島城義直著

大南洋史



大南洋史

白坂義直著

東京 田中誠光堂 發行

序

本書の著者白坂義直君は篤學にして獨學の士である。學歴とては別にないが生來の好學心は獨力を以て能く中外の典籍を讀破し得るものとなつた。

著者は又熱烈なる愛國の至情を詩に謠つて自ら樂しんだ。曾て臺灣軍司令部に於て臺灣軍軍歌を公募するや、君の送れる一篇は見事に一等に當選したのであつた。今日謠はれてゐる臺灣軍軍歌は君の頭腦より湧き出でた雄壯豐麗の詞藻である。

この軍歌の審査員の中最後の決定權を持つたのは、臺北帝國大學の教授安藤正次氏であり、その後間も無く君は同大學圖書館に就職する事となつた。爾來在職六ヶ年、君は同圖書館所藏の圖書に矚目する傍ら、豫てより志してゐた南洋史の研究に力を傾注する事となつた。

南洋史の研究が進むにつれ、南洋には偉大なる輝かしい過去の存在することを知つた。それは南洋諸民族を制壓下に置く西洋の史學者が固より顯揚を欲せざるのみならず、寧ろ隱蔽するを得策とする過去である。

否西洋の史學者ばかりではない。東洋の史學者も亦西洋の史學者と共に、餘りに南洋の過去を輕視し、之を等閑に付して居ることを感じた。

著者は輝かしい南洋諸民族の過去と、三百年來白人の重壓下に在る彼等の現狀とを對比するに從ひ彼等は是非とも英米の桎梏から解放せられて、自由に自己の能力を發揮し、福祉と繁榮とを恢復せね

ばならぬものと考へた。そのためには先づ彼等の過去を闡明し、英米の暴戾をあるがまゝに示し、世人の南洋に對する關心を昂むるを必要と信じ拮据精勵博く資料を蒐めたが、其れを纏めて一書としたのがこの『大南洋史』である。

時偶ゝ支那事變の半に方り世界の情勢日々に轉變しつゝあり、我國に對する南洋の經濟的文化的重要性が漸く認められて來た。さうして南洋を深く認識し、現在及び將來に處するためには、之を史的に觀察する必要が感ぜらるるに至つた。かくて君の著『大南洋史』は一部を削除し「南洋史大系」として外務省の執務參考用に印刷せられ、關係當局に配付されるに至つた。時に昭和十五年六月である。

翌昭和十六年十二月八日、對米英宣戰の大詔渙發せらるるや、忠烈精銳なる皇軍に依つて南洋は著々我勢力圏内に入り、大東亞建設の鴻業は今日旣にその緖に就いてゐる。是時に方り改めて本書が世に刊行され、廣く世間一般の讀者に公にされることは、寔に時宜を得たものとして、私の喜に堪へざる所である。

大東亞戰の進行に伴ひ、我國人の南洋に對する關心は急に昂まり、南洋關係の圖書は、雨後の筍のやうに出版されてゐる。中には資料の多くを本書に依存しつつ自著と銘を打つたものもあると聞くが、本書は前記の事情により、多年硏鑽の餘に成れるもので、それ等一夜作りの書とおのづからその撰を異にすることは言ふまでもない。

唯本書は史學の專攻者でない著者が、公務の傍ら今日迄顧みられなかつた史料不備な南洋史の新分野を開拓せんと試みたものであるが故に、その記載する個々の部分には未確定のものもないとは限ら

ず、又それ等に基づいて下せる大膽なる論斷も、必ずしも史學專攻者を首肯せしむるもののみとも限らないと思ふ。それは特に史料の乏しい古代の部に於てさうである。然しこのことは決して本書の存在意義を傷くるものではない。本書の價値は著者が未開拓の分野に鋤犂を入れて、蔽はれたる南洋の過去を世人の眼前に展開し、南洋民族の歴史と英米の暴虐を白日の前に露して、東亞の盟主たる日本の對南方政策に指針を與ふる所に存する。著者のこの意圖は本書に於て達し得られるものと思ふ。

南洋は今後あらゆる角度から深く研究されねばならぬ。史學者も亦その領域に於て研究を分擔せねばならぬ。本書の缺陷は專門史家によつて次々に補はれ行くべきである。この意味に於て私は本書が今後の研究に對し陳吳の役割を果すべきことを期待するものである。

昭和十七年四月

文學博士　村川堅固

序

上海の國立曁南大學及和蘭の國立ライデン大學は南洋史研究上に多大の貢献を爲し、前者は既に去る一九三五年より是が編成に着手し、後者は正しき南洋史が結局に於て自國乃至歐米諸國の一の罪惡史たり、且領下植民地大衆の自覺蹶起に資する所大なる點に於て是が發表を怠つてゐる。

右の外に印度のマドラス大學、河内の東洋學院、比律賓、臺灣及獨逸の諸大學が南洋史の斷片的研究を行つてゐるが、何れも其方向區々たり、未だ完成には道遠く、且其内容は反歐羅巴的ならざる範圍に限られたるあり、既に發表せられたる部分にも史實の歪曲誤解せるものあるを見る。

南洋史界が如斯狀態に在る時に際し、偶々大東亞戰爭の勃發あり、盤谷より歸朝して間も無き著者が、既に昭和十二年に成れる舊稿乍ら、體系附けられたる世界最初の南洋史として本大南洋史を、玆に世上に送るの機會を得た事は望外の喜びとする處である。

而して史界未曾有の試みたる南洋史の創建は、未開未整理の分野の開拓であり組織であり且從來の凡ての解說、理論、史觀等が歐羅巴的である點等に於て至難重疊、加之溫故のみを史學と信ずる一部學者の禍するあり、著者の研究過程は相當に荊莿の道であつた。

思へば本稿成つた昭和十二年の秋、英米の壓力を怖れて是が出版を思ひ留まらしめられて以來、著者は命により東印度諸島への出張、泰國在勤等の事あつて三年を經過したのであるが、昭和十五年六月に至つて漸く一部を削除し外務省執務參考用として極少數部印刷さるる事となつた。而して去る年十

二月の對英米宣戰は、茲に何等の遠慮屈從も無く本書を一般社會に送り得るものとなつたのである。五年前と一變せる大日本の興隆は、暮れなづむ歐洲より亞細亞に明けむとする大東亞の黎明を仰ぎ見るが如く、著者は五年間の遷延を憾みつゝも洵に喜びに堪へない次第である。

尚本書の成るに就て東京帝大の村川堅固博士並に臺北帝大の安藤正次總長の賜つた御厚情に對しては衷心よりの謝意を表するものである。

最後に著者は南洋史の持つ史的國家的意義の重大性に鑑み、速かに是が我國歷史教育中に包攝せられむ事を切望して熄まない。

昭和十七年四月

著　者

例言

（一）南洋史に於ける時の準據は、暹羅、爪哇等の佛曆、印度のヘヂラ曆等區々たるを、最も正確にして普及されてゐる西曆を以て統一した。然し是は近く皇紀に直さる可きである。

（二）一部には南洋の概念より印度を除く者があるが、是を除いては南洋の實質を摑み得るものに非ず、又大いなる馬來諸島も一般には東印度諸島と呼ばれて、史的に地理的に印度とは密接なる關係を有するものである。印度支那半島亦然る。

（三）地名人名等は、文化低く且十六世紀以來歐洲人の爲に蹂躙せられた南洋諸民族の歴史として確たる文獻史料を遺さず、其の殆んどが支那、和蘭、英國、佛蘭西そして僅かに日本等の學者の與へたる音表宛字より成り、加之其れ等は時代に依り、人に依り、國に依り多少或は全く異つてゐるものもあるが故に、最も正確と思料せられるか、最もポピュラーなものを取り、必要あるものは其の異名別名をも附加して置いた。尙其の讀み方は英蘭獨馬來等區々に分れてゐる事を承知あり度い。

（四）時代區分は大體に於て太古より十世紀迄を古代、十一―十六世紀迄を中世、十七―十九世紀迄を近世、二十世紀特に日露戰役の一九〇四年以後を現代とした。尙古代南洋史は文獻に於て筆者の研究に於て不充分なるものが多い點寛恕あり度い。

（五）歐漢等の原著、原文は、論旨の、又史實の、筆者の獨斷に非る事の證憑として、又原著繙讀者の便宜に資する爲に、成る可く紹介、挿入する事を努めたが、原著者名、筆者名等を失念し只原文のみを掲げたものも多い。

（六）地圖の不足は遺憾とする處であるが諸種の事由に依り削除した。

（七）本書に言ふ南洋は（二）に述べたる如く、著者の見解に基き印度、濠洲、新紐蘭は素より臺灣、海南島及南太平洋諸島、南氷洋を包含するものである。

目次

第三部　馬來諸島國

—附圖及寫眞—

—附　表—

大南洋史

白坂義直著

第一編　緒　論

亞細亞大陸の南方熱帶圏及び其の附近に展開する印度、印度支那、馬來の三半島及び南太平洋上に散在する臺灣、比律賓、ボルネオ、セレベス、爪哇、スマトラ、パプア等の馬來諸島と其の附近のミクロ＝ポリ＝メラ＝ネシア島嶼及び濠洲大陸、タスマニア、ニウヂーランド等の濠洲諸島が此處に言ふ南洋の地理的範圍である。

其の廣袤實に六百萬方哩を以て歐羅巴半島に二倍し、人口五億に近く以て地上人類の約四分の一に近く、加之風暖く資源豐かに、古來其の文化と共に世界の寶庫と稱せられてゐる地方である。

其處に生業(ナリワ)ふ南方亞細亞有色人種諸國家、民族の興亡盛衰の跡を溫ね、現狀を觀じ、以て其の偉大なる世界史的位置を知り、其の持つ現實的意義の、日本的延て亞細亞的將來への活用に資せんとするのが本南洋史研究の主題である。

而して南洋は地理的に人種的に又文化的に、相接する亞細亞の一半なる點に於て、之が歷史は東洋

諸國家の其れとは本質に於て不可分の繋りを持つものであり、近世以後は歐亞交通の十字路に當り、遠き歐羅巴諸國家の侵入に征服統治せられて、白人の世界制覇に資したる點に於て、西洋諸國史とも亦離し得ぬ深き政治的關聯を持つものである。

斯くて世界史の重要なる部分をなす南洋史は、當然其の考察究明に際しては、獨自の立場に基きつつも尙東洋史及び西洋史との緊密なる聯關に於て爲されるものであるが、其の際特に注意す可きは從來の囚はれたる餘りにも歐羅巴的な史觀より脫却して、公正妥當なる世界史的見地に立たねばならないといふ事である。讀者は此點特に注意せられ度い。

蓋し遠く人類發生の地と目せられる西南亞細亞に近いインダス文明こそ、東西兩史の淵叢たる黃河及びナイルの文明と共に、古代南洋史の黎明を告げる意義深きものであり、之に遡源する南洋各地時の諸々の文化に關する歷史は今日迄殆んど全く閑却されてゐた。

此意味に於て從來無視せられたる南洋史は、二十世紀現代迄、人智の史的內容を形作つてゐた東西兩史及び歐羅巴的世界史の持つ特殊的位置を明かにすると共に東洋史及び西洋史と相竝んで、歐羅巴中心的ならざる正しき世界史完成上の三大分野の一としての重き役割をなすのである。

古來世界の文化に多大の影響を與へて豊かなる此の南洋史が、其の獨立の必然性を藏しつつ敢て東西兩史の中に模糊として混入せられ、荏苒今日に至る迄顧られなかつた所以のものは、南洋諸民族の低能も然る事ながら、中世末來勃興した歐羅巴列强の南洋征服と、之に對する北方亞細亞諸國家の蒙昧無力に因るものである。

即ち既に世界に君臨せる白人に執つて、尠くとも近世以來三百年に亙る南洋の歷史は彼等に誇り得ざる暗黑史であり、且南洋史の知識は白人統治下に雌服する五億植民地人の自覺を喚起して、已が既成勢力に一大脅威を齎らすものたる點に於て、凡そ不利不必要なる存在であつた。

從つて彼等は、南洋史の高き位置を認めつつも敢て之を作さしめず、寧ろ之が正しき研究に對しては强き壓迫を加へ來つたのである。是、南洋諸民族は勿論、白人史家が今日に至るも尙體系づけられたる南洋史を成立し得ざる所以であり、又白人文明の强大に眩惑せられたる後進亞細亞諸國家が、隣接して因緣深き南洋の歷史を編むの創意無かつた所以である。

其の生產面積に於て、歐羅巴を壓倒する大南洋諸民族の覺醒、即ち南洋利益の南洋復歸、延て亞細亞利益の亞細亞的推移てふ必然は、既存世界覇權の維持確立てふ過分なる負擔に於て、小數白人の最も虞れる所であつた。

二十世紀、既に歐羅巴的制肘を受けずして自由なる亞細亞の指導勢力日本、加之南洋民族の主流たる馬來族の生理的影響を其の民族構成上に多分に受けたる日本が、古來因緣關係深き南隣同種の歷史を明かならしめる事は、文化的にも當然の歸趨と考へられる。

斯くて成されたる此の南洋史は、單なる史實の羅列的說明に終るものに非ず、實に世界史の動向推移究明上、又日本の南洋政策乃至世界政策確立上不可缺の意義と價値を有するものとして、既成東洋史及び西洋史と相鼎立して將に正しき世界史完成上に於ける三大要素の一たるものである。

又東西歐亞の間に介在して列强勢力相錯雜せる南洋の史的變遷は、「熱帶を支配する者は世界を支配

す」てふ意味に於ても、眞に二十世紀以後世界史の動向決定上に最も重大なる役割と貢獻を爲すものであらう。

推ふに歐亞二大人種の地上生活に於ける不斷なる切磋琢磨は、進轉窮り無き人類の智的能力を更に高き發展の段階に導き行く可き自然の經程である。

實に白人も言ふが如くに、歐羅巴の地理的位置が僅かに亞細亞大陸の一半島に過ぎない Europe is geographically merely a peninsula of Asia: Philipp's World Atlas, P. 3. ものであるとする時、其れは文化的にも政治的にも亦、斯くあり得べき可能性は認められないものでらう歟。

まこと南洋史は其の間に在つて人智に正しき史觀を釀成すると共に、這般の眞相を髣髴示唆するものである。

第二編　古代史

第一章　インダス文明時代

南洋史黎明の光は、遠く人類發祥の地と目せらるる、風暖かき西南亞細亞に近く、印度の西北部平原を流れるインダス河 R. Indus の中流、モヘンヂョ・ダロ Mohenjo-daro 死の山の丘陵地方に輝き初める。

其れは今より凡そ六千餘年以前BC四〇〇〇年頃より一千餘年の間卽ちBC二七〇〇年の頃迄繼續せられたものであつて、發掘された整然たる街區の遺蹟、埃及文字に相似た象形文字等の存在に依り、其の間に行はれた旣に遊牧を離れた社會生活の文化は、同時代に於けるナイル、黃河等の其れに比して劣らぬ古く且優秀なるものであつたことが想像される。

當時豐饒なる地中海東南地方のナイル、チグリス＝エウフラテス兩河の流域には、セム或はハム族に依つて各々特有の文明が築かれてゐたが蒙古族 Mongolian アリーア族 Aryan の大部分は、西部亞細亞のカスピ海東南高原地方に、未だ大移動前の蒙昧慓悍なる遊牧生活を送つてゐた時代で、印度を初め南方亞細亞及び馬來諸島 Malaysia 濠洲諸島 Australasia には原始的なネグリート族 Negrito が壓迫さるること無い自由なる生活を充分に押し擴げてゐた。從つてモヘンヂョ・ダロを中心とする

偉大なる此のインダス文明 Indus Civilization は、大體に於てネグロイド Negroid の一派たる印度先住民族ドラヴィタ族 Dravidian に依つて創められたものと考へられる。

又BC四〇〇〇年頃からBC一五〇〇年に至る間の南洋諸地方には、今日影薄く僅かに比律賓諸島 Philippine Archidelago 中の呂宋 Luzon の西部ザンバル Zambales 地方、馬來半島 Malay Peninsula の叢林中及ベンガル灣 Bay of Bengal 上のアンダマン諸島 Andaman Islands に餘喘を保つてゐるネグロイド諸分派が其の勢力を誇つてゐた。

恐らく彼等は、一八九一年瓜哇に於て發掘された直立猿人 Pithecantrops erectus たる所謂、瓜哇人 Java Man の八萬年以前頃から、該地方に生れ出でたる最初の人類として、未だ瓜哇、ボルネオ、比律賓、臺灣等の馬來諸島が、南方なる濠洲諸島及び印度支那半島 Indo-China Peninsula と陸續きであつた頃から南洋各地に分散移動して其の蒙昧野蠻なる生活を續け來つたものであらう。

然して今日の如き地形となつた頃には、南太平洋上に散在する諸島嶼に所謂巨石文化を營み、近隣島嶼は互に獨木舟に依つて交通を始めてゐたものである。

其の永い不文の闇黑時代を經て歴史時代に至る迄、彼等南洋人の生活は東洋及ビ西洋に於ける其れと等しく、血族乃至種族及び其の長老を中心として行はれ、未だ宗教と稱す可き程のものも無く、彼等は彼等を圍繞する偉大なる自然界の萬象を總て自己の生活と不離密接なる關係内容を具ふるものとする有靈觀 Auimism に依つて支配され指導されてゐた。今日尙彼等の間に行はれ信ぜられてゐるトーテミズム Totenism タブー Taboo 等の禁忌制即ち之が遺習である。

ＢＣ四〇〇〇年頃、南亞細亞地方に遊牧してゐた蒙古族 Mongols は、其の自然還境と外敵との抗爭に鍛えられた適應力を以て、盛んに四方に、特に東部及び南部に移動した。蒙古族に比して數少いアーリア族 Aryans が西南地方に活潑なる進出を開始したのは、其の後一千餘年の頃である。卽ち彼等の大部分はヒンヅークシ山脈を越えて南下し、氣候温暖なるイラン Iran バクトリア Bactria＝大夏、メヂア等既にセム族、蒙古族等に依つて先取せられてゐる地方に進入し、從來の遊牧的放浪生活を棄てて徐々に土着し農耕牧畜に據る部落生活を營むに至つた。

此のＢＣ二〇〇〇年頃西方ユウフラテス流域地方には、バビロニア、メヂア等の諸國を征服して其の威名天下に鳴つてゐたアッシリア帝國に、女王セミラミス Semiramis 在り、當時より世界の寶庫として廣く外人に知られてゐた印度の富を獲得す可く虎視耽々たるものがあつた。卽ち其翌年大軍を其の首府ニネベに發して、西北印度の沃地たるパンヂャブ Punjab に侵入したが、ドラヴィータ國家の爲に脆くも擊退され、遂に其の目的を達し得なかつた。

精悍なる遊牧狩獵のアーリア族が大擧印度に進入し來つたのは、其の後五百年のＢＣ一五〇〇年の頃である。彼等は先づ最も開け且肥沃なる北部印度インダス、ガンヂス兩大河の流域地方を占據し、其の勝れたる戰鬪力を以て徐々に先住ドラヴィータを驅逐して、南方デカン Deccan 高原に又東方なるベンガル Bengal 沿岸、印度支那地方に移動せしめた。

當時印度支那より海を越えて馬來諸島に渡る者多きも亦此の理由に基くものである。

斯くてアーリア族の勢力は北部印度に彌漫して行つたのであるが、猛烈なる生存競爭に生きた永い

過去の歴史よりして、平和的文化の成長を見得なかつた彼等は、其の後數世紀の間は直接に間接に之とは異り豐かなる地方に安定せる生活と文化とを營んでゐたドラヴィータの文明によつて、啓蒙され指導される所多かつた。

インダス文明より稍々遲れたBC三〇〇〇年頃、東洋文明の搖籃たる漢人の黃河文明は、當時恰も商時代の殷盛に在り、其の勢力の擴大、人口の增加は遂に南下せる漢人をして南方苗族を驅逐して其の一部を主としてモン・クメル族 Mon-Khmer の占據してゐた印度支那半島に移住せしむるに至つた。

優勢なる北方よりの漢人、西方よりのアーリア人の挾擊に會つて、印度支那地方の蒙昧なる諸族は斯くて不斷に且徐々に海を渡り、島嶼傳ひにスマトラ Sumatra＝蘇馬答剌（馬來語 Trimatra の轉化、幸福の地の意）瓜哇等の馬來諸島に安住の地を求めて行つたのである。

就中ケンデン島 Noesa Kendeng と呼ばれてゐた資源豐かな蓬來島瓜哇に渡航する者最も多かつた。馬來諸島から延て太洋洲 Oceania に分散した彼等は、其の有する比較的高い文化を以て、先住ネグロイド Negroid や、オウストラロイド Australoid の未開諸族を征服して支配的位置を獲得し、頓て其の後の永い生活の中に混融して行つた。

馬來族 Malaysian 或は所謂インドネシア族 Indonesian 及びミクロネシア Micronesia（Micro＝微小の意）ポリネシア Polynesia（Poly＝多數の意）メラネシア Melanesia（Mela＝黑の意）等の太洋洲諸族 Oceanian の分派即ち此れである。

梵語 Sanskrit で黒人を意味する暹羅人 Siamese 及び安南人 Annamese 等、印度支那族の中心勢力となつてゐる雲南西藏族は、ＢＣ二〇〇〇年頃漢族に驅逐され或は之と混血した苗族一派の南下せる者と、文化的に又生理的に印度人に影響される所多いモン・クメル族との雜種であり、ＢＣ三世紀頃卽ち秦時代の支那人は、彼等を南方支那の廣東人と同じく粤人或は越人と呼んでゐたものである。尙漢人、蒙古人等に敗退した苗族の一部は、遠く印度に近い緬甸 Burma 地方にも遁入した。

玆に知らねばならないのは原始時代に於ける對動物的遊獵及び其の武器が、當時の人間生活に不可缺の重要なる意義を有するものであつた事、恰も現代に於ける對人間的資源、領土獲得鬪爭及び兵器に相似て、其の種族の興亡を左右したものであるてふ事である。遊牧狩獵に依つて鍛練强化された蒙古及びアーリア族等の勝利及び其の後に於ける繁榮の一因は玆に見出さるるであらう。

第二章　吠陀＝波羅門時代

一度印度先住民族を征服して玆に定住し、其の生活資料獲得に遊牧鬪爭の必要無く、豐穰なる地方に悠々たる自然を樂しむに至つたアーリア人達は、頓て被征服ドラヴィータ人の文化に馴致順化さるるに至つた。

卽ち風暖く資源豐かに穰る地方の安易なる生活に於て、彼等の心はおのがじし現實的なる生產に對する考案よりも、觀念的な方面に向ひ、環る自然の偉大に對する畏敬と感情の中に一の神祕を見出し、其れは進んで宗敎的な社會生活やロマンスを織り出す詩歌となつた。斯くて二百年、ＢＣ十三世

紀頃には、語り傳えられ又時の流れと共に其の內容を豐富にして、價値あるものとなり來れる彼等の詩歌傳說、社會制度等は、初めて印度に古代語たる梵語 Sanskrit を齎したトルコ系なる、ガンヂス流域のサカ Sakya 族に依つて文字化され、頓て當時行はれてゐた波羅門教 Brahamanism の聖典としての所謂吠陀 Veda の大著に編成された。

此の頃にはアーリア族も完全に印度化して自らヒンヅー Hindus と呼び、中部以北に擴がり、其の勢力は吠陀に依り定められてゐる四姓 Cast 卽ち波羅門 Brahman 刹帝利 Ksatriya 毘舍 Vaisa 首陀羅 Sudra 四階級の上部三姓を占めて、全印度を壓してゐた。卽ち吠陀聖典はヒンヅー社會最初の文化的、階級的產物と見得可きものである。

當時の印度に割據する諸國は數十の多きに上つてゐるが、其の間に演ぜられた、高貴を意味する毘舍以上三姓のアーリア人と、醜惡を意味するダサ族 Dasa なるドラヴィーター諸族との宗教的又政治的、人種的鬪爭軋轢は、此の吠陀聖典の諸卷によつて熟知せられる。

斯くて印度の諸國は吠陀に基いて、徐々に北方より進步し、政治に社會生活に特有の精神文明を發達せしめて行つた。然し乍ら共れは、天產に惠まれた容易なる彼等の生活の中に釀し造られたものであつたが故に、何等生存競爭に、生產事業に與る所無く、只管に自然禮讃と、波羅門特權の擴大と、性慾讃美に終始する無力なる文化であつた。

其の後三百年、BC十世紀頃より、波羅門の高僧摩奴家は、歷代の努力によつて摩奴法典 Law of Manu を完成するに至つたが、之は其の後の永い印度社會を支配する重要なる典據となつたのであ

つた。然して其の內容は階級的紛糾と宗敎的盲信によつて、三千年後の今日に至る迄、印度民衆社會の統一的發展を阻害する事甚大であつた。吠陀と言ひ摩奴と言ひ、名は聖典であり法典であるが、其の價値は宗敎的なる點よりも、寧ろ文學乃至史學上の古典たる所に認めらるるものであつた。

印度に於て此の宗敎萬能的な社會思想が支配階級たる波羅門に指導されてゐる時、其れは東洋史及び西洋史上に於ても見らるるが如く、宗敎上の勢力は直ちに政治經濟上の勢力と化し、當時に於ける波羅門の權力は凡ゆる社會部門に浸潤してゐた。卽ち謂ふ所の波羅門時代の出現である。

斯くて刹帝利以下、特に異端たる多くの首陀羅大衆の生活は、諸波羅門聖典の希求するが如き繁榮と幸福に均霑する所無く、不遇なる狀態に置かれてゐたのであるが、彼等も亦其等の宗敎的雰圍氣を人生の一大事と信奉する輩であつた。更に諸國が人生の安穩平和を求めつつ互に其の發展の爲に相爭つてゐた事、其の度の强弱の差こそあれ、三千年後の今日、世界列强が正義人道、平和厚生を唱えつつ辛辣且不斷なる國際闘爭を演じつつあると些かも變る所ない。

卽ちBC一二五〇年頃西方に猛威を振つてゐた埃及のラメセス二世 Rameses II の屢々なる印度侵入を、擊退し得る能力を有してゐた所以である。

其の頃の主な印度諸國はガンヂス中流の摩揭陀 Magadha 北部中央の釋迦西北パンヂャブ Punjab 五河地方の犍馱羅 Ghandra 憍薩羅 Kosala 及び南方デカン高原地方の案奴羅 Andra 等であり、國王は悉く波羅門敎理に基く政敎一致の統治を行つてゐた。

從つて惠まれざる印度一般社會は漸く波羅門專橫に對する嫌惡を生ずると共に、未だ見ぬ新しき何

ものかを憧憬れ求むるに至つた。斯くて流るる七百年の歳月は、ＢＣ六世紀に入つて、さしもに力あつた永い波羅門時代の衰亡を告げしむるに至つたのである。

尙、此の頃西隣なるイランの地には、拜火敎 Zarathustra＝Zoroasster の開祖ツァラツトラ Zarathustra の誕生があつた。

第三章　當時に於ける南海諸島

ＢＣ十二世紀頃からＢＣ九世紀にかけて印度貿易に從事してゐた地中海の勇者フェニキヤ人の一部は、更に東航して馬來諸島中のスマトラ、瓜哇、馬來半島に來り、其の天產に惹かれて定住するに至つた者も多い。斯くて永住した彼等は亞細亞的歐洲人 Asiatic Furopean として、其の後全く馬來化し去つた。

ＢＣ十世紀頃からＢＣ四世紀に亘る周時代の支那は、南方廣東を中心として、南洋諸島との間に、可なり盛んな貿易を營んで居り、其の主なる地方のみでも八個所に及んだ。就中當時ピラ Pilak 金と呼ばれてゐた比律賓は、其の產する多額の金、銀、鼈甲等を支那に輸出して最も有名であつた。然して古代に於ける南海諸島卽ち印度支那半島及び馬來諸島中最も早く開化したのは、亞細亞大陸に連る印度支那半島であつた。其れは其の名稱の示すが如く、世界史上最も古い文明を持つ印度及支那の間に在つて、文化的にも生理的にも亦政治的にも最も多くの影響を此の二大國から受けたからである。

從つて印度支那地方はＢＣ六世紀頃には永い長老中心の蒙昧なる部落生活の舊套を脫して其の人口

の增加、文化的慾望の向上に伴ひ、幼稚乍らも漸く統制ある强力なる獨立的國家を形成せんとするの氣運を釀してゐた。

然し南洋一般の諸島國民は、其の温暖と肥沃に依つて一日が彼等の生活の循環期をなしてゐたが故に、彼等は將來の爲を慮る必要殆んど無く、加之、彼等の簡易なる生活の資料は、勞せずして充分に外界より供給されたが故に、對自然的に又對社會的に殆んど特別なる智識、考案、活動等の啓發刺戟を受くる所が無かつた。又其の暑熱は生理的に彼等の進取的精神を消耗して、怠惰とイージーゴーイングが彼等を支配し、僅かに性的本能のみが充分であつた。今日尙性典として世界的に有名な、かのカマ・スートラ Kama-Sutra が既に當時印度に於て大成されてゐた所以である。

彼等の優柔と對自然的無智は、徒らに主觀的アニミズムに據る信念を深め、印度を除いた他の大半の馬來、濠洲諸島の諸部落社會は、全くトーテミズムにより支配されてゐた。又文化未だ興らず世界各地の交通が極度に部分的であつた此の時代に於て、各地の種族は僅かに其の近隣を知るのみで遠く離れてゐる他族を知る由もなく、世界は全く彼等一部族の爲に作られあるかの如くに信じてゐた。

此の頃北方遙かなる大八洲の列島に於ては、其の統一の大業初めて成り、神武天皇の御卽位式は、大和なる橿原宮に於て嚴に擧行せられ、大日本帝國の基礎は、眞兹に創められたのであつた。時に日本紀元元年、西曆BC六六〇年である。

第四章　佛教時代初期

數世紀に亘る永い波羅門專横時代が全く忌まれ、印度大衆の心が切に平等と愛を希求してゐたＢＣ六世紀の頃、印度は北方ガンヂスの支流沿岸なるスラナスチ Sranasti＝舍衞城を王城として榮えてゐたコサラ王國の一藩にサカ Saca と言ふ一小王國があつた。其の首府は迦毘羅 Capila に在り、王をシュ・ドーダナ Su-ddhodana 后を摩耶と言つた。ＢＣ五六五年四月八日、折から咲き誇る宮庭の無憂樹の花の下で摩耶夫人が生んだ一王子こそ、實に後年世界最初にして最大の宗教として、多くの人間に深い心的影響を與えた佛教の開祖、悉達ゴータマ Siddhatta Gautama 卽ち佛陀 Buddha 其の人であつたのだ。

彼は二十九の春、波羅門敎下に根據無き不平等に據る當時の印度社會と衆生を匡救す可く、傳統と舊弊の坩堝たる王宮生活を棄て、大國コサラの學者に就て智識を博め、又ガンヂス河畔の苦行林に入つて臥薪嘗膽十五年の修業を積み、遂に隣國マガダの一邑伽耶 Gaya の菩提樹下に大悟徹底、凡ゆる煩惱より解脫したのであつた。

斯くて佛陀となつた彼は、此の天來の福音を世界に宣布して、惱める衆生の濟度に精進するのであつた。

「……………恆伽入㆓東海㆒、新頭入㆓南海㆒、婆叉入㆓西海㆒、私陀入㆓北海㆒、爾時四大河入㆑海已、無㆓復本名㆒、但名爲㆑海、此如㆑是有四姓、云何爲㆑四、刹帝利、波羅門、長者、居㆓士種㆒、於㆓如

來所ニ、剃ニ除鬚髮ニ著ニ三法衣ニ、出家學道、無ニ復本名ニ、但言ニ沙門釋迦…………」說く深遠博愛慈悲の教理の下に、高きは波羅門より低きは首陀羅に至る一切の衆生は、此の新宗教の傘下に汲然と集り來るのであつた。

斯くて日と共に佛教は各地に普及され、其の熱と力は遂にマガダ、コサラ等諸大國國王竝に王族を歸依せしむるに至り、印度各地には其の修道場として精舍が林立したのであつた。彼八十歲にして入寂の折、佛教勢力は殆んど全印度を掩ひ、在りし波羅門教の華かなりし日は、朝露の其れに似て儚くも消え逝いた。

佛陀去つて後、歷代多くの門弟達は彼の言行を集錄整理してBC二世紀漸く最初の結集が完成せられた。今日廣き佛教教理の基調をなすもの卽ち之である。

尙此の頃印度東方コロマンデル沿岸のヒンヅー達は東航して、其の佛教的或は波羅門的文化を以て印度支那南岸の林邑（後の東蒲塞）扶南（後の南部暹羅）地方に渡航し、苗、モン・クメル族等先住民族の間に梵字、生活樣式其他の印度的影響指導を與えた。其の後彼等ヒンヅーの勢力は大いに增大して、五世紀頃には南印度支那に分立せる諸國間に、政治的實權を獲得するに至り、七世紀頃には、眞臘（先の林邑）地方に、豪族スルダヴァルマン Srutavarman の率ゆるヒンズー王國の興隆を見るに至つたのである。

南洋史上は勿論、世界史上に於ける宗教思想勃興の淵叢を爲した佛教發生の黎明は、斯くて南亞細亞の大半島印度に其の曙光を放つて各地に傳播せられ、其の雰圍氣と影響を受くる事五百年、パレス

チナ及アラビアの地には新しく基督及マホメットの誕生があつた。

然して佛教及び之を搖籃とする基督教、回教は、二千五百年後の今日尙世界の三大宗教として普く地上を光被し、兎もすれば暗憺たらんとする人倫の行方を照し導いてゐる。

尙佛教と共に東洋思想の重要なる部分を占める儒教の祖たる孔子は、殆んど佛陀と時を同うして北方なる支那の魯國に生れてゐる。

第五章　アレクサンドルの印度侵入

佛教文明が政治に、生活に、多大の影響を與えて、印度民衆の社會を潤ひあるものに改善しつつある此のBC四世紀の頃、歐亞交通の衝として、早くより多くの民族相聚落して複雜なる混交鬪爭の中に、戰鬪的現實的な高い文明を織り作してゐたイラン、地中海沿岸地方の諸族は、其の不斷なる人口的經濟的膨脹に伴つて、イラン、マケドニア、スキチア等の諸帝國は不相變の爭霸に餘念が無かつた。

東方近く印度の資源を求めて、飢えたる西方諸國が、歷史を通じて常に侵略の矛を磨き、虎視耽々たりしは當然の事である。其れは既にBC二十世紀アッシリアの女王セミラミス以來大小幾度か繰返された事實である。

BC六世紀以後、メソポタミア地方、バビロニアを征服して其の都バビロンに離宮を置き、東歐に

大版圖を領して、威比肩するもの無かつたイラン帝國は、ＢＣ五二二年イランの北部ヒルカニア州の知事であつたダリウス一世 Darius I 卽位するに及んで、大いに軍備を擴大し、中央集權制を確立して、其の國力を充實してゐた。卽ち東隣の富國印度に對する野望抑え難く、ＢＣ五一五年遂に彼は大軍を派して印度に侵入し、ガンダラ王國を破りパンヂャブを占領した。同五一〇年には更に進んでインダス流域地方に及んだのである。

斯くてイラン帝國は歐亞に誇る大領土を統治して、其の國勢益々旺んなるものがあつたが、ＢＣ三八〇年ダリウス三世 Darius III 時代、西方なるギリシアと戰つて利あらず、國勢漸く衰運に向ひ、印度の領土亦其の羈絆を脫した。

降つてＢＣ三三〇年に至り、新興マケドニア帝國と衝突、遂に其の王アレクサンドル Alexander the Great の銳鋒に破られてイラン帝國二百年に亘る霸權は儚き泡沫と消え去つた。

アレクサンドルは、ＢＣ三三六年以來、其の若冠を以てギリシア聯邦の總帥たり、其のマケドニア帝國は當時彼等白人既知世界諸國に於て、最も發溂たる勢力を有してゐたものであつた。彼は其の頃、未だ蒙昧にして蠻族橫行し文化の度低き歐洲諸地方には何等魅惑を感ずる事無く、只管にイラン印度等東方諸國の資源、文化及び帝王の豪奢なる王宮生活に、若き日のアンビシァスな夢を描いてゐた二十歲の靑年であつた。

ＢＣ三三〇年に於けるイラン征伐は斯くて成功し、ＢＣ三二六年に於ける印度西北部インダス流域に及ぶ地方の占領も亦斯くて成就した。

偉大なる虚榮と武力を持つ此の若者の征服事業は、大體に於て一途に其の發展の道を辿つたのであるが、遠大なる計畫と深謀を缺く此の血氣の覇業は、其の後僅か三年ＢＣ三二三年に於ける彼の死と共に、脆くも崩壞の破局に其の終焉を告げた。從つて彼の南洋史上に於ける政治的位置は極めて渺たるものである。

然し乍ら彼の事業は、當時文化低かつた歐洲の一國王として、東方諸國に對する憧憬と尊敬の心から、其の征服後大いに歐洲人を東方に移駐せしめて、生理的文化的融合を試みた點に於て不朽の價値が認められる。所謂白人史家の歐亞の結婚 Marriage of Europe and Asia 之である。

即ち彼は一時占領したインダスの上流に、今は無きアレクサンドリア市を築き、又イラン帝國の東方カブールの西南（現アフガニスタン王國）に、更に地中海東方ナイル河口に、各々アレクサンドリア市を設立して、歐亞の混交合一を圖つたのであるが、此は史上稀に見る事蹟であつた。彼は彼の率ひる軍隊を共れ等遠征各地に分屯永住せしめて、該地方婦人との結婚を贈品を以て奬勵し、生活に、血液に、大規模なる所謂歐亞の結婚を實施したのである。又彼自身も豫て求めてゐたイラン皇帝ダリウス三世の美姫と婚し、更に第二夫人としてサマルカンドの知事オクシアルテス Oxyartes の娘ロクザナ Roxana の窈窕たるを娶つたのである。

今日イランを中心とする西南亞細亞人種が歐洲化されて、白人により Asiatic European と見らるる所以の一此に在る。尙之と相似た現象は、十三世紀末より十四世紀にかけて、成吉斯汗に創まる大元帝國に征服統治された露西亞、波蘭、ハンガリー、エストニア等のスラヴ族、及び今日白人化され

てゐる芬蘭族等にも行はれたのであり、彼等を Europeanized Asian とも考へ得られるのである。

尚アレクサンドルが當時のイラン帝國、現アフガニスタン地方に新設した町は、前記以外に、今日見得ぬアレクサンドリア、アリオン、オキシマナ等を數へる事が出來る。

正しき歴史認識上、又人種的平等觀念把握上、亞細亞諸國民が、超人的偉傑の如く過信せしめられてゐるアレクサンドル大王が、事實如何なる人物であつたかを知るの必要に基き、彼と同じ白人史家に依つて述べられてゐる彼の性格の一端を次に記して置く——

"…………They insist upon his immense vanity. They relate how he began to wear the robes and tiara of Persian monarch. At first only before the barbarians and privately, but afterwards he came to wear it in public when he sat for the dispatch of business. And presently he demanded Oriental prostrations from his friends. One thing seems to support the suggestion of great personal vanity in Alexander. His portrait was painted and sculptured frequently, and always he is represented as a beautiful youth, with wonderful looks flowing backward from a broad forehead. Previously most men had worn beards. But Alexander, enamoured of his youthful loveliness, would not part with it; he remained a sham boy at 32; he shaved his face, and so set a fashion in Greece and Italy that lasted many centuries.

…………………………"

The stories of violence and vanity in his closing years cluster thick upon his memory……

（H.G. Wells : Outline of history）

「臣下達は彼に激しい虚榮心のある事を言ひ張つた。彼がペルシア帝國を亡して其の帝王の衣冠を服裝する時、初めの間は被征被民に接する時か、私的會合に臨む時のみ用ひたが、後には公然其の禮裝を以て政務を執り、頓ては臣下に對して東洋的な跪座低步の禮を執る可きを命ずるに至つた。又彼は時々自分の肖像や彫刻を作らしめたが、常に廣い額から美しい房々とした髮を後に靡かせた眉目秀麗な青年に仕上げさした。そして昔は大抵の人が鬚を生したものであるが彼は自分の青年らしい可愛さが好きで、決して鬚を生ちず、三十二歳の青年の樣にし、頓て此の風趣は伊太利ギリシア等に流行して近世に至つてゐる。

斯くて彼の晩年たる全盛時代は、狂暴と虚榮の物語の連續に盡きてゐる…………」（北川三郎譯）

實に其の目的の大半を達し、威儀風彩四隣を拂ふ東方イラン皇帝、或は印度國王の黃金綾なし、絢爛目を奪ふ華麗なる衣冠を附けて、豪然群る臣下の前に昂然として步を進める若きアレクサンドルの得意や思ふ可しである。

又彼の狂暴の例としては、ギリシヤの都テーベの慘忍なる殺戮掠奪、父王フィリップ Philipp との鬪爭、近臣の殺害及び酒池肉林の亂業…………當時のマケドニア武人の常であつた…………等があ る。

白人史家の傳へる十三世紀末に於ける蒙古兵の慘酷と雖も、アレクサンドル及び其の率ゆるマケドニア兵の無道には及ばなかつた。其れは詮方ない事ではあるが、白人史家に依つて利己的に歪曲され

た今日迄の反亞細亞的歷史說明、及び之を盲信して顧る所無い亞細亞人、特に東洋人の人のよさは、南洋史の進展と共に、正しく白日の下に暴露されて、その眞の相を見出すに至るであらう。

印度の阿育大王、秦の始皇帝、成吉斯大汗、日本の關白秀吉等の偉大に比して、一籌を輸するアレクサンドルの史的位置亦其處に判然するであらう。

第六章　孔雀王朝の勃興

ガンヂスの中流なるマガダ王國はBC七世紀以來其の繁榮を誇つてゐたがBC三二六年アレクサンドルの來征あつて直後のBC三二〇年、パンヂャブの梟雄チャンドラ笈多(グプタ) Chandra Gupta＝施陀羅笈出でて、アレクサンドルによる歐洲勢力を驅逐し、又前ナンダ王朝 Nanda Dynasty を廢して卽位し、孔雀王朝 Maurya-Peacock Dynasty を創め、首府をマガダ王國の大都たるパタリプトラ Pataliptra＝華子城＝現パトナ Patna に奠めるに至つた。

彼は其の雄略と英明を以て舊來の弊政を改革し、近隣諸地方を併合して大いに國勢を强化し、其の末期には印度中部以北を統治して、竝び無き孔雀王朝隆盛の基礎を確立したのであつた。

斯くてBC三〇三年には、曾てアレクサンドルの部將であつたシリアの王セレウコス Seleucos Nicator のパンヂャブ攻擊の軍を破つて歐洲勢力の侵入を阻止し、更にアレクサンドル以來の失地たるインダス以西の沃地を奪還して南亞細亞に其の霸權を確立した。

時と費用を惜しまず、其の豪勢なる權力に任せて東西の巨匠をして造營せしめた、かの有名な孔雀の玉座の絢爛華麗が作されたのは此の頃であり、孔雀王朝の名の起源亦此に在るのである。。十八世紀以來英帝國の壓制搾取下に喘ぐ印度民衆に執つて、唯一最大なる誇らしき思出の泉として、彼等の人口に膾炙する孔雀王朝時代は、斯くて其の華かなる一歩を進めたのである。

ＢＣ二九七年次王ビンヅサーラ・アミトラガータ Bindusala Amitragahta 起つや、其の賢明なる政略は、文に、武に、印度社會を向上强化せしめて、全國民は其の力强き太平を謳歌した。卽ち內は文化と生活の幸に滿ち溢れ、外は曩に驅逐せられたセレウコスのシリア國を初として、ギリシア、埃及等の西方諸國の使臣、其の王城の地パタリプトラに駐在して、東方の大國印度の御意に添はむ事に力めてゐたのである。

斯くして印度國力は史上空前の發展を示して來たのであるが、其の後三十年のＢＣ二六九年、相次いで英明なる阿育 Asoka the Great＝Asoka Vardhana 大王登極するに及んで、印度は將に其の全盛時代に入つたのである。尙現代英國皇室に寶物とし祕藏されてゐる世界第一の大金鋼石及び紅玉は、實に此の孔雀の玉座に備付けられてあつたものであると言ふ。

第七章　阿育大王の世界史的位置

阿育大王は先づ其の首府をパタリプトラからベハール Behar に遷すと共に、內政を整へ軍備を擴

市民公園、大病院等の開設は實に彼によつて爲されたのであり、國民の福祉増進に貢獻する所甚だ大であつた。

又BC二二五年には其の充實滿を持する國力を以て、來る可き全印度統一に障害をなしてゐた東南コロマンデル地方の雄、ガリンガ Kalingha 羯餕伽王國及び其の附近諸國を征服して遂に印度統一の大業を成就した。次いで其れ等諸國と可なり頻繁なる交通あつた東南海上の馬來諸島に大遠征軍を送つて、當時ケンデン島と呼ばれて最も有力であつた蓬萊島爪哇諸島を屠り、印度の政治的ヘゲモニーを確立すると共に、大いに其の文化的指導を與へたのであつた。

反佛敎的波羅門敎徒の馬來移住は以前から行はれてゐたが、澎湃たる佛敎ヒンヅーの馬來移住は、實に此の阿育大王の爪哇遠征以來の事であつた。高き文化と强き國力を背景として彼等ヒンヅーは爪哇、スマトラ、ボルネオ等にも渡つたが、波羅門ヒンヅーは更に遠く北進して、彼等にマイヤ Maiya と呼ばれ、其の土人をエタ乃至イタ Ehta＝Ieta と呼んでゐた比律賓群島にも進出し、特に印度支那南岸の林邑、扶南地方には最も多くのヒンヅーが渡航して、印度的影響を與へて行つた。

斯くて阿育大王時代の印度の覇權は、北はヒマラヤ山系より東は印度支那、馬來諸島に、又西は當時歐洲文明の中心地方であつた地中海沿岸のシリア、ギリシア、埃及等に及び、支那、羅馬兩帝國と共に、當時既知世界の三大支配勢力であつた。後世印度偉大の名は實に此の時代に醸し造られたるものであり、其れは恰も同時代に於ける北方秦の始皇帝に依つて、支那偉大の名が世界に知られたるに

相同じい。支那卽ち秦音の轉化である。

然し乍ら印度及び阿育大王の名を四海に喧傳したものは、其の前期に於ける征服事業よりも、寧ろ其の後に於ける對外佛教傳道てふ文化的方面に在つた。

大王は當時世界最大の宗教であつた佛教の慈悲を、普く世界に廣む可く、其の有する强大なる勢力を背景として、自子マヘンダ Mahenda＝摩哂陀以下數十名の有能なる佛僧を南、錫崙 Ceylon＝獅子國より、東、馬來諸島、西はバクトリア、ギリシア、アラビア等の諸地方に派遣して、南亞細亞、中歐諸國民の大規模なる佛教化を圖つたのである。他の二大宗教の開祖たる基督及びマホメツトがアラビアに生れたのは、其の後二百年及び八百年の後の事である。

從つて前世記に於けるアレクサンドルが歐亞の生理的文化的結合を行つたものとする時、阿育は將に歐亞の宗教的歸一結合を行つたものと言ひ得やう。

佛教創始以來此に二千五百年、然して基督教興つて此に二千年、世は基督教國民の偉大なる發展の爲に、世界は恰も基督教國 Christendom の如き觀を呈するに至つてゐるが、其れは佛教に對して何ら獨創的又對蹠的要素を持たない基督教其のものの力には非ずして、實に基督教を信奉する歐洲諸國家の政治的文化的勢力が、佛教的亞細亞諸國を壓倒して世界に君臨し得た所に在るのである。吾人は斯くの如く一の觀念的思想的勢力を規定するものが、常に其の現實的政治的文化的能力に在る事に深く鑑る所あらねばならない。

此れと同じ事は、更に遲れて六二二年に興つたマホメツトの回教に就いても言ふ事が出來る。

宗教的見地に立つ限り、人類最初の大宗教であり、基督教を初め其の後に興つた幾多の力ある宗教に對して、直接に間接に其れが温床となつた佛教の價値は、人類史の續く限り永劫不滅の名譽を荷ふものである。然るに十七世紀來の基督教白人諸國の亞細亞征服に依つて、佛教其のものを征服せられたるが如き錯覺の中に、佛教の宗教的價値すらも蔑視するの對歐事大思想に支配されてゐる亞細亞諸國民多きを見ても、如何に過去三世紀の間に强大なる基督教白人諸國の勢力感化が、深く亞細亞諸國民間に浸透し切つてゐるかを知る事が出來るであらう。翻て阿育大王の對外佛教傳道政策を見るに、BC三世紀以後に於ける印度、馬來、中歐諸國以外に、五世紀以後に於ける北方亞細亞、支那、朝鮮、日本等に與へたる影響が、其の後に出でて第二の阿王とも見る可きカニシカ大王の其れと共に、重大なる意義を持つものである事を知るのである。即ち白人史家が阿育大王をして、基督教興隆に於けるコンスタンチン大帝 Constantin the Great に準へる所以のものである。然して英明比無かつた阿育大王を還る自然が、若し歐洲乃至東亞の如き温帶地方であつたならば、必ずや大王は國民生活の向上、國家永遠の存立の爲に、現實的に有用なる自然の開發てふ科學的研究の必要を悟り、印度國民をして生産的なる又武力的なる自然科學を勃興せしめ、以て國家の戰鬪的にして又文化的なる能力を向上せしめた事であらう。然して斯くあつた時、其の後今日に至る印度衰亡二千餘年の哀史は、發展興隆の連續として、世界に冠たる男々しき歷史に書き換へられてゐたであらう。

實にウェルズ Herbert George Wells も言へる如く、阿育大王は

「………………世界史上に躍る帝王の名は幾萬の多きに上るが、阿育王の名のみは、只一つ群

る中に明星の如くに輝き渡り…………………其の偉名を語り傳へてゐる。其れは基督教に於けるコンスタンチン或はカロロを讃えるよりも、遙かに多くの人が阿育大王の遺徳を深く胸裡に刻んでゐる」

のであつた。"…………Amidst the tens of thousands name of monarchs that crowd the columns of history, their majesties and graciousnesses and serenities and royal highnesses and the like, the name of Asoka shines, and shines alone, a star…………preserve the traditions of his greatness.

More living men cherish his memory to-day than have ever heard the names of Constantine or Charlemagne…………"

(H. G. Wells: Outline of History)

斯くて古代文化史上に於ける阿育大王の位置及び印度文明の指導的位置は、人類智能啓發史上に於て特筆す可き意義を有するものである事を忘れてはならない。

第八章　孔雀王朝の沒落

斯くて印度は明君相繼いだ孔雀王朝、特に其の阿育大王の時代に於て世界史上不朽の大事業を爲したのであるが、ＢＣ二二七年大王崩じてスヤサス Suasas 王、位を繼いでより後四十年、暗君幾度か相次ぎ漸く衰運に向つた。

卽ちＢＣ一八八年第十代王ブリハドラータ Brihadrahta 卽位より十年、ＢＣ一七八年遂に其の無

力は武將プシャミトラ・スンガ Psamitra Sunga の亡ぼす所となつたのである。スンガ王朝 Sunga Dynasty の祖卽ち彼である。世界に誇る南洋史上の孔雀王朝百四十年の歴史は、斯くて其の最後の幕を閉ぢたのであつた。

スンガ王朝時代の初期、BC一七五年、イランなるカブール Kabul の太守メナンダ Menanda は、隣接パンヂャブの沃地を占領す可く、印度侵入の大軍を派遣したがプシャミトラ王の爲に容易に擊退されて了つた。

其の後一世紀、BC七〇年スンガ王朝亡びてヴァスデヴァ Vasudeva に依るカンバ王朝 Kanva Dynasty 與り、同BC二五年南方デカンの大國アンドラの王シプラカ Siplaka 之に代つてアンドラ王朝 Andhra Dynasty を開くに至つた。

斯くてアンドラ王朝は四二九年に至る三十一代、プロマン Puloman 王を最後とする四百年に餘る永い時代を經過したのであるが、歴代王は佛敎を國敎として其の隆盛に力めた。

尙西方アラビアの北、パレスチナに於ては、BC四年基督の誕生あり、然して基督敎が漸く新興宗敎として勢力を東部歐洲諸國に培ひ初めたのは、其の後三世紀の頃である。

第九章　印度支那及び馬來諸島の黎明

印度が阿育大王の許に空前の發展を爲してゐたBC三世紀の頃、北方支那には周の後を承けて秦の始皇帝が大いに其の鵬翼を伸ばしてゐた。

ＢＣ二一九、彼は福建の除福なる者の一族をして、當時貿易は有つたが未だ充分に知られていなかつた南海を探險せしめ、其の頃夷州と呼ばれてゐた臺灣及び亶州と呼ばれてゐる比律賓に派して、之が調査に當らしめた。

又ＢＣ二一四年には南方支那及び前時代より交通あつた南隣の大半島印度支那近くに進出して、百粵後に越裳民國と言はれた甌駱國の王、安陽王を討つて之を降し、現在の廣東、雲南及び北部安南地方を占領した。

彼は其の地方を桂林、南海、象の三郡に分つて秦の統治下に編入すると共に、ＢＣ五世紀以來興つて支那國民の中心思想となつてゐた儒教を、未開なる南方支那、印度支那諸族の間に流布して、大いに彼等を指導啓蒙した。印度支那族を大規模なる國家的勢力を以て直接感化を試みたる、此れを以て嚆矢とする。

而して西南印度支那地方には、既に迅くより印度、主として東岸カリンガ地方及び馬來諸島との間に交通あつたが故に、多分に印度化された西藏緬甸族、吉蔑族＝モン・クメル族等が其の勢力を誇つてゐた。

支那の印度支那東半に對する後世永き宗主權は、實に此の始皇帝に依つて初められたものであるが、ＢＣ二〇七年秦政權の沒落と共に、此の地方に南海の尉越陀、獨立の兵を擧げて番禺即ち現在の廣東を首府とする南越國を建設した。

始皇帝が北狄匈奴の南下を阻止すべく、山海關を起點とする世界的大工事たる萬里長城を築いたの

は此の頃である。秦亡び漢之に代つて七十年、BC一三五年、武帝は南支那閩粵地方、及び東方印度支那に於ける曾ての支那勢力を回復す可く、始皇帝治下に在つた南越國の桂林以下二郡及び其の附近を征服し、之を交趾、日南等六郡に分つて、交趾統治府の管下に置いた。

其の後三百餘年、漢政府は此の地方を流刑の地として、多くの罪因を放つたが、他方、本國の弊政と生存競爭を逃れた、多くの漢族は南方の肥沃なる此の新天地に移住した。斯くて政治的に文化的に位置高い此の地方の漢族は、先住族を指導し、又混血して其の生活を改變して行つたが、其れは統治者たる支那官吏の法制、言語、文字等の採用と相俟つて、大いに彼等の生活を支那化して行つた。他方三世紀頃には佛教又は波羅門教を奉じて、稍高い文明を持つてゐた南方沿岸の馬來諸族は、多分に印度馬來的な林邑竝に扶南等の小國家を形成してゐた。彼等は北隣に迫り來つた新來の支那勢力に對抗して屢々攻撃の軍を送り、印度支那に於ける覇權を支那と爭つてゐた。二二一年漢亡び、晉之に代つて五十年後の二七一年、安南の交趾以下諸郡は晉政權を北方に驅逐す可く幾度か起つたが、常に敗亡の中に終つた。斯くて東北印度支那に於ける支那の勢力は牢固として拔く能はざる程に强化し行くに連れ、南方なる平定 Vija＝佛逝を首府とせる林邑王國亦興隆し三四四年以來三五〇年に至る間、同國王范文は幾度か晉領たる日南、九眞等に進出して大いに晉軍を惱したのであつた。

印度支那に對する支那の關係が斯く深まり行くに伴ひ、之を中心とする支那、南洋の交渉又頓に其の頻繁の度を加へて、馬來諸島、印度諸港よりの所謂蠻夷賈船の往來漸く激しくなつて行くのであつた。然して其の主なる南海諸島との交通は、東鯷卽ち前の夷州（現今の臺灣）、比律賓、爪哇及びスマ

トラ東端のパレンバン Palemban＝舊港＝三佛齋及び印度等との間に行はれたのである。

一五〇年頃、埃及の有名な地理學者プトレメウス Ptolemeus に依つて「世界に於ける最も豐穰なる島にして金を多く產す」と言はれ、又ヒンヅーに依り「無上の樂土」と讃えられてゐた曩のヌサケンデン當時のヂャワドヴィパ Jawadowipa＝米の島たる爪哇は、其れ等の中に於ても最も重要なる位を占め、島內にはヒンヅーに依り齎らされた佛教文明の華、彌榮えてゐた。

又印度がアンドラ王朝下に入つてより半世紀後の七八年にはアヂ・サカ Adi-Saka 一族の爪哇移住があり、彼等は東部爪哇にヒンヅー王國を建てて、此の年を爪哇の紀元元年と定め、大いに佛教を國民の間に普及して彼等の佛教化に資した。之は偶然にも後章に於て述べるであらうカニシカ大王の定めた釋迦紀元元年と、全く相一致するものであつた。當時の爪哇は西部、中部、東部に各々獨立國があつて三分されてゐたが、其の何れもが佛教國民である點に於て相繫がれてゐた。彼等佛教ヒンヅー達が主として天產豐かなる爪哇に留まり、遠く比律賓、臺灣等に及ばなかつた事は、其れ等、二島の先住馬來族の間に、今日佛教的痕跡を見出し得ない事に依つても知られる。

馬來諸島に印度人の宗教的勢力が如斯活潑なる浸透をなしてゐる時、支那の政治的優位性も亦、馬來諸島國民の間に充分に認められてゐた。其れは既に漢時代よりの事であり、一三二年には爪哇王デワワルマン Dewawarman が順帝の許に使節を派遣して修交を求め、朝貢したが、支那及び爪哇の國家的交涉は之を以て嚆矢とする。尙順帝は之に對して金印紫綬を贈つて其の意を嘉したのである。

斯くして馬來諸島、印度、印度支那等の南洋諸民族と、支那との總體的交涉は、此の三世紀頃に於

て初めて朧ろ氣なる連關を見るに至つたのである。卽ち南洋史上に於ける諸島國の一としての關連は、濠洲諸島を除いては、此の時代に於て初まるものと見る可きであらう。

第十章　カニシカ大王と印度文明の歐洲輸出

ＢＣ二世紀頃、印度の西北に流れるオクサス R. Oxus＝嬀水の流域地方に大月氏國在つて、其の地理的位置よりして、印度、イラン及び支那地方との關係甚だ密なるものがあつた。六五年の頃に至つて、大月氏五藩の一であつた貴霜＝Kushan にクヂュラ Kujals＝Kadophiseas＝丘就郤なる英傑出で、忽ちの內に他の四藩を降して大月氏を統一し、遂に七八年に至り西部なるバクトリア Bactoria＝大夏の都バクトラ Bactra＝監氏城＝現バルクを首府として貴霜王朝を開き、其の第一代の王位に卽いてカドフィセス一世 Kadophises I と稱した。

彼は佛敎文化の香高き南隣の大國印度に對して常に深き關心を持つて、其の文物を輸入して大いに自國の文化的向上に資してゐた。其れは頓て東隣支那への佛敎流入の端を開くに至つた事を知らねばならない。然して彼は政治經濟的見地から、資源豐かに且アンドラ王朝下に無力なる印度に對して、猛烈なる魅惑を感じてゐたのも勿論の事である。八五年、彼は此の私かなる野望を實行するに至らずして空しく他界したが、次いで起つたカドフィセス二世 Kadophises II＝閻膏珍に依つて彼の宿望は充分に達せられたのであつた。卽ち彼等は登極後間も無くアフガンの精兵を率ひて南下し、先づカシミール Kashimir＝罽賓を奪ひ、續いてパンヂャブに進入して容易に其の地方を獲得した。斯くて三

十五年、彼の死の一二〇年迄の間に、不斷なる彼の印度侵略は遂に北方印度の大半を占領するに至り、彼自身の覇望亦充分に滿足せしめられたのであつた。

次いで第三代の王位を承け繼いだのが夫の有名なカニシカ Kanishka＝Kanerke＝迦膩色迦大王であつた。彼は卽位と共に印度に近いプルシャプラ Purshapura＝Peshawar に王城を奠め、間もなく南方なるインダス下流のグヂャラト Cujarat 地方を獲得して、二世紀に於ける貴霜王朝下の大月氏の繁榮を齎らしたのであつた。

英明なる彼は武力に依つて國勢を强化する傍ら、盛に佛敎文明を印度より輸入して、自國及び其の領土の社會生活を向上せしむる事の利を忘れなかつた。又彼の寬大とリベラリズムは、國策の遂行に惡影響無き限りに於て、國民に對して佛敎を强制する事無く、印度系、イラン系、ギリシア系、等複雜なる諸族をして自由に、或は拜火敎、或はギリシア敎等を信奉せしめて、小規模乍らも混然たる歐亞文化の融合を圖つたのであつた。然して佛敎に次ぐ敎勢は、敎祖ツアラツーストラに依りゼンド・アヴェスタ Zend Avesta を聖典とするイラン族の拜火敎であつた。

眞摯な佛敎徒であつた大王の文化的遺業中、最も重要なものは梵文學への貢獻以外に、ＢＣ二世紀スンガ王朝以來衰運を辿つてゐた佛敎の中與に在る。卽ち大王はアンドラ王朝下の大藩國であつた東方印度マガダ王國の高僧アスヴァゴシア Asvagosha＝馬鳴と共に、佛敎敎理の硏究と傳道に努力し、當時の美術工藝の粹を集めて豪華なる大伽籃を各地に建立して、大いに佛敎勢力を挽回したのであつた。西域、緬甸等に於ける後世の佛敎興隆の遠因實に此に存する。

然して貴霜王朝創立の七八年を、釋迦紀元元年と奠めて確たる佛暦を創始したのも亦彼の偉業であつた。更に見る可きは、經濟上に於ける貨幣の鑄造てふ新制であり、國內は無論ギリシア、羅馬等西方諸國及び印度、支那等の亞細亞諸國との貿易に於て之を用ひたのであつた。

高き印度の文物、法制、數學、建築、醫學等がイラン、アラビア等を經て歐洲諸國に輸出されて、大いに未開白人を啓蒙したのも此の頃である。其の後一千年、歐亞の文化的發展の差異は、近世に入つて此等か再び亞細亞諸國に逆輸入するの現象を呈するに至つてゐる。大王の後、二二〇年第五代バスデハ王 Vasudeva の頃には、アンドラ王朝の勃興に伴ひ國運漸く衰へ、旣に東方マガダ王國を失ひ、四世紀に入つては印度に於ける貴霜王權全く消滅して、僅かに本土アフガニスタンの一部に留まつた。

從つて印度地方に於ける佛敎々勢亦衰運を辿り、波羅門敎徒再び其の勢力を增大して各地に擴り、六世紀頃印度の大半は波羅門乃至之より進化せる印度敎　Hinduism＝ヒンヅー敎徒に依つて占められ、BC五世紀以來一千年に亘る佛敎勢力は衰亡の彼岸に其の影を潛めて了つた。

又、大月氏は其のハイマートに驅逐して印度を安泰に置いた、かのアンドラ王朝も四世紀に入つて亡び、遂に笈多(グプタ)王朝 Gupta Dynasty 之に代るに至つた。

尙、支那、印度支那に佛敎が流入したのは、紀元前後の頃で支那に於ては漢時代西域大月氏を經て傳來し、印度支那にはマガダ王國を經て、爪哇其の他の馬來諸島には曩に述べたる如くヒンヅーの移住、貿易により直接輸入されたものである。然して日本に傳來したのは旣に本土たる印度に衰亡して

約二百年の、六世紀頃であり、其の後の奈良朝時代繁榮の遠因を作つたものである。
斯くて東洋思潮の主流たる佛敎は、其の主力を北方に移動し、其の後の發展に於ける中心たらしめるに至つた。
日本、支那等北方諸國が、佛敎研究の爲に其の本土たる印度に屢々優秀なる僧侶を派遣して、自國の佛敎興隆に資したのは無論其の後の事である。

第十一章　チャンドラ笈多王朝と其の文化

三世紀末頃、大月氏を驅逐し、四世紀に入つてマガダ王國を倒して、三二〇年ガンヂスの上流カノウヂ Kanauj＝曲女城＝現 Lucknow を中心とする地方に興つた笈多王朝の祖をチャンドラ笈多一世 Chandhragupta I と稱する。
此の笈多王朝は三三〇年、明君サムドラ笈多 Samudhragupta (Gupta＝王の意) 卽位して以來大いに國勢を伸張したが、三七五年梵文學上有名なチャンドラ笈多二世 Chandhragupta II＝超日王＝Vikramaditya 出づるに及んで益々榮え、將に其の黃金時代に入つたのである。
卽ち東はベンガルより西はグヂャラトスラシュトラ、Surashtra＝現 Kathiawar 半島を領してアラビア海に出づる大版圖を統治して、其の有力なる背景を以て、大いに西方羅馬帝國以下の諸國と文化、貿易の交通を圖つた。
支那の名僧法顯 Fa Hien が印度の佛敎、社會等の調査の爲に來印したのは四〇〇年であり、恰も

彼治世の頃であつた。

彼が十三年の間、印度各地を遍歴して歸朝後著した佛國記は、今日尚古代印度研究上の古典として重要視されてゐる。

孔雀王朝時代の其れに比すれば小規模なものではあつたが、ササン王朝 Sassan Dynasty 下のイラン、支那より、南海なる爪哇（當時支那人は耶婆提と呼んでゐた）及びスマトラ東南の雄シリビヂャヤ Siribidjaya＝シリブス Sribs＝室利佛逝等の諸國に可なり多くの文化的思想的感化を與へてゐた。

四九〇年ナラシンハ笈多 Narasimpha Gupta の頃より漸く其の力を失つてゐたが、五〇三年、同王は北隣の大國支那の武帝の許に使節を派して、此等南北の兩大國國交甚だ密なるものがあつた。

然して五二〇年クマラ笈多二世 Kumaragupta II 即位の頃には昔日隆盛の面影全く失せて、偶々西北アム河畔に與つたトルコ系白匈 White Huus＝Ephtal＝厭噠の鋭鋒にパンヂャブを奪はれ、進んで其の首府アヨドヤ Ajodhya を攻略せらるるに至つて五二三年遂に二世紀に亘る印度の覇權を失墜した。

然し其の後間もない五八〇年、ガンヂスの支流たるヂェムナ河畔の小王國タネサル Thanesar の王プラバカラ・ヴァルダーナ Phrabakara Vardhana 出でて白匈を北方に驅逐し、印度人の印度を回複した。此のタネサル王朝に於て最も重要な事蹟を殘した者は、六〇六年即位したハルシア Harsha＝Vardhana＝Siraditya＝戒日王である。即ち彼は即位後數年の後には舊笈多王朝時代の印度領地を奪回すると共に、學問の偉力を知つた彼は大いに教育を興して、ナランダ Naranda 及びタキシラ Ta-

xilaに大學を設けた。實に世界史上に於ける最初の大學であり、六四四年歐洲に於ける最古の大學たるエヂンバラ大學に先立つ事正に六〇年である。

又彼は國內諸制を改善し、佛敎、波羅門共に之を保護して國民の精神生活を潤はしめ、更に積極的に國策遂行の根幹たる軍備を擴充して平和を確保したのであるが、有效なる對外進出を試みて資源地を獲得し、國家の又國民の經濟的發展に資する事を忘れなかつた。

斯くて七世紀印度は政治的に精神的に確固たる實力を保有して、內に非國民的思想を抱く者無く、外に夷狄の侵略を蒙る事無く、文化と平和は彌が上に印度の質的向上に資したのであつた。阿育、カニシカに次ぐ印度文明の西歐東亞への輸出時代は斯くて又も繰返さるるのであつた。

六二九年北方唐の太宗の命により、印度視察に來つた玄奘(ヂョウ) Yuan Chwang＝Hiun Tsiang がハルシア王に謁見したのは六三三年の事であり、六四〇年玄奘は歸還して、後世有名な大唐西域記十二卷を發表した。之は曩に法顯の作せる佛國記及び同七世紀末（六七一―六九四）來印せる僧義淨の作せる南海寄歸傳四卷と共に、西域及び南洋史硏究上重要な文獻となつてゐる。

ハルシア王は其の後六四一年に至つて、北隣の大國唐に使臣を遣つて國交の親を圖つたのであるが、唐の太宗は之に應へて六四八年武將王玄策を派して、ハルシア王城下に駐在せしめ、南北兩大國の交涉は前世紀笈多王朝時代に於ける其れよりも更に密接なるものとなつたのであつた。尙、西方アラビアなるメッカ Mecca には、五七〇年、南洋史竝に西洋史上重要なる政治的宗敎的役割を演ずる回敎 Mohammedanism＝Moslemism＝Islam＝Saracenism の祖マホメット Mohammad＝Muhammed

の誕生ありしを忘れる事は出來ない。

第十二章　ハルシア王の教育と唐及び新興回勢力の影響

六—七世紀に於ける印度がハルシア王の下に、其の高い文物を歐亞に輸出して、對外的優位性を保持してゐた如くに、國內に於ける文化制度等も見る可き多くのものを有してゐたが、特に教育に於て然るものであつた。

卽ち子女は其の年齡六歲を以て學に就き、先づ悉曇を修め、七歲より十一歲には梵文學、文法等を學び、成人すれば五明卽ち文學、藝術、數學、天文學、醫學を硏諳せしめたのであつた。從つて國民は一般に高い文化の水準に、惠まれた生活を過し、當時未だ開けなかつた歐洲諸國民に比ぶれば雲泥の差ある時代を現出してゐた。

十八世紀以來英帝國資本主義發展の、最も良き搾取地として、其の鐵蹄下に蹂躪され、三億印度大衆の中、初步の程度に於てすら讀み書きを爲し得る者、壯年男子に於て僅か一%に充たず其の無智と饑餓の中に獸的生活を送つてゐる今日の印度人の生活とは、全く比較し得ないものであつた。

ハルシア王の在位四十年の間、斯く高い民度と强い國力を充實せしめてゐた印度笈多王朝の末期をなすタネサル王朝も、六五〇年王の死後、漸く衰へて遂に其の重臣アラナヂュン Allangum＝阿羅那順、王位を簒奪せんとして擧兵するに至つた。然し乍ら王の在世時代唐より赴任してゐた武將王玄策、王軍を指揮してアラナジュンの叛軍を鎭壓した。

然して印度は此の戰鬪に於て、豫て聞く唐將の勇武を如實に知り、諸國はカリンガ、マガダ等の小國に至る迄、續々と使者を渡唐せしめて大宗の許に修交と好誼を求めるのであつた。印度が西方、南洋諸地方に其の優秀なる文化を普及してゐる時、實に唐は北方に在つて其の先進文明の諸文物を朝鮮、日本等東洋諸國に輸出して其の强大なる指導的位置を確保してゐたのである。

ハルシア王の後、ヤソヴァルマン Yasovarman 登極して、七三〇年に至る永い其の在位間大いに文藝を興し、當時印度最大の詩人と謳はれたバーヴァブチ Vababti 等を出すに至つた。

尙、六世紀末の五七〇年頃には、南方デカンの西南ヴァタピ Vatapi にドラビータの豪族プリケシン Pulikesin なる者起つてチャルキア＝珠利耶王國を建て榮えたが、其れは六〇八年プリケシン二世 Pulikesin II 登位するに及んで益々强大化し、南方印度を確保したが、七世紀以來カリンガ、シンハラ Simhara＝獅子國＝現錫崙 Ceylon ヴィヂャナガラ Vijayanagara 等東南沿岸諸國興隆して遂に崩壞し去つた。唐僧玄奘が北部よりデカンに入つてチャルキア王國を訪れたのは六四〇年でプリケシン二世の時代である。

此れ等諸國の內、ヴィヂャナガラ王國は九世紀に至つて、パラケサリーヴェルマン Parakesali Verman 出でて附近諸小國を併せて最も振ひ、八五〇年チョラ Chola＝駐贊王朝を創めて、後世永く南方印度の重鎭となつた。然して第二代アディチャ一世 Adythia I が卽位した八八〇年には、殆んど南方印度の大半を領して其の後五百年二十餘代の間連綿として續いたのであるが、其の活動は極めて消極的なものであつて、北方なるアーリア系ヒンヅーの歷史に比して見る可き多くのものを持つてゐ

ない。

然してマホメットに依る回教は七世紀に入つて、其の聖典コーラン Koran と之に伴ふ武力の强制、卽ち劔かコーランかの旨意に依つて急激なる發展を遂げ、先づアラビア地方に於ける佛教徒基督教徒を驅逐或は改宗せしめ、次いでイラン、印度地方に及び、七世紀末には遂に基督教歐洲諸國の大宗たる東羅馬帝國を其の首府コンスタンチノープルに撃破して、後年歐洲ルネサンスの溫床たりし所謂ビザンチン文明を回教化したのであつた。回教徒の政治勢力は更に擴大して西歐なるスペイン、ポルトガルのイベリア半島、埃及等の征服に及んで、偉大なる其の所謂サラセン文明は八世紀に入つて西南亞細亞より遠く歐洲の大半を掩被したのであつた。

卽ち七世紀末より八世紀にかけて、アラビア中部沙漠地方に起つたサラセン人の偉力は、アラビアより地中海沿岸、歐洲諸國の基督教徒を、宗教的武力、加之高度なる其のサラセン文明に依つて啓蒙したのである。

然して如斯國家的背景を除いて、多くのサラセン回教徒は、東に近き印度より馬來諸島との旺んなる交通貿易或は移住に依つて、發溂たる其の新興回教勢力を輸出傳道して行つた。

今日印度に七千萬、然して爪哇を中心とする馬來諸島に普き約五千萬、總計約一億二千萬に及んで、南洋諸民族中に絶大なる勢力を有する回教徒の黎明は、實に此の八世紀以後、特に十三世紀に入つて、創められたものである。然して回教の南海に於ける北方終點は比律賓であり、其の中心をなすは、西南ボルネオに近く連るスールー諸島 Sulu Islands のモロ族 Moro であり、其の基督教徒スペ

イン、米國等との猛烈なる闘爭は近世史上に於て述べられるであらう。

尙此の頃、印度の西北アフガニスタンなるコラサン Korasan のガズニ Ghazni 州には、九六〇年アルプ・テギン Alp-tegin に依つて創められた回敎コラサン帝國 Korasan Empire のガズニ王朝 Ghazni Dynasty があつたが、九七五年セベクテギン Sebek-tegin 卽位以來大いに隆盛に向ひ、徐々に東隣印度への進出を計畫してゐた。卽ち九九七年其の守備弱小なるに乘じて、インダス流域に大兵を派し、遂に其の下流地方シンド Sind を占領、以て印度侵略の第一步に成功したのであつた。

次いで九九七年マームード Mahmud 王登極したが、此の王こそは十一世紀劈頭パンヂャブ地方を獲得して、印度に於けるガズニ王朝勢力を確立し、以て其の後六世紀に近いアフガン系印度諸王朝の基礎を作つた印度政治史上に於ける一大エポックメーカーであつた。印度民衆の大規模なる回敎化亦此れより初まる。

第十三章　暹羅安南等印度支那諸國

三世紀末支那の晉政府が印度支那東部に有する交趾、日南等の諸郡部に於ける舊南越國の獨立軍を平定して印度支那に於ける晉の覇權を確立して以來、之に伴ふ貿易に依る經濟的利得亦大なるものがあつた。又晉政權の徹底と共に商業的漢族の進入は獨り經濟的方面のみならず、社會的文化的方面にも共れ等安南地方民族に對して、多大の感化と影響を與へて行つた。

其の後約一世紀、梁時代に入つて東南沿岸の林邑、扶南等の印度馬來的諸小國は絕えず支那駐屯軍

と抗爭する所あつたが不及、六世紀頃には遂に印度支那東半に於ける支那の覇權を容認するの止む無きに至つた。其れは六〇五年南岸の强國であつた林邑の王、梵志が新興隋政府の將劉方の軍に破られて以來益々確實なるものとなつた。

後に暹羅の一部となつた扶南は既に迅く五〇三年に支那に修好し、林邑も國王梵志の敗軍後、支那の印度支那に於ける權益を認むるは勿論、朝貢の禮を執るに至つたのである。印度支那の中央、當時の墮和羅地方に、後世暹羅國都の淵叢となつたラムプン Lampung＝ハリブンチャイ Harbunchai が建設されんとしてゐたのは此の頃である。七世紀支那は優勢な唐時代となり、東部支那領印度支那を改めて安南と稱し、六七九年に至り高宗は河內に安南都護府を設立して、政治に文化に唐の高き統治を行つた。

尙其の前、六七七年代宗の時、安南は林邑及び爪哇＝闍婆＝の耶婆提聯合軍の襲擊を受けたのであるが、唐軍能く之を擊退して事無きを得たのであり、强力なる安南都護府の設置理由亦茲に存する。

然し此に注意す可きは、亞細亞諸國の歷史に於ては、一國家が其の經濟生活の向上發展を目的として獲得した領土の擴張に於ても、列國群立割居して資源面積狹少なる歐洲諸國の歷史に於けるが如き、徹底的苛酷なる自國中心の彈壓搾取が敢行せらるる所無かつたと言ふ事である。

其れは亞細亞の廣大肥沃なる自然及び其の中に釀し成された愛他的共存的佛教乃至儒教等の精神文明の影響である。況んや今日の如く人口的に經濟的に逼迫する事無かつた此の時代に於ては、征服國民と言ひ、被征服國民と言ひ當時の歐洲列國の間に行はれてゐるが如き、又現代世界各地方に行はれ

てゐるが如き、極端なる差別ある優者本位の不公平なるものではなかつた。

亞細亞人種の長所は實に此の悠長なる博愛に在り、然して亞細亞人種の短所は、此の生活的餘裕に因る對自然的生產科學の向上なきと、生存競爭適應の爲の進取的戰鬪精神の發展なきとに在る。此れは特に温暖なる南洋史上に現はるる諸民族に對して、最も適切に言ひ得るものであり、南洋史の對西洋史的對東洋史的劣等無力性は、將に其處に見出されるのである。從つて此の亞細亞特に南洋諸民族の短所は南洋史解釋上忘る可からざる重要なる基調を爲してゐる事を銘記され度い。

卽ち斯くて唐領安南地方が二世紀を經た九世紀の中葉、西北に南詔＝後の大禮王國興つてメコン中流に其の勢力を誇つてゐたが、遂に八六四年より屢々唐の交趾なる安南郡護府を襲つて、八六六年には、一時其の統治權を顚覆した事があつたが、唐本國より武將高駢來征するに及んで、南詔軍を破り其の持領を奪回した。

尙、南海に雄飛してゐたヒンヅー爪哇王國は、七世紀初葉頃、南方印度支那の一王國眞臘＝前、扶南の一部を攻略して、太守を派し之を統治せしめたのであるが、八世紀に入つて同太守の後裔ヂャヤヴァルマン二世 Jayavarman II は本國に叛して獨立、甘蒲塞 Cambodia 王國を創立したのであつた。更に馬來半島南方にはメナンカブ Menangkabu 王國興隆して馬來族勢力の勃興に資する所あつた。日本、朝鮮等極東諸國に唐文明が盛んに輸入されたのは此の頃であり、日本に於ける遣唐使、奈良朝文化の繁榮等此處に初まる。八世紀、日本に於ては聖武天皇の治世、遣唐判官平群居は唐より歸還の途中暴風に遭ひ漂流、甘蒲塞南方海上なる崑崙島 Puro Condre＝軍突弄山に至つたが七三九年無

事歸朝し、九世紀に入つては同じく智澄大師東支那海に於て遭難、臺灣北部海岸に漂着したが、八五三年恙無く歸國する事が出來たのであつた。尙八六二年、日本に於ては平安朝の佛敎全盛時代、聖和天皇の皇子、後出家されて眞如と稱せられた方は唐を經て印度に佛敎を求めて御旅行の途中、印度支那の中北部ラヲス Laos＝羅撾（ロヲとも稱せらる）に於て薨ぜられ雄圖空しく消え去るの悲劇あつた事を忘れてはならない。降つて十世紀の末期九九七年には、當時南海、特に南支那海を荒してゐた臺灣を根據とする馬來海賊船隊は、北上して日本九州の太宰府を襲つた事がある。日本史上に於ける所謂南蠻人の亂入卽ち之である。

斯くて東洋文明に貢獻する所大であつた唐も十世紀に入つて衰へ、九〇六年遂に朱金忠の爲に其の政權を奪はれて五十餘年、支那は宗時代に入つた。然して唐末以來內憂外患に遑無く、南方領土に力及ばなかつた支那は、宋の太祖に至つて全く南方經倫の策を抛棄し、遂に交趾なる安南都護府をも廢止するに至つた。

卽ち九七〇年、交州の太守丁璉＝丁部領獨立して宋の實權より離れ瞿越國を建てるに至つたのである。今日に於ける安南王國の遡源遠く此の時に在る。其の後十年の九八〇年、瞿越國の王位は、王族黎桓＝大行帝に奪はれ、同王は九八二年更に南進して占城（Champa＝前林邑を併して强大化し、北方の南紹王國と共に印度支那に重きをなすに至つた。尙丁璉は宋の太祖より交趾王として封されたのであるが、其れは名義上の事であり、何等宋權を認めたもので無く、黎桓に至つては全く宋の封冊干渉を排して、其の獨立を完成しつつ十一世紀に入つた。

又南方爪哇のマタラム王國より獨立した八世紀以來の甘蒲塞王國は、九世紀ヂャヤヴァルマン三世 Jayavarman III 出づるに及んで益々榮へ所謂クメル文化の全盛時代を出現した。かの有名な國都アンコル・トム Angkor Thom＝Great City の壯麗なるが築造せられたのは九〇〇年ヤソヴァルマン王 Yasovarman の時代である。斯くて印度支那に於ける唯一の印度馬來文化に生きるカンボヂャは、南海馬來諸島國との交通貿易の要地として榮へ、又東隣なる占城と覇を爭ひ國內は爪哇よりの佛教文明を以て興隆してゐた。然してかの豪華を誇るアンコル・ワット Angkor Vat が建立されたのは十二世紀初頭であり、甘蒲塞王國の隆盛は此の時代を絕頂して其の後徐々に衰運を辿り、十五世紀に入つて全く安南に征服併合せられて、其の本然の姿を失つて了つた。

クメル族 Khmer＝Komer はワレース Alfred R. Wallace の Australasia, London, Stanford, 1893, Vol. I濠洲諸島誌に據れば、其れは日本に於けるアイヌと等しく、分離歐洲人 Caucasian Fragment の一と見られて居る種族である。尙日本の九洲地方を臺灣と共に馬來諸島中に含ましめてゐる學者もある事を附記して置く。（坪井九馬三＝我が國民國語の曙＝東京、昭昭二年—參照）

尙前に述べた高岳親王（眞如）遷化の地は、羅越が確實であり、是に就て西村氏は「新村出博士は現新嘉坡に指されてゐるが、羅越は古代南海航路の要地で、マラッカと並び稱せられてゐたもので、現在のリヲウ Riow（新嘉坡の東に近きビンタン島の要津）に當ると見るが至當であらう」と述べられてゐる。リヲウ＝羅越に取つて代つた新嘉坡の繁榮は、一八一九年英國總督ラッフルスJ. Stamford Raffles の占領以後の事であり、當時は人口約一五〇に過ぎない蕞爾たる一寒村に過ぎなかつたもので

ある。（西村竹四郎＝在南三十五年＝昭和十一年―參照）

第十四章　爪哇マタラム王國と佛教文明

風暖く天産豐かに、古來より南海一の蓬莱島として有名な爪哇諸島は、BC三世紀末に於ける阿育王の遠征以來、佛教印度との交通頓に盛んとなり、其の多數なる爪哇移住者と相俟つて、大いに先住馬來諸族を啓蒙して、文化向上に貢獻したのであつたが、三世紀頃には全島は全く佛教ヒンヅー化されて、ヒンヅー達は其の中心勢力となり、諸地方に小國家を營み、印度、支那、モルッカス諸島、印度支那沿岸等との間に可なり盛んな交通が行はれてゐた。支那商船が之等南海諸島に進出し初めたのも此の頃であるが、其れは七世紀唐時代以後に至つて益々活潑なるものとなつた。彼等が爪哇を闍婆と呼び、ボルネオをポロ Polo ＝浡拉＝波羅尼、スマトラを其の東端のシリブス國に因んで、室利佛浙等と呼んでゐたのは此の頃である。

支那、特に南方閩學地方の民族は、其の才幹を以て大いに南洋に發展し、印度の宗教的、政治的勢力に對するに商業的、文化的へゲモニーを以てした。彼等、所謂後代の華僑が、單純温和なる南海諸民族の社會に進入して、其の經濟的覇權を獲得する事は然程困難な業では無かつた。卽ち現代二十世紀に於ける豪勢無比なる華僑勢力の淵源は、遠く此の時代に萠芽する。

而して宗教的、政治的、印度との密接なる關係に於て、六世紀前葉、印度は恰も笈多王朝の末期頃、東方沿岸のカリンガ王國より中央爪哇に對して、集團的な民衆の大移住が行はれた。彼等は主と

して勃興せるヒンヅー教徒の壓迫を逃れて、南海に理想の佛教國を求め來つた熱烈なる佛教徒の群であり、母國カリンガの名を其の儘に、カリンガ王國を其の地方に建設して、將に本國に亡びんとする佛教勢力を爪哇島に再興したのである。而して七世紀頃には、折から頻繁なる支那商船の來航に依つて之と貿易關係を結び、其の六四七年には唐太宗の許に修交の使を送つて、外交上の、又貿易上の和親を圖つたのであつた。

又六〇三年には中南部爪哇沿岸に、笈多王朝に藩屬してゐた西方なるグヂァラト王國 Gujarat から約五百の兵を率ひた一王族の來住があり、同七世紀の中葉メダン Medan を首府とする佛教ヒンヅーのマタラム王國 Mataram を創めて、シャイレンドラ Cailendra 之が王位に卽いた。卽ちシャイレンドラ王朝 Cailendra Dynasty 第一代の祖である。

同國は歷代、英主相繼ぎ國力大いに充實して、盛に馬來諸島に發展し、セレベス Celebes モルッカス Moluccas 諸島の資源を求め香料、珍果等を支那及び祖國印度に輸出して國富を増し、文化亦昂つて、國勢漸く爪哇の重鎭たるに及んだ。斯くて八世紀頃には北方なる印度支那の眞臘を攻略して一時之を統治するに至つたのである。斯くてマタラム王國は創立以來二世紀にして、南海最大の獨立國として、中世馬者伯夷(マジャパヒト)大帝國出現迄、其の發展を恣にし得てゐたものである。

今日最も古くして且其の規模の壯大豪華なる點に於て、日本の大佛跡は元より、埃及のピラミットをも凌駕して世界第一の大佛蹟たるケダウ縣ボドボヅル村なる、かの有名なボドボヅル寺 Bord Bodor =BodoburTemple の建立は、實に爪哇に其の佛教華かなりし七世紀に成されたものであつて、之

が建築は印度より招聘した名僧ダルマ Kiahi Guna Darma の手に營まれたもので、古代世界建築史上に於て、正に最高の榮譽を荷ふ偉業であつた。

而して歐洲文明に眩惑されて己を忘れ去つた今日亞細亞諸國人は、ピラミッドの、又羅馬建築の大を知るに急にして、己が歷史と因緣ある南洋史上に於ける、此の一大建築の名をすら辨へざるの不自然なる、且自卑の哀れむ可き狀態に置かれてゐる。

印度より遲れて紀元前後より回教傳來に至る十二世紀頃迄が爪哇諸島の佛教時代であり、然して七世紀に始まり、九世紀に完成したボドボヅル寺建立の頃が、其の全盛時代を示してゐるものと見られる。而して今日に於ては僅かに爪哇東隣の小島、バリに其の面影を偲ぶのみである。

第十五章　爪哇サンヂァ王國の勃興と回教

斯くて馬來諸島、特に文化高き爪哇及び附近諸島がヒンヅーの齎らした佛教文明下に、印度、印度支那、支那、アラビア等と交通しつつ、其の惠まれた自然の中に醸された消極的安穩な生活と、比較的平和な政治的分立をなしてゐた古代、六世紀の頃、スマトラ東南地方にはパレンバン Palembang を王都とする佛教ヒンヅーの室利佛逝（シリブス）王國があつた。其れは附近諸島國との貿易及び住民の勇敢に依り、徐々に國勢を伸脹して西方詹卑 Jambi ヂャンビ彼岸のマラッカ Malacca 馬剌加地方を征服して、印亞交通の要衝を扼し大いに振つてゐたが、七世紀に入り、爪哇マタラム王國の勢力と對立抗爭するに至つて破れ、之に藩屬せしめられた。

然るに八世紀の中葉、東部爪哇に興つた波羅門ヒンヅーの一國家は、九世紀に入つて俄然其の勢力を擴大し、遂にスラバヤ灣南岸なるシンゴサリ Singosari を中心とする地方にサンヂャ王國 Sandjaja を建設して東方爪哇に確固たる覇權を樹立するに至つた。然して八九〇年明主バリトン王 Balitung 卽位するや、其の善政と對外積極政策は、急激なる國運の發展を招來し、附近諸小獨立王國を征服併合して其の領土を膨脹して行つた。

斯くて十世紀に入つた頃には、中部爪哇のカリンガ、西方のマタラム等を攻略して、其の勢力下に屈服せしめ、南海第一の大國となり了せた。カリンガは之を以て全く亡び、マタラムは其の保護國化されたのであるが、爪哇及び馬來諸島に於ける、一千年に垂んとする永き佛教勢力沒落の遠因は、實に此の佛敎諸國の政治的衰退に在つたと見られるのである。

他方マタラム勢力下に在つたスマトラの室利刺逝王國は、此れを機會として獨立を回復したが、頓て再びサンヂャ王國の膨脹に對立するに至つた。

然し旣に南海を制覇したサンヂャの權力に抗する能はず、加之九九〇年サンヂャ王中の明星と仰がるる大王ダルマ・バンシァ Dharma Bansa 登極するに及んで、遂に紀元一〇〇〇年滅亡の悲運に遭つたのである。斯くて十世紀末以後の南海の富は、一にサンヂャ王國發展の爲に用ひらるるに至つた。

馬來諸島に於ける移住民族はヒンヅーに次ぎ支那人、アラビア人が最も多いのであるが、アラビア人の齎らした回敎の感化影響は支那人の經濟的其れに比して深く、爪哇人の生活思想に浸透して行つた。

従つて八世紀より十二世紀にかけての馬來諸島は佛教、ヒンヅー敎、回敎三派の鼎立時代と見られ、其の後に於ける回敎制覇の機緣を作つた時代である。尙回敎と言ふ語は支那人の其れであり、回紇人が熱心なるマホメット敎徒であつた所より回敎又は回回敎と言ひ馴せるものである。

今日六千萬馬來諸島民が、老猾なる白人列强の搾取下に蠢きつつ、其の儚き生涯に於ける最大の憧憬渇仰が、アラビアなる回敎の聖地メッカへの參詣に在るを見ても、其の後に於て如何に彼等が根强く回敎化せられたるかを知り得るであらう。

尙支那人の爪哇定住は、九二四年卽ち唐の同光六年、爪哇三寶壠附近で遭難沈沒した支那船の漂流者達が、直葛＝Tegal王に寶物を獻じて其の許可を得たるを以て嚆矢とすると云ふ學者キャンベル Campbell 及び李長傳等が居るが、筆者に據れば其の交通と共に旣に迅く、秦の始皇帝時代に初まるものである。

第十六章　五世紀より十世紀に至る臺灣及び比律賓諸島

古代に於ける馬來諸島、特に南支那海及び其の附近海上は、秦以來主として支那商船に依つて貿易上の連絡、文化的交通が行はれ來つた事は、當時に於て最大最高の文明と、政治的經濟的勢力を支那が有してゐた事と、地理的關係から見て當然の事である。其れは唐、宋、漢と支那政權の時間的推移につれて、商業上の又航海上の技術の進步と共に益々其の交通網を擴大して、印度、アラビア諸國の海上勢力を壓してゐた。然し乍ら馬來諸島民族に對する思想的又政治的指導力に於ては、到底印度及

びアラビア人に及ぶ所では無かつた。

臺灣、比律賓等は既に秦末頃から其の探險船によつて發見され、其の後最も近い閩粤地方の支那人は個別的な交通乃至移住を行つてゐた事は既に述べた所であるが、比律賓諸島中の南半の大島ミンダナヲ及びスールー列島は、六世紀頃彼等にラクシアと呼ばれてゐたものである。

六〇五年、支那の煬帝は、其の頃臺灣、呂宋（比律賓諸島中最大の北方の島の名であるが、一般に全比律賓諸島の總稱に代表せしめてゐる事が多い）等と貿易して巨利を博してゐた海商、何蠻の建言に從つて南方海上の蓬萊諸島を獲得す可く、海將朱寬に一隊の武裝船を率ひしめて、屢々其の探險、資源開拓竝に貿易振興に當らしめた。然し臺灣在住の一部支那移民を除いた他の全馬來族の諸酋長部落は之を喜ばず、朱寬一行の要求を拒絕したので、支那政府は虎賁以下一萬に上る大軍を派して臺灣遠征を企て、遂に其の西部沿岸の一部を占領するに至つた。

臺灣島に對する國家的外力の進入は、之を以て嚆矢とするものであるが、其の後僅か十年、政權唐に歸するに及んで隨政府の偉業も敢無く解消した。然し乍ら蒙昧なる臺灣の諸部落は之に依つて西方の大國支那の强大を知り、之との修誼を求めるに至つたが、六三九年唐太宗の許に修交の使來つたのが其の初まりである。

斯くて唐以來臺灣（當時琉鬼國とも呼ばれた）との關係は空前の親密を加ふるに至り、閩粤卽ち福建廣東等南方支那人は盛に一葦帶水の近い臺灣島に來航移住し其の文化を以て無智なる先住族を指導し又欺謀して、徐々に其の勢力を扶殖して行つた。然して八〇六年に於ける唐有數の文學者施肩吾一

族の澎湖移住は、初めて臺灣諸島を支那社會に紹介して、其の後の移住者を激增せしめるの因を作つたものである。

天產豐かな寶島臺灣は、斯くて先進支那民族移住の最適地となり、其の後七百年の明時代には、殆んど臺灣の主要地方に其の勢力を擴大して蒙昧なる先住馬來族、所謂蠻人を東部山間に驅逐するに至つたのである。卽ち「支那人の臺灣」の起りである。

他方比律賓に於ては呂宋 Luzon 最も多く支那人に知られ、其の要港マニラ Manila 馬尼剌はヒンヅー、アラビア人等と共に、支那人との貿易交通殷賑を極め、同時にマニラは比律賓に於ける最大なる政治的中心市街をなしてゐた。支那人の移住及び混血、其の他文化的影響、政治的關係に於て比律賓亦臺灣と相似たる位置に置かれたのであるが、元來商業的營利中心の支那民族の事とて、政治的勢力獲得には見る可き效果を現はさなかつた。

然して注目に價するのは、十二世紀以後に於けるアラビア人の比律賓に對する回敎的感化であり、十四世紀頃には沿岸及び小島嶼の大半は完全に回敎徒と化して其の敎理が彼等の生活を、思想を根强く支配して行つた事である。其れは事に南方ミンダナヲ、スールー群島及パラワンに强く、中世に於けるスペイン三百年の政權すらも、遂に撲滅し得ざる程の牢固たるものとなつたのである。

如斯、五世紀より十世紀に至る臺灣及び比律賓諸島は、主として支那及びヒンヅー、アラビア人等の政治經濟的及び文化的影響の下に、未だ全體的統制の無い、酋長中心の原始的分立狀態を現出して居たものである。

第十七章　古代世界史上に於ける南洋史の位置

先史數十萬年以來、南方亞細亞なる印度の西北一帶の地は、人類發祥の地として最も重要なる地方をなし、其の原史時代に入つてＢＣ四千年よりＢＣ二千年に亘る印度のインダス文明は、西方に於けるナイル、東北に於ける黄河の其れと共に地上に於ける三大文明の搖籃として、多くの意義深き史料を呈供してゐる。

其の後十數世紀の永い蒙昧時代を經て、人類最初の大宗教としての佛教が印度に發生して以後、是は、南洋は無論西洋、後に北上して東洋に移動發展し、多くの國を、民を、其の作りなす思想、文化の中に向上せしめて行つた。

斯くて五百年を經た頃アラビアの北、パレスチナより基督教起り、其の後六百年又同じくアラビアより回教の創成を見るに至つた。

其の後十世紀に至る古代世界は、佛教及び回教大いに榮えて政治化せる勢力を各地に振ひ、基督教は羅馬帝國其の他二三の小國に其の力を限られてゐた。

從つて古代世界諸國は宗教、政治に於て、文化、思想に於て、佛教的又回教的影響、及び其の啓蒙指導を受くる所甚だ多かつた事は既に述べた如くである。

特に一般に未開野蠻であつた歐洲諸地方民族は其の優秀なる素質に於て、之が爲に向上啓發せらるる所多く、以て後代に於ける所謂歐洲文明の淵源をなしたのであつた。

古代歐洲に於ける文化の最高峯に在つた侯及、羅馬人等の其れも、偉大なる印度文明には遠く及ばないものであつた。

とまれ、古代に於ける世界史上、亞細亞なる人々の文化は歐洲なる人々の上に多大なる指導を與へ特に南亞細亞なる南洋史上に作されたる文物の、對歐洲的リーダーシップは、其の後の白人文明の溫床として、永劫不朽の名譽を恣にするものである。英國の有名な東洋學者パーカー E. H. Parker は、いみじくも其の力作たる蒙古一千年史 A Thousand Years of the Tartars, London, 1924. 中に述べて言ふ――

「…………歐洲人は口を揃へて羅馬文明を高評し、世界の支配者とか、地上諸民族の統治者とか放言してゐるが、其れは地中海の一隅に、或は精々ペルシア、ゴール地方に極めて一時的な侵略をなし得た國家に過ぎない。

…………東方亞細亞諸國に行はれてゐた大事業に比ぶれば、其の世界人類的位置は到底其の足下に…………何れにせよ東洋世界の歷史は、西洋史に較べて遙かに優れた意義と興味を有つてゐる。唯殘念なるは我々白人には其の歷史が讀めない事である。白人の豪慢さは、世界史なるものから敢て東洋を忘れ去つてゐる。然らば東洋人が、當時の地中海沿岸地方の一小歐洲半島諸國の歷史を無視しても、詮方ないものと見る可きである…………」

更に一九三五年、歐洲諸國に、其の洛陽の紙價を高からしめたデュキュヂス Henri Degugis の名著白人の沒落 Le Destindes races blanches が其の卷頭に記せるが如くに――

「…………歐洲が永い間有し來つた偉大なる文明の光も、元は亞細亞より輸入し來つたものであつた」

のである。斯くて南方亞細亞及び太洋洲諸島史たる南洋史の、古代世界史上に於ける輝かしき位置は尠くとも歐羅巴半島の其れよりは、重要なる意義と價値を世界史の上に持つものであつた。

第三編　中　世　史

第一章　印度に於ける阿富汗政權

中世南洋史の劈頭を飾るものは、一〇〇一年に於ける現アフガニスタン地方の雄、コラサン帝國 Khorasan ガズニ Ghazni＝哥疾尼王朝時代に於けるサルタン・マームード Sultan Mahmud の印度侵入である。

彼は旺んなる國力を以て、其の後數回パンヂャブ地方に進入して、其の王ヂャイパル Jaipal の軍を破り、王を戰死せしめてパンヂャブ占領を完成し、更に一〇二五年には東進してガンヂス河よりベンガル地方のヒンヅー諸國を征服し、一〇三〇年には全く北方印度の統治權を獲得した。

其の後五百餘年の永いアフガン Afghan の印度政權樹立、實に此に初まるものである。而して其の當然の結果として、回教アフガン政府は其の政策として、大いに印度の回教化を圖り、ヒンヅー教佛教を壓迫驅逐し又其の生活をイラン化して行つた。斯くて回教徒は今日の如くヒンヅー教徒に次ぐ第二の勢力を獲得するに至つたのである。然し乍ら此に注意す可きはアフガン政權以來東方海上の馬來諸島に對する印度の交通とヘゲモニーは俄然衰退するに至り、僅かに東岸ベンガル、コロマンデル沿岸諸港が之との交通貿易を保持するに過ぎないものとなつた事である。其れは一に新政權の馬來諸

島に對する認識不足、及び之に基く對南海政策の沒却であり、之が爲に中世以後に於ける印、馬關係は徐々に疎隔され、其の後の歷史を獨立的なものに化して行つた。

十二世紀中葉以來衰弱したガズニ王朝は、一一七五年遂にシハブーウーデン Shihab ud-din＝Sultan Muhammad of Gohr のゴール王朝 Gohr Dynasty に取つて代はられたが、彼は前王朝時代の領土を更に擴大して、西南シンド、ラホール Lahore 及びビハル地方を獲得して印度に於ける回敎王國を强化して行つた。

然し彼のゴール王朝は一二〇六年に於ける彼の死と共に亡び、彼の部將であつたクトブ•ウ•デン•イバク Kutob-ud-din Ibak の所謂奴隷王朝 Slave Dynasty 之に代り其の首府をデリー Delhi に奠めたのであつた。

此の奴隷王朝時代に於ける重要事項は、北方蒙古に起つた空前絕後の大英雄成吉斯大汗 Jinghiz Khan＝鐵木眞の存在及び其の偉大なる影響である。

卽ち大汗は一二二〇年より數年に亘つて、部將チェエベスクタイをして其の本據たる中央亞細亞のサマルカンドより、慓悍なる蒙古騎兵を率ひてカブール、パンヂャブ地方に侵入しアルタムシュ王の印度軍を擊破し、更にネパール Nepal ブータン Bhutan の北端印度よりアフガニスタン、イラン地方を征服して其の勢力アラビア海に及んだのであつた。

斯かる蒙古帝國の進入は、其の後歐洲諸國を征服したる後にも屢々行はれ、衰弱無力なる奴隷王朝は遂に印度東南岸、當時支那人に馬八兒 Malar と呼ばれてゐた地方をも蒙古勢力下に奪はるるに至

つた。

奴隷王朝の滅亡は其の後間もない一二九〇年、王カイコバド Kaikobad の時代であり、同年王族にしてアルラハバド Allahabad の知事アラ・ウ・デン Ala-ud-din のキルヂ王朝 Khilji Dynasty が同じくデリーを都として主權を握るに至つた。

アラ・ウ・デンは奴隷王朝の後を承けて、大いに其の弊政を改め、一三〇〇年には北部地方に於ける蒙古軍の首都デリー進入を擊退して印度保全の爲に力むると共に、中南部反回敎諸小國を討つて之を併せ、大いに印度に於けるアフガン政權を强化したものであつたが、一三一五年彼の死に加ふるに次王クスル・カン Khusuru Khan の暴政に因つて國内忽ち亂れ、遂に一三二〇年最も優勢なるパンヂャブの知事ギァス・ウ・デン・ツグラク Ghiyas-ud-din-Tughlak の爲に、僅か三十年にして解滅して了つた。

卽ち新興ギァス・ウ・デン・ツグラクは翌一三二一年歷代王都であつたデリーに近く新王城の地としてツグラバド Tughlakbad 市を建設し、其の後百餘年ツグラク王朝 Tughlak Dynasty の首都となしたのである。

然るに一三二四年第二代ムハマド ツグラク Muhammad Tughlak 卽位するや、常に印度北邊を脅かして止む事無い蒙古帝國の勢力を驅逐す可く、大兵を派して之に當らしめたのであつたが、訓練と戰鬪精神弱き印度軍の、當事の世界第一の强大國蒙古軍に刄向ふは、恰も小兒の壯漢に抗するに等しく、忽ちの内に紛碎擊滅せられて了つた。加之巨額の賠償を支拂らはしめられて大いに印度國力を

疲弊せしめた。然して彼が發見したのは歴代アフガン政權の傳統たる印度の回教化政策と、財政回復の二鳥一石的效手段としての、非回教徒稅の實施であつた。然し乍ら不明な彼の此の計劃は、徒らにヒンヅー教徒と回教徒の對立を激成して印度社會の安定を搖がし、加之其の頃印度各地は例年に稀なる饑饉に見舞はれて民衆は窮乏し、課稅の成績甚だ擧がらなかつた。斯くて彼は當時支那に於ける紙幣に倣ひ、國內經濟、外國貿易に之を使用して一時を糊塗し得たか遂に濫發に終り、國庫は紙幣を以て埋まり破產の危機に瀕した。

斯くて二十餘年、其の衰退は、有力なる東方ベンガル諸國王＝印度副王をして獨立離叛の氣運を釀成するに至つたのである。危ふき事累卵にも似たる此のツグラク王朝をして、甦生の活氣を吹き込んだのは實に第三代のフィルツ・シャー・ツグラク Firz Shah Tughlak の敏腕であつた。賢明なる彼は先づ產業を開發して經濟力の充實を圖り、次で前代の弊政を改善して國民生活の安定に資した。かの有名なるガンヂスの支流ヂュムナ Jumna 運河の開鑿に依る灌漑及び交通の便、北部農業の向上、實に彼の偉業である。

斯くて半世紀の印度は平和の進路を辿つてゐたのであるが、一三九八年マームード・ツグラク Mahmud Tughlak 王の時代、察合臺汗國の帝にして、其の威西域、歐洲、地中海諸國の間に鳴つた英雄チムール Timur＝Timur Lenk＝帖木兒、大軍を率ひて印度を襲ひ印度軍を一蹴して長驅、其の首都デリー及びツグラクバドを攻略した。然して此等の各地に部將を駐せしめて蒙古勢力を扶殖した。斯くてツグラク王權全く地に墜ち、ベンガル諸國は既に獨立して南方の非回教バーマニ Bahmani

亦之に倣ひ、十五世紀に入つて遂に南方の大藩國ヴィヂァヤナガラ Vijayanagara も王クリシナ Krishna起つて其の羈絆を脱するに至つた。

即ち一四一四年、同しきアフガンのサイィド王朝 Sayyid Dynasty 之に代つた。然し乍ら之は僅かに其の首都デリーを中心とする地方的政權に過ぎず、加之三十餘年にして解滅し、一四五〇年ロヂ王朝 Lodi Dynasty 之に代つたのであるが、之亦無力にして印度は全く分裂の狀態となつた。

斯くて十六世紀に於けるアフガン政權は一途に沒落の衰運を辿り、印度は其の統一的國力を失つて極度に弱化した。コロンブス Christopher Columbus 以來東洋熱の昂上してゐた歐洲諸國、特に强大を誇つてゐたスペイン、ポルトガル等の南洋進入は實に此の頃である。

先づポルトガルは、アラビア海に於ける回敎徒の制海權を奪ひ、利多き印度貿易の獨占を企圖した。一五〇五年ロヂ王權を威嚇欺謀し、西岸の要港臥亞 Goa を占據して印度及び之を含む全南洋進出の根據とした所以である。

虛に乘じ無力を狙つた進取的白人諸國の亞細亞侵略は玆に初まる。所謂彼等の東洋乃至未知世界發見時代の端であり、西力東漸時代の緖である。

而して北方印度に於ては、十三世紀末來の蒙古人侵入による、彼等の第三帝國としての蒙古帝國 Mogul Empire が一五二六年の成立を急いでゐた。

第二章　印度支那諸國及び元帝國の覇業

印度支那東岸の安南王國（當時瞿越國）は、九八〇年に至り丁王朝の主權黎王朝に移つて以來、永年に亘る支那の封冊、干渉を排して完全なる獨立を遂げ、西北の大理＝南紹及び緬國と共に、印度支那の三大强國として中世に入つたのであるが、其の後僅か三十年、臥朝王に至つて交州＝現河內の太守李公蘊の爲に其の政權を奪取された。

一〇一〇年、新しき大越國の名の許に太祖として登極したのが卽ち李公蘊である。英明な彼は儀禮として名義上のみの宋主權を容れつつ大いに宋の法令制度、社會文物を輸入して安南文化の興隆に資し又全國を二十四郡に分つて其の統治を圓滑充實せしめ、更に國內產業を興し、宋、呂宋、馬來諸島の爪哇等との外國貿易を振起し、國力の經濟的强化を圖つた。

斯くて大越國の勢力は大いに膨脹して、一〇六九年遂に南方なる地哩、麻令、布政等占城 Champa の地を征服併合するに至つた。國名を今日呼ばるる如き安南と稱するに至つたのは、其の後一一六三年、時の大越國王英宗が、宗主國たる宋の孝宗の慫慂により改めた時に初まる。斯くて李朝下の安南は其の統治權の鞏固と、宋文化の指導によつて益々向上し、西方に興つた羅斛 Laos 其の南方なる暹國 Shan と又南海諸島、特にマニラ、スマトラのパレンバン、爪哇のバンムタ Bantam 諸港と盛んなる貿易を行つて、其の國際的位置を高めてゐた。然るに其の後六十年、昭皇幼くして王位に卽き、陳煚（ケイ）之が攝政となつて安南國勢を總攬してゐたのであるが、一二二五年遂に彼は其の並び無き權勢を

以て王位を簒奪した。陳王朝の太宗即ち彼であり、可惜安南建國の宗としての李王朝二百年の治世は其の終焉を告げたのであつた。

又北方支那に於ては、十三世紀中葉以來、宋の權力漸く傾き、遂に衞王を最後として一二七九年、新興蒙古帝國に其の主權を奪はれた。之に伴ひ宋の安南に於ける特權も亦消失し、同じき年王位に登つた仁宗は、國號を再び大越と改め、國政を刷新し、其の頃漸く爪哇の一角に擡頭し來つた後年の大帝國ヒンヅー教國滿者伯夷 Modjokert＝Majapahit とも國交を結んでゐた。

斯くて十五世紀に至る陳朝下の安南は順調なる國步を進め、文化の向上亦見る可きものあり、就中有名なのは聖宗の紹隆十五年卽ち一二七二年、黎文休によつて著はされた大作、大越史記三十卷及び元帝國に仕へて信任あつた安南の學者黎崱（ダク）に據る、安南略史二十卷である。漢字に相似た安南文字の起源も亦此の頃である。

然し乍ら智的に武力に、當時世界を壓倒してゐた蒙古人の元帝國が、行くとして可ならざる無き其の威力を以て、加之歷代支那の特殊權益を認めてゐた南隣の沃地印度支那の存在を、淡として拱手傍觀してゐる筈が無かつた。卽ち一二三五年以來、精悍なる蒙古騎兵の大軍は、長驅して、ツァー・ウラヂミール二世 Czar Vladimir II の下に諸公相爭つて統一無き露西亞帝國以下、ポーランド、ハンガリー等歐洲諸國を或はモスコウに、リーグニッツに、ダニウブ河畔に擊破して、歐羅巴半島の大半を征服し、世界史上空前の大帝國を建設した餘勢を驅つて、一二七七年、更に其の一部は先づ雲南に南接する緬國を、其の王都蒲甘（パカン）に破つて之を占領した。次いで東南下して羅國を併せ、一二八七年には

遂に仁宗治下に在つた安南を征服したのである。

元は之等南方諸國を、新に安南に設けた統治機關たる安南行省の管下に置いた。向ふ所敵無き元帝國の忽必烈汗は一二八一年に至つて、遂に海を渡り極東の神國日本征服の軍を派したのであつたが、大元自然の厄と共に慘敗の憂目を見た事は吾人の知る如くである。實に十三世紀末既知世界に於て、大元帝國の影響を全く受けざるもの、西に之が攻擊目標とならなかつた英獨在り、東に之が攻擊を擊退した日本在るのみであつた。

降つて一二九二年、元は豫て降服を促して之を容れたスマトラ及び印度馬八兒（マバール）地方を除き、之に從はなかつた南海の雄、爪哇に對して當時世界史上未曾有の大遠征軍を送つたのであるが、之が說明は後章に讓る。

尙世界史的見地より、當時の蒙古人歐洲席捲による歐亞人種葛藤の大局を略述して、人類史上最初の大規模なる黃白二大人種接觸の實相を瞥見しやう。

卽ち巧妙大膽なる戰術と、優秀なる武器を兼備した蒙古軍が、一二三五年以來、北部歐洲より徐々に西南歐洲諸國に向つて其の征服の手を擴大して來た時、未だ文化開けず、無力な歐洲諸國は實に驚天動地「神の怒り」なりとして其の威力に震駭した。

歐洲諸國、王中の王として、政教の大權を握つてゐた時の羅馬法王インノセント四世　Innocent IV は之を基督教國に對する一大罪惡なりとして、全歐洲諸國より成る對蒙十字軍の結成を提案すると共に、英佛二國に急使を派して是等諸國の大聯合軍を組織して、之に對抗せん事を企圖したので

あつた。他方彼等諸國の國民は、基督敎徒に幸あれかしと、只管十字架の前に日夜祈願の熱誠を籠めた。尙インノセント四世は基督敎徒の利益、道德の代表者として、其の重責を痛感し、一二四六年異敎徒亞細亞の代表、蒙古皇帝定宗に對して、歐洲に於ける蒙古勢力の撤退を求むる左の如き興味ある書を、高僧ジョン Jhon 及びプラノ・カルビニ Prano Carbini に託して送つた。

（英　譯）

INNOCENT, BISHOP, SERVANT OF THE SERVANTS OF GOD,
TO THE KING AND PEOPLES OF THE TARTARS.

……………As we have heard, having entered many lands of Christians and others, have, wasted them with horrible desolation, and still, with continued fury, not ceasing to extend further your destroying hands, desolving every natural tie, neither sparing sex nor age, direct indifferentry against all the fury of the sword.

We therefore, after the example of the Prince of peace, desiring to unite all mankind in unity and the fear of Cod, warn, beseech, and exhorst you henceforth to desist wholly from such outrages, and especially from the precaution of Christians; and since, by so many and so great offences, yon have doubtless grievously provoked the wrath of the Divine majesty, that you make satisfaction to him by suitable penitence…………………………

大意を汲めば次の如くである――

「…………汝等は基督教諸國を侵略して其の城市を破壞し、老若男女を問はず之を殺戮すと聞く。余は上帝の法に順ひて常に人類を平和に歸せむ事を希望す。故に懇に汝等に告ぐ。今日以後宜しく其の侵害を止めて基督教徒を虐すること勿れ。汝等旣に上帝の怒りに觸るること疑ひ無し。唯々懺悔して以て其の罪惡を滅す可し…………」

之に對して定宗は全亞細亞なる、非基督教徒を代表して應酬して曰く――

「…………西方の神の下僕に告ぐ

汝等果して兵を罷めん事を欲せば、敎主竝に諸帝王等、當に自ら來りて和を乞ふ可し。汝の書我に奉するに基督敎を以てす。雖然我何故に其の奉ず可きやを知らず。汝の書又我か基督敎徒を虐するを聞いて驚愕すと言ふ。之何ぞ驚愕するに足らん。彼の輩上帝の意に背き成吉斯汗の命に逆ひ、邪謀を用ひて我か使者を殺戮す。之を以て上帝震怒し我に命じ、此を嚴罰せしめ悉く諸國を以て我に臣屬せしむ。人力此に至らず、唯上帝の命ずる所也。汝西方の徒自ら上帝の選民と稱して他邦を侮蔑す。我等固より上帝を崇敬して宇內を平一せんとす。東西ある事無し。我等亦人也。上帝の加護無くむば能く何事をか爲さむや」と。

中世紀、未だ亞細亞人が文化に戰鬪能力に、世界に優勢を保つてゐた當時、亞細亞諸國人は彼等歐洲諸國に對して、何ら卑屈と畏敬を感ずる所無く、如斯堂々たる對等の男性的外交を爲し得て居たのである。然るに其の後十六世紀以來、四百年に亙る歐洲列强の偉大なる文化と侵略は、亞細亞諸國を殆んど征服して自主性を失はしめ、拜歐的思想を侵透せしめた今二十世紀とならしめたのである。

十六世紀西力東漸以來の亞細亞史、特に南洋史は、白禍による滅亡と憔衰の一大衰史であり、其處に何等の發展も美も見出されないのである。

實に十三世紀に於ける成吉斯汗の偉大なる文武の統治能力は、舊世界の大半なる歐亞大陸より南洋諸島に及んで、人類史初まつて此に七千年未だ曾つて斯かる世界統一的大帝國の出現を見た事が無かつた。アレクサンドル、豐臣秀吉、始皇帝、阿育、ナポレオン等亦偉大なる人物ではあつたが、成吉斯大汗の其れに對する時、其れは大人と少年の差が認められた。

イワニン Ivanin は其著鐵木眞用兵論中に述べて曰ふ――

「………加ふるに屢々四隣の强敵の來襲する所となり、鐵木眞は其の度毎に危難に瀕し、僅かに身を以て逃れる事數回に及んだ………然し乍ら此の間に於ける鐵木眞少年時代の艱難は、彼の不撓不屈の精神を鼓舞して後年能く衆を服せしむるの膽略を備えしむる樣になつた。長じて元老會議に推されて汗となつたが、此の時彼の率ゆる兵は僅かに一萬五千に過ぎなかつた。

然し艱難の中に人となつた彼は、己を持する事嚴に能く身を以て士卒の模範となつた。深く部下を

愛し、厚く勳功を讃え賞、罰を公平に行つたので、其の風を聞いて來り從ふ者次第に增大し、大いに兵力を强化する事が出來た。思ふに、暴戾横恣漁色を常事として怪まない當時の酋長の中に、彼の如き自制克己の精神を有し、加之果斷にして寛大なる酋長の出たのは甚だ稀な事であつた。

斯くて彼は野蠻暴戾、又、子の親に從はざる、富者の貧者を救はざる等の弊風を改善して行つた。………彼は異民族蠻民を征服するに及んでは事々に皆秩序を設け、公平を旨として彼等を保護するを以て急務とし、又大いに警備を嚴にしたので、旅行者亦自由安泰に往來して、掠奪の憂に遭ふ事が無かつた。裁判も明確なる證據無き限り、又犯罪者の自白無き限り、苛酷なる刑を適用する事を避けた………」

蒙古大帝國の行政方針は、其の廣大無比なる大領土内の諸民族を統治するに當つて、文化低く宗教熱獨り旺んなる當時代に適合す可く、信仰の自由を以て彼等を信服せしめた事は甚だ賢名な策であつた。又人種平等、階級無差別を以て人材登用を斷行するの進歩的な彼の制度でもあつた。斯くて十四世紀も中葉に至り、蒙古の本國元の衰運に伴ひ、西域、歐洲諸國に對する其の覇權も弱化して行つたが、露西亞のみは、翌十五世紀末、卽ち一四八〇年モスコー大公國にイワン三世 Ivan III 獨立するに至る迄、約二百五十年の永き間蒙古に藩屬してゐたのであつた。

斯くて蒙古人の約三世紀に亙る歐洲征覇が、歐亞兩人種の生理的文化的大混融を創出した一大遺業は到底ＢＣ三世紀に於けるアレクサンドルの東方地中海沿岸に行つた所謂歐亞の結婚程度の小規模な

るものではなかつた。今日、西は露西亞より、波蘭、ハンガリー、イラン地方の殆んどに亙つて、其の容貌遺風に一脈の蒙古的卽ち亞細亞的なるものを見出し得る所以卽ち此に在るのである。

歐亞陸路交通の開拓、及是による貿易、人種的接觸等亦之に依つて偉大なる進歩を見るに至り、カラコルムなる蒙古宮廷には、四時歐亞大陸諸國家の代表、重臣等が駐在してゐた。蒙古人十三世紀に於ける此の世界征服は、恐らく此の二十世紀以後と雖も何人をも爲し得ない不必要なる一大事業となるものであらう。

次にヴェルズの蒙古人の歐洲征服觀を掲げて、從來亞細亞史家すら誤り傳へてゐる反亞細亞的解釋の氷解に資する事とする――

"The Mongol then swept right across Asia to Russia (1235), an amazing march; Kieff was destroyed in 1240, and nearly all Russia became tributary to the Mongols. Poland was ravaged, and a mixed army ....was annihilated at the battle of Liegnitz in Lower Silesia in 1241. ....'It is only recently,' says Bury in his notes to Gibbon's Decline and Fall of the Roman Empire, 'that European history has began to understand that the successes of the Mongol army which overran Poland and occupied Hungary in the spring of 1241 were won by consummate strategy and were not due to a mere overwhelm-

ing superiority of numbers. But this fact has not yet become a matter of common knowledge ; the vulgar opinion which represents the Tartars as a wild horde carrying all before them solely by their multitude, and galloping through Eastern Europe without a strategic plan, rushing at all obstacles and overcoming them b, mere weight, still prevails…………' Such a compaign was quite beyond the power of any European army of the time, and it was beyond the vision of any European commander. ……………the Mongols embarked upon the enterprise with full knowledge of the political situation of Hungary and the condition of Poland………… they had taken care to inform themselves by a wellorganized systen of spies ; on the other hand, the Hungarians and Christian powers, like childish barbarians, knew hardly anything about their enemies……………………"

「…………一二三五年蒙古兵團は亞細亞より長驅して露西亞に進入し、一二四〇年にはキエフの町を奪り、遂に露西亞は蒙古の藩屬國となつた。次で波蘭が亡ぼされた。一二四一年には…………………聯合軍がシレシアのリーグニッツに於て蒙古軍の爲に粉碎された。…………賢名なる蒙古軍はリーグニッツ以西の森林地帶が、騎兵獨特の戰略に不利なのを知つて、其れ以上は前進しなかつた。

ベリーはギボンの羅馬興亡史中に述べて曰つた——

「最近になつて漸く歐羅巴史家が納得した事であるが、かの一二四一年の春に波蘭を征服し、ハン

ガリーを占領した蒙古軍の勝利は、實に巧妙なる戰略兵法に依つたものであり、決して單なる兵力の多數に因るものでは無かつた。所が如何しても人は其の歐洲利己的優越心から之を其のまゝには信じやうとはしない。

一般人の常識は羅馬史家の主觀的歷史觀の先入主に依つて、蒙古人と言へば野蠻無智な馬賊の如くに考へてゐる」と。

…………下流ヴィスチュラ河からトランシルバニヤの大戰場に於て、蒙古兵指揮官の意圖が如何に寸分違はず的確に實戰に遂行せられたかは、唯々感嘆の他はない。當時の歐洲の何れの國の軍隊も、斯かる大會戰には全く無智であつた。

…………就中注意すべきは、蒙古軍の行動戰術は當時のハンガリー、波蘭の國內事情を充分に內偵した上に計劃されたものであつた事だ。彼は其の侵略以前に間諜機關に依つて敵國の充分なる調査を遂げてゐた。…………之に比して歐洲諸國は全く未開諸國で、敵たる蒙古帝國に就ては殆んど何も知る所がなかつたのである……………………………………」

吾人は世界の征服竝に統治てふ一大事業が、決して蠻勇と無智慘酷に依つてのみ成されるものでない事を知つてゐる。然して其處に幾分の慘虐があつたとする時、其れはかのアレクサンドルが又ナポレオンが大蒙古帝國の五分の一にも滿たない小帝國激成の爲めに、或はイランの土地に、又歐洲の野に爲せる其れと何等の差異無い事を充分に知り得るのである。

吾人は身遠き西洋史の前に先づ身近く因縁深き東洋史を今一度新しく見直すと共に、白禍に曇る妖雲を拂ひ去つて、眞如の月を見出さねばならない。本南洋史觀の基調亦其處に存するものである。而して春風秋雨七〇〇年後の今日、既に衰滅に瀕して往年の繁榮見る由も無き蒙古族は、今日滿洲事變及支那事變を契機とする日本の大陸政策によつて、再び起たんとする因縁に置かれてゐる。

第三章　滿者伯夷帝國の勃興と蒙古艦隊の爪哇遠征

九世紀初頭、東方爪哇に興つたサンヂャ王國が、同世紀末バリトン王以來興隆して、西方なるカリンガ及びマタラム二國を其の統治下に併せ、更に十世紀の中葉ダルマ、バンシャ王出でて益々強大化し、遂にマストラの雄、室利佛逝（シリブス）王國を其の首府にして且南海の要港であつたパレンバンに破つて南海の霸權を確立し、北方の大國、宋、印度支那の安南、北隣の呂宋及び西北なる印度、アラビア等との交通貿易に繁榮した事は既に古代史上に述べた如くである。

斯くてサンヂャ王國はダルマ、バンシャ王の許に十一世紀に入つたのであるが、一〇一〇年彼は王位を嗣子エルランガ Erlangga に讓つて隱退した。其の後同國は衰亡して一二二〇年其の一都ケヂリ Kediri=Daha を中心とする地方に、ケンアロ Ken Arok なる豪族が一ヒンヅー國を建てたが、之が後世馬來諸島空前絶後の大帝國となつた滿者伯夷帝國の搖籃である。

其の後同國は擴大して、一二八〇年ケルタナガラ Kertanagara 王位に卽くに至り、初めて滿者伯夷 Majapahit=八達那巴郡務國と稱した。又此の頃西方爪哇にはバンタム、馬來半島にはメナンカブ

印度教(ヒンズー)

滿者伯夷帝國之全盛時代領土

—十四世紀—



十六世紀末南洋政治地圖

和蘭侵入以前



Menangkabu 等の小王國があつた。

而して北方には元帝國の興隆あり、十三世紀中葉には歐亞大陸の大半を征服し、降て一二八七年には印度支那地方を其の範圍に入れて、安南行省の下に統治してゐたのであるが、斷然たる其の權勢は一世を風靡して南海に及び、爪哇諸國亦其の干渉影響の下に威壓され勝であつた。

豪膽不屈の滿者伯夷皇帝ケルタナガラは、南海に樹てる其の勢力を背景として元に對抗、以て馬來諸島に於ける利益を確守せんとしてゐた。ボルネオ、當時の渤泥王國、印度東岸の馬八兒等と同時に、元帝よりの勸降使節を受けたのは此の一九二〇年の頃であつた。豫て斯くあらむ事を期して軍備、經濟等の充實を怠る所無かつたケルタナガラは、憤然として其の要求を一蹴し元との決戰を覺悟したのである。

大陸政策既に成功し、南洋政策亦大半の成就を見たる折柄、滿者伯夷帝の反撥は大いに元帝忽必烈＝世祖のプライドを害した。卽ち忽必烈は提督亦黒迷失（イヘメシ）、史弼に數萬の兵を與へて南洋遠征の大艦隊を組織し安南より南支那海、カリマタ海峽を通過して、東方爪哇なる滿者伯夷の要害、スラバヤ灣に突入した。ケルタナガラの爪哇艦隊は、灣內深く之を邀擊し、此處スラバヤ灣頭には物凄い一大海戰が展開されたのであつた。時に一二九二年、元の日本攻擊後十二年の事である。然し爪哇軍如何に奮戰力闘するとも、世界の大半を征服して强大なる元の武力に對しては、儚き一の跪きに過ぎず、哀れ一晝夜の激戰の後、爪哇艦隊は四離滅裂に粉碎され、元軍は大擧上陸し遂にケルタナガラをして、首府ケヂリに城下の盟を結ばしめるに至つた。斯くて南海の覇者滿者伯夷帝國亦元の安南行省管下に保護

化せられ、南洋諸島は南端の蠻界濠洲諸島を除いて、殆んど元帝國の勢力下に入つたのである。

然し乍ら當時に於ける富裕なる元の領土獲得、勢力扶殖行爲は、近世に於ける文化的慾望高く加之資源乏しき歐米諸國が、亞細亞諸國に對して爲せるが如き、資源の奪掠、領民生活の搾取、衰弱を齎らすが如き、深刻なるもので無く、僅かに朝貢、國際的優位性及び貿易上の博利を目的とする程度の穩便なものであつて、多分に主權者のヒロイズムの發現でもあつた事は前にも述べた如くである。從つて今日の其れとは大いに其の意義內容を異にするものであつた事を知らねばならない。

南方支那人の陸續たる爪哇移住が行はれたのは其の後であり、彼等は其の得意とする商業を以て、爪哇人社會中に食ひ入つた。南洋華僑の歷史は斯く古い。

斯くて一二九四年に至り、ケルタラヂャサ Kertaradjasa 帝位に登るや先代の屈辱を雪ぐ可く、新興の意氣を以て盛んに支那、回敎等の文化を輸入し、法制、敎育を興して民度の向上に力め、又兵備を擴張して其の國本を鞏固にした。從つて一二九五年忽必烈の後を承けた元帝成宗の對南消極政策と相俟つて、滿者伯夷は遂に元の羈絆を脫し、其の他諸國も亦元の無關心に依つて漸く獨立的形態を備ふるに至り、元との間には外交的平和な修好のみが結ばれてゐた。

而して一二九八年、一三〇〇年には、ケルタラヂャサ王は他の諸國に倣つて成宗の許に朝貢の使節を派した。又一三〇八年には、元武宗より應答の使爪哇に來り、國交愈々親密なるものがあつた。

元帝國に二十年の仕官を卒へて、歸國の途に就いたマルコポーロ Marco Polo が西部爪哇なるバンタム Bantam 王國の首府カラパ＝Kalapa＝噶喇巴に寄港したのは一二九五年の事であり、十五世紀

來、回教勢力が爪哇を占むるに至つて、同地はジャガタラ＝Jacatra＝Xacatra デヤガトラと呼ばれ、其の後十七世紀に入つて和蘭之を占領してよりバタビヤ＝Batavia と新稱さるるに至つた。

倚此に見逃してならない重要な事は、十三世紀以來十四世紀に亙る亞細亞諸國が、大元帝國を盟主とする平和な政治的文化的交通の中に、一の精神的同好觀念が作られてゐた事である。

今二十世紀、文化、交通機關の發達が主觀的世界を縮少して、凡ゆる問題が直ちに世界的連關の中に考へられ、又對外關係が一國家を超えて直ちに國家群的考慮を要する今日、之は亞細亞諸民族特に東亞の盟主としての日本に對し洵に深き敎訓と示唆を與へるものである。

第四章　滿者伯夷帝國の興亡及び十六世紀馬來諸國家

元帝成宗の消極的平和政策と、一二九四年以來のケルタラヂャサの努力に依つて、徐々に其の國勢を挽回しつつあつた滿者伯夷帝國は、一三〇九年ヂャヤナガラ Joeyanagara 帝位を繼ぐに及んで益々强化し、旣に元の安南行省の干渉を排して、其の國勢の膨脹を附近諸島の獲得に依つて滿足せしめて行つた。

其の優勢なる艦船による南海の制覇は、先づ最も近き東方のマヅラ Madura バリ Bali 諸島の占領に初まり、次いで西部ヒンヅー諸國より北方比律賓、セレベス島のマカッサー Makassar ボルネヲのバンヂャルマシン Bandjarnasin スマトラのパレンバン諸島港を獲得して、馬來諸島全般に於ける、政治經濟的覇權を樹立して行つた。

斯くて一三五〇年、英明なるハヤム・ヴル Hajam Woëroek の時代に至るや、彼は對外政策の成功を遠交近攻に在るとなし、既に元亡びて明時代となれる北方の大國支那、及び西北の印度、ツグラク王朝に修好の使節を遣つて國交を温め、以て附近諸島國に對する武力進出に後顧の憂ひ無からしめた。

卽ち彼は一三五七年以後、猛烈なる對外進出を始め、一三七七年に至る二十年間に、西部なるバンタム王國を除いたボルネヲ、スマトラ、セレベス、モルッカス、チモール Timor 馬來半島、及び比律賓南半に至る尨大なる全馬來諸島を征服統治するに至つたのであつた。實に其れは二十世紀前葉に於ける所謂蘭領東印度諸島に、英領馬來及び米勢力下の比律賓を加へた一大南海の帝國であつた。

(地圖參照)

而して一三五七年、ハヤム・ヴルの最初の外征たるバンタム征討に於ては、國王ラップラナ Lapoeranna の頑强なる抵抗に遭ひ其の目的を達し得ず、又一三七七年のパレンバン及びロンプン Lompoen 攻略に際しては、同國王、明の救援を求めたのであるが、支、滿間の親交は遂に滿者伯夷の同地占領を可能ならしめたものであり、ハヤム・ヴルは其れ等諸領に太守を派遣して之が統治に當らしめる事とした。

當時スマトラは爪哇本島 First Java とも呼ばれ、マルコポーロは小爪哇 Java Minor と記してゐる。スマトラと呼ばれるに至つたのは、一五〇五年初めて渡來し來つた伊太利人ド・ヴァルテマ Ludovico de Varthema が島民一般の呼ぶ Trimatra トリマトラを誤聞して Sumatra スマトラと稱し

て、歐洲に傳はり、其の儘今日に至つてゐるものである。

斯くて十四世紀南海に君臨するに至つた大滿者伯夷帝國北端の領土は比律賓の大半に及び、之に對してはラカンドーラ Lacandra 家のトンド王朝 Tond Dynasty が統治に當つたものである。而して此の王族は十五世紀末本國滅亡後も、薄弱ながら依然として其の主權を握り、十六世紀末スペインの侵入時代迄繼續された。

十五世紀に入つて間もない一四〇三年及び一四一〇年、恰も滿者伯夷帝國に於てはヴィクラマヴァルダーナ Vikramawarddhana 在位の頃、明より鄭和及び中官候顯が大艦隊を率ひて南航し來り、パレンバン其の他滿者伯夷の諸要港に示威的な雄姿を現はした。

而してヒンヅー滿者伯夷なる此の大帝國の根底を動搖させるに至つたものは、如斯武力には非ずして、實に數世紀來爪哇に侵入し來つた回教及び其の釀し作した思想であつた。爪哇文字をアラビア文字化し、其の生活を回教化して行つた偉大なる回教は、頓て爪哇人の間に政治的反ヒンヅー勢力を溫釀したのであり、十五世紀中葉スヒタ Soehita 帝の時代には、遂にヒンヅー滿者伯夷政權の牙城に迫るものとなつたのである。又數世紀來の支那人勢力も亦增大して、此の頃首府滿者伯夷市の北方沿岸にグレシー Gresik=Grisee の町を作して、其の經濟的覇權確立の初期を形成してゐた。

如斯情勢は徐々に滿者伯夷政權の沒落を早め、十五世紀末ヒヤン・プルワビシェサ Hijang Poeruwawisjesa 帝時代には、遂にスマトラ、比律賓、ボルネヲ等外領の治權を失ひ、又西方爪哇なるマタラム王國獨立の業を成さしむるに至つた。

斯くて滿者伯夷國勢は秋陽沒山の其れに似て、一四七八年全く衰へ、十三世紀以來二百餘年に亘る永い間の南海制覇の偉業を儚く解消し終つた。

十二世紀來、佛敎の後を受けて榮え來つたヒンヅー敎の勢力も亦之を國教とする滿者伯夷帝國と共の運命を共にし、爪哇全島及び之を環る馬來諸島よりヒンヅー敎は驅逐され、新たなる力强き回敎是に代つたのである。今日馬來諸島民族の回敎化實に此に初まる。就中比律賓南部諸島及びボルネヲ沿岸最も早く、當時彼等は全く回敎徒酋長たるハッヂ Hadj=Haj 又はサルタン Sultan の統禦下に在つた。

此の時代に於ける南洋諸國（含酋長國）の政治體制は、當時の東洋及び西洋の其れよりも甚だしい專制君主の、原始的封建國家であり、滿者伯夷に於ても行政官は恰も王家の家扶に過ぎず、且官吏の報酬は中世日本の祿高に等しく、生活用品を以て行はれたものである。

然して十六世紀馬來諸島に於ける主なる國家は、七世紀來爪哇のマタラム、バンタム及びスマトラのアチン Atje=Atchin=亞珍等の諸ヒンヅー國（後回敎化）であり、マタラムは一六〇一年マス・ヂョレン Mas Djoleng 王以來、又バンタムは一六〇二年アブルマファヒル Abocl-Mafachir 王以來稍盛んに、尙亞珍は一五一〇年スマトラの大國であつたピヂェールを其の一州知事であつたイブラヒム王 Raja Ibrahim が亡ぼして各々建國せるものである。

西歐の二大强國ポルトガル及びスペインが南洋に侵入し來つたのは、一五〇五年に臥亞 Goa を獲得したポルトガルのダルブケルケ（ポルトガル領臥亞總督=印度副王とも通稱する）が、一五一一年

其の所屬艦隊を以つて亞珍攻擊を爲したるを以て嚆矢とする。而して彼は其の歸途バンタムのカラパ＝ヂャガタラ港に寄港し、同國王を懷柔して、其處に侵略の前衞としての商館を設置した。同時にスマトラのパレンバン及びマラッカのツマシク Toemasik＝シンガプラ Singapoela＝現 Singapore＝新嘉坡の二港が、强制に依り彼等の爲に開港せしめられた。スペインが比律賓に據つたのは其後六十餘年の一五七一年である。西力の東漸は斯くて初まる。

又十七世紀來歐洲勢力南侵に拍車を掛けたものに、十六世紀末の和蘭人リンショーテン Jan Huijgen van Linschoten の著、東印度旅行記 Itinerario: Voyage ofte Shipvaertnaer ofte Portugael-Indien. 's Gravenhage 1610. がある。一五七九年スペインより獨立したる和蘭が其の新興氣勢を以て、大いに亞細亞經倫に着眼し、一五九七年第一回の南洋遠征艦隊を派遣するに至つたのは實に此の著の影響である。卽ちリンショテンの述べた南洋諸島に於けるスペイン、ポルトガルの活躍と巨利、特にモルッカス諸島に產する香料資源が其れである。又初期資本主義發展時代の彼等諸國にとつて、植民地獲得は最も魅力ある國家的冒險の一でもあつた。而して和蘭艦隊が最初に投錨したのは、爪哇西岸のバンタム港であり、翌一五九八年末の事である。

斯くて迫り來つた歐洲勢力の前に、無力倫安の爪哇民族は、在りし日華かなる滿者伯夷帝國時代の見果てぬ夢を追つてゐた。恰も其れは孔雀王朝時代の誇らしきスーヴェニアに醉ふ印度民族の其れにも似た儚いものであつた。其れは舊滿者伯夷の東に近く、マヂョケルト Madjokerto 市の名の許に今日尙其の昔は偲ばれてゐる。

尙南洋が初めて西洋史上に上つたのも亦此の時代である。

第五章　安南及び明帝國の活動

一三六七年、元帝國滅亡と共に、印度支那諸國は約一世紀に亘る安南行省の管下を離れたのであるが、十四世紀末、明太祖の晩年、安南は再び其の勢力下に入つた。然して一四〇〇年、安南の少帝は王族李犛の爲に廢されて、明の干渉を斥けるに至つたので、明帝成祖は將張輔をして大兵を率ひしめ、一四〇六年安南の潜王李犛の軍を討つた。斯くして翌一四〇七年明は簡定帝を擁立すると共に、元時代の安南行省に交る可き交趾布政司を設置したのである。

其の後一四二〇年に至り、陳王朝の遺臣黎利は明政權の不當を鳴らして、安南の完全獨立の爲に兵を擧げ、布政司を攻擊した。時の明帝宣宗は大いに驚き將李彬等を派して之を征討せんとしたのであるが、利あらずして破れ、遂に布政司は攻略せられ、黎利は全安南の治安を確保し、河内を首府として王位に登つた。安南黎王朝の始祖太祖卽ち彼である。其の後黎朝安南と、明間の國交は圓滑に歸し、更に極東なる足利時代日本、及び南海諸島國との交易も振興して五十年の歲月は過ぎたのである。曩に獨立した南隣の占城を征服したのは聖宗時代の一四七〇年であり、又一四七九年には西北方なる羅撾を併せ、印度支那に於ける最も優秀なる國家の一として十六世紀に入つた。然るに一五二七年、東京地方の豪族莫登庸起つて北部安南に獨立して安南國勢は南北に對立するに至つたが、一五九二年、黎の一族鄭松の軍北上して莫登庸を破り南北安南を統一して、交都＝現交趾に王都を奠め、全

安南の政權を握り且國號を大越と改めた。然し乍ら之も僅か八年を出でざる一六〇〇年、中部沿岸なる順化（ユエ）に鄭松の族たる阮黃叛して南半を領する廣南王國を建て、安南再び二分されて近世に入つた。

飜つて北方支那を見るに、十三世紀より十四世紀にかけて興つた世界的大帝國元の後を繼いだ明は、前代の其れに比較して稍小規模ではあるが、亞細亞に竝び無き大國として、南洋にも大いに其の勢力を浸潤させた。

特に一四〇五年より一四三三年に亘る間、曾て支那が南洋に有してゐた優位性を回復す可く、宦官鄭和は世界に誇る大艦隊を率ひて眞臘＝柬蒲塞＝甘孛智＝Cambodia 暹羅、満者伯夷等の南海諸國の要津を訪れ、諸王と會して大明帝國の政治經濟上の權盛擴大に資したのである。

鄭和の大艦隊は更に西進してサイイド王朝下なる印度のベンガル＝榜葛剌及び南部のヴィヂャヤナガラ諸國の要港コーチン＝Cochin＝阿枝、古里＝Calicut を經てアラビア海を渡り、遠くイランのコラムズ＝Colams＝忽魯模子より、更に南航してアフリカのモグドクス＝Mogdocus＝木骨都東地方に至つて、十五世紀中葉未だ歐洲勢力の南侵無き時代を風靡したのである。

當時歐洲諸國に於ては、百餘年に亘る永き十字軍の失敗、法王權及び敎權の濫用等により、羅馬法王及び既存基督敎の權威地を拂ひ、政敎の分離、宗敎改革等の烽火は、折から興れる自然科學的思想の勃興と共に、永き彼等の蒙昧なる超現實的宗敎萬能の夢を打破して、暗黑なる中世歐洲に輝かしき理智の光を投じつつあつた。其れは、内に彼等の所謂ルネサンス時代の絢爛たる文化を齎し、外に、

新世界發見の偉大なる資源及生活面積を獲得するに至つたものである。

第六章 暹羅王國の勃興

六世紀末頃よりメナム Menam＝湄南流域のラムプン、チェンセン Chiengsen 地方に形成されつつあつたラヲ・タイ Lao-Tai 族のスコタイ・サワンカロク Sukothai Sawankack 王國は、十一世紀中葉プラルアン Phra Luang の頃大いに國勢を張り、文化も亦向上して西はサルウィン河 R. Salween より南は馬來半島に至る大領土を有してゐたが、一〇九〇年彼の死と共に沒落した。ムアン・ハン Muong Hang の豪族スダマラージャ Suddhammaraja 之に代つて政權を握つたが、十二世紀中葉ケサラ・シマ Kesara Sima 王の時代、西南なる柬埔塞の攻略に遭ひ、次いで白古 Pegu の軍に大侵略を受けて、國勢頓に衰運に向ひ、一一八〇年、王ナライ Narai の頃迄白古軍の勢力下に沈淪した。而してナライ王は十三世紀初頭、首府をノン・サヲ Non-Sano＝Non-Sao に遷して國勢の挽回に力める所多かつたのであるが、一三〇〇年頃元帝忽必烈の進入軍と戰ひ破れた北部のタイ Tai 族は、南下してナライの軍を首府ノン・サヲに襲撃して之を亡し、遂に主權はタイ族の手に移つて了つた。

斯くて一三五一年プラ・チャヲ・ウ・トン Phra Chao U Thong は、首府をアユチャ Ayuthia＝阿猶地亞に定め、スコタイ・サワンカロク全土の統治を宣言した。ソムデッチ・プラ・ラマ・チポヂ Somdetch Phra Rama Thibodi 王卽ち彼であり、其の後十八世紀に至るアユチャ王國四百餘年の基礎此に創められた。而して不世出の偉材であつた彼が、建國に際して制定した諸法令の優秀進步的なものであつ

た事は、二十世紀の今日尙其の幾部を踏襲してゐる暹羅法令に依つても知り得らるるであらう。斯くて同國は徐々に隆盛に向ひ、曾ては其の攻撃に惱んだ柬埔寨を征して之を領し、十六世紀に入つた頃には印度支那中央の大國として、支那或は南海諸國との間に盛んなる交通を行つてゐた。

南方支那、臺灣、呂宋等に發展し來つた日本の所謂倭寇が、其の驥足を南洋諸島に伸ばし、暹羅に進入し來つたのは此の頃である。

然るに一五五五年、暹羅は西北の緬甸王ビエンヌング Biennung＝莽瑞體の猛烈なる侵入を受けて耐へず、王都を攻略せられ、遂に暹羅王ソムデッチ・プラ・マヒンドラ Somdetch Phra Mahindra は國外に亡命して國運將に累卵の危きに瀕した。斯くて暹羅はアユチアに於て緬甸軍と城下の盟を結ぶの止む無きに至り、中央暹羅は全く緬甸勢力下に把握せらるるものとなつた。

玆に注目す可きは、十六世紀以來、徐々に增大し來つた海外日本商人武士は、遂にアユチアに近く集團して、日本町を形成するに至つてゐた事であり、又彼等の一部は其の知識と信義と武力を以て暹羅人社會に重きをなし、一五六〇年、明君プラ・ナレスアン Phra Naresuan＝Phra Naret の卽位に及んでは、王の信任を得て政治に、國防に、參與せしめらるるに至つた事である。

日暹貿易官としての木下六右衛門、日本町統率官としての津田又左衛門等之であり、日本軍は直接宮闕の護衞に當ると共に、暹羅軍指令の重任にも就いたのである。其等日本人は意氣天を呑むの勇略ある發展的商人、乃至內に志を得なかつた野望ある浪人武士團であつた。

斯くて暹羅王プラ・ナレスアンは內政を整へ國軍の充實を圖り、遂に一五六五年以來、緬甸勢力驅

逐の爲に起つて之を破り、一五九〇年頃には舊領土の大半を奪回して、中央印度支那に於ける暹羅國勢を中興したのであつた。斯くて其の背後に在つた日本人の勢力は益々鞏固となり、日暹貿易關係も大いに振起し、日本人の來住も亦頓に多きを加へ、一六〇五年ナレスアン王の死の頃には、暹羅に於ける日本人の位置は空前の强靱性あるものとなつてゐた。

卽ち一五九九年、日本の關白秀頼の許に、暹羅よりの使節が方物を獻じて修好を求むるに至つた所以である。之に對しての日本實權者德川家康は秀頼に代つて、其の使節に暹羅國王への書及び甲冑を贈つて嘉納親交の證とした。

尙一五九七年、日本の慶長二年に於ける關白秀吉の征韓征明の飛報は、大いに南洋諸國を驚かしたが、暹羅王ナレスアンも亦大に愕いて、明帝神宗の許に共同防衞の進言をなした。而して侍臣日本人の慰撫に依り漸く安堵したのであるが、此事件は曩に述べた暹羅使節訪日の前年、一五九八年の事である。

又、馬來諸島國に其の侵略の手を伸ばし來つたポルトガル艦隊が、アユチヤを尋ね通商を求めて來たのは、一五一一年に於ける其のマラッカ征討の後であるが、當時日本人及び其の商船の繁榮に壓せられて、暹羅進出の機會を見出し得ずに十七世紀に入つたのである。

斯くて十七世紀、卽ち近世初期に於ける日暹關係は、山田長政等の出現により益々親密化されて行つたのであるが、近世以後駸々たる歐洲勢力の侵入は、全く日本的なるものを驅逐して、遂に英國之に代るに至つた。經緯は詳しく近世史上に於て述べられるであらう。

尙西北隣なる緬甸は一四四五年、明帝英宗の攻擊に破れて之に藩屬したが、其の後に於ける明の輕視と、自國の發展に依り、徐々に獨立するに至り、十六世紀に入つては全く明の羈絆を脫し、一五三〇年國王莽瑞體の積極政策は近隣諸地方特に暹羅を討つて、北は雲南より東は暹羅領の西部を占領して範圍を擴大し國勢大いに昂つた。一五八三年同王の死に次ぐ莽應裏王の失政は、遂に暹羅軍に反擊せらるるに至り、又一五九〇年明將劉綎之の大兵を邀へ戰つて破れ、再び明の干涉を受くるに至り、國勢頓に衰運に向ひつつ十七世紀に入つた。當時の首府はイラワヂ R. Irrawady 上流の阿瓦 Ava であり、大都マンダレー Mandalay の南隣に在つた。

第七章　ポーロ父子と歐亞交通の黎明

今日に至る世界七千年の史上に於て、曾て無い歐亞大陸大半の統治を行つた十三世紀元帝國の世界的な交通、政治、思想上に於ける影響と業蹟は、其の後に於ける亞細亞諸國の衰退畏縮と、歐洲文化の世界光被に依り、不幸にも陰滅掩蔽されてゐるが、素晴しく偉大なるものであつた。陸路に依る當時の歐亞交通は、元の出現に依つて初めて完成されたものであり、從つて、人種、國家、文化等の大陸的接觸混融も亦之に依つて行はれたのであつた。

十三世紀に於ける蒙古成吉斯大汗の名は世界を風靡し、其の遠征を受けた歐洲人は、蒙古來を鬼神惡魔の如くに恐れた。而し乍ら東方なる蒙古の偉大を求めて、歐洲列國の諸王、就中最も有力であつた羅馬法王は多くの使者を、又は探險者を蒙古に派遣した。故にカラコルム、後に北京に遷つた蒙古

王宮は、四時歐亞諸國家の使臣達に依つて賑はつてゐた。

伊太利人ニコロ・ポーロ Nicolo Polo が、僥倖を東方の大國に策して、遙々一子マルコ・ポーロ Marco Polo＝孛羅を伴ひ來つたのは一二五四年の事である。

文化未だ進まず交通機關備はらない當時の歐亞の連絡は、雲烟萬里、涯知らぬ山野を、或は馬上に或は隊商に托して、パミールの高原を、ゴビの沙漠を、危險と疲勞の中に數年を費して行はれる一個の偉大なる事業であつた。

ニコロ・ポーロは斯くて東洋史上最初の白人としての名を留めたのであるが、數年の後、忽必烈汗の歐人學者の來訪を求める羅馬法王への傳言を携へて歸還した。未だ拓けざる歐亞陸路を多大なる犧牲と年月と巨費を投じて開發し、其の後の交通に便じたのは、實に成吉斯大汗以後歷代元帝の努力である。而して其れは當時の世界的大國家、元のみの能くする一の尊き使命でもあつた。

時の法王グレゴリー十世が、ニコロ・ポーロの傳言に依つて、忽必烈汗の希望に副ふ可く、マルコ・ポーロを案內者として數名の學者を其の親書と共にヴェニスより元に派遣したのは、一二七一年の事であるが、其の困難なる大旅行に於て、學者達は、或は前途を危み或は發病して其の行を挫折し、僅かにマルコ・ポーロのみ五年の歲月を費して一二七五年、無事、開平なる忽必烈汗の王城に到達するを得たのであつた。パミール高原の遙か彼方、崑崙山系東方の連山は當時マルコ・ポーロが苦心慘憺踏破した折の記念にや、今日尙マルコ・ポーロ山脈 Marco Polo Mts. の名が與へられてゐる。

羅馬の學者達は遂に來るを得なかつた。然しポーロの賢明と信義は大いに忽必烈の寵愛する所となり信任する事甚だ厚く、遂には官吏に採用して、一時は彼を楊州の知事に任命した事もあつた。斯くてポーロの元帝國に仕官する事十餘年、一二九二年漸く忽必烈汗の許可を得て、杭州より元船に乗じ、臺灣海峽を南航して泉州、スマトラ室利佛逝王國のパレンバン（彼の所謂 Java Minor）等海路を經て印度沿岸よりアラビア海を通過し、四年の後、卽ち一二九五年、彼は無事故郷ヴェニスに歸還したのであつた。

彼の後には一二八八年、羅馬法王ニコラウス四世 Nicolaws の命により僧コルヴィノ Monte Colvino が主として、布敎の目的を以て渡蒙した。而して有名なのはポーロの東洋見聞錄及び之と同様なる東洋旅行記を著はした、ポルトガル人オドリク Odoric 及びアラビア人イブン、バツダ Ibn Batuta 等である。

然し其れ等の圖書は多くの誤謬と誇大を持ち、今日より見れば殆んど無價値に等しいものであるが、歐洲諸國人の間には世界最初の未知世界たる東洋の紹介記事として中世白人に愛讀せられ、豐かなる東洋の天地に對する憧憬と射利心を煽つたものである。十五世紀以後に於ける歐洲人の、米大陸發見、南洋渡航、世界一週等の世界文化史的、又白人世界制覇の基礎的偉業達成の温床は實に此處に在つたのである。ヂパング Zipangu なる名に於いて、ポーロにより初めて日本が歐洲人に知られたのも此の頃である。又航海用羅針盤、紙、火砲戰術、印刷術等が支那より歐洲に輸出されたのも此の十三、十四世紀の頃であり、數學、醫學等曾つての印度文明が更に改善されて亞細亞諸國に逆輸入さ

れるに至つたのも亦此の中世である。

尙東洋を初め亞細亞諸國人の特に肝銘して置かねばならないのは、紙の發明が歐洲に於て行はれたもので無く、又印制術の發明が、決して一四四〇年獨逸人グーテンベルグ Johan Gensfleisch Gutenberg に依つて爲されたもので無く、何れも此れ等の文明の利器は、八六八年金剛般若經に依り、東洋の支那に於て先鞭附けられたものであるてふ事實である。歷史上の事實は、決して其の當局が無力なる國家なるが故に不利に歪曲せらる可き性質のものではない。亞細亞諸國人は歐洲史に精通し、白人文明を謳歌する前に、先づ順序として、葬られて暗き己が亞細亞の史實に幾多の遠き先祖の爲せる遺業を、白禍に基く自喩を棄てて眞摯なる心もて、探究する所あらねばならない。人類の一としての歷史は、斯くて認識され、其の後の動向に眞の指標を與へるものとなる。

斯くて漸く開かんとする西洋及び東洋の大規模なる海上交通に於て、南洋は其の中間十字街の要衝として、諸島國民の無力なるままに、精神的物質的戰鬪的に强大なる歐洲人文明の鋭鋒に先づ血の洗禮を受けねばならなかつた。卽ち中世末以後の南洋史が、主として彼等の南洋侵略史化する所以である。

第八章　十六世紀印度とポルトガル

十五世紀末、ロヂ王朝の沒落に因る印度分裂の頃、西北なるアフガニスタンのカブール地方に占據して力あつた蒙古王バベル Baber は、一五二五年太兵を率ひて其の虛を衝き、鎧袖一觸其の首都デリーを陷落してイブラヒム Ibrahim 王下に喘々たるロヂ王權を斃し北部印度に於ける政權を獲得し

た。

實に十一世紀ガズニ王マーームード印度政權を握つてより五二五年、遂にアフガン統治は其の終焉を告げたのである。然して代るは蒙古成吉斯大汗の族、チムール Timur＝帖木兒五世の孫たるバベルに據る蒙古政權であり、まことそれは蒙古の第三帝國であつた。翌一五二六年、バベルは北部印度及アフガニスタンを領する大國—蒙古帝國 Mongol Empire＝Mughal or Mogul Empire＝莫臥兒帝國の首都を、デリーに奠めて、其の多分にイラン化した統治權を確立したのである。

斯くて三十年の一五五六年には、印度史上の明君として名高いアクバル大帝 Akbar the Great の即位を見るに至り、十三世紀以來アフガン政治の爲せる數多きヒンヅー教徒に對する非回教徒税、非回教徒の官吏不採用等の宗教及び政治上の差別を撤廢して印度統一上の障害を除き、宗教上の又種族上の機會均等を圖つた。

從つて印度發展上不利なる內部的相剋は解消して、民衆は初めて久方の光長閑なる春の自由に甦つたのである。

アクバル大帝の此の正しく美しい印度統一强化政策は、近世に於ける英國の老猾なる印度分立弱化政策に對する最もよきコントラストを爲すものであらう。

アクバルの此の善政は、徐々に印度諸藩の人心を收覽して國勢を統制强化せしむるに至り、十六世紀末には東ベルガル及び緬甸に近きオリッサ Orissa 地方より、西南カンディシュ Kandish グヂャラト更に、西北はアフガニスタン、バルチスタン Baluchistan 及び其の西隣イランの中部に至る地方を

征服するに及んで、印度は僅かに南方ヴィヂャヤナガラ、アーマドナガル Ahmadnagar 等の小ヒンズードラヴィタ諸藩を除いて、全く其の統治下に太平を謳歌するに至つた。ポルトガル勢力下の臥亞は卽ち西岸アーマドナガルの一津である。然して一六〇五年、アクバル大帝は萬民哀號の中に、其の長き五十年の治世を逝いた。

史眼は飜つて再び十五世紀末、解體分裂時代の印度及び其の西岸に進出し來つた歐洲なるポルトガル王國の地に移る。

當時ブルグンド王朝アルフォンゾ五世治下に、歐洲に雄飛してゐたポルトガルは、航海王として有名なヘンリー支配の下に其の優勢なる艦船をアフリカ沿岸に遊弋せしめ、無智蒙昧なる土人を恰も兎狩の如くに追捕して、歐洲諸國に奴隷として賣却するてふ人非人的な所謂奴隷貿易に從事して巨利を博してゐた。又埃及乃至アラビア人を通じて、東方なる印度馬來諸島の產物特にモルッカス諸島よりの香料を歐洲諸國に供給して漁夫の利を占め、經濟的に、政治的にスペインと共に中世歐洲の二大强國であつた。

斯くて十五世紀も終りに近い一四九八年、エマヌエル王の時代にはガマ Vasco da Gama 喜望峯を迂廻して印度に達する航路を發見し、ポルトガル人はアラビア人の仲介を經ずして直接印度貿易に從ふ事となつた。

十六世紀に入つた頃には進取的ポルトガル人の海上活動は、アラビア海、印度沿岸に於ける埃及又はアラビア商船を驅逐して、印度西岸にコーチン、古里(クリカット)、カナノル Cannanore、臥亞等の諸港を占據

して駐屯軍及び、商館を設置し、總督ダルメイダ Francisco d'Almeida をコーチンに駐せしめて、是等前進根據地を統括し、以て來るべき侵略の歩武を固からしめた。時に一五〇五年である。

曾ては榮えた埃及文明、サラセン文化も、老ひては駑馬の其れに等しく、新興歐洲のポルトガル國民に壓倒されて遂に一五〇八年、カチアワル半島のヂウ Dieu 港なる埃及商船隊は、ダルメイダ艦隊の攻擊下に微塵に粉碎され、悲劇の終幕を閉ぢたのであつた。

斯くて印度貿易、延て馬來貿易は全くポルトガル人の手に獨占され、印度洋制海の權も亦新參ポルトガル武裝商船隊の掌中に握らるるに至つた。斯くて翌一五〇九年、ダルメイダ去つて辣腕比無きダルブケルケ Alfonso d'Albuquerque 新任總督として來印し、翌年印度政廳をコーチンより臥亞に移して其の兵力を强化し、一五一一年來遠く東航してマラッカ、支那等に大遠征を決行し、以てポルトガルの對東洋政策の着々たる成功を齎らして行つた。

西力の東漸を先驅したる勇者は實にポルトガル海軍であり、彼こそは其の後に於ける歐洲列强南洋進出のいみぢきパイヲニーアであつたのである。

尙筆者は、或は艦隊と言ひ或は武裝商船隊、商船隊等統一無き多くの語を用ひたが、當時未開なるストレンヂャー相互が、未知の土地に未知の異民族と、今日の如き國際的統制無き無秩序なる時代に、利得のみを目的とさる不安殺伐なる交易を行ふに當つては、其の背後に相信じ得ぬ萬一の鬪爭を豫期して、必ず武器を備へたものであるが故に、商船は、同時に艦隊でもあつたからである。況てや

スペイン、ポルトガルの其れは出發點から異端征服を前提した强制が重心であつたからである。

又、當時の彼等の有色人種觀は、中世前期に於ける彼等社會乃至家庭の普き奴隷――黑奴使用以來、黑人は物品乃至家畜に如かざる如き思想に培はれ、又黃人に對しては成吉斯大汗の歐洲蹂躙以來、一種の憎惡と蔑視觀念を深く抱かしめられてゐた事を知つて置かねばならない。而して此の豫備的な知識を沒却する時は、西力東漸以後に於ける彼等の南洋及アメリカに於ける慘虐を、正氣を以ては理解する事が出來ないであらう。

斯くて人道乃至正義は、基督敎歐洲人諸國間に於てのみ彼等にとつては意義あるものであり、異端の利益を代表する道德人道は、主觀的優越觀に生きる彼等に執つては凡そナンセンスであつた事も知らねばならない。

第九章　中世歐洲の狀勢と自然科學

十六世紀以來陸續として南洋に來り、各地に占據して政治經濟的侵入を敢行し、無力なる支那、日本、アラビア、印度等の勢力を驅逐した歐洲列强の南洋史上に於ける位置は、其の科學的ヘゲモニーを以て決定的要素となす。

特に彼等の辣腕に接して、根底より其の歷史の動向に大變革を與えられた南洋史の解釋上、彼等の本土の自然的又社會的環境に對する認識を得る事は、直接に間接に不可缺の關心事である。吾人は次

に依つて其の大要を知らうと思ふ。

古代以來、十三世紀、地上は未だ亞細亞人の勢力下に在つて榮えてゐた頃、歐洲に於ては、五世紀以來ゲルマン諸族の西部歐洲大移動があり、進取的な彼等は、其の後數世紀に亙り、强大なる武力に任せて、佛蘭西、伊太利、スペイン等諸國に入寇して獨立國家を形成し、或はラテン、スラブ等諸民族の中に混融して行つた。

其の後彼等は東方なる羅馬の僧侶、宣教師等に因つて基督教化され、熱信なる信徒となつて中世に至つたが、未だ蒙昧なる當時の西部歐洲に於てに最も力あつたものは武力と宗教とであつた。從つて諸國各地は「高い石壁と陰慘な塔を持ち、甲冑を鎧ひ馬上豐かに槍と劍を揮ひ鬪ふ精悍な戰士の部隊を擁する封建城砦と、旅宿、病院、學校等の役目を兼備する僧院の二つの代表的建築」"the two typical institutions of the early middle age were the feudal castle, with its high stone walls and gloomy towers, with its fierce bands of warriors armed in mail and fighting on horse-back with lance and swords, and the monastry, which represented inn, hospital, and school" に滿たされてゐた。

有名な史家ギボン Edward Gibbon すらが、「野蠻と宗教の勝利時代」 Period of the triumph of barbarism and religion と呼んでゐた所以である。

而して從等諸國間の不斷なる政治的抗爭は、彼等が猛烈なる基督教信徒である點の一致より、共同の畏敬者たる羅馬法王の判決を仰くに至り、基督教勢力は遂に歐洲の天地を掩ひ、宗教は政治をも支

配する祭政一致の時代を現出してゐた。

従つて羅馬法王は、王中の王として全歐洲に君臨する現人神であり、彼の一顰一笑は直ちに諸國帝王の位置を搖がす偉大なる勢力を持つものであつた。

而して其の後百餘年に亙る幾十度かの十字軍、宗教盲信に基く悲慘なる十字軍行、當時に於ける、歐洲諸國人は此の大犧牲を正氣を以て神に殉ずる聖軍と思ひこんでゐたのである。

然し乍ら餘りにも悲慘なる十字軍の結果と永き年月及其の地理的啓蒙に依り、更に又基督敎の墮落に因つて、彼等は漸く理想的宗教的觀念の世界よりも、巳の存する現實世界がより多くの意義と眞理を有するものである事を悟るに至つた。

斯くて永き法王權と既存敎理は漸く沒落の運命を辿るに至り、人權と宗教改革が現實人間の生活を基調として新なる勢力を得るに至つた。

彼等は「神」よりも先づ「人」を考へ出したのである。

加之資源と面積に惠まれた亞細亞に比し、狹小にして人口夥多なる歐洲半島に於て、曾てはヴォルガ地方に及んでゐた勢力を成吉斯大汗出現以來西方に驅逐されて更に其の生活面積を狹められ、且十一世紀以來の諸小國家の分立割據は、益々彼等の個人的延て國際的生活の發展を困難ならしめて來た。生物は決して自發的には滅亡を招かないてふ公理に基く人間生活に於て、當然其處には猛烈なる生存競爭が演じられねばならなかつた。

即ち彼等は互に生きむとする手段に全能力を注がねばならなかつた。自然に依存する人間生活に於て、最も彼を强化するものは無論自然物の開發利用の知識であり、其の心的前提としての不屈不僥の進取的戰鬪精神である。

彼等は其の苦境に適應して行く事によつて充分にの此二者を獲得して行つた。此の叫びを最も早く且最も大きく主張したのが、十三世紀英國に於けるロージヤー・ベーコン Roger Bacon の、知識は力なり "Knowledge is Power" である。

自然科學的精神は斯くて十三世紀歐洲に澎湃として興り、生きむが爲の知識の要求は燎原の火の如くに燃へ昂つた。而して之を更に助長發展せしめたものは、グーテンベルヒの齎した印刷術による圖書の出版容易、及び之に依る知識の普及である。

封建制度の沒落より智的精神、國家的精神等の勃興玆に初まる。

斯くして中世歐洲の永き暗黑のヴエールに掩はれた宗敎時代は、眞理を目指す對自然的對社會的科學知識の力に漸く開かれて來た。

所謂ルネサンスの黎明期である。フス John Huss ルーテル Martin Luther 等の宗敎改革論、コペルニカス Nicholas Copernicus ガリレイ Galileo Galilei 等の天體、地球論等其の最も有名なるものであつた。曾て亞細亞から輸入した知識の改善進歩と、其れ等の新しい科學的知識が彼等の對社會生活觀をも變改して行つた事論を俟たない。

歐洲人は斯く難關を超え行く事に依つて益々其の個人的、國家的更に種族的發展能力を强大ならしめ十六世紀に入つては十三世紀蒙古兵の齎らした火器の改良も亦彼等相互間の戰闘經驗によつて大いに進步し、遂に偸安の亞細亞諸國民の能力を遙かに壓倒する丈の實力を具備するに至つた。

卽ち十六世紀以後に於ける西力の東漸が、常に完全に彼等の勝利に歸して行つた所以である。

當時彼等は東方陸上の地理的又曾ての政治的障害を避けて、西方及び南方なる海を利用して徐々に附近海外に進出し、マルコ・ポーロ、イブン・バッタ其の他の「富源東洋」紹介後は、東方の資源を求めて盛んに遠洋に乘り出した。

卽ち一四九二年、コロンブスは日本、支那等に赴かんとして偶然西印度諸島を發見し、南北兩米大陸世界發見の動機を作り、又一五二三年にはマヂエラン Ferdinand Magellan は人類最初の世界一週に成功して地球を證明し、又其の獲たる、又今後獲べき東方の財寶沃地を齎らして、歐洲諸國人の厚生と、來る可き新天地獲得可能のプレゼントに狂喜せしめた。

尙當時の歐洲諸國は、科學の進步と戰爭方式竝に規模の擴大强化、資源植民地の領有、一般社會思想の變遷等に依つて、國家組織も亦政治的に經濟的に大いに改革せられ、封建制の沒落に代る中央集權的立憲的國家が萠芽しつつあつた。而して其の經濟組織に於ては未だ資本の勢力勃興を見出し得なかつた。

實に十六世紀歐洲諸國は、其の有する高き文化と戰闘力に依つて、歐洲半島に百倍する天產豊かな

る新世界獲得の端緒に入つた古今未曾有の希望と感激に滿ちた喜びの時代であつたのだ。

他方亞細亞、特に南洋諸民族は、風暖かに自ら豐かに穣る生活資料を前に、何等の生活向上、智能啓發の刺戟も無く、坦々たる生活と春日遲々たる文化の步みの中に、墮眠と性慾のみが彼等を支配してゐた。

僅かなる其の文化は、餘りにも悠長な唯心的な又非科學的な無力なものであり、發辣として强力なる歐洲人の其れには到底對抗し得べくもなかつたのである。

又西南亞細亞なるアラビア人による、七世紀末以來の西方イベリア半島に至る地中海制覇も十字軍擊滅による歐洲壓迫も、頓に衰弱して遂にサラセン大勢力の崩壞となり、其の壓迫を脫したスペイン、ポルトガル等の新勢力の勃興を促したのであつた。

其れはやがて東方なる印度、馬來諸島に築き上げたる永きアラビア同敎徒の勢力をも、彼等歐洲諸國に依つて覆滅せらるるに至つたのである。"Spain now free from her long Mohammedan wars, and the nation was being united under Ferdinand and Isabella"

第十章　歐羅巴人及び歐羅巴的國家

ラテン、ゲルマンの兩族を主流とする歐洲人諸國家は、狹小なる歐羅巴半島に相分立するものであつたが故に、容易なる交通により、同一語系により、同一宗敎に依り、文化的に、生理的に複雜なる

混交をなしてゐた。特に中世に於ては政治的にも其の國際關係、就中王室間の其れは、血緣的にも甚だ密なるもので、一の歐羅巴聯邦を形成し、若し必要とあれば何日にても相協同すべき性質を持つものであつた。是は十三世紀蒙古兵歐洲席捲に當つて、羅馬法王が歐洲諸國を代表して蒙古大汗に抗議し、直ちに獨、英、佛、波聯合軍を組織せる等により知り得られた。

彼等は如斯トラヴルの無い永い間、常に相互に猛烈なる國際鬪爭を演じて、各々自國の强盛、文化の向上に不斷の努力を續けねばならなかつたが故に、智能の發達、生活意識の强化は、到底悠長なる亞細亞、特に南洋諸民族の及ぶ所ではなかつた。

理論的には、人種の次の單位は、國家乃至國際ブロックであり、從つて協力の程度も、國家的生命の發展に對する利害關係の濃度に比例するものであるが、事實に於て最も有力に其國家の方向、協力對象を規定するものは人種以上に、直接該國家の存亡を左右する利害の問題である。

却說彼等は環境の齎らす不斷なる抗爭の下に於て、力無きものは其の自由と土地を强き征服者に捧げねばならなかつた。

而して其の强き征服者たる領主は、更に强大なる征服者たる王侯に家臣として仕へ、忠誠の義務を誓ふと共に、其の大領主國王より利益と保護を受くるの權利を獲て、其の地方的生存權を確保して行つた。

斯くて歐洲諸地方には生存上の利益と義務の爲に結合した大きな集團聯邦が出來て、一個の民族或は國家と稱せられるに至つた。

従つて此等諸國の國際的又君臣的關係は、其の近接複雜せる地理的、政治的、生理的關係に於て、生存上、獨立上の利益乃至義務の大小濃淡を生ずる事に依つて、常に其の對立及び結合の程度を左右せられねばならなかつた。

即ち其處には史的に、生理的に、何等絕對的なる判別差異が認められず、國家的結合離脫等は比較的容易な問題であつた——

"............For centuries the countries of Europe were fiercely raided and disturbes by pillaging and murdering hordes............The free but weak man gave up his freedom and his lands to some stronger man who became his lord.

He swore obedience to this lord, while the lord engaged to furnish him protection and gave him back his lands to hold as a "fief", both sharing in the product. This lord swore allegiance to some still more powerful man, or "overlord" and became his vassal", pledged to follow him to war with a certain number of armed man; and this overlord, on his part, owed allegiance to the prince, who was, perhaps, a duke or bishop or to the King or empror.

Thus were men united into large groups or nations for help or protection. There was little understanding of love of country.........................."

加之或時代に於てスペインの皇帝は英國王を兼ね、又或時に於て佛國皇帝の兄弟がオウストリヤ皇帝であり、スペイン國王であり、更に或期間英王妃はスペイン王の娘であり、丁抹王と露國皇室とは

親戚であり、近世に於ても前英國ヂョーヂ五世の祖父が、獨逸人ゴータ伯爵であつたてふ如き關係に置かれてゐた時代に於ても、其れ等諸國は互に自國利益の爲に鎬を削つて相爭つたものである。

從つて國籍の無い國王乃至皇室間の關係と、國家自らの國際關係とは常には一致するもので無く、又歐洲諸國家に於ける一所不常なる國籍不定の皇室の位置は、或は油と水の如く、或は技師と機械の如く、其處に何等の水魚の、一元の愛撫と臣節が保たれ得なかつた。

亞細亞の、特に日本の如き君民一體萬世一系の天皇を奉戴する國家に於ては、如斯複雜曖昧なる君臣國際關係は考ふべうも無い事である。從つて國體、國柄てふ如き觀念は彼等には起らず、日本の國民思想と歐洲の國民思想との相容れざる所も亦實に此に存するのであつた。

又われわれは、皇帝が國民の反對の爲に反意の法令に裁可を强制せしめられたり國外に追放せられたり、甚だしきに至つては、十八世紀末フランス革命に於けるが如く、國民環視の中に、公然と斷頭臺上に絞殺されたりする歷史を其處に見るのである。

從つて歐洲人の文明は實に尊く攝取同化す可き力、價値を有するものではあるが、如斯其の一般的國民思想、制度等は、强ち取入る可き性質のものでも無かつた。

然し乍ら歐洲人の如斯思想傾向は、其の與へられたる自然環境の中に生れ出づ可くして生れ出でたる必然のものであるが故に、彼等に執つて其れは正當なるものであり、日本人が又獨特の其れである事亦然る可くして然る自然のものである事を知らねばならない。

其の自然及び歴史を深く顧る所なくして、異國文化に眩惑さるる、拜外的心にのみ、其の國體國運を誤る如き思想論說は生れ出る。然し乍ら一時に高き强き文化を多量に取入れたる後進國家、國民に於て、拜外心の起るは逃れ得ない一の副産物でもある。十九世紀末以來の日本も亦此の拜外心旺溢の時代に屬するのである。

說く所少しく脫線したが、以上の如き歐洲國家の史實は、本史近世以後に於て、特に一章を頒つて述ぶる餘裕無きが爲め玆に略記した次第である。

飜つて十七世紀歐洲諸國人に愛讀せられたマキアヴェリ Niccolo Bernardo Machiavelli てふ政治家、特に王宮に永く出入した彼の一五一四年出版した名著、君主論 Il Principe は言ふ――「……………人生に於て權力に有りついて慾望や感情を充足し、揚々と生活する事、之は人生に於ける大願成就である。如斯滿足な生活を實現し得る者、帝王以外に無い。………………而して君主の掠奪と快樂と惡業の頒前に與る不可缺の相棒こそ重臣近侍である。…………故に…………側近重臣の考ふ可き最良の道は、國王術覇道の專門的研究である。………………庶民に對する倫理道德上の義務は、些も君主を束縛し得るものではない………………」

之に關する知識は、蘭人ファン・ルーン Hendrik Willem Van Loon の著、神近市子譯人類文化史物語を一讀すれば大體得らるるであらう。東洋諸國人は、一般にマキアヴェリを過賞して、或は「政治學と倫理學とを明確に區別し、政治學をして政治學たらしめた」とか「彼は科學としての政治

學の建設者と言ふ事が出來る」等と六かしい事を言つてゐるが、彼は然程眞摯な學者では無く、權謀術數に富む一の王宮政治屋であつた。後年彼の此の思想が所謂マキアヴェリズム Macliarellism として諸帝王、治政家等に愛讀玩味せられ、彼等の思想、行政上の資料となり、一家を成すに至つたのを見ても中世に於ける歐洲帝王以下一般の思想傾向を窺ひ知る事が出來やう。

亞細亞人に多くの缺點がある如くに、歐洲人にも多くの缺點があり、特に葡、西、英人等の武力的又文化的世界制覇の位置は、後進亞細亞人諸國に多大の善惡の影響指導を及ぼすものがあつた。然して賢明老巧なる葡、西、英人等は、今日迄殆んど己が短所惡業を知らしめざるの對外文化紹介に成功し、全く世界全民族を魅了し去つてゐるかの如くである。又其の有する武力、智力等に依り、尠くとも外見上に於ては二十世紀前半迄、地上の富を獨占利用せる優位を確保してゐると見られる。歐洲人の眞の相は、其の良き惡しき兩面よりの全的觀察無くむば測り知り得るもので無く、又之と竝立する亞細亞人は、若し可能ならば彼等に對して客觀的なる批判を加へ得る程度に、彼等の文化的武力的牽制から獨立し得るの能力、位置に達せねばならない。

此の事は彼等の過去及び將來に於ても亦同じであり、恐らくは、無限であらう人類史の流れに於て、斯かる相互の切瑳琢磨、盤根錯節は、相剋自滅に至らぬ限り其の發展の法則に於て不可避の經程であらう。

第十一章　歐亞兩種の大接觸と白人の優位性

中世に於ける歐洲人及び其の國家、思想が凡そ亞細亞、特に日本の其れとは甚しい懸隔あるものであつた事は既に述べた如くである。就中英、蘭等は更に、基督の選民たる誇りと人種的優秀、强大なる文化等を以て、此の地上世界は全く彼等の利益の爲に存するものと信じては疑はなかつた。世界各地に屯する諸民族も、資源も、土地も、彼等の利益厚生に役立ち得るもの以外は、彼等に執つては無價値な、從つて此の地上に存在を許さぬものであつた。異端の利益、道德等は實に神基督の思召に叛く恐る可き罪であつた。西力東漸當時に於ける白人諸國は、實に如斯徹底した利己的信念を當然視するの恐る可き誤謬に陷つてゐたものである。狹小なる歐洲半島に群雄割據し、又年々激增する人口が、飽和の域を越えて彼等の生活を脅してゐる時、其の對外發展强行を良心的ならしめる爲にも、海外發展の彼等に執つて、如斯思想は缺き得ざる重大なる意味を持つものであつた。

卽ち冒險心と野心に燃えた優勢なる西、葡、蘭等は、南洋にアメリカに、殺到して、醜惡無力なる其れ等諸島民に隨所に痛烈なる一擊を加へて、其の富と土地とを掠奪して行つたのである。

セム、ハム族は更なり、其れ等諸島のバイブルに記載されてゐない非基督敎野蠻人は、基督の此の地上に於ては凡そ不必要なる存在であり、其の虐待殺戮は神の名に於て行ひ得る業なるものであつた。然して其の敵が彼等以上に大勢なる時は、直接武力に據らずして、奸謀欺略或は基督敎傳道の阿片的效力を活用する等の智力に訴へて、其の目的を達して行つた。

此の所謂歐洲人新世界發見時代、彼等西、葡人の鄕土歐羅巴に於て人々に膾炙してゐた寸言は次の如きものであつた。

「喜望峰以東に神の照覽無し」

「亞細亞に道德無し」等　等

西班牙及葡萄牙の新世界に於ける慘虐は、旣に十四、五世紀アフリカ沿岸に於て行つた奴隷狩てふ人攫ひ貿易に依つて、相當の經驗を持つてはゐたが、其れよりも更に大規模なる酷使と虐殺を伴ふ深刻なるものであり、人類開闢以來の一大悲劇であつた。

其の頃東洋及南洋に於ては所謂倭冠、支那の海賊等が八幡船乃至胡蝶船等に乘じて海上を荒してはゐたが、其の大規模なる掠奪、慘酷の程度は到底彼等諸國海船の其れには比し得ないものであつた。卽ち東亞に於ける其れは、個人的乃至部隊的、結局本國の目を掠めた私的な、加之良心の苛責に喘ぎつつ行つた可憐なものであつたが、彼等の爲せる其れは、神の名の下に、國家的背景乃至國家直接の指令に依つて行はれた公然たる忠義の偉業であつたのである。更に東亞の其れは所謂 Half pirates, half merchants 卽ち半賊半商であり、白人の其れは純然たる Buccaneering 卽ち海賊行爲であり、加之土地占領てふ政治的なるものであつた。從つて之に從事する者の大半は軍人軍屬であつた。

歷史を詳にせず又は其の重要なる部分をカットされてゐる今日南洋諸島國民が、當時如何に無道を强行されたかは其のカットされたる部分を集成し得ざる限り、想像推理するより外に道が無い。

歐洲に於ては其の頃、かのルネサンス文化の華が其の全盛に在つた。史上空前の大財寶、資源は新

世界、南洋等より歐洲の天地に絶へ間無く運ばれて彼等の文化生活を彌榮えしめ、航海戰鬪等により造船技術、戰鬪法、地理學、航海術等自然科學の發達は刺戟され、國家の財政、産業、教育等亦飛躍的發展を遂げて行つた。ルネサンスの大は內に宗教改革、啓蒙思想等の心的向上と、外に新天地發見征服による如上の現實的、物的獲得とが竝び行はれた結果であり、歐洲人の述ぶるが如く、又之を盲信する亞細亞諸國インテリの唱ふるが如く、絢爛たるルネサンスは一に歐洲人の內的向上發展のみに因るもので無く、其の影に米大陸、印度、馬來諸島國の資源領土獲得利用てふ偉大なる原動力が藏されてゐたものである事を看過してはならない。

南洋史を認め得ず、南洋史の世界史的重大なる役割を知らず、英米人中心的世界史、及び彼等によつて成されたる印度史、蘭領印度史、暹羅史、比律賓史等に魅了されてゐる亞細亞人は、絢爛として其の後の産業革命、又は白人の世界征覇等を齎らしたルネサンスの大を讃美するを知つて、其の背後に之が原動力の一をなしたる南洋諸島國民族、アフリカ、アメリカ兩大陸十億の敗殘衰亡の大犧牲を敢て顧み得ないのであつた。

高き智能と强き自信に依つて、誰憚る所無く其の有する大野望を着々と實行成功せしめて行つた彼等の精神、行動は、假令其れが如何なる道德的非難を受くるものであつたにせよ、自然に依存する人間として、自然の法則軌道上に於て行つたものである點に於て、正當なる、然して偉大なるものであるとも見られる。

今二十世紀に於てすら列强相嫉視し互に權謀術數のあらむ限りを盡して他を奪はむとし、加之斯くある彼等が、異口同音に標榜高言する所が正義人道、世界平和に在るの時代である點に於て、中世に於ける彼等の行動に對する非難は或は不當なるものと言ふ可きである歟。尙、其の慘虐の信じ得ざる程の驚く可きものであつた事に關して、ペイン Edward J. Payne は其の著歐洲植民史 European Colonies 中に「………スペイン人は最初の五十年間に約五千萬人の島民を虐殺した。素より之は正確な數で無く或は一千萬、四千萬と稱せられてゐるが恐らくは前者が眞實に近いものであらう。現に西印度諸島では六百萬を超えた島民が全く其の跡を絕ち、ハイチ島 Haiti Is も最初約百萬を有してゐたものが、五十年の後殘存してゐる者は僅か二百となつてゐる。僧正ラ・カサス Las Casas の言に據れば、「コルテスがメキシコ征服に虐殺した土人の數は約四百萬である」と述べてゐる…………其の他ボリュー Lery Beaulieu ローロフ G. Roloff 等も彼等は自らを新イスラエルの選民と信じ、印度人を以て撲滅す可き仇敵カナーン人の如く考へてゐた…………と述べてゐる。卽ち彼等と同種なる白人すらも其の餘りに慘忍なる事を非難してゐる者がゐるのである。

無論彼等の虐殺の方法は徒らに武力に據るもので無く、金礦發掘其の他の過激なる勞働に其の大衆を酷使して休養、食を與へず豫定の死に至らしめる如きものもあつた。從つて勞役に從事せしめられなかつた女性の死を逃れたる者甚だ多きが見られるのである。尙如斯は近世史上に於て述べるであらう濠洲南端のタスマニア島民其他に就いても同樣である。

第十二章　十六世紀ポルトガルの南海侵入と世界分割線

十五世紀サラセン勢力衰退の後を承けたポルトガルは、アフリカ沿岸各地を占領の後、更に長航して印度洋を渡り、一五〇五年印度西南沿岸の要津コーチンを略取、ダルメイダを總督（印度副王Vice Roy とも言ふ）に任じて、其の後の活動の策源地とした事、更に一五〇九年には第二代總督ダルブケルケ來つて强力なる印度政廳を北方臥亞（ゴア）に設けて、南洋侵入の一歩を固めた事は既にわれわれの知る所である。

コーチン其の他占據の要地に、彼等は必ず商館 Factory or Comptoir なるものを構築したが、此の所謂商館こそは、彼等の其の後の侵略戰鬪に最も重要なる、商業事務所兼兵營であり、其の堅牢廣大なる築城の周圍には多くの兵器が備えられ、廻らすに高き障壁を以てしたものであつた。彼等は徐々に此の所謂商館を各地に增設し、侵略の手を覺られずして擴大强化して行つたものである。

彼等が印度を經て馬來諸島の南海に進出した十六世紀前葉は、恰も大滿者伯夷（マジャパヒト）帝國沒落し、北方、明も亦衰運を辿つて力無い時代であり、其れ等諸島には僅かに爪哇及び其の附近にバンタム、マタラム、亞珍等諸々の小王國と、比律賓、モルッカス諸島に多くの酋長國が群つてゐた分裂無力の時代であり、外夷の侵入には最も都合のよい時代であつた。

即ち一五一一年、印度臥亞（ゴア）總督ダルブケルケは、其の精銳なる艦隊を率いて先づ錫崙の一部を占領

し、東進してスマトラの回教亞珍王國を威嚇してイブラヒム王との間にパレンバン開港を約し、更に其の領地たる北隣なるマラッカ地方を征服し、アラビア人、支那人等の貿易勢力の中に突入した。

彼及び其の艦隊は、其の着々たる成功に勢を得、遂に利多き香料貿易の目的地たる東方モルッカス（モルッケン）諸島に侵入し、其の中心たるテルナテ Ternate アンボイナ Amboina＝Ambon チドール Tidor 諸港に至り、肉豆蔻、丁子、胡椒等を獨占して、其の利を壟斷するに至つたのである。

其の後一五一五年頃には印度支那なる暹羅、緬甸の諸港に入り、次いで一五一七年にはアンドラド Andrade を明に派して修好を求めるに至つた。

彼等ポルトガル人の誤り傳へて云ふゴーレス人としての、足利時代末期の日本人商船が、遠く南支那、安南、呂宋、暹羅等より更に南下してマラッカ諸港に來り貿易してゐたのも此の頃である。然し其れ等ゴーレス日本人の來航目的は、實に單なる個人的貿易に止まり、ポルトガル其の他歐洲列國商船隊の如く、永久的商館、根據地等を武力に訴へても構築するが如き、政治的な遠大なる計畫を持つものでは無く、國家的意義は全く持たないものであつた。又彼等倭冠の鬪爭、其れは相手が不信詐謀を策した時に於てのみ斷然として行はれた。

斯くて南洋侵入のトップを切つたポルトガル本國の富强隆盛は、スペインと相竝んで歐洲の二大勢力と化し、遂に其の武裝商船隊の潑溂たる活動は更に北進して、一五三七年には南支那なる媽港 Macao＝澳門＝天河を占據して商館を造築し、東洋根據地となすに至つた。降て一五五七年には正式に衰へたる明より同島の永久租借權を獲て、實質上の領土としたのである。

是實に支那が歐洲國家に蠶食せらるるに至るの端緒を爲したものであつた。尙媽港は日本商船により天川と呼ばれてゐた所である。日蘭貿易の起源も亦此に始まる。

斯くて南洋東亞に於けるポルトガルの勢力は日に盛んとなつたのであるが、他方隣接の大國スペインの對外活躍も亦劣らず、米大陸の經營を經て南太平洋に擴張せられ來り、兩大國の對立は益々激化されて來たのである。卽ちポルトガルは一五一一年南海進出以來、一五一七年モルッカス諸港に、又一五二二年には爪哇に、而して一五二五年にはバンタム王國のカラパ Calapa＝咬𠺕吧卽ちバタヴィア港及び北岸チェリボン Cheribon 港等と通商關係を結んで、强敵スペインに對するポルトガル商、政權の擴大確保を圖つてゐた。卽ちポルトガルは、無力なる南海諸島民に對して、ポルトガル以外の諸國との貿易を嚴禁し、若し之を犯す者あれば直ちに其の商品を沒收するか、銃殺の刑に處して島民の自由を禁制したのである。

他方スペインは、一五二一年ラドローネ Ladrone Is.＝海賊島＝マリアナ群島 Marianna Is. より比律賓群島、北部ボルネヲ、北部パプア島等に進入し來り、特にモルッカス地方に於ては盛んに既成ポルトガル勢力との衝突を演じた。

然し此の二大國のアメリカ大陸及び南洋諸島に於ける政治經濟的紛爭に對しては、一四九四年、羅馬法王アレクサンデル六世 Alexander VI が大西洋上緯度五五度、卽ち南アメリカ東方、アゾレス島 Azores Is. の西方約百浬海上を限つて世界を二分し、其の以東をポルトガル領、以西をスペイン領とする世界分割線を設定して、其の和平策を講じたのであるが、其れは十六世紀に入つて屢々改訂

せられ、遂には法王權の無力に依つて全く否認さるるに至つた。

戰鬪的な歐洲諸國、特に良心の必要無き彼等の新世界に於ては、土地及び資源獲得の爲には、異端に對する其れの如くに、同種國に對しても徹底的な爭奪戰、惡業を敢行して自國の富强繁榮に死力を盡したものである。

斯くて十六世紀中葉、比律賓、ボルネヲ、パプア及びミクロネシア諸島が主としてスペインの勢力下に、又印度沿岸マラッカ、スマトラ、爪哇モ、ルッカス及び濠洲の北岸がポルトガルの勢力範圍に握られ、一五七一年スペインが比律賓に對する覇權を確立する五年前、卽ち一五六七年、ポルトガルは亞珍王アラ・エヂン・シャー Ala-ed-bin Shah を討つて、ツマシク＝現新嘉坡及びマラッカ海峽附近に其の主たる權益を保有した。

從つて中世初期以來、ポルトガル國富の源泉をなしてゐたアフリカ沿岸に於ける人攫ひ貿易の利は抛擲せられて、より尨大なる巨利を其の豐かなる土地と共に獲らるる南洋に其の全力を傾注するに至り、曾てのアフリカ沿岸の價値は僅かに寄港地として認めらるるに止まつた。

尙知る可きは、南洋に於ける支那、アラビア、日本、印度等の東亞及び南洋諸國商船の活動が、彼等の爲に驅逐せられて影を潛め、古き己が因緣の地の利を、全く西、葡、蘭、英諸國發展の爲に提供せしめらるるに至つた史的經路と矛盾である。

第十三章　比律賓に於けるスペイン覇權の樹立

十六世紀に入つてより俄然國勢を擡頭したスペインは、其の有力なる海軍力に依つて稍々早く海上活動に着眼せる先進ポルトガルと相競ひ將に其の牙城に迫らんとしてゐた。

即ち一五一九年、スペインはマヂェランを長とする大規模なる亞細亞遠征艦隊を組織してサン・ルカルを解纜した。此の艦隊こそ三年の後一五二二年、人類史上最初の世界一週を爲し得た名譽ある艦隊であつたのである。

彼等は西進して南米を經、其の南端即ち彼の名に據るマヂェラン海峽を迂回して一五一三年バルボア Vasco Numez de Balboa の初あて發見せる波靜かなる太平洋＝Pacific Ocean に出で、更に西航して南太平洋群島の一島嶼に寄港したが、島民の襲擊及び盜難に遭つて其の島の名を海賊島 Ladrone Is.＝現マリアナ群島と命名し、更に西進して遂に其の西に連る廣大なる比律賓群島に到達した。時に一五二一年である。

彼等は先づビサヤン Bisayan 諸島中のサマル Samar に到り、次いでセブ Cebu 港に碇泊した。當時比律賓地方には、既に滿者伯夷帝國沒落して確たる統一者無く、多くは回教的酋長に依る無力なる部落國家の群であつて、僅かに北方なる本島呂宋に舊滿者伯夷の遺裔が、有るか無きかの頽勢を保つてゐるに過ぎなかつた。

從つてマヂェラン艦隊は其の智と武に依つて容易にセブに上陸、酋長以下を威嚇して商取引を行ひ

巨大なる利益を博した。同時に同島及び其附近諸島の占領を宣し、時のスペイン王子フィリップ Philip の名譽の爲にフィリッピン Philippine Is.＝比律賓群島と命名したのであつた。次いで彼等は南隣なるマクタン島 Mactan Is. に上陸、例に依り豪然たる威嚇を以て同島民に迫つたのであるが、頑强なる島民は屈せずして遂に爭闘となり、マヂェラン艦隊員は衆寡敵せずして敗走し司令官マヂェランは此に落命したのである。

マクタン島に於ける此の意外なる戰闘に、多大の損害と司令官を失つたマヂェラン艦隊は匆々として同島を逃れ、南航し、翌一五二二年漸く本國に歸還した。他方アメリカに於てスペイン人コルテス Fernando Cortez がメキシコを征服したのも亦此の年である。當時の比律賓地方は曩に述べたる如く、全諸島の主なる沿岸は回敎部落國家で南方、特にボルネオの北部を有するスールー諸島のモロ Moro 族最も有力であつた。呂宋本島に於てはマニラ附近に舊滿者伯夷帝國の遺裔、トンド王朝のラカンドーラ家稍々大なる政權を握つて居たが、全體的には何等統制なき集團であつた。又、マニラ及び北方カガヤン Cagayan 地方には、日本及び支那の武裝商船が盛んに出入して貿易上の、又侵略的な勢力を振つてゐた時代である。

而して一五三八年、ポルトガルは比律賓に多數の宣敎師を派して同島への文化的侵入を行ひ、以て島民の基督敎化に依るポルトガルへの馴化及同島地理政治經濟事情の探査を行ひ、更に曩に進入せるスペインを惡宣傳して島民間に反スペイン熱を煽つた。其の後一五五六年、スペイン本國にフィリップ二世 Philip II 卽位するや、己が名に據る比律賓群島の未だスペイン王化に浴せず拋棄せられある

を遺憾とし、スペイン植民地たるメキシコ卽ちニウ・スペインの長官（一般に副王 Vice Roy と稱せらる）に對して一五六二年之が占領を命じたのであつた。

卽ち一五六四年、當時メキシコ行政會委員長として辣腕を振つてゐたレガスピ Miguel Lopez de Legazpi 比律賓大遠征艦隊司令官に任命せられ、翌一五六五年ポルトガルとの抗爭を豫想しつつ、舳艫相銜んでビサヤン諸島中の要港たるセブに其の雄姿を現はしたのである。

彼等は一五二一年に於ける先輩マヂェラン艦隊の失敗に鑑み、島民に對するに信と威を以て望み、流血の慘を見ずして巧みに同島を占領し、セブ港をサン・ミゲル Saint Miguel と命名すると共に、比律賓廳を設置して同島及び其の附近に政令を布くを得た。

他方ポルトガルは此の報を聞いて大いに驚き、一五六八年共の東洋艦隊の全力を擧げてセブに來寇し、スペイン勢力驅逐の大激戰を演じたのであるが、利あらずして敗退し、遂にスペインは比律賓南方に於ける覇權を確立したのであつた。次いで翌一五六九年レガスピはスペイン王より更めて比律賓總督の親任を受け、專心比律賓經營に當る事となつた。

斯くてセブを中心とするビサヤン諸島を統治するに至つた比律賓政廳は、各島に支廳を配置して其の完璧を期すると共に、レガスピの積極政策は北方なる大島呂宋の豐かなる天產と、繁華なるマニラ貿易を獨占す可き策動を開始した。

卽ち一五七〇年彼は優勢なる呂宋征討艦隊を組織して北進し、マニラの外郊カビテ Cavite を攻略して之に據り、既に比律賓統治の政權落魄して見る影も無き舊滿者伯夷帝國の餘端ラカンドーラ La-

candra 及びソリマン Soliman 等に對して投降を促したのであつた。

兩豪族はスペイン艦隊に對して武力を以て對抗するの意氣と實力既に無く、遂に之に降服したのである。依つてレガスピは其の兵を首都マニラに進め、同時に兩家の既存勢力を利用してカガヤン、ザムバレス、パンパンガ Pampanga 等諸地方酋長部落を説服し、以て新たなるスペイン政權を認容せしめたのであつた。而して愛國心と無力とのヂレンマに惱んでゐた兩豪は、在りし日統治の夢忘られず叛服常無き狀態に在つたが、遂に同年末レガスピ軍の爲に全く其の權能を奪略、其の存在を解消されて了つた。

斯くて翌一五七一年、レガスピは全島の要地を攻略してスールー諸島を除く比律賓占領を完成すると共に、其の統治の中心を南方なるセブよりマニラに移駐して、其の權力の擴大强化を圖つた。斯くてスペインの比律賓統治は此の年を以て初まり、第一代總督としてのレガスピの位置も亦本格的なものとなつた。後世三百三十年に亘るスパニシュ比律賓の基礎實に此に成り、古來日本、支那等東亞諸國と地理的に政治經濟的に、又史的に關係深い南洋の大島嶼比律賓は、其の無智に依り、又其れを環る東亞諸國の無力に依り、全くのストレンヂャーたる遙か遠き歐洲の强國、スペインの大植民地として其の掌中に握られ、永久に東亞民族の利益より除外されてしまつた。

第十四章　十六世紀スパニッシュ比律賓と其の政策

其の始め、スペインは北アメリカに於ける大植民地メキシコ卽ちニウ・スペインNew Spain＝Nueva

Espania の副王 Visorei = Vice Roy をして比律賓行政を管理せしめ、總督の任免權も亦之に屬せしめた。

從つて新任比律賓總督レガスピは、其の統治の大本をメキシコに同じく武力統制に依るエンコミエンダ Encomienda 卽ち莊園制に置いた。卽ち比律賓全土を多數のエンコミエンドロ Encomiendro 卽ち莊園に分つて、スペイン人をして之を各々管領せしめ、其の地域内に於ける島民卽ちフィリッピノ Filipino は、其の地主にしてスペイン政廳の指令に基いて差配するスペイン人に對して勞作と產物貢獻の義務を負ふものとなした。他方彼等は其の主人の絕對命令と基督敎化に服するものでもあつた。

然し乍ら北方臺灣と共に古來より關係深い支那人、及び十五世紀以來急激なる貿易の增加に依つて呂宋島に其の勢力を扶植し來つた日本人に對して、駐屯兵尠いスペイン政廳は、之が彈壓驅逐に多大の困難を感じ、レガスピ以後十六世紀に於ける歷代比律賓總督は、見而不見の寬大なる處置を執らねばならなかつた。

當時南洋に發展してゐた日支人、及其の商船の數は相當多數に上り、特に安平以下臺灣西部諸港マニラ、ツーラン Turan = 茶隣以下印度支那南洋諸港、及びヂャカトラ以下爪哇北岸諸港には、歐洲船舶未だ盛んならざる時代に於て、其の勢力は貿易上に武力上に甚だ侮り難いものがあつた。

而して比律賓に對する其の影響中最も大なるものは、一五七四年に於ける日本人庄公 Sioco 及び

支那人林阿鳳 Rim Ahon の率ひる日支聯合艦隊のマニラ攻撃であつた。即ち十六世紀後半、南海諸港を遊弋して其の威と利を恣にしてゐた彼等は、新參異端の歐羅巴人が、其の勢力範圍たる比律賓を掠奪したるを驅逐して、再び日支共和の權益下に保持す可く、同年其の精鋭三千を以て突如マニラ灣頭にスペイン艦隊を襲擊した。守備薄弱なるスペイン海軍は忽ちにして擊破され、庄公の指揮する一隊は勇躍マニラに上陸し、在留日支人の協力を得て大いにスペイン軍と戰ひ、遂にスペイン政廳を包圍して將に之を陷落せんずる狀態に至つたが、總督ラベザレス Guido de Labezares の急報に依つて馳せ參じた地方分屯スペイン軍の來着と共に、庄公軍は窮地に陷り、遂に日支艦隊はマニラ灣より擊退さるるに至つた。

翌一五七五年、林阿鳳及び庄公の聯合艦隊は再びマニラ攻擊の軍を進めたが、先年の失敗に鑑みて擴大强化されたスペイン軍の爲に、遂に其の目的を達せずして去つたのであつた。國家的何等の支援を受けてゐない彼等の活動が、スペイン軍に比し無力であつた事は勿論であり、此の事變以後、在マニラ日支商人は大いにスペイン政廳よりの制壓を受けるに至り、特に總督ペナロザ Gonzaro Ronquillo de Penaloza は、當時約三萬に及んだ支那人に對して、一五八一年マニラ郊外の一區に集團生活す可きを命じて、大いに其の跋扈せる勢力を收縮したのであつた。

然してスペイン政廳は無力なる南方ボルネオに對して、屢々遠征の艦隊を派遣して、其の首府ブルネイ Brunei＝浡泥の攻略に力める事を忘れなかつた。又支那、日本を初め印度支那の暹羅、甘蒲塞等に修好して宣教師を派し、貿易を開始し、來る可き政治經濟的進出に資する所あらむとした。尙、

未だ占領統治する所とならない未開亞細亞諸國に對して派遣する宣教師とは、法衣の影に該國の政情、資源調査のメスを藏するスパイであり、其の大半は有能なる商人乃至軍人である事を豫め知つて置かねばならない。

之は後世に於てもスペイン以下歐洲列强の全部が、稍々有力なる亞細亞の獨立諸國に對する侵略豫備工作として必ず執つた賢明なる方法であり、之に依り歐洲列强は侵略の能否、時期等を熟知したものである。然し乍ら比律賓の如く既に占領せる植民地に對する其れは、無論其の必要無く、島民を宗敎に依り阿片的な痲痺效果を與ふる以外に、一定の範圍に於て其の純正なる目的に向つて働くものであつた。

十六世紀歐洲に於ては、往時の如く絕對的なものでは無かつたが、羅馬法王權、基督敎勢未だ全くは衰へず、特に舊敎を墨守する保守的なラテン族の一たるスペインに於ては、基督敎權は政權に匹敵する偉大なる勢力を持つてゐた。

比律賓統治上多くの禍根障害を遺した敎權が、始めて樹立されたのは、總督ペナロザ時代に、本國より比律賓島民の永久的敎化を委囑されて赴任し來つた僧正サラザルを迎へた一五八一年である。

其の後間も無い一五八四年、時の總督ロンキロ Ciego Ronquillo は行政上の問題に關して、僧正サラザルと最初の大衝突を演じて、其の後に於ける政敎二權の對立を釀成するに至つた。宗敎の政治への容喙干渉は、統治力を弱化する不利なる策であるが、當時のスペイン國情として、其れは詮方ない事であつた。之が解決法として時の國王フィリップ二世は、同年高等法院 Audiencia をマニラに設

立して、總督及び僧正間の紛爭判決機關となすと同時に、比律賓統治上の最高諮問機關とし、且總督不在乃至缺員等に於ける行政代行の大任を賦與したのであつた。

而して十六世紀に於けるスパニッシュ比律賓の對外交渉に、最も大なる位置を占めてゐたのは北方なる日本であり、一五九〇年總督ダスマリニァス Gomez Perez Dasmariñas は、使節を關白秀吉に派して修好し、又秀吉は之に對して日本への投降を促したのであるが、詳細は後章第十八章に於て述べる事にする。

當時比律賓は印度支那なる暹羅、柬蒲塞等との貿易、延て政治的侵出に關して、其れ等諸國との間に多くの紛爭を齎らしてゐた。既に知れるが如く、歐洲勢力亞細亞行の目的は、一に其の財寶獲得に依る自國勢力、文化生活の向上に在つたものであるが故に、其の植民地人の福利厚生等は眼中に置かれてゐなかつた。

神の照覽無き無道德の特殊地帶亞細亞に、又交通不便なる當時、幾多の犧牲を拂つて雲烟萬里の異境に進出し來つた彼等に於て、其の自慰的惡業は公私共に默認せられてゐた一の常識であつた。

從つて其の治下に在る多數のフィリッピノ達は、何等生活の向上に、文化の施設に、保護せらるる事無く、彼等の均霑する事無い產業開發、資源獲得の爲に、山野に、莊園に、過激なる服役を强行され、加之、園主領主の苛歛誅求に全く奴隷化され、在りし日、サルタン時代又は滿者伯夷帝國時代に於ける幸福と自由は全く彼等の世界から消えて逝つた。而して彼等を其の絕望と呻吟の中から或程度に於て救出せんとするのが僧正以下に依る基督敎化、禮拜であつた。彼等は其れに依つて寂しき諦め

と、すずろなる非現實的慰藉を得るのであつた。

基督教權と雖も、僧正以下全スペイン宣教師の現實生活がフィリッピノの搾取により、より良く保たれてゐる以上、總督の執る政策に對して多くを言ひ得なかつたが、腐敗せるスペイン官吏、園主の必要以上の亂業無道に對しては默し得ず、遂に僧正は本國王に對して其の改善を建白したのである。一五八九年總督ベラ Santiago de Vera による莊園制の一部改正卽ち之に據るものである。

之と共に、從來ニウ・スペイン副王管下に在つた比律賓の統治は本國の直轄となり、總督任免の權も亦國王の親裁する所となつた。一五九〇年赴任せる總督ダスマリニアス卽ち其の最初の總督である。

尙當時に於けるスペインの東部亞細亞諸國に對する貿易に從事した商船は、ガレヲン船 Galleon と呼ばれる官有の巨船であつて、當時の日本人は一般外國船と等しく南蠻船或はガレウタ船と呼んでゐた。日本、支那、南海諸國よりの商船の往來に榮えてゐたマニラに於けるガレヲン船の出入は又一入繁く、主としてニウ・スペイン及び本國との間を往復した此の船を、在比律賓スペイン人は、官吏、商人、僧侶を問はず、國家的公用以外に私的に之を利用して、獲たる財寶特產を本國、ニウ・スペイン等に販賣し、私腹を肥やす者多かつた。

又共れは遙かなる祖國の同胞に彼等の活躍乃至憂情を傳へると共に、戀しき家族よりの懷しき便りを齎らす唯一の連絡者でもあつた。從つてガレヲン入港の報は國家的にも個人的にも、マニラ其他諸港の市勢を昂らせた大きな刺戟であつた。

而してスペイン政府の比律賓獲得に依る財政上の利益は、最初の數年、毎年約二十萬ペソの國庫補助 Real Situad を要したるのみで、其の後は連年百萬ペソ以下の收益に終つた事が無かつた。

尙、玆に注意す可き歐洲政情の變化は、一五八〇年ポルトガル內亂の結果、國王ヘンリー一世失脚して隣强スペインに合併せられ、フィリップ二世がポルトガルを統治するに至つた事であり、之に依り十五世紀以來南洋に開拓、占領したポルトガルの利權の大半はスペインの有に歸するに至つた。

更に英國と共に、後年南洋侵略の王座を占める和蘭は、前年よりスペインの虐政に反抗して獨立し、遂に此の一五八〇年和蘭共和國を完成するに至つた。

然して十七世紀に於ける和蘭及び英國の興隆は、中世の老大ポルトガル、スペイン兩國の勢力を驅逐して、之に代る覇權を南洋に、延て歐洲に確立するものとなつた。

此の頃、歐洲諸國に於ては、外に彼等の新世界に於ける廣大肥沃なる植民地の獲得と、內に彼等の史的環境の中に釀し出されたるルネサンスの後期に於て、其の進路には新たなる資本主義的經濟組織が其の黎明の光を投げ掛けてゐた。

第十五章　當時日本人の南洋發展と倭寇の位置

十三世紀末、卽ち日本に於ては北條時代の末期、元寇の頃、日本は其の貿易、海外渡航の多くを、在留支那人の所有する大船に依つて爲すか、又は之を賃借して爲すの哀れな狀態に在つた。從つて東亞諸國間の交通貿易は主として當時の先進國たる支那商船に依つて行はれてゐたものである。

其の後、日本内地に志を得ない浪人武士團、或は外國貿易の巨利を夢見る沿岸諸港の進取的な商人達は、支那船に等しい大規模な船舶を造營し「八幡大菩薩」の大旗を押し立てて、徐々に高麗以下朝鮮諸港に出沒し初めた。而して十四世紀足利時代、其の勢力は東亞に竝び無い雄大なものとなり、北は朝鮮より西は支那沿岸諸港に進出して、或は貿易に或は掠奪に從事してゐた。豪直不屈の彼等發展的な日本商人達は、其の對外商取引に於て、若しも相手が不正欺諜を弄した時は之を咎めて憚らず、尙も聽かない場合は直に武力に訴へて之を解決した。

其の素質に正義と短氣を藏する尙武的日本民族性は、特に海外に雄飛せる彼等に於て最も甚だしく、凡そ悠長老獪なる商業的支那民族とは相容れず、各地に於て猛烈なる衝突を演ぜねばならなかつた。卽ち支那人が八幡或は倭寇と呼んで恐れた所以であり、又明政府が倭寇の取締に就いて其の沿岸の警備を嚴にすると共に、日本幕府に對して屢々之が禁止を抗議した所以である。

然し乍ら此の所謂倭寇の日本的價値は、其の爲せる造船、航海の技術發達に依つて、從來支那船に獨占せられてゐた東亞貿易の利を回復せる點に於て、又支那船賃借に依らずむば海外渡航を爲し得なかつた日本の恥辱を雪いだ點に於て、將又地理認識、海上戰鬪、貿易販路擴張等の方面に於て、甚だ重要なるものがあつた事を忘れてはならない。

斯くて十五世紀後半、卽ち足利末期の頃には、彼等の遺裔は南支那より遠く南洋に其の驥足を伸ばし、先づ根據としたのが高砂卽ち臺灣である。當時未だ蒙昧にして一定の統治者無く、無力な馬來酋長部落及び支那人集團の散在してゐた臺灣西部沿岸の良港たる鷄籠卽ち現在の基隆、打狗卽ち現在の

高雄及び淡水、馬公等を占據して、對日本、支那及び比律賓の呂宋、南支那の媽港、印度支那東岸安南の茶隣(ツーラン)諸港との間に可成り盛んな貿易を行つてゐた。

當時の日本は未だ鎖國、海外渡航、大船造營等に對する禁制を行つてゐなかつたが故に、彼等は自由に其の武力と智能の任すが儘に、呑天の覇氣を以て南洋諸港に販路を求めて飛躍する事が出來た。從つて十六世紀前葉には遙か南方なる馬來半島南端のシンガプーラ＝舊ツマシク＝現シンガポール、爪哇のヂヤガトラ（當時カラバとも稱した）、印度より、東方モルッカス諸島中のアンボイナ等に、交通貿易は勿論、其の儘移住した者も多かつたのである。

日本より一歩遲れたポルトガル、スペイン等の商船が東漸し來つた十六世紀の南洋は、其の後の敗退を前にして、日、支、アラビア等の亞細亞諸國の商船とポルトガル、スペイン等歐洲諸國の大商船の往き交ひ漸く繁く、當時の南洋は多分に國際的な色彩を呈した華かなものであつた。

未だ歐洲勢力の黎明であつた此の時代、秀麗なる容貌と、信義と、又驚く可き勇武を以て、日本人は南洋各地に斷然たる恩威を施し、支那人に比して、素朴穩和なる諸島民族は彼等を敬愛し、其の入來を歡び迎へる事厚かつた。其の好意により移住するに至つた日本人達は、其の高き文化と識見によつて島民社會に重きをなし、頓て彼等の間に支配的な位置を占めて行つたのであるが、可惜其の後の鎖國と共に一部は本國に歸還し、一部は島民の中に混血同化して其の本然の相を失つて逝つた。

斯くて、十六世紀末、雄略ある關白秀吉の征韓征明、竝に南洋經倫の旺んなる國勢に刺戟され、又

猫額大の本國列島に同胞相剋に由つて獲らるる利を棄てて海外貿易を目指した、小は數十人、大は千餘人より編成されてゐた日本の武裝商船隊所謂倭寇は、今日南洋に於ける凡ゆる日本的遺跡、遺風を作つた當時最强の海上勢力としても甚だ重要なる意義を持つものであつた。

爪哇、ボルネオ、モルッカス、マラッカ諸島民にして、今日尙、日本を宗主國視し、遙かに憧憬の思ひを寄する者ある、實に當代に於ける倭寇活躍の影響であり、如何に彼等が南洋諸島民族に敬慕されてゐたかを如實に物語るものである。

卽ち同時代に於ける歐洲列國の武裝商船隊の同地方に於ける非道なる行動と比して、如何に其の精神に相去る遠きものあるかを見得るのである。故國を去る萬里の波濤、荒波渡世の彼等が其の携へる日本刀の武力を振つて威名を輝かしたのは、攻擊乃至謀略侮辱を受けた時々に限り、其れは支那沿岸諸港に於て最も多かつた。一五九〇年卽ち天正十八年には、其の交易に依つて屢々入港してゐた比律賓北岸なるカガヤン河口に於て、折柄警備し來つたスペイン艦隊に不當、不意の襲擊を受けて遂に大海戰を開くの止む無きに至つた。現在に於ても日本人との交涉深かつた同地方住民には、まぎれも無き中世日本武士の甲冑、太刀を家寶の如く祕藏する者多く、加之、彼等の住居が竹垣に日本式家屋庭園なるを見ては感無量なるものあるのである。尙、之に關しては Formen :— The Philippine Islands 中に詳しいものがある。

倭寇が在來非道無類の集團であつた如くにのみ今日尙思はれてゐる事は、史實の曲解又偏見に禍さるるものである事、蒙古兵の歐洲征服の其れに似たるものあり、特に直接關係ある日本人として、彼

等の惡業の他に、確認せらるる國家的諸々の貢獻あるを知る所あらねばなるまい。

今日を隔る三百餘年前、圖南の先驅として南洋諸港市に敢無く果てた彼等の英魂が、祖國の同胞にすら誤解視さるるに於ては、其の靈以て瞑する能はざる憾みあるであらう。況や其の對立者たりし歐洲諸國船隊の南洋に於ける罪惡無道は、今日尙巧に隱蔽され母國に於ては國運開拓の英雄視され居るに於てや。

以下に當時南洋諸島港に在留した日本人竝に日本商船、倭寇に關する記錄の一端を記して、啓蒙の資に供する。

世宗肅皇帝丙午嘉靖二十五年四月、倭寇浙東自罷市舶凡番貨至、輙賊與奸商、奸商欺負、多者萬金、少者不下千金、轉展不肯償、乃投貴官家、又欺負不肯償貪戾甚於奸商、番人泊近島遣人坐索、意不得償、番人乏食、出沒海上爲盜、貴官家欲其亟去、輙以詭言撼官府云、番人據近島剎掠人、奈何不出一兵、備倭當如是耶、及官府出兵、輙齎犒師、好語啗番人利。 ——皇明實記——

"There usually are in Manila Japanese, both Christians and Pagans, who remain from the ships which come from Japan, though there are not so many of them as of the Chinese…… ………There are spirited people, and of good disposition and valiant; they wear their own costume, which consists of garments (Quimon) of colored silk and coton reaching half way down the leg, open in front, wide short drawers close fitting doots of chamois leather; shoes like sandals, the sole of straw well interwoven; thhir heads bare, the top shaven as far as

the crown, and the back hair long, tied upon the head with a graceful bow; they wear large and small catans their waists and little beard; they are people of noble condition and conducts, of much ceremony and courtesy, with much of honour, and very estimable, and determind in any case of necessity or diffheulty, ……………………the most of this nation that may be in Manila, for they do uot go to other parts of the islands, may be five hundred Japanese, and from being of the quality of which they are, they return to Japan without remaining long in the islands, and so in general very few of them remain; in every thing good treatment is offered them, as they are people who requir it……………………”

Morga, Antonio de:=Sucesos de la Islas Philippinas, Madrid, 1609. の英譯たる左記り

Stanley, Henry E. J: —The Philippine Islands, Moluccas, Siam, Cambodia Japan and China at the close of the 16th century, London, 1898.

「…………マニラには日本人の基督敎徒及び異敎徒で日本船に乘じて渡來し移住する者多かつたが、支那人程では無かつた。…………日本人は氣慨のある人民で性溫順加之勇敢であつた。自國特有の服裝をしてゐたが其れは、色附いた絹布又は綿布のキモノ=着物であつて長さは脛の半に達し、前部は開いてゐる。別に廣く短い股引を着け緊い羚羊の皮長靴を穿いてゐる。短靴はサンダルに似て底は巧みに編んである。

頭は露出して其の上部まで剃り上げ、後の長い毛は綺麗に曲げて頭上に結んでゐる。腹には大小

二刀を佩び、鬚髯は少い。風采動作は上品で禮儀を尙ぶ。又名譽を重んずる尊敬すべき人民で、缺乏艱難に面して甚だ果斷である。

日本人は比律賓諸島中マニラ以外には行かず、其の數約五百人である。彼等の特性として永く同島に在留せず引返すが故に增加しない。

彼等は優遇す可き人民である故に、常に歡待されてゐる……。」

尙モルガは十七世紀初頭スペインの副總督であつた。

"…………It was reported that their province was on the mainland the general opinion of all is that their land is an island, and they navigate from it to Malacca, whence come every year two or three ships. The merchandizes which they bring are sillk, silk-stuffs, brocades porcerain, a great quantity of copper and frusseria ; and they bring a great deel of gold in little cakes , stamped with the seal of their King. It couldn't be assertained whether these little cakes were the money of that land, or whether they impressed them with that mark to show that it was a thing which had passed through the port, whence they brought it, for they are men of very reserved speech, and do not give anyone an account of their native affairs…………the men are fair, their dress is like a cloak without a hood ; they carry long swords after the fashion of Turkish cimeters, but somewhat more narrow, they carry also daggers of two palm's length ; they are daring men and feared in this land Malacca. When

they arrive at any port, they do not bring out their merchandize all at once, but little by little; they speak truthfully, and will the truth spoken to them. If any merchant in Malacca broke his word, they would immediately take him prisoner. They strive to dispatch their business and get away quickly. Thee havy no settlement in the land, for they are not the men to like going away from their own land. They set out for Malacca in the month of January, and begin their return journey in August and September………………"

d'Albuquerque, Blasius:—Commentarios Grande Affonso d'Albnquerque, Lisboa, 1557. の英譯たる左記より。

Birch, Walter de Gray:—The commentaries of the Great Afonso Dalboquerque. v. 3. London, 1875.

「…………彼等の本國は大陸にあると言はれてゐるが實は一の島國であつて、毎年其處から二三艘の商船でマラッカに來航するものである。彼等の齎らす商品は生絲、絹布、陶器其の他多くの穀物、銅、砂金等で、國王の刻印のある金錠も多く輸入し來つた。彼等は非常に寡言で少しも本國の事情を話さないので、此の小さな金錠が彼等本國の通貨であるか、其の輸出地の港を通過した事の證明に如斯刻印をしたものか不明である。……………………………男子は容貌美しく其の服裝は頭布の無い外套の樣なものを着て、土耳古人の用ひる偃月刀に似た長い刀と六七寸の短刀を帶びてゐる。勇敢な彼等はマラッカ地方で畏敬されて居り、彼等は入港するや直ちに陸揚げはせ

ず、少し宛出して取引する。彼等は信義の無い者とは語るを欲せず、マラッカの商人で若し虚欺した者は直ちに捕へられた。

永く他國に留らない彼等は、植民地を持たず、毎年一月頃本國を出帆してマラッカに向ひ、同八九月頃歸還する。」（文中「國王の刻印ある」とは御朱印を指す）

ダルブケルケは一五一一年マラッカ遠征に來航した印度臥亞のポルトガル總督であり、彼の呼ぶ Gores 人は日本人を指し、國王とは幕府の將軍を指すものである。當時に於ける歐洲人の日本人に對する畏敬視亦之に依つて知らるるであらう。

十六世紀に於ける支那沿岸、特に南方諸港に於ける歐洲人卽ちポルトガル及びスペイン船員の亂虐は、所謂倭寇の其れに比して遙かに高度の殺戮、破壞であつた史實を知るが、東洋諸國人には之を知らしめてゐない。又知らうとしないが故に知らない東洋諸國人の史眼があるのみである。歐洲人の其れは倭寇の如き、一時的報復膺懲的な單純なものでは無く、永久的な政治的侵略を藏する深刻なものであつた。一五八四年、卽ち天正十二年日本種子島に漂着した事あるピント Ferdinando Mendez Pinto の亞細亞旅行記 Peregrinação, Lisboa, 1614. 卽ち The Voyages and Adventures of Ferdinando Mendez Pinto, London, 1891. なるコーガン Henry Cogan の英譯中には、其の一端が明らかに認められてゐる。

然し乍ら斯くも盛んであつた中世末期約一世紀半に亘る永い日本人の南洋發展も、永住地及び永久

的利益獲得の政治經濟的遠謀無き本國の爲政者の無關心と、彼等自身に依つて、其の有利なるコンディションの中に在つて尙見る可き何等の功蹟をも遺し得なかつた。加之一六三六年、卽ち寛永十三年幕府の鎖國令は全く之を無爲ならしめたのである。

是に關して十九世紀初葉英國印度會社の社員で、曾て暹羅使節であつたクロハード John Crawfurd は其の著東印度諸島史 History of the Indian Archipelago, London, 1821. 中に述べて言ふ——

「…………今から凡そ二百餘年前頃、南洋諸島には多くの日本人が發展してゐた。然し乍ら彼等の發展は主として一時的且貿易的のものであつて、南洋諸島に永久的存立をなす政治的發展は爲し得なかつた。之は彼等が女を伴は無かつた故であらう…………」

と。

近世初期に於ける白人列强の南洋に於ける傍若無人の大規模なる非道は、倭寇と云へ共三舍を避ける甚だしいものであつたが、其の一例をヂヲーズの濠洲諸島史 A. W. Jose: History of Australasia, Sydney, 1911. に取れば次の如くである——「…………此の時代に於て各文明國は其臣民の行爲に就き責任を負ふ可き事今日の如く明かに決定せられざりき…………三百年前にありては元氣ある青年にして金錢を有せざる者が印度諸島の海員中に加はりて、スペイン人の通商及植民地を劫掠するが如きは敢て異常の事にはあらざりき…………」と。「大日本文明協會譯＝濠洲及其諸島參照」

十八世紀末に於ける英國東印度會社の渺たる一事務員…………曾ては無賴の徒として印度に流轉した…………然して後には印度ベンガルの知事として有名な夬のクライブ卿 Lord Clive 亦此の「元氣

ある青年にして金錢を有せざる者」に相當する者であつたのだ。

次に倭寇研究の好資料として、三高兼大阪高校教授藤田元春氏の「八幡船…………支那沿岸に活動した中世の日本人」の一節を掲げる――

「東亞の海上に遊弋した日本船の多くは、八幡大菩薩の旗を舳先にかかげてゐた、そこでこれを見た支那人は、我海外渡航の者を總稱して八幡船と呼んだ。この語は我國人にも用ひられ、やがて海外に交易することをバハンするといふ樣に轉じた、文祿二年小西攝津守行長が、淺野彈正少弼に送つた手紙の中に「五島平戶の唐人八幡仕候由」と述べ或は渡邊幸庵對話に「日本へ來る多くの品物は皆盜物也阿蘭人日本へ持參の品々、彼國の物にあらず、過半諸國の土產をバハンし來る物也」と述べて意味か通じる程になつた、それは我國人のなすバハンと同樣に唐人やオランダ人もまたバハンをするといふ意味である、しかしバハンだから盜物だといふことは今日の言葉ではよほど耳ざはりに聞える。事實盜物といつても、今の密貿易といふほどの事で、バハンは決して盜掠の行爲ではなかつた。けれどもこの時代の貿易といへば、今日のやうに國際關係が確立してゐるわけでもなく、今の汽船や電信電話等があつて、其の發著が迅速に且つ正確に知れるといふ時代ではなかつたから、唐人にしても、オランダ人にしても、故鄕を後に萬里の波濤を押しきつて、貿易の利をあさるのである。先方が歡迎するとは極まつてゐない。どこで誰の劫掠に逢ふかしれない危險があつたから、すべて武力をもつて自分を保護するのみではない、時には他國の船と爭鬪もする、或は劫掠もするるのがいはゆる貿易の本體であつた。自然此の頃の貿易船は世界を擧げて海賊船とも見られた、卽ち我邦人もバハン

をする、唐人も蘭人もすべてバハンをやつてゐたのである。

支那沿海でバハンをする外人の中で、日本人は最も勇敢であつたので、支那人はこれを倭寇と呼び倭寇來といへば泣く兒も聲を止めるほどに恐れた。第一圖に示すところの日人沿海活動の範圍を見ると明かな樣に我國のバハンは北は遼東から南は海南島はもとより更に遠く安南、シャムに迄發展した。倭寇と云ふ字に引かれて、世人の多くはこれらの寇賊は全く文字のない亂暴慓悍の武骨者の癖だと稱する傾があるけれども此の字は支那側からの言葉である。我國から見れば勇士であり武夫であつた、中には立派な教養の人もゐたから「倭變事略」を見ると我操舟用兵の妙を詳述驚嘆するのみではない、廟壁に五言律詩を題したのを傳寫するとか或は將に刑に處せられんとした一倭口占の詩等を錄してゐる。いはく――

諸君何必淚潸潸
自古英雄死作閑
今夜不須尋投宿
魂隨明月到關山

とある。これを近時喧傳される陣中の名吟に比較して決して遜色がない。或はその詩品の遙に優越してゐるのに驚かされる。

かくも立派な詩を吟じた人が、一人でも居たといふことは實に倭寇一般の品位を見上げしむるもの

であつて、彼等は決して鼠賊斗寇のやからではなかつたのである。

從つてこれらのバハンは勿論はじめから盜賊を目的にするほど下劣ではなかつた。先方が平和に貿易をしさいすれば決して兵を用ふるのではなかつた。もしくは海上で支那の海賊などの刺戟のない限り勢ひに乘じて陸地に荒れるといふこともなかつた。その主要目的は支那や南洋等の珍奇な唐物、藥材を輸入するために我の有する金、銀、銅、硫黃、倭扇、日本刀、漆器などを輸出したもので、取引が滿足に出來さへすれば喜んで歸航したのである。最初は先方の島かげに隱れてゐたので舟も人も多くはなかつた。しかし市を禁じたから寇となり、寇を禁じたからいよいよ寇をなしやすきの勢ひに發展したといふのが實際の歷史であつた。云々」

第十六章　十六世紀日本と其の歐洲關係

東漸歐洲勢力の先驅たるポルトガル船隊が南洋貿易の後、北上媽港を經て日本の豐後神宮寺に來航したのは、恰も足利時代末期の一五四一年、天文十一年であり、領主大友宗麟との間に通商交涉が行はれた。歐洲商船の日本入港は之を以て嚆矢とする。

卽ち大友氏はポルトガルとの互市協定に依り、臣植田源佐をポルトガル本國に派遣して貿易の事に當らしめるに至つたが、之も亦日歐、日葡交涉史の劈頭を飾る偉觀であらう。

隊長キソウウエルス以下百餘名乘組のポルトガル船隊が薩藩種子島に初めて銃を傳へたのは、其の

後二年の一五四三年の事であり、之は其の後一五五五年、弘治元年同じくポルトガル船に依つて齎らされた砲術と共に、日本國内諸藩侯の戰術に多大の進歩を招來するものとなつた。

一五五三年、天文二十二年には大友義鎭に對してポルトガル臥亞(ゴア)總督、所謂印度副王ノローニア Affonso de Noronha より修交竝に自國僧侶の日本布教許可を求めて來たが、スペイン商船の來航は一五五五年を以て初まり、ポルトガル船の種子島入港と同年であるが場所は平戸であつた。

然し乍ら通商ならぬ布教を目的とした最初の白人來朝は、一五四九年即ち天文十八年のスペイン僧ザビエル Francisco de Xavier の鹿兒島上陸を以て嚆矢とする。ザビエルは永く蒙古帝國治下の印度各地を傳道して「印度諸島の布教者」Apostle of the Indies と呼ばれてゐた有名な僧侶で、偶々印度に於て日本人入道者彌次郎 Yajiro=Angero と遭ひ、之と共に日本布教に志した者である。尙彌次郎は本國日本に於て罪を犯し、一五四五年、天文十四年遙々印度に逃れ、出家して了西と稱したが、後基督教徒となり、パウル Paul とも稱した。

實に此の兩人こそは、日本に初めて基督教を傳來し、其の後に於ける隆盛が十六世紀末より十七世紀にかけての日本社會思想に、所謂バテレン伴天連―パードレ Padre 等による宗教的大變動波瀾を捲き起し、遂に政治的な島原の亂、鎖國の令等重大なる事件を惹起するに至つた因子の一を釀成したものであつた。

ザビエルは日本布教の後、安南其の他の印度支那諸國を遍歷し暹羅に於て逝いた。現在盤谷市のシーロム通り外人墓地に其の大墓碑が建立せられてゐる。

當時最も基督教化された九州の三大藩主、大村、有馬、大友三氏が、日本布教司長であつた伊太利人ワリニャーニ Allessandro Valignãni の切なる勸誘により、伊藤滿所以下四十名の使者を印度を經由して時の羅馬法王グレゴリー十三世 Gregory XIII の許に遣はしたのは、一五八二年、天正十年織田信長の末期である。

之によりワリニャーニ以下の在日本傳道師達は、其の布教實蹟の效果を棒大に法王に報告して、其の歡心を買ひ利する所が多かつた。卽ち彼の同僚たるオルガンチノ Gnechi Soldi Organtino の如きは、當時敎會數二百、約十五萬の日本基督教信徒を、羅馬法王廳には約三百萬にして敎勢旺んなる事賴母しきものありと誇報して其の優遇を克ち得たものである。

尙グレゴリー十三世は、其の後三年の歲月を費して一五八五年、卽ち天正十三年遙々羅馬に到着した大村氏以下日本使節の禮を受け、己が管する敎の遠く極東異民族に及べるをいたく喜んだのであつた。又オルガンチノは日本に在留する事四十年、ウルガン伴天連と呼ばれて日本人間に著名であつた。

十六世紀日本は斯くて史上空前の對歐交通、基督教流入を行ひ、歐洲史上に初めて其のショーグネート Shogunate＝將軍國としての實相を現はしたのである。而し日本國內に於ては、兎もすれば國步を危からしめんとした歐洲勢力の宗教的侵入としての、基督教徒の跋扈に對する爲政者の彈壓、及び之に因る騷擾が起つた。其の思想的影響內容は、其の後三百年の二十世紀、ソビエト露西亞より入り來つた所謂共產主義思想の其れに似たるもの多く、日本史上に於ける思想的二大受難時代を形成する

ものであつた。然して同じく外來宗敎思想影響としての奈良、平安の中世日本に於ける佛敎輸入が齎らした日本文化、國勢の向上繁榮は、全く相異るものであり、一は亞細亞的な、一は歐洲的なるものであつた。甚だ異る社會環境に發生した歐洲のロヂカルな唯物的な思想流入に對する、史的な深き考察による取捨撰擇變改の必要は其處に見出される。然して之を缺いた時、其の國家は恰も消化不良の生體に及ぼす如き大なる障害を受けねばならなかつたのである。

第十七章　南洋史上に於ける關白秀吉の位置

十四世紀以來二百餘年の足利幕府は、日本人の海上發展に對して何等の禁令制限を行はなかつたので、國民は自由に大船を造り遠く茶隣、カラパー現バタビアーヂャカトラ及びマラッカ諸港の南洋諸島に其の鵬翼を伸ばして潑溂たる活動を行つた事は既に第十五章に於て述べた。

斯くて十六世紀に至り足利氏去つて織豐時代に入らんとし、歐洲勢力の東漸は遂に日本に及び、日本の對外關係は、一躍して世界的水準に達せんとしてゐた。

其れは一五八三年天正十一年、日本史上空前の英雄豐臣秀吉、天下の權を握るに及んで、其の對外政策は又日本史上空前絕後の强力なる飛躍的な發展を遂げ、南洋史も亦之が爲に看過し得ざる重大なる影響を與へられたのである。

特に一五八七年卽ち天正十五年、彼が豪華なる聚樂第に移つて後は、頻繁なる外國よりの刺戟と國力民勢の趨向に適ふ可く、其の全力を外方經綸に向けてからは比律賓、印度、臺灣等は將に其の存立

を危からしめられた程であつた。

即ち彼は沿岸貿易商人をして盛に海外發展をなさしめ、國家の經濟的富强を圖ると共に自らは政治的對外膨脹に專心し、先づ其の緒として行つたのが、一五八九年卽ち天正十七年に於ける使者宗義智による朝鮮招降と、琉球の獲得であつた。

琉球王國は既に一四三九年卽ち足利時代の永享十一年、將軍義政が、九州島津藩をして之を討たしめ統治したのであつたが、其の以前に於ける永き明への從屬により琉球王は、兩大國に對して不卽不離の關係を持してゐた。

因つて秀吉は那覇なる王に使者を派して、明への朝貢臣從を廢せしめて確たる島津藩治下に入れ、以て其の模糊たりし主權の歸屬を明かにしたのである。

其の頃北九州を主として諸地方に蔓延してゐた外國人宣敎師、所謂切支丹伴天連を中心とする基督敎勢力は、其の巧妙なる布敎政策に依つて漸く政治的色彩を帶び、其の根柢に於て反日本的なる一の社會的結成を示さんとしてゐた。卽ち秀吉は先づ切支丹禁止の令を布いて彼等の背後に隱されたる何ものかを摑まんと努力し、全國の奉行役人に其の注意警戒を怠らしめなかつた。

然るに事、意に反して敎盛益々昂つて不息、不穩なるものあり遂に一五八九年卽ち天正十七年、全國に對して南蕃寺の破壞と拜敎の絕對禁止、伴天連の國外追放及び長崎なるポルトガル人居留地の沒收を命令し、其の凡ゆる耶蘇的なるものを驅逐した。

而して一五九六年慶長元年、土佐灣に漂着した比律賓よりのメキシコ行スペイン船サン・フェリペ

San Philippe 號の抑留調査は、遂に其の船長ランデホウ Machas Landejo より意外なる報告を受けた。卽ちスペインは未開亞細亞諸國侵略の最初の手段として、先づ諸國政府當局及び社會人心を安からしむるに都合好き宣教師を送り、布敎の傍ら同國內の政治經濟思想狀態を隅なく調査して本國に密報するものなる事を聞いたのである。斯くて其の戰慄す可き野望は初めて日本に暴露されたのである。秀吉が此の種スパイ宣敎師二十六名を死刑に處したのは翌年一五九七年、慶長二年の事である。之に對して時の比律賓總督グズマン Francisco de Tello de Guzman は關白宛嚴重抗議する所あつたが、秀吉は「人民を煽動し國內平和を亂す、若し貴國に於て外人斯くある時如何」と應へて一蹴した。秀吉が斯く强硬なる態度を執り得、又彼グズマンが其の儘沈默したる、當時東洋に於ける兩國勢力の差の效す所である事を知る可きである。

然して此の事件はスペイン人間に於ても相當に問題化され、今日尙マニラ市チェスイット Jesuit 寺院には此の處刑の圖が揭げられてゐる。

然して秀吉の慧眼と其の嚴然たる對伴天連處置こそは、其の災禍を島原の亂程度に止めて、虎視眈々東洋に迫り來つた歐洲諸國の魔手を排除し得た賢明なる策であつた事を知る。之と共に秀吉の如き又日本國民の如き高き强き意氣と實力を有しなかつた安南、爪哇、印度、比律賓等南洋諸民族は、西力侵入に對して、宣敎師活躍に對して、深き洞察と抵抗力を有せず、脆くも其の銳鋒に征服沈倫し去られたのを知り得るのである。尙羅馬法王廳から直接派遣せられた少數の宣敎師達には、斯かる恐る可き目的が與へられてゐたとは思へない。

更に遠謀深慮ある秀吉の對外政策は、斯く、內に蠢く禍因を除くに明であつたと共に、外に海外貿易に依る國利を獲るに亦敏であつた。

卽ち曩に逃べたる如く沿岸豪商資產の家に對外貿易を奬勵し、一五九一年卽ち天正十九年以來は大船建造を補助し、朱印狀を與へて一部海賊の類を禁じ大いに國家の經濟的發展を圖つたのである。斯くて一部海賊の者も全く朱印貿易に從事するに至り、其の統制ある國家的活動は、明船を驅逐して彼の死に至る十六世紀末の十年間は、東漸せるスペイン、ポルトガル兩勢力と相對して南海を制したのであつた。

南太平洋なる小笠原諸島の發見領有も亦此の一五九三年、文祿二年の事である。尙當時の外國とは朝鮮、支那及び呂宋、ヂヤガトラ（爪哇の現バタビアであるが爪哇の總稱に用ひた）媽港＝澳門、高砂＝現臺灣、柬蒲塞、安南、暹羅等で、主として南洋諸島國を指し、スペイン、ポルトガル等は南蠻とも稱しポルトガル領印度の臥亞等は西洋と呼ばれる中に含めてゐた向もある。

當時に於ける一般商人、藩主等朱印船貿易者の主なるもの及び其の通商先は――

島津陸奧守	主として柬蒲塞、暹羅、印度
末次平藏	同　安南
有馬修理	同　印度、占城、呂宋、暹羅
松浦法印	同　印度、呂宋
加藤淸正	同　暹羅、交趾、呂宋

村山等安　同　高砂

等であり、秀吉は關白殿 Cuambacdono と呼ばれて當時スペイン、ポルトガル、和蘭等の在南洋歐洲人間に其の名高かつた。

次に一五八七年卽ち天正十五年、秀吉が國策として人民に布令した禁教勸商の令旨及び翌一五八八年卽ち天正十六年令した海賊禁止の文を記して、其の平和的な對外貿易振興の道を知らう。

禁教勸商の令

一、日本は神國たる處、切支丹國より邪法を授け候儀、太以不可然候事

一、其國郡之者を近付門徒に爲し、神社佛閣を打破らせ、前代未聞候。國郡在所知行等、給人に被下候儀者、當座の事に候。天下よりの御法度を相守、諸事可得其意處、下として猥儀曲事事

一、伴天連其知慧之法を以、心さし次第に擅那を持候と被覺召候處、如右日域佛法を打破事、曲事候條、伴天連儀日本之地にはおかせられ間敷候間、今日より二十日之間に用意仕可歸國候。其中に下々伴天連に不謂儀申懸もの在之は、曲事たる可き事

一、黑船之儀は商賣之事候間、格別候之條、年月を經、諸事賣買いたす可き事

一、自今以後、佛法のさまたげを不成輩、商人儀は不及申いづれにても切支丹國より往還くるしからず候條、可成其意事

天正十五年六月十九日　御朱印

海賊禁止の令

一、諸國於海上、賊船の儀堅被成御停止之處、今般備後伊豫兩國之間伊津喜島にて盜船仕之候、在之由被聽食、曲事に思食事

一、國々浦々船頭獵師、何れも舟つかひ候もの、其所之地頭代官をして、速相改向後聊以海賊仕まじき由、誓紙申付連判をさせ、其國主取あつめ可上申事

一、自今以後、給人領主、致油斷海賊之輩於在之者、被加御成敗、曲事之在所知行以下末代被召上事

右條々堅可申付、若違背之族在之忽可被處罪科者也

天正十六年七月八日　御朱印

第十八章　關白秀吉の圖南策

一五九一年卽ち天正十九年、征韓征明の役を以て其の大陸政策を實現せんとし、可惜其の中途に薨じた秀吉の雄圖は既に吾人の知る所である。

中世、尠くとも十六世紀末秀吉時代の十餘年、日本は東洋の最强國として老大明國を初め、スパニッシュ比律賓、安南、暹羅、柬蒲寨、ポルトガル、印度等南洋諸國を睥睨し、經濟的見地からも其の南洋貿易は南洋各地民族との間に行はれて、新進スペイン、ポルトガル等も地理的又人種的關係より

して兎もすれば日本商船に壓倒され勝であつた。

從つて北方日本の動靜は南洋諸國に執つては重大なる關心事であり、殊に一五九一年、秀吉の大陸征伐は彼等に一大衝撃を與へ、同年末比律賓總督グヅマンをして、其の餘波が守備力弱い比律賓諸島に及ばむ事を恐れて、朝貢の急使フライ・ペドロ・パブチスタ Frei Pedro Babtista を派して更めて修好親善の楔を固めんとし、又暹羅王ソムデッチ・プラ・ナレスアン Somdetch Phra Narosan をして時の明帝神宗の許に使者を特派して、共同防衛の議を提する等の狼狽を演ずるに至らしめた程であつた。暹羅勢力下に在り十七世紀山田王國領となつた馬來半島東北岸の太泥 Patani 藩王が日本に來貢、以て友誼を求めたのも亦此の頃である。而して征韓に多忙の日を過してゐた秀吉は、他日其れ等有利なる南洋への具體的進出を試む可き豫定の下に、翌一五九二年文祿元年、南洋貿易に從事して其の事情に詳しい原田孫七郎 Farande Mangoseshichro—基督教名 Gaspard =ガスパル及び其の父原田喜右衞門—基督教名 Poro を使節として、次の如き勸降の書を送つたのであつた。

比律賓勸降之書

夫吾國百有餘年、群國爭レ雄、車書不同軌文、予也際誕生之時、以有下可レ治二天下一之奇瑞上、自二壯歲一領國家、不歷十年、而不レ遺二彈丸黑子之地一、域中悉統一也繇之三韓琉球遠邦異域、欵レ塞來レ享、今也欲レ征二大明國一、蓋非二吾所一レ爲、天所レ授也、如其國者、未通二聘禮一、故先雖レ欲レ使三群卒討二其他一、原田孫七郎以二商船之便一、時來往此、故紹介近臣曰、某早々到二其國一而備可說二本朝發船之趣一、然則可解辨獻筐云々、不レ出二帷幄一而決二勝千里一者、古人至言也、故聽褐夫言、而暫不命將士、來春可營九州防

前不移時日、可偃降幡而來服、若葡匐膝行於遲延者、速可レ加ニ征伐一者必矣、勿レ悔不宜

天正十九年季秋十五日　　　　　　　　　　關白

曾て日本に遊んだ事あり、而して時の比律賓總督であつたダスマリニァス Gomez Perez Dasmarinas は武力に於て、貿易に於て、日本との抗爭の不利を思ひ、加之當時本國スペインは新興和蘭勢力の壓迫に不斷の脅威を受けてゐた折であり、遂に之に對抗する事を得ず、原田氏以下の日本使節を優遇歡待し、左の如き婉曲巧妙なる拒否の辭と贈物を連ねて、自國の威嚴を保持せん事と秀吉の怒を蒙らざらん事を力めたのであつた。然して其の書は原田氏及び特使ラノ Lope de Llano ヂァン・コボス Jean Cobos の二人により秀吉に奉呈された——

LETTER FROM DASMARIÑAS TO THE RULER OF JAPAN:

Gomez Perez Dasmariñas, knight of the order of Santiago, Governor and Captain-general in these islands, great archipelago, and districts of the West, for the king, our sovereign, Don Phelipe the Second, king of Castilla, Leon, Aragon, the two Sicilies, Jerusalem, Portugal, Navarra, Granada, ...the Eastern and Western Yndias, and the islands and mainland of the Ocean Sea; archduke of Austria; duke of Borgona, Bravaute, and Milan; count of Absprug, Flanbes, Bretana, Tirol, etc.; to the very exalted and powerful prince and seignior, *Quamboc*, after all due respect, wishes health and perpetual happiness. *Faranda Mango Schiro*, a Japa-

nese vassal of yours, and a Christian, arrived in this city, bringing me news of your royal person, as which I rejoiced exceedingly, for, because of your greatness, and the worth and prudence with which the God of heaven has endowed you, I am much affectioned unto you.

Some days ago *Faranda* gave me a letter, which—although it seemed to be in its form and authority, and even in the gravity and style of its language, a document despatched by so great a prince—yet, since the messenger was below the rank and quality roquisite to the royal name of him who sends him, and of the one to whom hio is sent, and tho importance and greatness of the embassy, I have douted, on the one score, and on the other, because he is a man so common and poor, and coming in an ordinary merchant vessels, which came hither for the purpose of selling provisions and other articles.

Because this took so long in coming hither, I have doubted whether these letters were not written qy this man himself or by another, for some individual end, so that by this means, he might receive more attention here. Furthermore, as I have no accurate interpreters throughly acquainted with both the Japancse and Spanish languages, as has been likewise declared to me by the letter and embassy, I am in doubt also of the true sense and purport of the words of the letter.

I think that if the king of Japon wished to write me, he might, since he has in his

kingdom the fathers of the Society of Jesus and other Spaniards, send me at least a copy of his letter in my own language, through their medium. I can say with truth that I have not even been able to read or understand in to the letter or embassy presented me by this man ; and therefore, that he may not have practiced any fraud or deceit toward your royal porson, or toward me, I have thought it best to de tain him here, until I could ascertain the truth and will of the king of Japon, and what are commands and wishes. ....

....

....

....if it is really one, I give you many thanks, assuring you that I am and will remain your friend ; and that, in the name of my king and sovereign, the greatest monarch in the world, I shall rejoice at your well-being and grieve over ill-fortune (which may the king of Heaven keep from you). Let it be take for granted that I desire your friendship, in the name of my king and sovereign, because of the good reception and hospitality extended by your royal hands the Spaniards, vassals of my king, who have gone to Japon and Asia by way of Eastern Yndia and these districts ; and because the best treatment possible has been extended here to your vassals and will be extended to them with the same love.

My king will consider it a favor to be advised if the message brought to meis true. I it is such, then I shall respond to the friendship due so great a prince, without any lack of my duty and avligation to my king and sovereign, to whom I shall immediately give account of this, in order to assertain what his orders shall be then. I irust that this matter will result quite to the satisfaction of two so great princes as my king and the king of Japon ; and that these discussions and conferences in true friendship and alliance may rebound to mnch peace to the universal happiness of the world, and to the glory of omnipotent God, the King of kings.

In as much as certain presents have been sent ma but lately from Japon, which are of great value, I would wish to have some rare and valuable products of our Espana to send in retur , but, since weapons are the articles most esteemed among soldiers, I am sending you with this a dozen of swords and daggers.

They are the finest that we have, and you will receive them from me as from a private person who desires your well-being and greatness, with the good will with which they aee offered, and as a token of affection.

I send only these too because the bearer of this of what I have stated above, so that we may have the information here that is desired.

May our Lord preserve your royal person with great prosperity.
　　Manila, June xi. 1592 years since the birth of our
　　　Lord and Savior. Jesus Christ.
……………Blair, Emma Helen and Robertson, James Alexander :—
　“The Philippine Islands, vol. 8, Cleveland, 1903” より

本文は關白秀吉の事を Quamboc と記し、原田孫七郎の事を Faranda Mango Shiro と綴つてゐる。次の漢譯は右の英譯と地名其の他に多少の差が認められるが大意に相違は無い。

秀吉宛比律賓總督之返書

縱二小琉球一

本國王敖綿氏敵裏系麻里仔氏、爾封授帶、聖知亞二我十字之號一係二故國一精勇功臣、管二轄小琉球等軍民一、承二奉皇帝郞卑理毗一、自二建國立位一以來擧二干系蠻一、大小隣邦近十八餘國、如二黎王、啞膀郡、是系里耶、灰呂沙吝、牙波廚、那猫膀、牙膀那、些吝仔、高羅民等一、諸處東西南北莫レ不二來賓一皈二我一統一レ固如二金甌一、曷敢有下越二厥志一而睥二睨神器一焉者上恭惟、殿下予敢斗膽頓首拜復、日者接二得原田孫七郎一、係二入聖廟中一人也、奉二陳台翰一、雪手開レ緘、愧レ受二厚腆一、捫衷感佩、時拜二使命一、而詢二問起居動履一、淸吉默相一、天帝不レ占有レ孚也、又兼以芳名久著雄方大略統二馭一方一、欽羨欽羨、予始而欣然、終則愕然、與二國屬一共商及レ此、謂斯一人來者、恐非二殿下高明責望盛心一也、何也箇

書嚴謬、封固甚密禮則是矣、而獨使賚レ書、輔行無レ人、且徒以ニ商船之便一、順搭而來、査ニ其時日一、久淹レ迹則疑矣、果眞耶、抑僞耶、方寸躊躇、群議狐沸、致レ執ニ狐疑心生一、以此等輩或者竊發ニ私行一、乘レ隙誘ニ貢於敝國一、欺レ君滅レ貢、於ニ殿下一、非ニ奉公秉レ忠者流一、故戴ニ鬼軍一之疑、疑不レ終釋ニ平、又兼以佛郎機之僧師托處ニ貴國一亦有レ年矣、亦知ニ殿下執事之爲レ人一矣、目ニ擊盛擧一、何無ニ片紙札行相通一、疑益倍、夫末ニ敢レ恭命一者、此故耳、茲姑借留ニ一年一、緬想（ツラツラ）、天顏咫尺、朝夕慇懃抵レ館、敢不レ揣ニ狂慢一、專人捧ニ簡書一、訪ニ眞僞一、倘情拙ニ於丹悃一、不レ負ニ知己之庇一、雀躍曷レ勝、如事屬ニ於奸細一、候ニ來年一、即遣レ歸レ國、伏レ闕待レ罪、近議先差ニ人役一、賚レ文奏請干系蠟帝都、聖旨施行一、想睦レ隣脩レ好柔レ遠通レ商、我國皇帝以ニ意氣一相期、毋ニ以嫌疑一介レ意決矣、何幸如レ之、異日旨下、速馳ニ報簡一、再伸ニ進上之儀一、可ニ以遲延一者、訝レ之哉況殿下貴國版藉所レ誌、固稱ニ大國一、而干系蠟本國地段所レ載、亦羨大國也、兩大相宜、講解可レ議、第一盛事、無乃、天帝默誘ニ二國之衷一、盛ニ兩家之好一俾和氣致レ祥、萬代瞻仰在ニ此一擧一、倘有下背ニ斯命一者上、天帝昭ニ鑑之一、敬承徽音、未レ通ニ干系臘一、儀尙不レ腆、予乃學レ劍武夫、微物珍重奉ニ長短寶劍一二十四盒、聊表ニ芹意一、並納是幸、情緒叮嚀使平使乎彼能言レ之、亦能傳レ之也、昭亮不宣、無レ任ニ山仰斗膽之至一

托ニ重僧師

羨高茂　拜上

西土出世壹千伍百九十二年仲夏朔日

判印

側線あるは固有名詞である、如次

敖綿氏敵裏系麻里仔氏 Gomez Perez Dasmarinas
郎卑理毗 Don Phelipe (King Philip を指す)
佛郎機 Frank (European歐洲人を指す、亞細亞諸國人の使ふ語で所謂異人乃至南蠻人に等しい)
羨高茂 Jean Cobos
小琉球　比律賓自稱
他は皆地名であり、前掲英文と對照され得る。

尙ダスマリニァスは如斯返書により事を遷延し、其の間に本國の指令を待ち、支那と同盟して日本に當る可きや否やを劃策せんとしたのであるが、多忙と死により秀吉の遠征は實現せられずに終つたので間もなく事息んだのである。尙東洋に於ける日本の位置の輕視す可からざるを知り、宗教、經濟兩方面より之との好誼を求めてゐたポルトガル印度總督、所謂印度副王はヂュユルテ Don Duarte に至つて、僧ワリニァニを日本に送つて布教の自由とポルトガル人生命財產の安全、貿易等を求めて許された。然し其の後曩に述べたる如き伴天連不良分子の跋扈に依り、織田信長之を禁ずるに至り、次いで秀吉亦之を嚴禁してゐた。ワリニァニが印度副王の書を携行して再び日本に來つた一五九一年卽ち天正十九年、當の秀吉は恰も反日伴天連竝に基督宗信徒撲滅に全力を盡してゐた時であり、該書面に接したる秀吉は伴天連の非望、民情の攪亂を大いに怒り印度副王に對して、若し改めずば遠征す可きの威嚇を與へて歸したのである。卽ち其の文面は次の如くである——

印度副王威嚇之書

遙寄音章、披而讀之、則不異見萬里海山於眼界、如來簡、本朝者邦域六十有餘、積年亂日多、而治日少、故凶徒好姧謀、群士作黨與、而不得服朝命、予也壯歲之日、嘸旭嘆惜之、修身之術、治國之要、深謀遠慮、而似仁明武之三、撫養諸士、哀憐百姓、正賞罰、定安危、由此久不歷星霜、而天下混一、如安盤石、及異邦遐陬、亦莫不來享、東西南北、唯命之從、當此時、傳聖主敕於寰中、振良將威於塞外、四海悉通關梁、討海陸賊徒安國家人民、吾卽已晏然、雖然、一有欲治大朋國之志、不日泛樓船、到中華者、如指掌矣、以其使路可赴其地、何作遠近異同之隔乎、夫吾朝者神國也、神者心也、森羅萬象不出一心、非神其靈不出、非神其道不成、增劫時此神不增、減劫時此神不滅、陰陽不測之謂神、故以神爲萬物根源矣、此神在竺土、喚之爲佛法、在震旦、以之爲儒道、在日域謂諸神道、知神道則知佛法、又知儒道、凡人處世也、仁以爲本、非仁義則君不君、臣不臣、施仁義則君臣父子夫婦之大綱、其道成立矣、若是欲知神佛深理、隨懇求、而可解脫也、如爾國土、以教理號專門、而不知仁義之道、此故不敬神佛不隔君臣、只以邪法、欲破正法也、從今以往、不辨邪正、莫爲胡說亂說、彼伴天連之徒、前年至此土、欲魔魅道俗男女、其時加刑罰、重又來干此界、欲作化導、則不遺種類、可族滅之、勿噬臍、只有欲修好於此地之心、則海上已無盜賊艱難、域中幸許商賈往還、思之、南方土宜、如注記領受、自是所給賜之方物、目錄在別楮、餘楮分與使節口實也、

不宣

天正十九年七月二十五日　　　關　　白

印地阿　　毘會靈

側線あるは固有名詞である。如次――

伴天連 Padre＝パードレ＝舊教宣教師

印地阿 India

毘會靈 Vissorei＝Vice Roy ＝副王＝總督

翌年ワリニァニに依り之を齎らされた臥亞總督タポラ Ruy Lourengo de Tavora は、自國布教師の非異を謝すると共に、今後の好誼を希ふ鄭重を極めた返書を秀吉卽ち Cuanbacdono に宛てて送り、其の怒りに觸れざらむ事を努めたのであるが、其の原文は今日尙京都妙法院に藏されてゐる。當時白人の見たる日本の狀勢はワリニァニの大著 Commentarii et ad caetras Indiae Nationes Christianae idei mysteriis Imbuemas 卽ち日本及印度諸國巡禮記中に詳しく好個の參考資料となつてゐる。更に秀吉は一五九三年文祿二年、南洋貿易家にして且先年呂宋に使した原田孫七郎の進言に基き、海外の根據地として當時日支人に依つて半ば領有されてゐた臺灣を占む可く、彼を使者として招降したが、統一主權無い同島に對する其れは、他方征韓の役に寧日無かつた彼と共に、不得要領に終つた事既に人の知る所である。左に其の文書を揭げる――

臺灣招降之書

夫日輪所ニ照臨一、至ニ海岳山川草木禽獸一、悉莫レ不レ受他恩光一也、予際下欲レ處ニ慈毋胞胎一之時上、有ニ瑞夢一、其夜已日光滿レ室、室中如レ晝、諸人不レ勝ニ驚懼一、相士相聚占ニ筮之一曰、及ニ壯年一輝ニ德色於四海一、發ニ威光於萬方一之奇異也、不レ出ニ十年之中一而誅ニ不義一、立レ有レ功、平ニ宏海內一、異邦遐陬嚮レ風者、忽出ニ鄕國一、遠泛ニ滄海一、冠蓋相望、結ニ轍於道一爭レ先而服從矣、朝鮮國者自ニ往代於ニ本朝一有ニ牛耳盟一、久背ニ其約一、況又予欲レ征ニ大明一之日、有ニ反謀一、此故命ニ諸將一伐レ之、國王出奔、國城付ニ一炬一也、聞ニ事已事已急、大明出ニ數十萬援兵一、雖レ及ニ戰鬪絡依一不レ得其利一、來ミ勅使於ニ本邦肥前之州一、而乞レ降緩レ之築ニ數十箇營一、收ミ兵於ニ朝鮮城中慶尙道一、而屢々決ニ眞僞一也、如ニ南蠻琉球一者、年々獻ニ土宜一、隊陸通ニ舟車一、而仰ニ我德光一、其國未レ來レ入ニ幕中一、不庭之罪彌レ天、雖レ然不レ知ニ四方成享一、則非ニ其他疎志一、故原田氏奉ニ使命一而發レ給、若是不ニ來朝一可レ令下命ニ諸將一征中伐之上、生ニ長萬物者日也、枯渇萬物亦日也、思レ之不具、

文祿二歲星集癸巳十一月初五日

日本國前　關　白　印

高　山　國

當時澎湖島は十四世紀末、明の太祖により在留支那人保護の爲に巡檢が置かれたが、一三八七年撤廢され、其の後は日支海商の巢窟と化してゐた。

然し乍ら蓋世拔山の力あつた秀吉の壯圖も、第一段階たる大陸經綸の中途に於て逝いては、第二段たる南洋政策も遂に空しく、僅かに精神的な覇業を遺したのみに終つた。

天、秀吉に藉すに更に十年の歳月を以てしたならば、其の旺んなる開國政策、對外進取に依つて國家的膨脹に應え、以てかの歐洲文明と植民地獲得に遲るる事無く、日本を中心とする東洋及び南洋の大帝國乃至ブロックは結成され、西力亞細亞侵略の手は其の大半の餘地を失ひ、歐亞兩大人種は其處に何等の優劣、尊卑生ずる事無く、白人の所謂白人の負擔 White Burden に依る主觀的優越も、亞人の拜歐畏縮感も其の發生を見ずして、互に正當自然なる分野を拓くべきものであつた。又對等なる兩文明種族の切瑳琢磨は、其の經路に必然たる爭融の盤根錯節の後に、其の發展は今日見得ざる高き世界文明を招來してゐたであらう。將又中世末期以後の悲慘衰亡の南洋史は、同種先進國の指導下に、健全なる發展史と書き換へられてゐたであらう。

歐洲史家及び之に全幅の信頼を置く一部東洋史家は、秀吉の征韓役をしてモンゴロイド特有の戰ひの爲の戰ひ War for War's sake と稱してゐるが、其の戰役が如何に統制あり、無辜の敵國人民に害を及ぼさなかつたものであるかは、尠くともアレクサンドルのイラン、印度征服、ナポレオンの歐洲蹂躙の史實と比較する事に依つて充分に知る事が出來る。又征韓役に際して發令した左の禁定は能く其の一端を窺ひ知るものであらう――

禁制

一、軍勢甲乙人等、亂妨狼籍の事

一、放火の事

一、對ニ地下百姓等ニ、非分の儀申懸くる事

右條々堅く令レ停ニ止之ー事、若違犯之輩於レ有レ之者、速に可レ被レ所ニ嚴科ー者也

天正二十年正月　　　　　　　　　　　　御朱印

定

一、軍勢於ニ味方の地ー亂妨狼籍の輩可レ爲ニ一錢切ー事

一、於ニ陣中ー火を出す族有レ之者、其者を搦め捕り、可レ出レ之自然逐電せしめば其主人可レ爲ニ曲事ー事

一、薪、ぬか、わら、ざうり以下其主に斷り可レ取事

右條々若於ニ違犯の輩有レ之ー者忽可レ被レ所ニ嚴科ー者也

天正二十年正月　　　　　　　　　　　　御朱印

尙之等に關しては Dening:—New Life of Toyotomi Hideyoshi 及び E.W. Clement:—A Short History of Japan 等の白人の書が眞相に近きを傳へて居る由である。

此の他戰鬪に於ける赤十字的思想の創始者亦秀吉に在つた事實をも其の政治經濟思想政策等と竝び思ふ時、彼が決して一個の武辯では無かつた事を充分に知り得るであらう。

亞細亞の盟主を以て自他共に許すとする日本人は、尠くとも自國同胞の事業功績位は正しく認識して竝立的立場に在る外力に曲げられぬ信念と力を持つ可きであらう。然りと雖も日本人をすらも殆んど其の思想傾向の中に捲き込んだ白人文明の力亦偉大也と言ふ可き歟。

第十九章　加藤淸正其の他諸侯商人の南洋貿易

秀吉の禁教勸商政策は、內に異教輸入に依る行政上の障害を排除すると共に、外に一般商人藩侯の對外貿易を振起して財政上の利に資する所多かつた。

次に當時に於ける二、三有名な南洋貿易家を擧げて日南交涉の大概を知らうと思ふ。

當時彼等勇敢な貿易家達は、海外（其れは其の殆んどが豊かな南洋である）の富を求めて特に九州地方は活氣ある狀態を呈してゐた。其の中には武勇と信義に聞えたかの加藤淸正の名も見出される。彼は永く比律賓、暹羅等の南洋貿易に從事して多くの利を博してゐたが、征韓役と共に朝鮮に渡り、其の後秀吉の死に至る本國歸還迄の數年は中絕の狀態に在つた。

卽ち一五九六年慶長元年、彼は比律賓總督グズマンに對して左の如き修好貿易復活の書を送つてゐる——

加藤淸正呂宋長官宛修好之書

今日に至る迄閣下と通信せることなきも、我領民の船舶其地方に至る故、此に文を呈す。早くすべき也しも高麗の戰爭に參加し、五六年間領國に在らざりし故、今日迄之をなし得ざりき。

今日稍々彼國の事落着、閣下と通信せん。

予は長崎のパードレ等と相識るも、未だ其の敎は奉ぜず。今般其地に行く船に對して、諸般の便宜を與えられなば、深く之を喜び謝すべし。

又親交を結ばむ事を祈る。

慶長元年十月十五日

日本に於て
加藤主計頭

ルソン諸島長官

尙彼の名はマニラ外人間に Catto Canzuyeno Camg 加藤主計頭として知られた。

又安南との交通に於ては、其の東南の一王族より左の如き書を贈らるるの親交を結んでゐたのである——

安南王族阮氏加藤淸正宛修好之書

安南國大都統瑞公、敬ニ書于日本國加藤肥後守平淸正貴翁座右一曰、
國家大寶、其一日レ信、以レ信相交、斯仁者之所レ爲也、曩者貴府情未ニ相識一、既有ニ先施之義一、賚贈與レ僕、意己勤拳倘ニ二番矣、奈告遇レ碍、凡信物頗雖レ未レ見、然僕已愛ニ其恩一、玆方ニ船主言一還、僕心深想ニ貴府厚意一、將何以答、暫以ニ小禮一遙寄爲レ信、幸蒙ニ笑納一、貴府如能親ニ愛於僕一、明年再許ニ吾兵衞一、整修商船、直來ニ本國一、得ニ以相賀一、如レ此則利通ニ兩國一、好結ニ千年一、至矣必矣、

弘定拾年五月拾柴日

又日本の對歐交涉創始の黎明、特に殷盛を極めた肥前平戶の城主松浦法印は、比律賓其の他の南洋諸港と盛に交易して藩財政に資する所多く、又歐洲なる英國、スペイン等の本國とも直接なる友交關係を結んで居り、一六一〇年慶長十五年には、時の英國王ヂェームス一世は、英國船長にして後の平

戸商館長サリス Edmond Saris をして其の親書及び珍品を托し贈つたのであつた。

此れに對して法印は左の如き禮狀を送り、交友甚だ厚きものがあつた。（現代英語のスペルと多少異る所あり）

TO THE KING OF GREAT BRITAINE

Most mightie King, how acceptable your Maisstties louing Letter and bountifull Present of many worthy things sent mee by your servant Cap. Iohn Saris is into mee, I cannot sufficiently expresse,; neither the great happinesse I esteeme my selfe to be in, by enjoying your Highnesse friendship, for which I render you many thankes, desiring the continuance of your Maiesties love and acquaintance. I an heartily glad of your subjects safe arriuall at my small Iland fro so long a journey.

My helpe and furtherance they shall not want to the vttermost, for the effecting of their so worthy and laudable enterprises of Discouery and Merchandizing, greatly commending their forwardnesse therein,; referring their hitherto entertainment to the report of your seruant, by whom I returne into your Maiestie an vnworthy token, wishing your Maiestie long life.

From my Palace of Firando, the sixth day of our tenth moneth.

Your Maiesties louing Friend, Commander of this Iland,

Firando in Iapan, Foyne Sam-Masam.

（法印）　（平戸）

斯くて十六世紀末より十七世紀にかけての地方的日本藩侯の對外關係は相當に進んでゐたものであり、秀吉存命中に於ける著名な貿易商人としては、堺呂宋助左衛門＝菜屋助左衛門を擧げる事が出來る。其の有する膽力と叡智に依つて、彼は其の名の示すが如く主として呂宋貿易に依つて巨利を博し、當時浪速一の豪商として其の盛名を謳はれてゐた。後秀吉の忌諱に觸れて日本を去り、一族と共に印度支那南岸なる甘蒲寨に移住して南海貿易に從事し、再び隆盛を來して附近に重きを爲すに至つたが、其の後才幹を認められて同國の商務官の如き位置に昇つた。

其の後間もない日本の鎖國令により遠く離れて三百年、二十世紀に入つての日南兩族關係は、互に其の十代以前に在りし日の親交を忘れて恰も異端の如くである。

第二十章　中世に於ける臺灣

地理的關係から、一葦帶水の臺灣には支那との間に古くより多少の交通が行はれ來つた事は既に古代史上に述べた如くであるが、一般先住馬來諸族は不相變野蠻な原始生活を各地に營んで居り、僅かに西部沿岸諸港及び其の附近部落住民は、支那人との平和的接觸に於てのみ幾分の進化を見つつあつた。而し支那人との生存爭鬪に於ては常に敗退の經路を辿り、蒙昧なる馬來諸酋長部落の活動範圍は、徐々に東方山間の不利なる地方に壓縮されて行つた。

其れは連年の區々たる南方支那移住民の增加繁殖に伴ひ益々激しく、中世前期に於ては西部沿岸の

要地沃地は殆んど支那人（特に閩人）の手中に握られてゐた。

又澎湖島嶼は十四世紀末、明の太祖の時代には、既に同地在留支那人保護の爲に巡檢司が設けられて居り、其れは約十年にして廢せられたが、澎湖島民生活の利益は夙に優勢なる支那人の爲に行はれてゐた。

然して當時南方の所謂東印度諸島及び比律賓等を領有して盛んであつたヒンヅー爪哇の、滿者伯夷帝國の權力も臺灣に迄は及ばず、從つて其の文化に影響される事も無かつた。

更に北方なる日本、支那等に統治される事も無かつたが故に、臺灣は全く南北兩文化圏外の死界としての暗黑地帶に放置されてゐた。

北方朝鮮及び支那沿岸から南下した日本及び支那の海商海寇達が、此の無主の臺灣諸港占據に乘り出したのは其の後間も無い十五世紀の事である。

彼等は本國と南洋諸港との貿易仲繼地として、又對南海寇に便多き無主の大島として盛んに西岸諸港を利用したが、十五世紀中葉以後、卽ち足利時代に於ては日本人の勢力漸く增大し、呂宋、ヂャガトラ等馬來諸島進出の基點としてゐた。

然し乍ら貿易上に於ける、特に數多き南洋移住に依る支那人の定住不動の勢力扶植は、一時的日本商人の其れとは比較し得ぬ遠大なるものを以てゐた。

日本人と異り武力と信義を持たぬ彼等は、南洋諸島民の間に信賴尊敬をこそ受けね、默々孜々として只之營利に從ふ彼等の執念と老猾は、其の移住者の夥しき數と相俟つて、着々と鈍重穩和なる全南

洋民族の間に確固たる經濟的位置を形成しつゝあつた。

斯くして十六世紀に入るや、歐洲海賊遠征隊の南洋進入に依つて南洋の富は將に東西世界文明諸國の狙ふところとなつたのである。然し乍ら高き物質文明と、强き進取の精神に加へ、直接國家的なる力を持つ、歐洲諸國の强力大規模なる武裝船隊は、或は南洋に振ふ勇武なる日本人を戰鬪に利用し、或は無智なる諸酋長藩主を謀略により又武力により不利なる條約を强制し、或は商館なる兵隊屯營兼商品倉庫を築城して領土の獲得及び貿易獨占に便じて、徐々に私的な一時的な力無い東洋及び南洋諸國人の既存權益を浸蝕して行つた。

其の遠望美しきにより、臺灣島が美はしの島イラ・フヲルモサ Ilha Formosa と呼ばれ、澎湖島嶼が漁船多かりしにより、漁人ピスカ・ドル Pisca dore 等と呼ばれて初めて歐洲人に知られたのは此の頃である。

然し乍ら、ポルトガル人は、未だ未開なる當時の臺灣の價値を認め得ず、其の儘に放置してゐた。白人が臺灣に踏込んだのは其の後二百年の十七世紀に於ける和蘭の進入を以て嚆矢とする。十六世紀末、日本の秀吉が原田孫七郎の獻策に依り臺灣征服を企てたが、無主と彼の逝去に遭ひ空しく水泡に歸した事は既に述べた如くであり、支那も亦本國の尨大と多事の爲に政治的進出を試みる事無く中世馬來族の占むる臺灣は、可惜瘴癘暗黑の島として葬り去られ、日支海賊のこよなき巢窟と化してゐたものである。

尙臺灣古代文化に關して曩の臺灣總督府史料編纂官尾崎秀眞氏其の他は、臺灣東岸は五千年以前よ

り東洋文化の發祥たる巨石貝石文化があり、支那揚子江及び日本神代文明の祖を作したるものなりと唱へられてゐるが未だ定說となつてゐない。

第二十一章　新興和蘭及び英國の南洋進出

十六世紀に初まるスペイン及びポルトガルの南洋進入は、既に說けるが如く其の武力と奸計に依つて能く馬來の一角マラッカ附近及比律賓、モルッカス諸地方の土地及び商權を獲得し歐亞貿易を壟斷して、中世歐洲の二大國としての位置を築いたのであるが、之と共に其の慘虐と不信は時の經過に連れて可憐なる南洋諸族の反感怨恨を深めて行つた事を忘れる事は出來ない。

斯くて十六世紀末に於ける無力な彼等南洋諸國人の心は、到底對抗し得ない諦めの中に、新たなる强力者の出現及び其れに依る自救を求めるに至つてゐた。

而して比較的高き文化を有する同種日本人及び支那人の力は、其れを滿足せしむる可く餘りに無力であり消極的であつた。

當時南洋との關係深い歐洲に在つては、其の複雜不斷なる國際關係及び國際壓裡に、一五八〇年遂にフィリップ二世下のスペインは、隣れるポルトガルを仆し之を合併して、スペインは歐洲及び南洋に於けるポルトガル勢力を驅逐するに至つた。然るに同年北方スペイン領ネーデルランド Nederland の富强なる七州はユトレヒト同盟を結成して英國の後援の下に叛旗を飜し、遂にスペイン軍を破つて獨立を敢行し和蘭共和國を創立したのであつた。

斯くて流石の大國スペインも新興和蘭の活躍によつて漸く衰運を辿るに至り、加之永く大西洋、歐洲近海を制してゐた有名な所謂スペインの誇り無敵艦隊 Inbissible Armada も一五九八年英國艦隊に滅撃せらるるに及んで、海國としてのスペインの基礎全く崩壞して英國之に代り、十七世紀以後世界に擴がるスペイン覇權は沒落の一途を辿つたのであつた。

中世に於ける二大ラテン勢力スペイン及びポルトガルに代行する新興和蘭及び英國活躍の時代は其處に開かれて、今日に至る三百餘年、以て南洋併呑の緒に着いたのである。

然し乍ら英國の利多き南洋進出の希望は遠くヂェームス五世の十六世紀前期に在り、屢々新世界遠征調査の艦隊を送つてゐたのではあるが、先進スペイン、ポルトガルの二大勢力に驅逐壓迫されて果し得なかつたものである。

然して其の動機は一五二七年、永くスペインに在住調査して其の新世界植民地事情に詳しい英人ゾーン Thorne は、歐亞貿易の有利及び其の方法を說いた書を時の英王ヂェームス五世に建白した時に在つた。

其の後漸く機運熟した一五七七年、女王エリザベスは勇猛無比なる海將ドレーク Francis Drake を主班とする强大なる亞細亞遠征艦隊を組織し、以て其の地理資源調査をなさしめ、來る可き植民地及び資源掠奪の確たる基礎を作らしめたのである。西航して南米南端を迂廻して南洋を經歸還した此の艦隊は、英國に於ける最初の世界一周實行者として眞に意義深きものを持つた。又女丈夫エリザベスの後援下にドレークに指揮された此の强力なる大艦隊は、當時全く良心の必要無かつた別天地南洋

各地に於て、小規模且私的なる日本倭寇艦隊等、遠く足下にも及ばぬ大强行を以て、或は先進スペイン艦隊を襲撃し、或は諸國商船乃至沿岸をバッカニアリングして、大いに英國の爲に氣を吐き、來る可き英國の海上制覇上に必要なる武力及知識の先鞭を着けた貴重なる存在となつた。次いで一五八六年には大航海家カヴェンディッシュ Thomas Cavendish をして南北兩米大陸及び南太平洋諸島を探險せしめて後年の進出に備えしめ、更に一五九一年のランカスター Lancaster に至つてモルッカス地方最後の資源經濟調査を行ひ、更に一五九三年にはスチブンス Stevens の印度紹介書出版せられて、十六世紀末に於ける英國は全く南洋に對する地理的政治經濟的又戰略的萬般の知識能力と準備工作を終へたかに見えたのであつた。

小島王國イギリスの海軍力商船數の擴大增加に依る世界海上制覇、海外發展政策は斯くて生れ出で、强敵和蘭に對抗し舊勢力スペイン、ポルトガルを驅逐するに些かの苦痛を感じぬ確固たるものとなつた。斯くて一六〇〇年には南洋、主として和蘭勢力の微弱なる印度に、英國東印度會社 British East India Company を設立して印度經略、亞細亞直接貿易の基礎を作つたのである。

同會社の資本は僅か三萬磅であつたが政府より特許を與えられた倫敦の大貿易商達の聯合機關で、其の發展上必要なる政府の陸海軍を有し、戰爭、外交等の權能を與えられた特殊國策會社であり、一六〇〇年印度東南岸なるマドラス Madras（當時英人は Port William と稱す）に置かれた。

然して其の兵力が如何に强大なものであつたかに關して、マッケンジーの著十九世紀世界史は、

"The Company was one of the governing powers of the world, keeping great armies on foot,

fighting great battles, controlling vast revenuer"
と述べてゐる。

創立當初は主として經濟的なものであつたが、其の後歐洲諸國に於ける資本主義の勃興に伴ひ、印度に對する其れが强行機關となり、近世中期卽ち印度に於ける統治者蒙古帝國衰弱の後は、其れに對立する政治的なるものとして盛んに領土獲得に活躍し、十九世紀に入つては全く英帝國主義の最も有能强大なる植民地統治機關たる印度總督府と化したものである。

他方一五八〇年獨立して新興の氣に燃えた一小和蘭の南洋に對する進出は殊に目覺ましく、旣に一五九五年ハウトマン Cornelis Hautnann の率ひた南洋遠征商船隊（總て Half Pirates, Half Mercants 半賊半商である事は曩に述べた）は爪哇のバンタム Bantam を中心とする諸島港に確たる商權及び占據地を獲得して、英、スペイン等の旣得權を驅逐し又進入の餘地を無からしめ、諸多の勢力範圍及び利益を獨占してゐた。

又一五九八年モルッカス諸島の占領に遠征してゐたファンヌールト Oliver van Noordt の和蘭艦隊は、比律賓を根據としてゐる先來スペイン艦隊がポルトガルと聯合して成せる大艦隊を同地に擊滅して、南海に於ける覇權確立の基礎を作つた。

斯くて和蘭も一六〇二年にはモリス王 Prinz Moriz 主班となつて、モルッカス諸島南方なるアンボイナ Anboina＝Anbon に六六〇萬盾の資本を以て國策遂行機關としての和蘭東印度會社 Nederl-

anscheOostindische Compagnie = V.O.C. を設置して、南海に於ける其の資本主義的發展の策源地としたのであつた。（一説にはバンタムに設立さるとなすものもあり）

然して此の會社組織こそは、近世株式會社なるものの搖籃となつたものである事を注意すべきである。斯くて十七世紀以後に於ける歐洲列强が初期資本主義時代の特徴として、海外植民地の獲得に狂奔し初めた時、肥沃なるアメリカ世界と共に、天産豐かなる南洋世界は彼等に執つてこよなき好個の大發展地、大植民地であつた。

恰も其れは飼養されて活動力無い榮養滿ち足る巨大なる家畜が、突如餓えたる野性の狼群に襲撃されたる如くに、力無い其の反抗も、悲痛なる其の訴へも、無能なる同族の間に、又其の闖入者の間に、何等の應援反響を喚起する事無く、徒らに其の餓えたる强力者の滿腹と成長に資する榮養となるものであつた。

僅かにも賴らんとする日本人の群も、一六三六年卽ち寛永十三年に於ける其の鎖國と共に全く其の姿を沒してゐたのである。

其の持つ精神及び戰鬪と策略に、充分に其の智能を應用した歐洲列强、特に蘭、英二國の辣腕は、或は武力により或は計略により、猛烈なる勢を以て其の廣大なる天地を恰も無人の野を行くが如くに容易に征服搾取して、其の慾望を滿足せしめ、以て其の後に於ける白人支配下の世界を出現するに至つたものである。

其れは十三世紀末に於ける成吉斯大汗及び其の蒙古帝國の爲せる歐洲征服統治事業の如き短期間且

淡白なるものでは無く、强國隣立して不斷なる國際場裡に常に緊張せる蘭英が、其の存立確保上に於て、無智醜惡なる人種的蔑視を伴ふ無力諸島國民族に對して永久的領有を目的として決行したる極めて强力なる政策の連續であつた。

曾て世界人口の五分の四を占めた有色人種衰退の直接的動機は卽ち茲にも初まつたのである。

第二十二章　中世南洋史の世界史的意義

十一世紀より十六世紀に至る中世史に於て、其の前半は亞細亞諸國家の確たる獨立及び蒙古卽ち元帝國の歐洲半島及び南洋諸國征服等に依つて、一時南洋と共に全世界は殆んど亞細亞人、特に蒙古人勢力下に握られてあり、又十四世紀前後の南海諸島は夫の華やかなりし滿者伯夷帝國治下に百餘年を過して比較的統一ある平和な時代を現出してゐた。

卽ち十三世紀末に於ける第一回の黃白二大人種の接觸は、黃人制覇の下に、今二十世紀とは全く相反對なる人種的觀念の行はれてゐた期間で、之を要するに中世前半は亞細亞文明が南洋を含む世界を支配してゐた亞細亞人全盛時代と見る事が出來る。

卽ち南洋を含む亞細亞は、亞細亞人の亞細亞としての發展的な經路を順調に進んでゐた時代であり、當時の主なる南洋諸國たる印度のキルヂ朝、印度支那の安南朝、爪哇の滿者伯夷帝國等は、多分に元の影響を受けつつ其の國步を進めてゐたものである。

然して次げる十四世紀の中葉より十六世紀末に至る中世後半の二百餘年は、大元帝國の滅亡を中心

として、亞細亞は其の一時的統制を失つて舊態に復歸し、加ふるに其の永い生活的に惠まれたる環境は彼等特に南洋人の生產的能力を全く阻止して、其の文化を停滯せしめ生存能力を無力化して行つた。「但し日本は此の意味に於て亞細亞的範疇に入らないものを持つ」

反之、歐洲諸國は狹小なる面積と豐かならざる資源の中に對立して、國內的にも絕えず現實的生存機能を啓發せられ、遂に其の自然科學的思想の勃興となり、之は中世以來の無能なる宗敎絕對的觀念を打開して强力なる生物人間中心的な社會思想を釀成するに至つた。

所謂ルネサンスの要因である。亞細亞人に對する歐洲人の戰鬪的又文化的ヘゲモニーは實に此の時代に完成されたものと言ひ得る。

從つて東歐なる羅馬を除いて、一般に野蠻であつた西部歐洲諸民族が古代以來印度、支那等亞細亞諸國から輸入した文物は、此の時代に入つて充分に改善進步せられて歐洲的强力なるものと化してゐたのである。

マルコ・ポーロ、イブン・バッタ等亞細亞旅行家の東方資源紹介の書が、餓へたる歐洲人の亞細亞熱を盛んに煽つたのは十四世紀より十五世紀にかけての頃であり、强力戰鬪的なる彼等が大擧してジパングなる日本を求めて偶々アメリカ、南洋諸島を發見し、次で世界史上第二回の人種的大接觸を齎らすに至つたのは其の翌十六世紀である。

所謂西力の東漸である。同時に其れは南洋民族初め世界有色諸民族沒落の第一步であつたのだ。

ウェルズは、曾ては華やかであつた此の亞細亞人種衰退の原因を「天才に對する國家的無援助と國語の難解及び科學の不蒴」に置いてゐるが、其れは枝葉末節の事項であつて、最も重大なる厚因は彼等を環る廣大肥沃なる大自然の恩惠が、彼等の生活能力を啓發する機會を與えなかつたてふ自然的環境に在つて存する。

從つて亞細亞人の生んだ文明は主として非闘爭的唯心的な、宗教的形而上學的なものであつて、然らざる歐洲人との接觸抗爭に於ては全く無力なものであつた。

如斯は、亞細亞に於ても溫暖にして最も天産豐かなる地方に生きた南洋人に對して更に適切に言ひ得る事柄である。働かずして喰ひ得、暑熱にして怠墮とならしめらるる南洋人の環境に於ては、生産的科學研究の必要も起らず、天才に對する國家的援助も、彼等に求められてゐた觀念的宗教的學者に對してのみ行はれ、國語の不完全及び、難解も亦悠長怠墮なる彼等にとつて、些かの痛痒を感じるものではなかつたのである。

斯くて中世南洋史は、其の前半に於ける北方支那との密接なる交涉より、後半に入つて日本人及び歐洲人との深き關聯の下に考へらるるに至つたが、日本太閤秀吉の南洋諸國に對する覇業は單に威嚇に止まり、又日本人の南洋發展も一時的永久性無きものとして頓て其の視界より去り逝き、南洋に於ける古來よりの亞細亞的色彩漸く薄れ、獨り歐洲人のみ强力なる政治經濟的侵入を敢行して行つたのである。斯くて其の後に於ける南洋史との間に不可分の交涉連絡を、其の沒落過程の中に結ぶに至つ

たものである。

實に中世南洋史は、華やかなる前半に反して、其の末期の百年は歐洲勢力に依る近世以後の南洋侵略、延て歴史以來世界をリードし來つた南洋及び亞細亞諸國の偉業の衰退を招來せしめた凋落期を示すものであり、頓て歐洲人の全南洋制覇及び之に基く世界支配能力を齎らし、其れ迄、千五百年世界史の動向に、曾て見得なかつた一大轉期を作したものである。

斯くて世界史上に於ける中世末期の南洋史の貢獻、意義甚だ深重なるものありと言ふ可きであらう。

第四編　近世史

第一部　印度

第一章　蒙古政權と英國勢力の侵入

五世紀に亙る永いアフガン王朝の後を承けて、一五二六年バベルが蒙古朝廷創始以來、歷代明君相繼いで印度の國勢漸く興隆し、特に一五四二年アクバル大帝卽位してよりの善政は、益々印度國民の生活と國步を向上發展せしめ、其の光に浴せぬは僅かに南方未開のヴィヂャヤナガラ、バーマニの二小藩國に過ぎず、加之其の西南岸臥亞地方には、南洋に於ける最初の白人たるポルトガル人の侵略の手が密かに伸ばされ、降つて一六〇〇年には再び東南岸の要津マドラスに、中世の大國スペインを破つた新興英國の南洋發展本部としての東印度會社が設立されるに至つた事は既にわれわれの知る所である。十六世紀印度は、蒙古政權の及ばぬ南方沿岸に侵略を目的とする强力なる白人國家の進入を受けつつ十七世紀に入つたが、間もなく一六〇五年アクバル大帝忽焉として逝き、同年ヂェハンギル Jahangir 之を繼ぐに至つた。

當時印度貿易の獨占を劃策してゐた英國東印度會社は、一六一〇年所屬海軍士官ホーキンズ Captain Hawkins をヂェハンギルに謁見せしめ、西岸臥亞に近いスラート Surat に商館（ファクトライ）築造の內諾を

得、以て印度西岸に振ふポルトガル勢力の驅逐と、全印度に對する英國商權の完璧を期した。歐洲情勢を露知らず、從つて彼等の眞意を得悟らぬヂェハンギル以下印度諸藩王の無智と無能は、彼等の要求に對して甚だ寛大であつたと共に、彼等の老猾なる會商に瞞着せられて寧ろ大いに彼等の企業計畫に對する後援を與えたのであつた。

如斯人種的國家的偏見の無い同仁愛他的な態度は、其れが將來に於て、より偉大なる意義乃至價値を齎らし得る場合に於てのみ沒我的宗敎的褒む可きものであるかも知れないが、乍遺憾自發的には絶對に自己の滅亡を求めない生物人間の本能、特に國家的な其れとして、此は全く客觀的狀勢に對する自己の認識不足に基き行はれた不自然な犧牲であつて、徒らに自己の存立を危くする一顧のの價値無い哀れむ可き策であり、生命に忠實なる歐洲人諸國家に於ては決して執らぬ所謂東洋的謙讓の美德であつた。

卽ち國家的生命の發展に拔かり無い英國の賢明にして强力なる積極政策は、衰へたポルトガル臥亞總督府の勢力を驅逐し、印度沿岸諸藩王を威嚇してマドラス、スラート等の根據地を擴大し、更に一六一二年、同會社は資本金四百萬磅の大株式組織となり、陸海軍駐屯軍は激增され、其の經濟的侵出は强大なる武力を背景として圓滑に行はれて行つた。

卽ち一六三九年には東北なる蒙古帝國領ガンヂス下流の大市街にして、文化最も進めるベンガルの首都カルカッタ Calcutta 當時英人の呼んだ所謂セント・ヂョーヂ港 Port St. George を蒙古帝シャーヂャハン Shahiahan より獲て大商館兵營を築城し、以て北部印度に步武を進めた。次いで十七世

紀末蒙古帝アウラングゼブ Aurangzeb の頃にはポルトガルの既存權益及び蘭、佛等の新來勢力の大半を印度半島より驅逐して全印度に亙る貿易の巨利を壟斷するに至つた。

さらでだに强力なる英國東印度會社の印度侵入に更に拍車を掛けたものは、實に一六五八年即位した前記アウラングゼブ帝の失政であつた。彼は印度中興の明主たるアクバル大帝の廢した信仰の劃一、非回教徒稅 Jizya ヒンヅー教徒官吏不採用等の宗教的、種族的差別令を再び實施して印度國民の統一を破り、更にヒンヅー教徒に對する諸種の壓迫は全印度民衆の三分の二を占むるヒンヅー教大衆の怒を買ひ、印度各地にアウラングゼブ帝に對する反感、延て蒙古政權に對する反動諸藩の蹶起を招來するに至つたのである。

南方ヴィヂャヤナガラ王國を中心とする蒙古帝國領ヒンヅー諸藩の聯合、西方シバヂ Sivaji なる豪族を盟主とするベラール Belar バーマニ以下六藩の反回教マーラタ Mahrata 聯邦等の結成即ち是である。英國は既に事前に之を豫知して、其の運動及び能力を煽動助長するの內部的分裂策を執つて、印度の主權たる蒙古朝廷の弱化に資したのであり、陰に陽に共れ等反蒙諸藩に對する智的武的應援に盡す所大であつた。實に印度會社は此の機會を釀成把捉する事に依つて空前の侵略效果を得、來るべき政治的權力樹立への基礎を固めたのである。

如斯印度全般に亙る不穩なる政情に暗いアウラングゼブは、ヒンヅー諸藩の反抗を單なる不滿と見、且巧みに接涉外交する英國の表面的態度に心安んじ、深く顧る事無かつた。

斯くて英國を背景とする反蒙諸藩の活躍は益々激化して、遂に蒙古朝廷に對して戰端を開くに至り、

アウラングゼブは大いに驚き征討の軍を派したが利なく、遂に彼は親しく全軍を率ひて南征するの熄むなきに至つた。

然し乍ら頑強なるヒンヅー軍は容易に屈せず、彼は其の後一七〇五年に至る約五十年の長い在位期間の大半を、其の鎭壓の爲に戰場に送らねばならない破目に陷つたのである。

從つて蒙古帝國の内治は忽かせとなり、外征の費用は嵩み、財政充塡の爲には頓て苛斂誅求が行はれるに至り、民心漸く離叛を思ふに至つた。

印度の政治斯く紛糾して統制亂れたる虛に乘じ英國は大いに其の驥足を伸ばし、曩に獲たカルカッタを根據として徐々に豐かな附近ベンガル諸地方を蠶食し、一六八六年には殆んどカルカッタを中心とするベンガルの要地を獲得した。次いで翌一六八七年には遠く西岸の大都ボムベイ Bombay に屯營商館を構築して印度貿易上の二大要津を其の掌中に握り、遂に印度沿岸に拔く能はざるの牢固たる勢力を扶殖したのである。

斯くて十八世紀初頭、アウラングゼブ崩御の頃には印度に於ける蒙古政權漸く衰運に向ひ、加ふるに一七三九年西北なるイラン國王ナジルシャー Nadir Shah 入寇してアフガニスタンなるカブール、カンダハル Kandahar 等の要地を奪つて内憂外患絶ゆる間無く、一七五四年アラムギル二世 Alamgir II 帝位に卽いた頃の蒙古帝國領は、イラン、英國の侵入及びヒンヅー諸藩國の獨立等に依つて其の權能は北方印度に縮小せらるるに至つた。

而して同帝の一七五七年、蒙古領ベンガル藩の王スラヂャ・ドーラ Suraja Dowler の印度軍は、豫

て待期してゐたカルカッタのベンガル侵略の英國軍とガンヂス左岸のプラッシー Plassy 原頭に一大衝突を演ずるに至つた。

時の英軍司令官こそ、英領印度創設の恩人として、又亞細亞に於ける英國覇權樹立の偉人として、英人の尊敬の的となれる東印度會社の青年書記クライブ Robert Clive であり、勇猛なる彼は其の强大なる英軍を率ひて貧弱なる武器を擁するドーラの大軍をプラッシーの野に痕跡無き迄に紛碎して大勝利を博し、遂に古來印度に於て最も肥沃にして文化開けたるベンガル地方の占領を完成したのであつた。然して其の後十年の間に隣接するアッサム Assam ビハール Bihar 地方を併せ、彼は功により其の知事に任命されたのである。卽ち斯くて印度東北の要地、日本九州の二倍大の資源地方は一七六六年を以て完全に英國東印度會社の統治權内に把握され、蒙古帝國の政治的能力は大いに其の範圍を削減されて、來る可き衰亡の悲運は其の中に豫想されたのである。

實に一七五七年プラッシーに於ける英軍の印度軍擊滅こそは、世界の寶庫たる廣大肥沃なる蒙古領印度を、其の後英國が占領して、十九世紀以來世界第一の大帝國たるの政治經濟的能力を獲得するに至つた遠因であり、アングロ・サクソン延て全白人種世界制覇への間接的素因となつたものである。

まことに共れは南洋史上最古最大の印度民族衰亡を齎らした大事件であり、延て亞細亞諸國蝕食衰弱の一大弔鐘であつた。然ればこそ英國政府が本國を逃れ印度に渡り東印度會社の一書記となつて、功勞を建てた武略ある風雲兒クライヴ青年をして、知事と昇し、侯爵 Lord と陞した所以である。

東印度會社が本國の資本主義的發展に資す可き其の經濟的發展の完璧を期する爲に、印度に對して必然的な政治的色彩を具體化するに至つたのも亦實に此の機に在る。

其の後五年、一七六二年、豫て内偵して其の豐かなると、守備力弱きとを知つた英國は、印度會社所屬の大艦隊を北上せしめてスパニッシュ比律賓の首都マニラを衝いて之を占領し、約二年の間比律賓政權を握つたのであるが、歐洲諸國間の外交接渉に依つて一七六四年、英國は巨額の賠償を收めて、再び之をスペインに還付した。詳細はII比律賓史上に於て述べる。

斯くて十八世紀後期に於ける印度は、蒙古政權及び之に對立する英國竝にマーラタ以下反回敎的ヒンヅー諸國の三勢力鼎立錯綜するの不安なる時代となつたのであるが、無智なるが故に其の客觀的狀勢推移を悟り得ぬ蒙古帝國印度諸民族は、只之宗敎盲信と確執の内部的相剋の爲に、可惜其の勢力を消耗して、徒らに英國の侵略の前に孱弱い憔悴の姿を横たへてゐたのである。

尙英國政府は一六一三年、東印度會社を先進和蘭の其れに倣つて株式組織に改組した事を知る可きである。

當時より利に敏い和蘭人は、歐羅巴諸國に於ても最も優れたる商人として、一般に商業國民 A Nation of Traders と呼ばれてゐたものである。

第二章　英領印度と新嘉坡の意義

其の巨利と廣大本國に等しき新植民地、延て歐羅巴半島の面積に近い全印度半島經略豫定を確實な

らしめんが爲、一七七三年英國政府は再び東印度會社の大改組を行つて其の機能の擴大强化を圖つた。卽ち從來カルカッタの會社本部に駐在してゐた社長に代るに、本國政府の任命した總督を以てし、總督は印度經營、南洋政策に關する外交、行政、宣戰等の大權を更に高度に委任され、會社の利益の大半は之を本國國庫に收納する事となり、以て歐洲の激烈なる國際場裡に於ける英國の優位性確保と其の資本主義的發展に資する事となつた。

然して其の第一代總督に任命されたのが敏腕を以て鳴る若き(時に三十二歲)ヘスチングス Warren Hastings であり、宗教の外に人生ありとも覺えぬ無智無力なる印度諸藩國は、彼の銳鋒の前に着々征服せられ、其の十一箇年の在任時代にベナレス、サタラ等の諸地方を占領して其の利益範圍を擴張して行つた。

次で有名なのは一七九八年に就任したウェルズリー Lord Wellesley であり、彼は其の敏腕を以て英國資本主義發展の對象として印度を開拓し、又クライヴ以來の强敵たる佛軍を、南方マイソール、Mysore カルナチック Carnatic 等の諸藩王と聯合して擊退した。又、十八世紀中葉、佛王ルイ五世 Louis V 以後の印度經略事業に致命的大打擊を與へて再び起つ能はざらしめ、更に蒙古朝廷に叛し其の衰運に乘じて勃興した西方なるマーラタ以下のヒンヅー諸藩及び錫崙島 Ceylon を征服し、十九世紀初頭には遂に蒙古帝國領の要地たるデリー地方を攻略し、殆んど印度政權の大半を獲得して不動の位置を築いたのである。

漸く激化し來つた當時の歐洲列國の國際的壓迫に對して、又其の猛烈なる植民地獲得競爭場裡に在

つて、賢名なる小島帝國英國の積極政策は、無能なる印度に對して如斯無人の野を行くが如き大侵略を進行し得たると共に、他方和蘭、佛蘭西等の活躍せる馬來諸島をも沒却する事無かつた。卽ち一八一九年其の海軍はマラッカ海峽に進出して、和蘭の占領してゐたシンガプーラ島 Singhapura = City of Lion 現新嘉坡島 Singapore をヂョホール王より買收して、南海發展の根據地、又帝國防禦の基點 Keystone of the Imperial Defence として經營した。更に印度支那に於ける佛蘭西の活躍を牽制す可く北上して暹羅領馬來半島に入りペナン Penang 彼南を占領したのであつた。

斯くて一八二四年總督アムハースト Lord Amherst の時代には、其の必要に依つて敢て緬甸王國と事を構へ、其の王バギド Bagidoh の軍を破つて南岸なるアラカン Arakan 地方を奪取し、又暹羅領馬來半島のベンガル灣東岸なるテナセリム Tenasserim 地方を占領して、西部より徐々に印度支那に對する步武を進め、以て東方よりの佛勢力との均衡を保つ事に努力した。

印度より延て後印度 Further India 馬來半島と南洋の要地に大植民地を擴大じ來つた東印度會社の國家的事業は、遂に一八三三年總督ベンティンク Lord William Bentink の時代に入つて、實質上全く印度を英國政府の直轄するものとなし、以て其の帝國主義的慾望を滿足せしむる事となつた。

斯くて北部なる蒙古政權は十八世紀中葉以來、其の井蛙の如き獨尊の位置を夢幻に打破られて施術と力を知らず、一途に衰亡の悲運を辿り、十九世紀に入つては往時の領有地域殆んど其の羈絆を脫し、十六世紀赫々たりしバベルの偉業も、其の後二世紀半の世界の進步に取殘されて全く崩壞せんずる情勢に至つた。

而して一八五八年に至るや、時の印度總督カンニング Lord George Canning は本國政府の命に依り、無力乍らも英國印度統治上の障害となれるデリーの蒙古帝バハヅル・シャー Bahadur Shah を廢し、其の領土と諸權益を沒收して全印度の統一を圖るに至つた。

卽ち一五二六年以來三百三十三年に亘つた蒙古人の印度政權は茲に形式上に於ても全く亡び、印度民衆は史上空前の經驗たる白人帝國の一植民地人と化し去つたのである。

十三世紀より十四世紀にかけての亞細亞人全盛時代、歐洲諸國の大半を其の統治下に率ひた大蒙古帝國の遺裔としての蒙古領印度は斯くて史上より消え、曾て華かなりし蒙古人世界雄飛の最後を飾るものとなつた。

英國女王エリザベス Queen Elizabeth が、勅令を以て東印度會社を廢して印度の領有を宣言し、英國內閣に新設された印度事務省の管下に入れ、親任總督をして之を統治せしめるに至つたのは實に此の一八五八年である。

眞に十六世紀に於ける倫敦商人の培へる貧しき一商事會社の企業地域は、十九世紀に於いて偉大なる英國領土となつたのである。いみぢくもマツケンヂー Robert Mackenzie は其の著十九世紀世界史上に述べて曰ふ——

"………… the prosaic enterprice of a few London merchants was now a great empire……… magnificent beyond the wildest dream of romance. Upon no people before had there devolved a heritage so glorious, responsibilities so vast"

世界の寶庫たる古き歴史に輝き、凡ゆる意味に於て南洋史上最も重要なる位置にある南亞細亞の大半島印度は、斯くて全く亞細亞人、南洋民族の手から離れて英國人の大植民地として利用される事になつたのである。

其の後十年の一八六七年、時の總督ローレンス Lord Henry Lawrence は、尨大本國に十倍する人口と面積を擁する印度の位置が、英國の世界政策遂行上に於ける無二の重大なる意義を有するものであり、之が經營には一意專心すべき重要性を認め、南海諸島及び印度支那等に對する英國の活動は、別に新嘉坡の要津に總督府を設けて之に當らしむるの必要を本國政府に獻言して認容實施さるるに至つた。新嘉坡を根據地とする海峽植民地總督府の獨立卽ち此の年に在る。

南亞細亞諸國、南洋諸島に對する英國の政治經濟的活動は、此の年以來專ら新設新嘉坡總督府に於て愼重企劃せらるゝに至り、益々其の進出の度を向上强化して行くのであつた。

斯くて歐南、歐亞交通十字街の要衝として、國際貿易港として、將又東洋艦隊根據地としての新嘉坡の英國的意義は、北方なる英領香港 Hongkong と共に益々南洋及東洋諸島國民族に對して重大なる威力を持つに至つたのである。尙日本の寛大なる植民政策と異り知る可きは、十九世紀中葉以後英國が此の一新嘉坡島の財政に對してすら、毎年五十萬圓より百餘萬圓の國防費を負擔せしめて英帝國の存立完璧を期してゐた事である。

"…………For Imperial purposes, Singapore maintained by the Government. Up to 1890,

the colony had paid a yearly contribution of & 50,541 towards its defence, but in that year the Secretary of State colonies suddenly demanded that the contribution be raised at once to & 100,600 Per annum..........." From" Norman: Far East" 1895.

第三章　所謂英領印度帝國と香港の獲得

一八四八年印度總督に就任したダルハウヂー Lord Dalhousie が、ウェルズリー、ヘスチングス等歴代總督の武斷政策に依つても未だ殘されてた西北なるパンヂャブ地方の反英印度軍を殲滅し、印度に於ける英國の統治權を確立して以來、既に印度は一七五八年に於て英帝國直轄となり、降て一八七六年には大英帝國の一部として印度帝國 Indian Empire と改稱せられ、女丈夫として有名な時の英國女王ヴィクトリア Queen Victoria 印度皇帝を兼ねるに至つた。

既に豐穰なる大印度其の他を掌中に握つて得た英國の經濟的餘裕と海軍及び商船の强大なる能力は「領有」の美酒を求めて世界各地に不斷なる活動を行ひ、寸尺の地と雖も利するに吝かで無かつた。

即ち一八二三年アムハーストは既に述べたる第一回英緬戰役に依つて印度の東北に連る南岸アラカン地方を獲たのであるが、更に之を擴大して全緬甸王國を占領す可き國策の豫定は、一八五二年總督ダルハウジーに至つて英國東洋艦隊の新嘉坡集結となり、同年末に於ける緬甸の首都ラングーン Rangoon 蘭貢の攻擊、次で主都マンダレーの攻略となつた。

時の緬甸王テバウ Thebaw は斯くて、城下の盟に英帝國の保護國とならしめられ、緬甸に於ける生

產利益は專ら英國の爲に行はれるものとなつた。而して形式上に於て緬甸が全く印度帝國の一部に編入されたのは、一八八六年デュフェリン Lord Dufferin の時代であり、彼は全緬甸を八縣に分つてマンダレーに民政廳を設置し之が行政に當らしめた。斯くて中世末期隣邦暹羅との抗爭に、曾ては華やかな歷史を持つた緬甸王國も、五百年にして南洋史上より其の獨立の相を消したのである。然して彼は翌一八八七年、印度西北隣なるバルチスタン Baluchistann 王國を征服して印度帝國に合併統治するに至つた。

斯くて英國の金庫たり倉庫たる南亞細亞の印度半島を中心として四方に隣接する緬甸、バルチ.スタン二王國の全部及び暹羅、ネパール、ブータン等の大部卽ち廣大百八十萬方哩、人口無慮三億を擁する南亞細亞の寶庫は一括せられて十九世紀末英領印度總督府の確たる統治下に入つたのだ。英國をして十九、二十兩世紀に亘り南亞諸國の過半を領有して、世界制覇の大業を完成せしむ可き政治經濟的能力を供給したるもの、實に此の大印度の富と地理であつたのである。

眞に其れは（其の價値は）英國人が「印度を失ふともシェクスピアを失ふ勿れ」と言ふが如く、世界に輝く英國の國寶的文學者シェークスピアと竝び稱せらるゝ偉大なるものであつた。斯くて英國が印度を有する限り南洋は言はずもがな亞細亞に於ける英國の、延ては歐米諸國の覇權乃至ヘゲモニーは永久に南洋史、東洋史の動向を支配して、人類は英米中心の世界史を營み行くものであらう。

斯くて近世史上に於ける英國の賢明と努力は、印度の經營に最善を盡す傍ら、智的に戰闘的に脆弱な支那、ボルネオ、印度支那諸國及び濠洲大陸等に對して、驚く可き發展事業を着々と成功さして行

つたのである。

卽ち豫てより印度に產する大量の阿片を支那（當時淸）に輸出して多大の利を博してゐた英國は、一八三八年卽ち宣宗の道光十八年、支那政府が國民保健上有害なる阿片の國內普及を禁じ、廣湖總督林則徐に對して之が搬入を停止せしむるや、英國は之に肯ぜず、遂に翌一八三九年印度總督エルレンボロー Lord Ellenborough は全東洋艦隊四十餘隻を以て廣東、舟山列島及び其の附近を攻擊破壞して支那軍を降し、我意の貫徹を圖つた。所謂阿片戰役此れである。

斯くて無力なる支那政府は、一八四二年道光二二年、南京條約の城下の盟を以て自由通商、阿片損害賠償、福州以下五港の開場及び香港島の割讓等凡そ不利なる要求を受け容れねばならなかつた。われわれは東洋史上に於て、此の英國の執れる行爲に關して、何等敎えらるゝ所無かつたのであるが亞細亞人に對する蔑視及び亞細亞人の無能無き限り、如斯脅迫的國際的非人道が公然と行はる可き筈のものでは無かつたのである。

人類の國際的鬪爭に於ける理論の正邪を決定するものが、其の利害關係乃至程度を中心として、對立者間に在る智的武的能力の差異である場合に於てのみ、該事件に關する英國的解釋の正當性は認められるのであつた。

人間行爲及び其の累積たる歷史に對する社會生物學的解釋の必要は其處に見出され、加之互に生を絕對的に希求してやまぬ動的生物人間の本能的進路に於て、如斯對立する二勢力の抗爭試練が其の必要に基いて齎來せざるを得ぬ人智の進步、生存能力の强化てふ全人類的發展に資する大局に於て人類

史上に於ける如斯强食弱肉の生存競爭、卽ち、戰爭の意義價値及び其の辨償法的解釋の必要は其處に判然認められねばならないであらう。

斯くて英國は新に獲た香港を東洋政策の策源地として總督を置き軍隊を駐屯せしめ、名も時の女王の名に因んでヴィクトリアの大市街を建設し、巨費を投じて之が世界的貿易港としての經營に當つて東亞制覇の第一線に突入したのである。

斯くて二十世紀に入らんとする頃の英國は、日本、支那等の春眠未だ醒めぬ間に北に香港、南に新嘉坡の二大根據地を東方及び南方亞細亞に營んで、其の東洋及び南洋政策に遺憾無き活動を開始し得たのである。

第四章　英國の印度支那、ボルネオ、濠洲大陸に對する經略と佛蘭西

十八世紀末、印度總督ヴェルズリーが馬來諸島に進出し、其の後一八一九年に至つて新嘉坡を獲得して以來、英國政府の南海、特に印度支那に對する活動は目醒しく、一八六七年には新嘉坡に總督府を設置して南海經綸の根據地とするに至つた事は既に述べたる如くである。卽ち其の第一歩として隣接暹羅馬來半島の調査に着手し、一八七〇年以來一八八八年に至る間に北方なるペラ Perak スランゴール Serangor ネグリスムビラン Negri Sembilan パハン Pahang 等の暹羅諸州を謀略したが、一八九五年を以て其れ等の諸州を聯邦組織として新嘉坡なる海峽植民地總督府管下に編入するに至つた。

次いで南進して一九〇九年にはケランタン Kelantan トレンガヌ Trengganu ヂョホール Johore ケダ Kedah 等の暹羅保護の諸藩を保護領化した。斯くて西は緬甸を通じて印度より、南は馬來半島より、然して東は佛蘭西の安南よりの挾撃に遭つた印度支那中央の暹羅王國は、其の領土を徐々に蠶食せられて國勢日に衰運に傾き、加之英國は巧みに暹羅內政に參與して其の實權を握らんとするに至つたが、僅かに之を免れしめたのは東隣安南なる佛蘭西勢力の英國牽制であつた。

斯くて英國は南洋各地に着々と其の見事な業蹟を作つて行つたのであるが、ボルネオに對しては既に一六一四年より東印度會社に依つて、未だ和蘭勢力擧らぬポルネオ南岸の要港バンヂャルマシン Banjermasin に於て貿易を初め、一七〇七年には同地に商館を設置するに至つた。然し乍ら中世以來進入してゐた支那人大衆の商權には對抗するを得ず、遂にボルネオに對する活動を一時拋棄して了つた。

和蘭が其の南方の爪哇を獲得してよりボルネオ侵略に着手したのは其の後の事であり、十九世紀に入つた頃は既に其の南半を領してゐた。

印度を奪ひ印度支那に進んだ英國の南洋政策が、再びボルネオに向けられたのは十九世紀前葉であり、一八四〇年ブルーク James Brooke の率ひる彼の私有軍艦及び英國海軍に屬する特別別動艦隊は、和蘭勢力の及ばぬ北方ブルネイ Brunei 王國の占領に其の鋭鋒を向けた。先づブルークは其の一州たるサラワク Sarawak 藩ダヤク Dyak 族の叛亂を鎭壓して大いにブルネイ王の信賴と畏敬を得て遂に同地に留まるに至り、一八四七年にはサラワクの王＝ラヂャ Raja に任ぜらるゝに至つた。尙ブ

ルークは永く東印度會社に勤務してゐた社員であり、多額なる退職資金を以て軍艦其他を購入し、英國の後援の下に此のロマンチックな王樣夢物語を實現したものである。

斯くて北ボルネオの一地方に確固たる基礎を築いたブルーク家の勢力は英國の後援の下に日に増大し、一八八八年ブルークの王位を繼いだ外甥チヤンソン Charles Johnson に至つては遂にブルネイ王國の衰弱に乘じて其の主都クチンを攻略し、又北方海上なるラブアン島を占領して、一八九〇年には全く英國を背景とするブルークの統治下に入れて了つた。同時に北ボルネオにはヴィクトリア女王の特許ある北ボルネオ開發會社 British North Borneo Chartered Company を組織して、社長トレーチャー Treacher を任じ之が產業的活用に資したのであつた。

恰も之は十七世紀暹羅に於ける山田長政の偉業に相似たるものであり、若し彼に對して英國の如き積極的な後援を日本國家が與へてゐたとしたならば、既に成れる馬來半島中部地方のオンプラ山田王國は、ブルークのサラワク王國に比して更に偉大なる業蹟を尠くとも今日の印度支那地方に遺してゐたであらう。

從つて二十世紀前葉既に英蘭諸國に完全に占められたる南洋に對する、喧しき日本の南進政策の困難は未然に解消せられ、歐洲列强に對して何らトラブルを釀さずに濟んだであらうものを。況んや其れは同種にして古來地理的に歷史的に因緣深き南洋の土地であつたに於てや。

南方の大陸オーウストラリア Australia = Terra Australis = 南洲即ち濠洲は、十六世紀以來ポルト

白人濠洲大陸の巨大

（歐羅巴半島ノ一・五倍）



ガル人、和蘭人或は佛蘭西人等に依つて屢々探險せられてゐたが、英國人が之に乘出したのは、一六四二年時の爪哇總督ファンヂーメンの命を受けた和蘭人タスマン Abel Janszoon Tasman の發見後に端緒を開く。卽ち東南に在る今日のタスマニア島は卽ち彼の名譽の爲に名付けられたものであり、十七世紀頃より十八世紀前葉にかけては多くの和蘭東印度會社商船が出入してゐたが、和蘭は爪哇諸島の經營に追はれ勢力扶殖を試みる餘裕を持たなかつたものである。

英國が其の經營に着眼したのは一七七〇年に於ける英國海軍豫備將校クック Cap. J. Cook の率ひるエンディバー號 H. M. S. Endeavor 以下の探險調査隊に初まる。而して英國は未開蠻人のみの同島を占領して當時の國際常識たる白人の「利用無き」non user を以て英國領土としたのであつた。

斯くて英國政府は、當時の倫敦市の人口に滿たず而も全歐洲半島より大なる…………she bears a population little larger than that of London, scattered over an area greater than that of all Europe…………此の大陸の東南地方なる新發見地を新サウス・ウェールス New South Wales と命名し、本國罪囚の服役地となし、其の肥沃なる土地の開拓及び豐富なる鑛山の發掘に專心して經濟的價値の向上に力めた。其の後十九世紀中葉以後には日本、支那、印度等の亞細亞諸國人勞働者をも濠洲及び東方のニウ・ヂーランド New Zealand フィジー Fiji 木曜島等の開發に移住せしめたので、溫暖肥沃なる同大陸島嶼の產業は驚異的發達を遂げ、遂に十九世紀の後半に入つては曩に英國の羈絆を脫して獨立したアメリカに代つて優秀なる植民地と化し、本國よりの移民は日に日に激增して夥しい數となつた。卽ち十八世紀地上の南端に在つて顧みられなかつた未開の大陸濠洲、（歐洲全面積の一倍半）

は、十九世紀に入つて素晴しい利益ある英國の大植民地となつて、罪囚に代る一般英國人大衆の爲にこよなき蓬萊島に美化されるに至つたのである。當時日本人にして此の地方に出稼してゐたものは多數に上り、一八九三年に於てニウ・カレドニア島に八百、フィジー島に千五百、木曜島に千五百、濠洲大陸に三千であり、合計約五千餘の日本人が此の濠洲諸島 Australasia に發展してゐたのである。然し乍ら十九世紀末に於て殆んど其の開發を了えて外國勞働移民の必要無くなつた英國は、一八八八年及び一九〇三年に於て有色人種 Colored race 即ち日本、支那、印度、南洋等諸國人の濠洲移住を其の人口增加に依る勢力の勃興を恐れて嚴禁したが爲に、日本初め亞細亞諸國人勢力は全く濠洲諸島から驅逐せられて了つた。

斯くて英國は全土を新サウスウエールス以下六洲に分つて統治し、シドニー Sydney メルボルン Melbourne 等の大都市を營み、且少數にして無智蒙昧なる濠洲人の可及的衰亡及び有色人種の拒否を以て完全に白人濠洲主義 White Australia を實施し、全歐羅巴より大なる面積と資源を有する濠洲をして、南洋に於けるアングロ・サクソン Aaglo-Saxon 族の一大理想鄕たらしむ可き建設に邁進し來つたのである。

面積に對して人口既に飽和點に達したる歐洲なる英國人又、肥沃なる大植民地北アメリカを失つた英國人の、永遠なる生命維持に對する國家百年の大計たる此の對濠洲經營策の遠謀深慮は、濠洲と地理的に人種的に關係深き亞細亞諸國、特に其の盟主たる日本の留意す可き將來世界史上の、又南洋史

動向決定上の最も關心す可き來世の重大政策問題たるものであらう。而して飛躍的な大發展を遂げた此の南方の大蓬萊島は、一九〇四年には古き英國の植民地たる北米加奈陀と共に、印度に先だつて自治領 Dominion と成り、植民地としての最高形態を整えるに至つた。然し乍ら其の大陸の中部以西四洲卽ち北部領土 Northern Territory 南濠洲 South Australia 西部濠洲 Western Australia 等、滿洲に約四倍する大沃地が、可惜アングロ・サクソン將來の移住發展地として極度の人口稀薄の儘に確保せられてゐる事を忘れてはならない。

佛蘭西は英國、和蘭等と同じ年頃卽ち一六〇二年ルイ十三世 Louis XIII 時代に、既に佛蘭西東印度會社を英國と對立して印度に設置したのであるが、商業蔑視の佛人氣風と本國の不斷なる政爭及び之に基く國家的支援の缺除に依つて見る可き成功を得ず、一六五〇年に至る間に三度も改廢せられて、到底英國の其れとは對抗し得ない無力なものであつた。

其の後ルイ十四世 Louis XIV の時代斂腕を以て當時の佛蘭西政界に鳴つてゐたコルベール Jean Baptiste Colbert 首相となり、大いに通商保護政策、重商主義を以て海外發展特に有望なる印度植民地獲得に努力したのであるが、偶々優勢なる英國王兼和蘭王たるウイリアム三世 William III と爭つて利無く一般に佛蘭西勢力は不振となつた。然し乍ら當時に於けるコルベールの重商主義政策 Mercantilisme は Colbertisme と稱せられて今日尚有名である。

斯くて約百年後の十八世紀ルイ十六世 Louis XVI の時代となり、デュプレー Jose Francois Dupleix 印度東岸なるポンヂチェリー Pondicherry 以下の佛領印度總督に任ぜらるゝに至り、シャン

て教育費は總督府豫算の八十%を占めてゐた當時の印度國防費の一%に過ぎなかつた。一九〇四年以後教育局を置きマドラス以下三個所の外に更にラホール、アラハバトの兩市に大學を設け其の他各地にカレッヂ等が開かれたが、英國が印度人に與へてゐる物質的苦境に於て入學者は眞に寥々たるものであつた。貧弱なる三年乃至四年制の小學校ですら、一九〇九年に於ける小學校就學者は二十二萬人卽ち全印度人就學適齡兒童數の百分の四に過ぎないのであつた。カレッヂ、大學等は極めて少數の印度貴族及上層階級の爲に僅かに存在するのみで、生活難に喘ぐ三億の印度大衆には殆んど入學すべき能力が無かつた。從つて絢爛たる十九世紀歐洲文明の恩惠にはなんら與る所無い、蒙昧な生活を送らしめられてゐたのである。世界道德の基調が英人の利益に在りと信じてゐた當時の英國人が、本國の國策遂行容易の爲に如斯教育政策を執つた事は自明の理であり、佛蘭西の安南に於ける、和蘭の馬來諸島に於ける教育政策も亦是と變らない。

然し乍ら印度の産業的資源開發、軍事的施設の爲には巨額の費用と十九世紀文明の凡ゆる利器とを應用して全英國の有する資本と技術と努力が總動員されてゐた。卽ち先づ必要な交通機關たる鐵道は既に一八六二年に於て一萬三千餘哩が最も重要なるインダス、ガンヂスの兩大河地方に敷設せられたのである。

斯くて印度の藏する富は、印度人從來の小規模なる手工業から大規模なる機械工業に換つて其の生産を激增せられ、英國資本主義發展に於ける最も重大なる役割を演ずるに至つた。十八世紀より十九世紀に至る輝かしき英國の世界的强國化、政治經濟的發展の現實的素因實に印度に在つたのである。

其の價値、文學に於けるシェクスピアの偉大と竝び稱せらるゝ所以卽ち茲に在る。

南洋に於ける此の勢力獲得は和蘭の馬來諸島占有と共に、白人の亞細亞に對する威力を牢固として拔く能はざるものとした。

他方三億印度民衆自身は蒙古政權下に於ける機械力無く開發資源尠い時代に於けるよりも、生產激增した英領印度時代に入つて、却て急激なる生活苦の中に憔悴の相を現出するてふ不自然を示すに至つたのである。

第六章　印度國民と日英同盟の英國的意義

英國の斯くの如き諸々の政策と雖も、十八世紀以來の世界的文化思潮の流れ、徐々なる印度人の自覺的傾向を如何ともする事は出來なかつた。無能とは言へ曾ては世界文化をリードした印度人の遺裔であり、然らずとも生物人間として、本能的にも己が生命發展に障害たるものは先驗的にも知り得る能力を持つてゐたのだ。

從つて尠くとも「考へる動物」たる人間の有機的な生命は、其れに對して何等かの意示表示を爲さずにはゐなかつた。其の抵抗が假令無駄に終るものであらうとも、反應を先づ精神的方面に、次で具體化して行かねばやまないのである。

殊に印度に於て最も文化の高いベンガル地方の民衆は、クライヴの征服以來可憐なる反抗を以て、己が生活保存の爲に儚き努力を續けて來た。又十九世紀英領印度帝國完成の頃には、其の壓制と冷遇

の下に生存の權を脅かされてゐた印度三億の大衆は、其の衰弱の内に求めて熄まぬ生を反英的哀號、排英的怨聲の中に籠めて切實なる蠢めきを演じてゐた。

而して其れ等は遂に一八五七年ベンガル駐在英軍傭兵 Sepoy たる若干の武器を携へた印度人に依つて最初の獨立を目ざして爆發するに至つた。英國人の所謂セポイの亂 Sepoy Rebellion であるが、事實は窮鼠猫を食むにも似たものであつて、可憐なる印度人が憤懣遣る方なく惹起せる最初の獨立抗爭であつたのである。

斯くて印度人自覺の度は、折柄の自由民權的世界風潮の波に乘つて益々向上し、一部印度人士は漸く印度國民の宗教的種族的相剋と智的無能を目指せる英國の對印政策の基調を洞察するに至つた。三億印度人の利益を代表する先覺、主として北方印度の諸藩侯、ヒンヅー教徒及び回教徒の志士有志が、英國の桎梏を脫して滅亡途上に在る印度の獨立復興運動に乘り出したのは實に一八八五年であり、其れはガンヂー（後出）の無抵抗主義に依つて率ひられ、同年ボムベイに於て其の第一回國民大會を開催する事となつた。

スワラジ Swaraj＝自治、スワデシ Swadeshi＝國產品なるベンガル語に依つて標榜せられてゐる印度最初最大の政治的指導機關たる所謂印度國民會議 Indian National Congress 即ち之であり、十九世紀末より二十世紀前葉にかけての印度民族獨立運動史上に不朽の功蹟を遺すものである。然し乍ら、英國によつて殆んど文盲の暗黑の中に置かれてゐた當時の印度社會大衆に對して、其れは然したる實蹟效果を擧げる事は出來なかつた。

十九世紀カルカッタ及新嘉坡總督府ノ征服事業



飜つて十九世紀以來の新興露西亞帝國を顧れば、ツァーニ・ニコラス二世 Czar Nicolas II の膨脹政策は當時世界に冠たる大陸軍を擁して東はシベリアを併呑し、支那を威嚇して滿洲、蒙古に入り、浦潮須德、大連 Port Arthur 等を築いて政治經濟的東洋侵略の根據地としてゐた。更に彼は「印度の商業は世界の商業也。能く之を制し得る者は卽ち歐洲に君臨する者也」てふ旨意に依つて中央亞細亞、アフガニスタンを經て世界の寶庫印度に進入す可き祕策を巡らしてゐた。

遙かに英國を凌ぐ露西亞大陸軍の北方よりの侵入は、さらでだに動搖せる印度國民の獨立氣運、反英運動を激化するのみならず、萬一の印度喪失は英帝國に執つて致命的な大打擊となるものであつたが故に、英國政府の露國より受ける脅威は眞に異常なるものがあつた。

文學に於けるシェクスピアを失ふ以上に、其れは英國民の現實的國家生活に關する重大問題であり、又廣大歐羅巴半島に等しき印度半島の資源と、無慮三億餘の顧客を失ふ英國資本主義發展上の一大脅威であつたのである。

此に於て賢明なる英國政府は、露國の東侵に依つて自己と相似たる立場に置かれた極東日本の位置を利用する事を忘れなかつた。

卽ち一九〇二年締結せられた日英同盟の主旨たる「東亞及び印度に於ける全局を確保し、東亞及び印度に於ける兩締盟國の領土權を確保するを以て目的とす」るの英國的意義は、之に依つて印度に迫らんとする露國勢力を牽制すると共に、反英印度民衆への日本の威嚇てふ重點に在つたのである。

斯くて一九〇五年露國は日本の爲に粉碎されて頓て帝政の顚覆を見るに至り、英國は初めて大安心を得、更に一九〇七年には英露不侵條約を締結して、印度の保全を完うする事が出來た。

然し乍ら印度國民に疑惑を抱かしめたものは、一九〇二年同じき亞細亞なる日本が、最も忌める征服者英國との間に同盟を結んだ事である。彼等は日本が敢て英國と共同して印度國民の壓迫に當れるに對して解く可からざるものを感じると共に、日本に對する豫ての信賴を裏切らるゝ事大であつた。

十八世紀以來豐かなる印度を狙える列强は露西亞の外に佛、獨等あり、即ちナポレオン三世の印度侵入企劃は時の印度總督ウェルズリーの慧眼に破られて未然に終り、獨逸はウイリアム二世 William II の積極政策下に盛んに印度にスパイを發して情勢を探り、「他の如何なる國家の統治下に入るとも、英支配下に在るよりは多幸也」とて溺れたる者藁をも摑まんずる如き印度民衆と深く結び、大いに其の獨立運動に對する智的、武的後援を與へんとしてゐた。更に獨逸は大學の過半を占むる二十一個の各大學に印度研究に關する講座を設け、又第二の露國として積極的行動に出で、ベルリンより中歐を經てバグダッドに至る大鐵道を開通し、徐々に英領印度に肉迫し來つたのであるが、一九一四年の歐洲大戰勃發は遂に此の計畫を水泡に歸せしめたのであつた。

斯くて資源豐かに民弱き南洋史上の大國印度は、古來世界列强の覬覦する一大魅力であつたが、十八世紀以來其れは英國制覇の下に現代に入つたのである。

第二部　比律賓

第一章　スパニシユ比律賓の外患と日本

中世紀末勃興した臺灣島大の小國、和蘭の南洋に於ける活躍は、驚く可き優秀なる業蹟を作して、先進スペイン、ポルトガル等の既存勢力を侵蝕して十七世紀に入つた事は既にわれわれの知る所である。而して曩にモルッカス諸島にスペイン及びポルトガルの聯合艦隊を破つて、同地方を占領し、不拔の勢力を扶植したファン・ヌールト Oliver van Noordt の率ひる和蘭艦隊は、一五八八年英國の爲に、所謂無敵艦隊を破られて後、頓に國勢衰へたスペイン統治下の比律賓を奪取す可く、一六〇〇年突如北上してマニラ灣頭に其の雄姿を現はした。

時の比律賓總督グズマンは、直ちに副總督モルガ Antonio de Morga（後年比律賓事情 Sucesos de las Filipinas, 1609. を著はして有名である）をして全スペイン艦隊を率ひしめて之と大海戰を演ずるに至つたが、共に苦戰の末遂に和蘭艦隊の退却となつた。其の後屢々和蘭艦隊の比律賓沿岸來襲は、あつたが大事に至らず、一六四七年スペインの總督ファヂァルド Diego Fajardo 以後は再び其の脅威を受ける事無かつた。當時マニラ市、南方ビサヤン諸島と安南、柬蒲寨等の印度支那諸港及び北方日

本、支那等との間には相當繁華な貿易が營まれてゐたが、特に近接せる閩粤地方の發展的な南方支那人との間には盛大であり、其の移住も亦夥しく、數に於ては日本人を凌駕するものであつた。

彼等の經濟的優勢は頓てスペイン當局の壓制への反抗及マニラ市に於ける政治的權力の要求となり、遂に一六〇三年總督アクニア Pedro Bravo de Acuña の時、同市三萬餘の支那人は俄然蜂起し、政廳を襲ひ、市街を破壞したが、武勇と戰略に富む日本人との合同無かつた爲、空しくスペイン軍の爲に鎭壓されて了つた。

然してスペイン政廳は比律賓に永き支那人の勢力を削減す可く、支那商品に高關稅を課すると共に、フィリッピノ（一般比律賓人を指す但し米人は基督敎徒比律賓人のみに用ふ）の位置を向上せしめて支那人との對立を圖つた。

在留支那人の本國なる明政府は其の末期の衰運に在り、東洋の大國として古來因緣深く貿易關係密接なる呂宋に於ける、此の大變に對しても何等積極的な處置を執る事無かつた。

然して日本に於ては、當時幕府未だ鎖國を令せざるの頃、南洋諸港に貿易してゐた日本人は其の信義と武勇に依り、何等國家的後援無きに不拘、西・葡人及び南洋諸島國民より絕大なる信賴と畏敬を受けてゐた事は既に中世史上に於て述べた如くである。

比較的近距離のマニラ附近には特に日本人の在留する者多く、十七世紀初頭に於ける人口約一千人に上り、略々マニラ在住のスペイン本國民の數と相伯仲してゐた。剛直不屈にして信義ある日本人に對しては、スペイン政廳も一步を讓り、又長崎、平戶等に於ける日西貿易の關係をも慮つて日本人を

優遇する事大であつた。

然るに一六〇六年、スペイン政廳は、マニラに於ける一部日本商人をマニラの市外に驅逐せんとして全日本人の憤激を買ひ、マニラ全市はスペイン人對日本人對立の下に形勢甚だ不穩なるものがあつた。當時總督ヴィベロ Radrigo de Vivero はモルッカス諸島に出張して在らず、僭正代つて大いに日西兩國人の間を斡旋して、日本人の有利に解決されたが、此の事件は來航中の日本商船に依り本國幕府にも報ぜられたのであつた。

然してスペイン政廳は總督歸還後、日本幕府に對して、在住日本人の不法及び之に對する取締處分を要求した。

是に對して小島內に蟄居して世界を知らぬ消極的な日本幕府は、支那政府と同樣日本人の海外發展、勢力扶植等の對外發展策は考慮の埒外に在るものとし、海外日本人に對する處置は極めて冷淡であつた。卽ちスペイン政廳の抗議に對する德川幕府の回答は、左記の如く日本人の不法に就いて何等其の理由を訂す事の無い無責任なものであり、海外在留者は支那人と同じく棄民であつたのである。

比律賓總督に對する日本幕府の回答

近年到二其國一日本人作二惡逆一輩者、如二呂宋法度一可レ被レ致二成敗一也、於二日本一無二關心一、任二此印札一可レ被二申付一也、仍狀如件

慶長十三年戊申八月六日

呂宋國太守　足下

さらでだに永久性無き日本人の海外移住發展及び之に因る勢力は、斯くて漸く築き上げられむとして、常に崩壞し、失敗の連續に終つた。

然し次代比律賓總督シルヴァ Juan de Silva の時代、卽ち一六〇九年より一六一六年に至る間は勿論、一六三六年の鎖國令實施に至るまでは、マニラ以下南洋各地に於ける日本人の勢力は相當見る可きものがあつた。

卽ち一六一六年スペインの强敵たる南方の覇者和蘭東印度會社の艦隊が、又も比律賓駐屯スペイン軍の無力を知つてマニラに來寇し來つた時、總督シルヴァは其の兵力の脆弱を補ふに日本浪人武士團を採用し、將校或は兵卒として其の武力を利用する事甚だ大であつた。卽ちスペインは之に依つて首尾よく和蘭艦隊を擊退するを得たのであるが、如斯事變は屢々有りスペイン政廳が日本人に對して寬大なる態度を執つた所以のもの亦玆に在る。又造艦造船に當つても、スペインは所要材料を殆んど日本より仰いでゐたのである。

第二章　日本植民の失敗と鎖國令及び外交政策

十七世紀初葉の南洋は日・支・蘭・西等歐亞諸國商船交錯して甚だ多彩な世界的商業舞臺であつたが、歐洲諸國が其の强力な進出を敢行して着々成功の域に入るに從ひ、日支の勢力は徐々に衰退の悲運を

辿つて行つた。然し乍ら信と武に厚い日本人のみは南洋諸島國民の間に遠き血緣あるものとして、特別なる親誼を受けてゐた事は既にわれわれの知る所であるが、此の理由に關しては土俗、民族學上、言語學上に相當の根據あるものであり、松岡靜雄氏ミクロネシア民族誌は能く是を說いてゐる。此の方面に就いての研究は今後南洋史の充實と共に益々重要性を加へる興味深い未開分野であらう。

如斯狀態であるが故に、若し當時の日本幕府が、彼等發展的な日本人に對して國家的後援を與える事、理解を持つ事に於て、歐洲列國政府の半ばにも達するものあれば、彼等日本人は其の住み心地良き南洋諸島民族社會に在つて埋骨を期し、永久的な文化的政治的支配位置を形成するに然したる困難は感じ無かつたであらう。

支那人に次いで南洋と最も古い關係に在る日本人が、如斯好條件の下に、尙一の植民地をすら有せず儚い夢に終つたのは上述日本政府の無理解以外に、彼等が一時的出稼根性、所謂桃太郎式なるものに終始し、且クロフホードも言ふ如くに、何等家族的部落的永住性ある方法を執らなかつたからである。

十六世紀中葉未だ西力東漸尠き頃、地理的認識深く、海上立國の遠大なる理想を有する爲政者、或は二人の豐臣秀吉あつたとする時、既に南洋深く進入してゐた日本人の勢力、就中最も近い臺灣、又守備力弱いスパニッシュ比律賓等の如きは、和蘭の爪哇占領以上に容易に行はれ得たであらう。

斯くて地球を半周して遙に來つた歐洲列强の爲に、無智なる東洋諸國は、足下に近い利益地方の据膳を易々として彼等白人の素晴しき榮養に奪ひ去られたのである。

然して一六三九年卽ち寬永十六年の鎖國令は、全く日本人の南洋發展を阻止し、僅かに殘つた在南日本人は、其の後の數世代の中に南洋諸島國人の血液中に混融同化し、其の本然の相を消滅し逝いたのである。他方支那人は政治的には何等見る可き業蹟を遺さ無かつたが、其の夥しき數と飽く無き努力と趨利性とに依つて、南洋各地に隱然たる經濟的勢力を獲得して行つたのである。今日華僑の發展故無きに非ざる次第である。

×　　×　　×

德川幕府が、何故にアナクロニズムの鎖國令を實施したかに就ては種々な理由が擧げられるが、兎もあれ自然の軌道を外れた好ましからぬ方策であつた事に相違は無い。

元來家康と雖も秀吉と等しく、當時商業資本の波に乘つて、海外貿易に依る利を求めてゐたものである。又對外貿易の巨利を獨占して、封建諸侯の强大化を抑壓するてふ事も考へないでもなかつた。卽ち一六〇九年慶長十四年には、諸大名が外國貿易の爲に五百石積以上の大船を造る事を禁じて彼等の富强化を制限すると共に、幕府自らも得造らずして消極的貿易策を執つてゐたのである。

加之歐洲列國に伍して日本が南洋なる世界商業舞臺に乘出す事は、虎視眈々日本の虛を狙つてゐるスペイン其他の資本主義諸國が、其の最大目的たる植民地獲得對象の一を、當時の日本、卽ち家康以來數十年の忍耐と努力に依つて漸く獲た極東なる日本六十餘州に置くに至るべき事の危險を、事勿れ主義の德川家は恐れたのである。

又一六〇九年卽ち慶長十四年、任地比律賓に總督としての二年を終へてノバ・スパン Nuera Espano

=New Spain（メキシコの事を當時日本人は斯く呼んだ）に歸還の途次、日本沖に於て難破、千葉浪花村に漂着したヴィヴェロは、時の將軍秀忠及び家康に會談した事があるが、其の折ヴィヴェロは大いに日本の産業開發、貿易振興に依る資本主義的國家政策を幕府に說き、要すれば其の後援を惜しまずてふ好意を見せたのであるが、幕府は後難を恐れて之を拒否したのであつた。

尙家康は其の前年和蘭國王ウイリアム一世 William I より書を受けて『スペインは世界蠶食の素志を抱き、國內布敎其の他の好意は頓て日本併呑への前哨』となる可きを知らされてゐた。加ふるに一六〇五年慶長十年には、豫て家康が其の才を愛でて重用してゐた勘定奉行大久保長安が其の死後、圖らずも彼の机中よりスペイン遠征軍の能力及び其れとスペイン宣敎師下に在る切支丹日本人との聯合軍の倒幕、延て日本占領等に關する諸計畫密書の類を發見した生々しい事實も在つたのである。長安遺族の全部が死刑に處せられると共に、切支丹及び伴天連に對する警戒禁止が嚴重化されるに至つたのは勿論であるが、根强い敎網と伴天連の潛行運動は其の後も續けられて、寛永年間に入つて其れは侮り難い勢力を持つものとなつてゐた。

卽ち寛永十四年、一六三七年には耶蘇敎最も盛んであつた北九州に、十字架の前、耶蘇の爲には身命を抛つて顧りみぬ反日本的基督敎不良分子に依る天草之亂が勃發するに至つた所以である。若し此の亂を牛耳る者がスペイン宣敎師達であつたとすれば、大久保長安に據るスペイン政府の對日野望は充分に實現性ある恐る可き事柄であつたのである。一六三九年卽ち寛永十六年、幕府が斷然鎖國を命ずるに至つた所以亦此に在る。

約百五十年に亘る日本の南洋發展史は、斯くて其の終焉を告ぐるに至つたのであり、スパニッシュ比律賓との交渉も、時の總督コルケラ Sebastian Hurtaco de Corcuera 以後斷絶し、其後十九世紀ペリーの浦賀に至る迄の二百餘年、日本は世界史上類例尠き意識的鎖國時代を出現するに至つたのである。

尙知る可きは曩に述べたる如くに、鎖國令と共に在南洋日本人は急遽本國歸還を命ぜられたのであるが、其の一ヶ月の制限期日内に歸還無き者は幕府に依つて嚴罰に處せらるゝ規定の爲に、在外約二千の日本人には、其の儘該地に留り島民の間に同化し去つた者が多い事である。

又日本内地に於ても豐臣の殘黨なるが故に、又切支丹信徒なるが爲に家康以下歴代德川將軍に依り、マニラ、ヂャガトラ等に追放された者は一六一四年卽ち慶長十九年、マニラに追放せられたる舊豐臣家の遺臣、攝津高槻の城主高山左近、及び志摩鳥羽の城主内藤如安等以下六百餘名の夥しき數に上つて居り、南蠻人卽ち歐洲人との混血の爲に南洋に追放されたる者も亦甚だ多く、所謂ヂャガタラお春等其の例である。

依つて現代南洋諸民族の中には、其の十代の前に父母を日本人として持つ者多いのであるが、今日に於ては僅かにタカタ、キリノ等日本式姓名の中に其の名殘を留めてゐるに過ぎない。尙高山左近の墓は現にマニラ寺院に在り、更にマニラ北方約十哩のマリキン河谷 Maricin Valley の現住部落民の用語、習俗傳説中には極めて多くの日本的なるものが遺されてゐると言ふ。

第三章　呂宋及びスールー諸島回教民族の反抗

其の統治權の無力と僭正權の强大に依つて、近世史上に於けるスパニッシュ比律賓は甚だ不統一混亂を極め老衰スペインに執つて、遠き南洋の大島嶼比律賓の統治は、實に過分なる負擔であつた。卽ち一六〇三年に於けるマニラ支那人の叛亂は、大いに其の勢力が殺がれたのではあるが、地理的に歷史的に密接なる關係を有する南方閩粤地方よりの支那人の來航移住は、陸續として續き、無能なるスペイン政廳の容易に禁止し得るものでは無く、比律賓各地に於ける支那人の勢力は再び向上の道を進んで行つた。

斯くて四十年の後、一六四三年にはマニラ在住三萬三千の支那人は、其の貿易利と生存權を主張して再びスペイン當局の不當なる壓迫に對抗して一大衝突を演ずるに至つた。

然し乍ら商業民族たる支那人の事とて、素より組織的統制ある武力、政治能力等無く再び鎭壓屈服せしめられ、更に加重なる桎梏の下に其の活動を制限束縛せらるゝに至つた。

其の後二十年の一六六一年、北隣臺灣の西岸を領有してゐた和蘭東印度會社の勢力を驅逐して、之を統治するに至つた新興の意氣燃ゆる鄭政權は、翌一六六二年マニラなる支那人勢力を援用し、以て豫て知る無力にして且反亞細亞的スペイン政權の打倒を目指し、祕かに遠征の準備工作を急いでゐたが圖らずもマニラなるスペイン官憲の知る所となり、鄭成功圖南の雄志は事前に空しく南海に消え逝いたのであつた。

然して大陸なる支那政府は、斯かる關係深き南方政情の動向遷移を知つてか識らずでか、依然として不關焉の態度をしか執り得ない狀態に置かれてゐた。

飜て比律賓に於ける此の十七世紀後期を觀るに、比律賓統治上の大勢力たる僧正以下のフィリッピノに對する基督敎傳導敎化は、漸く其の實效を見るに至り、回敎其の他の宗敎より之に轉ずる者出來、特にマニラ附近なるタガログ Tagalog 族の間には、顯著なるものがあつた。苛斂誅求、强制勞役等、スペイン政廳のフィリッピノ酷遇に於て、半ば己が權力の增大を目的とする僧正等一般宣敎師の宗敎的訓育は、其の諦觀的、又痲痺的なる點に於て、大いに被搾取フィリッピノ階級に容れらるゝ所が多かつた。

然し乍ら南方ミンダナオ、ビサヤン及びボルネオに連るパラワン Palawan スールー Sulu 諸島には、十三世紀以來の永い回敎の侵透が深く島民社會を捕えてゐたが故に、十六世紀後の新宗敎たる基督敎は容易に其の足場を見出す事が出來なかつた。

就中スールー諸島のモロ Moro 族等の回敎民族は、基督敎徒を異端として絕對に之を排斥したが故に屢々スペイン政權と衝突し、十七世紀以後の歷代總督は、此の頑强なるモロ族の抵抗に對して絕ゆる間無き遠征の軍を送らねばならなかつた。然して此の列島民族の不屈なる反抗は、さらでだに貧弱なるスペイン政廳の費用と兵力を消耗して、僧正權と共に、比律賓統治上の大いなる癌であつた。

斯くて一七二五年に至つた頃、スールー諸島中の主島ホロ Jolo のサルタンは、歷代百餘年に亙るスペイン軍との抗爭の相互に無益なるを覺え、時の總督コシヲ Toribio José Casio y Campo の許に

使節を派して協同通商の約を結んだのであるが、相互の利己心は間も無く同協定を無視するに至り、スペイン總督府とモロ族間の平和は再び破れて紛糾抗爭の舊態に復した。

其の後武力弱い比律賓政廳は、遂に如何ともし難いモロ族の抵抗に對し、最後の手段として附近ビサヤン諸島及びミンドロ島のフィリッピノの武力を援用し、之との聯合軍を以てモロ族征服を圖つたのであるが、將又失敗に歸して徒らに島民の輕蔑を買ふのみとなつた。

斯くて回教徒モロ族の勢力は却て增大するの傾向を辿り、遂に北方呂宋に進出して其の沿岸を侵略するに及んだので、一七五〇年總督オバンド José Francisco Obando Solis は、彼等の來寇に備ふ可く、沿岸の防禦を嚴にし、巡邏船を廻航せしめ、且諸港に砲壘を築造するの令を發せしめるに至つた。(因に當時に於けるスールー王國はボルネオの北半をも統治してゐたものである)

斯くて統治能力無い衰弱スペインの比律賓に於ける政權は、徒らにフィリッピノの生活と文化を脅かしつゝ十九世紀に入つたのであるが、恰も其れは北隣なる清政府の、暗黑臺灣に對する統治の其れに甚だ相似たるものがあつた。

スペインが如斯無能を演じてゐる間に、曾てはスペインの一屬藩に過ぎなかつた猫額大の小國和蘭は、其の賢明と努力とに依つて着々と爪哇を中心とする馬來諸島に巨大なる沃地資源を獲得しつゝ、既に一六二四年には所屬東印度會社のシルヴァ Jeronimo de Silva の率ひる東洋艦隊の艨艟は、北上して臺灣西岸を占領し、爪哇總督府統治下に編入してゐたのであつた。

此の報に驚いた比律賓總督コルケラは、急遽所屬艦隊を派遣して北部臺灣なる基隆を暫時占領した

が、間も無く北上し來つた和蘭勢力の爲に擊退されて了つた。詳しくは臺灣史上に於て述べるであらう。

尙懶惰にして無智なるフィリッピノも、如斯スペインの統治には滿足すべくも無く、屢々反抗の氣勢を各地に擧げたのであるが取るに足らず、僅かに一六六〇年ララ Sabiniano Manrique de Lara 總督時代に於けるマニラ西北なるパンパンガ、ブラカン兩州を中心とする地方の共れが稍々大なるもので、スペイン軍は之を鎭壓するに約一年の歲月を要した。

第四章　スパニッシュ比律賓に於ける政敎二權の對立と英國の侵入

比律賓統治スペイン政權を斯く無能化したものは、本國の沈滯も然る事乍ら、主として一五八〇年ペナロザ以後に於ける僧正 Archibishop を背景とする宗敎權の、總督に依る行政權への對立抗爭に因るものである。

卽ち總督は、本國政府の命に依り、僧正は、本國大僧正及び羅馬法王の指令に基くものであり、加之本國王は此等政敎二權を代表するものであつた。如斯宗敎過大視に依る政敎一致の觀念は、英國、和蘭等ゲルマン族に對する、ラテン系舊敎民族の一の特徵とも見られるものであつた。

例へば司法權の行使に當つても、總督府法院は、敎會側の意見、僧正の應諾無くしては、之を全う

する事が出來なかつたのである。從つて統治一般に亙る總督と僧正との衝突反目は、回教モロ族との紛爭と共に、三百年スパニッシュ比律賓に於ける二大障害であつた事、前にも述べた如くである。

就中最も烈しかつたのは一七一九年に於ける總督ブスタメンテ Fernando Manuel de Bustillo Bustamente y Rueda と僧正ケスタ Fray Erancisco de la Cuesta との衝突であり、各々政治、宗敎を背景とする此の二大勢力の對立は遂に激化してマニラ市内に一大戰鬪を惹起し、結局多くの犧牲者を出して總督派は敗北し、且總督は逮捕投獄せられて、翌年刺客の手に斃れるに至つた。

斯くて比律賓に於て最も有力となつた僧正ケスタは、同年本國王より總督に親任せられたが、僧正の總督就任は之を以て嚆矢とし、十五世紀末來百餘年に至る政敎二權の對立も亦此に自然解消する事となつた。然し乍ら、之も約十代五十年の後一七七〇年、非僧正總督アンダ Simon de Anda y Salazar 赴任するに及んで舊態に復し、比律賓行政は再び混亂に陷つたのである。

翻つて十八世紀より十九世紀に至る全南洋に於ける和蘭、英國、佛蘭西等歐洲列强の動向を瞥見するに、産業革命、資本主義興隆の風潮に竿差した彼等の强力經濟組織に於て、無力蒙昧なる人種と天産資源に滿ちた大南洋は、こよなき搾取の世界として傍若無人の活動が許されてゐた。卽ち既にその大半は彼等の鋭鋒の下に占領利用されて、近代的資本主義發展の羈足を充分に伸し、彼等帝國主義的コロナイジング・パワーとしての政治經濟體系を調整し、以て彼等に依る世界制覇の偉業を完成せしめつゝあつた。

就中、中世スペインに代つて近世世界の海權を制した海運英國の發展は目覺しく、十八世紀末には

既に印度の大半を支配し、更に其の餘力を驅つて馬來諸島に游弋してゐた東印度會社の大艦隊は、ドレーパーを將として一七六二年北上し、老衰スペインの領土なる比律賓諸島を、其の中心マニラに攻擊したのである。

時の總督ローホ Manueel Rojo は驚愕色を失ひ、直ちに全艦隊を集結して、マニラ灣頭に一大決戰を試みたのであるが、英艦隊の强大には敵す可くも無く、無慘にも首都マニラを攻略せられて了つた。加ふるに豫てよりスペインの統治に不滿遣る方無かつたフィリッピノは、此の機に乘じて各地に蜂起し、外寇に急なるスペイン軍を內に惱ましたのである。特に西北沿岸なるパンガシナン州の雄ヂーゴシラン Gigo Siram は大衆を率ひて遂に同州の政權を奪ひ、更に英軍と協力してマニラなるスペイン總督府の打倒に全力を擧げた。

內憂外患突如として襲來したスペイン當局は、彼等の爲に徹底的に蹂躪破壞せられ、遂に總督ローホはドレーパー以下英軍强迫の下に比律賓全島の移讓に關する城下の盟を結ばしめられたのである。而して比律賓經營の困難に就いて、時のスペイン王チャールス三世が親しく選んだ非僭正總督アンダが着任したのは、恰も此の事變の最中に在り、彼は直ちに英軍の撤退と比律賓統治の大綱を宣言したのであるが、實力ある英軍は其れに何等の權威を認めず依然として其の軍政を續けた。

其の後本問題は歐洲なる本國の間に移牒されて英西講和會議となり、一七六四年英國はスペインより巨額の賠償と權益を獲得して、比律賓二年の占領を再びスペインに還附したのであつた。

第五章　スペインの比律賓政策

南海貿易の一中心として、又本國及びメキシコ間定期航路の基點として、將又比律賓統治の首都として、スペイン政府は大いにマニラの經營には意を注いだのであるが、一歩地方邊境に入れば十七世紀比律賓も、滿者伯夷帝國領時代の往時に變らぬ蒙昧なる部落諸州の連續であつた。

諸州知事、莊園主達は其の管下のフィリッピノに對して、徴税使役以外に爲す可き道を知らず、文化的施設、共榮的產業開發、生活の向上、治安の維持等は敢て顧らるゝ處無かつた。

僅かにマニラ近接カビテ Cavite 及ブラカン諸州に宣教師に依る寺小屋式教育所が點在してゐたに過ぎず、一六〇一年設けられたサン・ホセ神學校 Jesuit Seminary of San José は其の鼻祖であつて、華やかなる歐洲文明の恩惠は何等フィリッピノの生活向上に用ひらるゝ事無かつた。

數多きフィリッピノを完全にスペイン人發展の爲にのみ用ふるには、斯くの如き無智蒙昧の位置に生產勞働機械化する事が最も賢明なる策であり、又スペイン人に執つて南洋の動物に過ぎない異端フィリッピノの利益幸福等は夢にも思ひ懸けぬナンセンスであつた。

然して十八世紀後期に入り漸く比律賓經營に目覺めたスペインは、特に其の一七六二年に於ける英國來寇以後劃期的な大改革に努力する事となつた。

一七六三年卽ち英軍マニラ攻略の年、及び一七七〇年の二回重任した名總督アンダの比律賓開發强化政策之であり、彼は先づ比律賓守備の兵力を擴張して外侮に備えると共に、歷代總督が等閑に附し

てゐた全島の產業特に農業の改善進步を圖り、且島民間に諸々の生產事業を興隆援助して大いに比律賓の經濟的價値と政治的位置の向上に資した。

次いで一七七六年就任したサリヲ Pedro de Sario も亦前代の後を承けて產業の開拓を徹底し、麻亞麻等を栽培せしめたのである。又領有以來二百餘年、殆んど顧られ無かつたフィリッピノの教育に志し、スペイン語に依る知識、文化の普及を圖つたのであつた。

斯くて徐々に農產に依る比律賓財政の富裕は、一七八〇年總督バスコ José Basco y Vargas の創設せる煙草專賣制に依つて愈々潤澤となり、スペイン本國政府に對する貢獻大いに見る可きものとなつた。

順風に帆を上げたるが如く、スペインの比律賓統治は大いに昔日の面目を改めて二十年、世は十九世紀の波瀾時代に入つた。

當時歐洲には稀代の英雄ナポレオンが一世を風靡して、一八〇四年には佛蘭西帝位に卽き、一八〇八年にはスペインを征服して國王チャーレス四世を廢し、ナポレオンの兄ヂョセフを其の王位に卽かしめてナポレオン帝國の威は全歐洲を震駭してゐた。

卽ち比律賓政廳は其の本國を佛蘭西に合併せられて落魄弱化し、兎もすれば危ふからんとする統治確保の爲に、大いにフィリッピノ人心の收攬に力め、遂に一八一〇年總督フォルゲラス Mariano Fernandez de Folgueras はフィリッピノに對して參政權の賦與てふ空前の優遇を實施するに至つた。

尙一八〇五年總督アギラール Rafael Maria de Aguilar y Ponce de Leyn は王命に依り資本八百萬ペソを以て王立比律賓會社 Royal Company of the Philippines を設立して全島の產業貿易の發達を圖つてゐたが之は一八三〇年總督府直營に移管された。

斯くて前世紀末來漸く文化の恩惠に浴し來つた一部フィリッピノは、新たに政治的權能を具へて將に人間的位置を認めらるゝに至り、民族的本然の自覺も亦此に初めて力ある擡頭を齎した。スペイン治下に入つてより實に二百四十年の事である。

フィリッピノの間に初めてスペイン語に依る新聞が發刊されたのは其の後三年の一八一二年であり、又同年末には總督ゴンザロ Manuel Gonzalez de Aguilar に依つてフィリッピノ參政に基く新憲法が發布された。是に依りフィリッピノは其の人口六萬に就き一名の代表 Depties を選出し、當時の有權フィリッピノ二百餘萬に對して、約四十名の代表は比律賓行政上に一勢力を形成して、產業、敎育、課稅等に關するフィリッピノ利益を主張し得る事になつたのである。

然し乍らナポレオンのスペイン征服も僅か七年に滿たずして失脚し、一八一四年スペインは新にフェルヂナンド七世の下に復興して一切の佛蘭西的影響を排除し、以て無視せられた往年のスペイン勢力を復活して行つた。

卽ちスペイン政府は比律賓に於ても、總督をして曾て統治權確保の便宜上一時止む無く與えたフィリッピノに對する權益の、可及的抹殺を圖らしめたので、歷代總督は盛んにフィリッピノの既得權益を解消し初めると共に、一八一二年以來の憲法に基くフィリッピノの合法的主張を無視し、遂に一八

三七年總督カスチロ・Pedro Antonio Salazar Castillo y Varona は斷然之が廢棄を宣言するに至つた。一八一二年來漸く認められたフィリッピノの權益は僅か二十五年にして覆滅せられ、彼等は再ひ往時の位置に顚落した。

然し乍ら一度與へた當然の政治的、文化的進路を俄然逆行せしめる事は困難であり、加之、世は十九世紀の自由民權思潮澎湃たる時代であつた。

其の後に於けるフィリッピノの政治的自覺に基く、諸種の反スペイン的運動の地下潛行は玆に胚胎する。

加ふるに本國遠く且官紀弛緩せる在植民地スペイン官吏の收賄、職權濫用等は、大いにフィリッピノ商工及び農民階級の經濟生活を脅かし、旣に目覺めたる十九世紀フィリッピノの反スペイン熱を彌が上にも高昇さした。

各地には從前三世紀時代に異る、底力あるフィリッピノの反抗が勃發し、特に甚だしき煙草專賣局の農民搾取に對しては全島農民の蹶起となり、一八八〇年遂に彼等は之が斷然たる廢止を比律賓政廳に要求するに至り、總督リヴェラ Fernando Primo de Riveera は其の形勢只ならぬを察して、翌一八八一年バスコ以來百年に亙つた煙草專賣制度を廢止したのであつた。

然し乍ら十九世紀末葉、全島フィリッピノのスペイン政權に對する離叛嫌忌の心は、滔々として深く彼等の社會に漲り渡つてゐた。

第六章　十九世紀世界の狀勢とリサールの出現

歐洲に於ける產業革命は十八世紀以來其の急激なる生產手段の發達に伴ひ、舊來の生產諸關係は分化變改して高度の發展を遂げ、近代的資本主義國家の形成を見るに至り、十九世紀は將に其の全盛時代と見る可きものであつた。

又科學の發達に基く唯物的世界觀は大いに歐洲人の社會思想を理智的なものとし、南北兩米大陸、南洋諸島開發等に依る彼等の生活面積の飛躍的膨脹及び之に因る經濟的富强と相俟つて、歐洲諸國は空前の華かなる生活文化を營んで世界に雄飛するに至つた。

故鄕たる歐洲を離れた彼等は、其の本國に數倍、數十倍する大植民地を先づアメリカ大陸に獲得して本國の强大に資し、次いで彼等は其の地を歐州文化の中に發展せしめて第二の故鄕とするに至り、遂にアメリカ合衆國を初めアルゼンチン、ブラジル等の獨立國家を發生せしむるに至つた。

斯くて中世末、歐洲諸國人の自負してゐた白人の世界、白人の利益が全人類の道德の基調なりてふ理想は着々として實現せられ、實力ある彼等の優越感は充分に滿足せられて行つた。

然して其の高度なる文化の向上は大いに彼等の主觀的世界を縮少して、南洋をも其の掌中に把握するに至り、特に十九世紀末に於けるスエズ、パナマ兩運河の開通は南亞諸國をも其の勢力圈內に抱擁するものとなつた。

斯くの如き世界的情勢の許に在つて、劣弱なる南洋諸島國民は全くの敗北者としての、悲慘なる境

地に沈倫せしめられてゐたのであるが、既に列强連る歐洲に衰退したスペイン治下に在つたフィリッピノのみは、十九世紀初頭より漸く擡頭して、盛なる和蘭、英國等の治下に在る爪哇、印度諸島民よりも文化的に政治的に比較的高き位置を獲得してゐた。

然し乍ら一八六六年に於ける受教育者の數は小學及中學を合して、一千萬フィリッピノの中二十三萬てふ僅少なるものであり、又初等及中等教育令の確立したのは其の後二十餘年の一八八九年總督ウェイラー Valeriano Weyler の時代であつた。

然し既にフィリッピノは政治的には一の經驗と自覺とを持つてゐた事、前章に於て述べた如くであり、十九世紀後半比律賓に於けるスペイン政權對フィリッピノの思想運動は險惡なる對立を示し、無氣味なる暗雲全島に垂れ籠めてゐた事亦前述の如くである。

フィリッピノの發展に執つて、最も意義深く且惱み多い此の時代、忽然として彼等の前に現はれて、其の指導者となり啓蒙者となり、後年比律賓獨立の志士と仰がるゝに至つた比律賓史上最大の偉人こそ實にリサール José Rizal y Mercado 其の人であつた。

リサールは約八代以前、即ち十七世紀前葉、當時マニラに在住してゐた一日本商人にして、鎖國令により歸還し得ず同地に永住するに至つた者の後裔であり、彼の高祖母はスワ Suwa＝諏訪と呼ばれてゐた。彼は一八六一年マニラに生れて同地に教育を受け、後歐洲に渡つて、先づスペインのマドリド大學に醫學を修めて後、佛、獨等に遊んで大いに其社會を研究し、遂にフィリッピノの慘狀を救出

す可く、斷然獨立運動に突入した先覺である。

不屈の精神を持ち、多分に語學に長じてゐた明敏なる彼は、一八八五年白耳義なるロッテルダムに於て不可侵Noli Me Tangereなる一書を出版して、スペインの惡政を歐洲に暴露したが、意外にも此の書は英、獨諸國に飜譯せられ高評を博した。其の後一八八八年卽ち明治二十一年には日本横濱に來航、翌一八八九年には巴里に於て連帶責任La Solidaridadを發行、更に一八九一年にはマニラに於て侵略者El Filibustersmo等を著はして大いに世界の、又フィリッピノの正義と自覺を刺戟した。

斯くて翌一八九二年彼は比律賓聯盟Liga Filipinaてふ政治結社を組織して、一千萬フィリッピノの求めて熄まぬ獨立運動の指導機關となした。

彼は西歐諸國の華かなる文化、厚き生活を目のあたり見ては、母國比律賓同胞の無智にして慘めなる生活が可憐でならなかつたのである。然して此の慘狀を排除して、等しく地上の富を滿足せんとするには、如何にしてもスペイン延て白人に對抗し得る丈の智識の向上が絕對的要素である事を知ると共に、不屈進取の戰鬪的精神が其の基調を爲せる事を悟つたのである。彼は此の意味に於て常に怠らず同胞フィリッピノの啓蒙に努力し又イージーゴーイングなる彼等の發憤に、あらん限りの力を盡したのであつた。其れは彼が同胞へ訓へた慈父の如き溫き指標である次の一文に依つても充分に知り得らるゝであらう――

"Life is a serious matter. It goes well only for those who have intelligence and heart. To live is to be among men, and to be among men is to strive.

But this strife is not a brutelike, selfish struggle,—nor with men alone. It is a strife with men, and at the same time one's own passions, It is a struggle with the proprieties, with errors, with prejudices. It is a never-ending striving, with a smile on the lips and the tears in the heart.

On this battlefield, man has no better weapon than his intelligence. He posseses no more force than he has spirit·····························Strengthen and educate yourself that you may be prepared for the struggle·····························."

斯くて全フィリッピノの文化と自覺の向上が齎來せられた秋、彼等の生活の前に立ちはだかつてゐた悲慘と卑屈は其の影を潜め、其處に打ち建てられるであらう輝しき自由と幸福に滿ちた獨立比律賓國の雄々しき姿を彼は屢々夢見てゐた——

RIZAL'S DREAM OF THE FUTURE

"Some day we shall all be citizens of the Philippines. Our future will be bright because it will be in loving hands. The future indeed is ours. How rosy it seems to me! I foresee activity in these regions. There will be life where for so long there has been death. A cities arise beside highways of iron·····························

Everywhere there are factories, I hear the steamer's whitsle, the rumble of trains, the noise of machinery. I behold the smoke rising, their powerful breath·····························

Cheerfully and confidently the people will work. Labour will cease to be servile and like the task of the slave. Commerce, industry and agriculture will flourish. The science will be under the protection of liberty and wise and equitable laws, and will develop as in properous England…………………"

斯くて近世比律賓に於ける島民の獨立能力はリサール指導の下に智的に武的に日一日と增進して行つた。風雲將に急ならんとするを察した總督ポラビハ Camilo Polarieja は、是が機先を制す可く本國政府に援軍急派を打電して武力彈壓を圖ると共に、一八九六年豫て監視してゐたリサールを突如逮捕して銃殺の刑に處したのであつた。

フィリッピノの間に尊敬信望神の如く厚きリサール銃殺の飛報が一度全島に傳はるや、一般人士は言ふに及ばず、田夫野人に至る迄驚愕悲憤措く能はず、全島フィリッピノは遂に其の虐政に抗してスペイン政權を打倒す可く、各地一齊に獨立の烽火を擧げ、スパニッシュ比律賓は史上空前の大混亂を惹起するに至つた。

第七章　比律賓共和國の成立と米國の侵入

一八九六年リサールの銃殺を契機として、各地に起つたフィリッピノの獨立軍中最も優勢であつたのは、マニラに近きカビテの町に據つた豪族アギナルド Baldomero Aguinaldo 及びルナ Antonio Luna を主班とする比律賓軍である。彼等は其の後推されて全軍を指揮するに至り、事實上比律賓

の實權を握り、次でアギナルドは翌年成れる比律賓共和政府の統帥となつた。

既に本國よりの增援軍來着したスペイン軍は、其の偉大なる南洋の植民地を失はざらんとして、又其の統制成れる比律賓軍は、三百年に亙る永い異國よりの壓政より脫却獨立せんとして、互に全力を盡して戰つたのであるが、延々として容易に勝敗を決せず翌一八九七年に入つた。

斯くて兩國の死傷者四十萬に達する程の激戰に、先づ疲弊したスペイン軍は、同年末遂にアギナルドを招致してイ、一八三七年廢棄されたフィリッピノ參政權の復活、ロ、フィリッピノの高級官吏採用並びにハ、アギナルドへの年金贈與等を約し、以て此の不利なる西比戰役を結局せんとするの讓步的懷柔策に出でた。

然し乍ら、斷乎たる決意を以て多大の犧牲を拂ひ、完全なる獨立を目指して戰ふ比律賓軍に於て、依然としてスペイン政權を認める如斯提案は一顧の價値すら無しとして拒絕せられ、比律賓には、對立せる西比二政權相角逐しつゝ一八九八年に至つたが、此の間アギナルドの比律賓共和政府は着々として獨立國としての體制を具備しつゝあつた。

他方老衰スペイン本國に於ては、十八世紀以來メキシコ以下多くのアメリカ植民地を失つて力無く、加之リサール銃殺の前年一八九四年以來は、中央アメリカ東方カリビア海上の植民地、キューバ諸島民のアメリカ合衆國を後楯とする强大なる獨立軍に遭つて大いに國力を損じてゐた。更に間もなく茲に比律賓の獨立軍を迎へて國勢極度に疲弊したのである。

更にアメリカ合衆國の膨脹は、一八九三年大統領クリーヴランドの就任以來、其の帝國主義政策と

共に益々發展して、一八二三年以來の國是たるモンロー主義 Monroe Docterine = Monroeism と共に先づ近き弱小メキシコへ、キューバ諸島へと其の獲得、征服の鋭鋒を進めてゐた。

秋や好し、スペイン既に植民地維持能力無く、キューバ、比律賓等に對する政權は脆弱に、島民は各々獨立の兵を擧げてゐたのである。卽ち彼は先づキューバ島民の獨立を陰然支持して、其の獨立卽ちキューバの占領の機會を虎視眈々狙つてゐた。

斯くて米西兩國關係は逼迫して一觸卽發の危險に曝されてゐたが、遂に其れは大統領マッキンレー William Mckinley 就任の翌一八九八年、豫てキューバ島民の要求に依ると稱してハバナ灣頭に碇泊してゐた米國驅逐艦メーン號 Maine の不可解なる爆沈に依つて爆發したのである。

卽ち米國政府は之をスペイン海軍の敷設水雷に因るものなりとして、直ちにスペイン政府に對して宣戰を布告した。米國のキューバ諸島占領は勿論、世界の大消費市場たる東洋諸國への政治經濟的進出のステップたる可き、スペイン領比律賓獲得てふ遠謀深慮も亦此の米西戰役の主たる目的中に包含されてゐた事言ふまでもない。

鎧袖一觸、米國は僅か數月の交戰を以てスペイン軍を擊破して、第一の目的たるキューバ諸島獲得を完成し、直に豫て派遣してゐたヂュイ Dewey の率ひる東洋遠征艦隊に、同じくスペイン治下に獨立の氣漲る比律賓諸島の占領てふ第二の目的達成を電命した。

旣に本國敗れたスペイン領比律賓總督府は、更に內にフィリッピノの頑强なる抵抗を受けて力無

く、同一八九九年五月圖らずもヂュイの米國艦隊の猛烈なる攻撃に遭つて木葉微塵に粉砕され、同年就任した總督オウガスチン Basilio Augustin の時には、事實上其の政權は喪失して、十六世紀後期以來三百餘年のスパニッシュ比律賓此に全く終焉を告げるに至つた。

斯くて一八九八年夏以後の比律賓は、アギナルド比律賓共和國政府に對してスペインに代るアメリカ勢力の樹立が豫測せらるゝに至つたのである。卽ち同年末歐洲なる巴里に於ては米西講和條約が締結せられて、當の比律賓共和國政府には何等の交渉無きまゝに、米國は二千五百萬弗を代償としてスペインに支排ひ比律賓の領有を認容せられたのであつた。

又スペインは翌一八九九年、比律賓東方海上に在り、遠く一五六四年レガスピが占領したグアム島 Guam をも米國に移讓し、又マーシャル Marshall Is. カロリン Caroline Is. 等のミクロネシア島嶼を新興獨逸帝國に讓つて、全く南洋に於ける根據地を失つて了つた。

然して比律賓共和國政府は米西諸國に關はる所なく、着々と在來スペイン統治機關を改廢接收して獨立國としての基礎を固め、一八九八年六月に入つては、比律賓共和國憲法を發布して統治の大綱を定め、更に全島の代表會議をマニラに召集して、滿場一致アギナルドの大統領推戴を可決し、且世界列國に對して此の完全獨立の趣旨を宣明したのであつた。

斯くて三百餘年の永きフィリッピノの忍從屈辱の哀史は此に其の最後の幕を下し、一千萬同胞は多年の念願成就したるが如くに歡呼し、全國津々浦々には祝福の聲、新興の意氣が滿ち溢れた。

而して其の蔭には强大なるアメリカの鋭き征服の手が歩一歩と肉迫してゐたのだ。

尙米國は此の年、北太平洋中の大島嶼サンドウヰッチ Sundwitch 即ち布哇 Hawaii 王國を征服して東洋への前進根據地として經營するに至つた事を知らねばならない。

第八章　米領比律賓の完成

豫定の如くスペインを仆してキウバを倂せ、更にマニラに上陸してゐた優勢な米國軍隊は、貧弱なる武裝に固めた砂上の樓閣にも等しい比律賓獨立政府及び其の軍を、倒壞の最初の方法として先づ大統領アギナルド以下の懷柔策に出で、比律賓獨立能力具備迄の米國の好意的庇護、及び共和國政府幹部に與ふるに巨額の年金と名譽とを以てした。

多大なる犧牲と努力の結果漸く獲得した比律賓共和國政府は、如斯目前の利に惑はされて其の實を失ふが如き申出を拒絕した。無力乍らも再び來る可き米國軍との衝突に備ふる所あらんとした。

米國遠征軍は直ちに此の旨を本國に打電したが、大統領マッキンレーは米西條約に基き一部比律賓拋棄論者の反對を排して、時の比律賓駐屯軍司令官オーチス Gen. Otis に對して、一八九九年一月斷然たる武力征服を電命した。即ち次の如くである――

"Jan. 3. 1899. President Mckinley issued a special message to General Otis, who commanded the army of the United States in the Philippines, declaring that American sovereingty must be recognized without conditions………the result of Mr. Mckinley's message was to move them (Filippinos) at once to strengthen their indepepent organization and to decide to defend it with

arms."

斯くて米比關係は急激に惡化し、一八九九年初頭以來、比律賓各地は再び血醒い戰禍の中に閉ぢ籠められたのである。

然して脆弱なる比律賓軍が、近代的米國軍の精鋭なる戰鬪力の前に無慘に破壞擊滅された事は言ふまでもない。

即ち比律賓政府は猛烈なる攻擊に首都マニラを驅逐され、北方ブラカン州のマロロス Malolos に逃れ、其の地を假の比律賓首府と奠めて應急策を執ると共に、所謂マロロス憲法 Malolos Constitution を發布して全比律賓軍の徹底的最後的な抗戰を試みた。

アギナルド以下マリアノ Gen. Mariano ケーソン Manuel Keson (or Quezon) オスメニア Sergio Osmenã 等幹部も必死の努力を盡したのであるが空しく、遂に强大なる米軍の爲にマロロスの本部をも擊破されて了つた。

斯くして一八九六年以來の比律賓共和國政府は、一八九九年に至つて全く其の實權を失つて消滅し、翌一九〇〇年米國政府の創設したる米國人のみより成る臨時比律賓統治委員會 Philippine Commission 新に之に代つて全島に君臨するに至り、廣袤十一萬五千方哩(我九州は一萬四千方哩)の南海の天地は完全に米國領とならしめられたのである。

スペインの重き桎梏を脫して獨立の歡喜に醉ふ事僅かに二年、フィリッピン一千萬は再び白人の支配下に入り、漸く成らんとしたリサールの理想も儚き一場の夢と化した。

斯くて米國は南亞細亞諸國に近き此の大植民地を本國の富强に利用すると共に英、蘭、佛等の歐州列强の植民地相連る南洋の一角を占めて、彼等に對抗し得べき政治經濟的確固たる東亞進入を爲し、且多くの利害關係を以て東洋狀勢に對して力ある發言權を持つに至つた。

新に南洋、加之臺灣を隔たる數百浬の南隣近くに、白人の大植民地を控へるに至つた日本の、亞細亞的活動範圍、利益地方は斯くて益々縮小されると共に、其の强大なる對立勢力を迎へて、日本の東洋、亞細亞確保上の困難、懊惱は益々大いなるものとなつたのである。

斯くて二年卽ち一九〇一年、米國は漸く秩序整つた比律賓に對して從來の軍政を廢し、總督府を設けて、後、米國大統領となつたタフト William Howard Taft を其の第一代總督に任ずると同時に、マニラに近き要塞の地カビテを以てアメリカ東洋艦隊の根據地とし又駐屯軍を派して、其の亞細亞的政治經濟發展及び比律賓統治上に於けるアメリカ國策遂行上の偉大なる後楯とした。更にグァム島を南太平洋上の戰略地として造營强化するに至つたのは其の後間もない事である。

他方米國は新領土比律賓の經營に當つては音樂に、映畫に、ダンスに、交通に、教育に、凡ゆる善惡の二十世紀文明の最新利器、方法を用ひて溌溂たる進步變改を施し、陰慘なりしスパニッシュ比律賓を改造して一躍明朗化したが故に、フィリッピノ一千萬は只管米國の偉大と恩惠に威壓敬服せしめられたのである。

更に一九〇三年總督府は、全島より一千名のフィリッピノの新人を選拔して、米本國に送りアメリカの偉大とヤンキー式思想を注入して、フィリッピノの敎化に當らしめたのであつた。

彼等フィリッピノ達は、名よりも實を取る巧妙なる拜米式教育の下に、自由、文化を與へられつゝ、基督教化され、英語化されて自主的歷史、民族的位置を忘れ行かしめられた。

フィリッピノの歐米化及び文化は斯くて南洋諸民族中最も高きものとなり、最も多幸なる南洋人の如くに思はれつゝ現代に入つたのである。

第三部 馬來諸島國

第一章 初期和蘭東印度會社の活動と臺灣島

英國がマドラスに特許東印度會社を創設した一六〇〇年に遲るゝ事僅かに二年、和蘭も亦モルッカス諸島の南方アンボイナ（或は爪哇のバンタムとも云ふ）に英國と同樣なる東印度會社を設立して、馬來諸島に於ける發展根據地と定めた事は、既に中世史上に述べた如くであり、スペイン、ポルトガル等の舊勢力は壓倒せられて潑溂たる新興和蘭、英國の二勢力が之に代るに至つた事も亦既に吾人の知る所である。

即ち和蘭は會社創立の後五年には早くもモルッカス諸島、セレベス等の主なる諸酋長回教部落と結んで、完全に既存ポルトガル商權を驅逐し、一六一六年總督レアール Laurence Reaal の時代にはセレベス西南の要津マカッサー Maccasar に堅牢强固なる商館兼要塞を造營してフロレス及びバンダ海 Flores and Banda Seas を制し其の貿易、資源を獨占するに至つたのである。

更にセレベス北部の大港メナド Menado を攻略し、同島及爪哇各地の未開酋長諸國を征服或は懷柔して、該地方島嶼への經濟的侵入を完成したのは一七〇三年總督オーソン Willem van Outhoorn

の頃である。

北方遙かなる列島、日本と貿易關係を結んだのは既に一六一〇年即ち慶長十五年の事であり、彼等は德川幕府の許容に依つて九州平戶（彼等の Firando）及び出島（彼等の Decima）に商館を設置して日蘭通商の端に就いた。其の後三十年、幕府の鎖國令に際しても、彼等の非宗敎的巧妙なる政策は尤も日本の安心を得て、制限附きではあつたが獨り依然たる貿易關係を繼續する事が出來たのであつた。

豪膽にして進取的なる和蘭人は、內に安閑として留まる事を知らず、常に對外的利益獲得に活動し、隣國スペインの領たる比律賓に對しても、さきに述べたる如く十七世紀初頭幾度か之が掠奪に入寇したのであるが志を得ず、又一六〇二年には、ポルトガルの東洋根據地たる媽港を遠征したが失敗し、北上して臺灣海峽に入り、當時ポルトガル人にピスカドールと呼ばれてゐた澎湖島嶼を調査して歸還した。其の後和蘭東印度會社は其の國策遂行能力向上の見地より、一六一〇年其の規模を擴大すると共に社長制を廢して、大權を賦與されたる總督制に改め、ボート Pieter Both をして其の初代總督に任じた。

降て一六一八年辣腕に有名な總督クーン Jan Pieterszoon Coen は南海制覇の大局より、最も重要にして且價値多き爪哇を見出し、其の西部なるバンタム王國の首府ヂャガトラを租借して、アンボイナより其の會社を移轉し、バタヴィア Batavia = Bataaf = Batavier（和蘭人の地の意）と命名し、以て來る可き對南諸島獨占の政治經濟的本據としたのである。無論和蘭としてはバンタム王國の征服の如

きは近き將來の豫定に在り、如斯名を附けた所以である。
十七世紀前葉當時、歐洲列强の有する商船（戰艦を兼ぬ）は總計約二百萬噸と稱せられてゐたが、其の半ばに近い九十萬噸は和蘭商船に依り占められ、次いで英國の五十萬噸であつて、十八世紀以後英帝國の興隆する迄の世界海上は、和蘭が其の全盛時代を出現してゐたのである。
卽ち「海洋を制する者は世界を征す」てふ原則に因り、十七世紀和蘭は世界に雄飛し、英國をすら馬來諸島より驅逐して、陸上印度經營にのみ專念せしめた所以である。日本の九州にも滿たざる歐州の一小和蘭王國が、今日の大を成せる遠因實に此の海上權の偉大と、英國の印度占領に於ける偉勳者クライブに比す可き名總督クーンの、遠大なる計畫に基く爪哇占領に在るものと言ふ可きである。
卽ち一六二二年、總督クーンは曾て調査した澎湖島占領を決行して東洋根據地を獲得す可く司令官カイツェルツーン Admiraal Kaizerzoen をして、十七隻より成る大艦隊を率ひて遠征せしめた。時の澎湖島統治者たる衰運に在つた明政府は大いに驚き、和蘭との通商を條件として漸く之を保持し、代るに澎湖の東方に橫たはる海寇惡疫の地、臺灣の占領認容を暗示したのであつた。
因つて東航した和蘭艦隊は先づ安平（アンピン）を攻略して上陸したのであるが、豫て聞くフォルモサの名に美はしく、且未開資源豐かなる臺灣を見て狂喜した。
卽ちバタヴィアなる本社に委細を報告して請訓すると共に、直ちに臺南及び其の附近を占領した。總督クーンは大いに喜び對日對支貿易の基點として、巨費を投じて之が經營に當つたが、一六二四年新任總督カルペンチール Pieter Carpentier はゾンク Marten Zonk を派して臺灣長官とし一切の政

治經濟上の主班たらしめた。卽ち一六六一年、鄭成功出現に至る迄の和蘭領臺灣四十年史の發端であるが、委細は後章臺灣史上に讓らねばならない。

×　　×　　×　　×

尙曩に述べたる如く、當時の和蘭は歐洲に於ける最も早く進步せる資本主義國家で、近代に於ける英國の先鞭を爲したるものであり、文化的にもスピノザ Baruch de Spinoza レムブラント Hamensz van Ryn Rembrandt 等多くの學者藝術家を輩出し、其のライデン大學 Leiden Universiteit は十七世紀歐洲學術の中心地となつてゐた。

又バタヴィアなる東印度會社が、蒙昧なる南洋諸民族の住む大資源地方に於て、如何に巨利を壟斷したかは、一六〇二年の創立以來、一六〇六年に至る五年間の政府株主への配當平均が、六十五%を降らなかつたてふ事實に徵して見ても明かであらう。其の後に於ても四十%を降つた事が無いてふ素晴しいものであり、國民の富强、厚生、世界に冠たり、又アムステルダム港は當時歐洲第一の殷盛を極めてゐたものである。

從つて金融銀行業の發達も亦目覺ましく、近世英國銀行業發達の鼻祖となつたものであり、當時に於て工場工業等の經營は、アムステルダム市のみでも、工場勞働者の數は纖維工業を加へて、二十六萬人の多きに上つてゐた。

實に英國が印度經營に餘念無かつた十七世紀世界は、先輩スペイン、ポルトガル既に衰へて、獨り和蘭のみが南海の富を占有して榮えた黃金時代であり、其れは後年歐洲諸國に發達せる資本主義的經

濟組織への先驅を齎らせるものとなつた。

尙蘭領東印度諸島が、和蘭本國の富强に如何に偉大なる貢獻をなしたものであるかは、次の一文に據つても判然するであらう――

「假に我が和蘭國民の滅亡する時ありとせんか、千年後の史家は我等が遺せる事業に就き、數語を費さむとして必ずや次の二名を撰ぶ事を忘れざる可し、曰く畫聖レムブラント。曰く蘭領東印度」

〔ミユーラー Hendrik Müller 一九一八年〕

卽ち、英國が印度の偉大なる貢獻を、文學に於けるシエークスピアの偉大に例へたると相等しい。

第二章　和蘭植民地官吏の活躍と爪哇諸國の滅亡

和蘭が猶額大の本國を以てして、加之列强割據の歐洲に在つて如斯偉大を成すに至るには、彼等の不斷なる文化的進步と戰鬪的能力の向上に因るは勿論、特に彼等の進取努力の精神が生んだ賢明にして且强力なる政策の遂行があつた。

卽ち其の分子、要素としての拔け目無い政府、會社諸機關の機能と、本國爲政者は無論の事、總督以下職員官吏の寧日なき努力と慧眼があつたのである。彼等に如斯大局の把握と、實行能力が無い限り、當時の人口僅か四百萬、今日に於てすら八百萬に滿たざる寡少なる本國人を以て、其の世界的位置は言はずもがな、獨立をすら維持する事は至難な事業であつたのである。

アフリカ、南北兩米大陸等に對する政治經濟的進出に遲れて、スペイン、英國、佛蘭西等に壓迫され勝であつた彼等が、全國力を傾倒して馬來諸島獨占に勉めた所以は此に充分に見出されるのである。

從つて本國發展の經濟的背景として、延て政治的にも重大なる役割を占める國策上の第一線たる南海諸島に、幹部、職員を派遣するに當つては、政府は之が爲に必要なる政治經濟上の知識は固より、史的、語學的常識を課して嚴重なる選拔試驗を行ひ、之に合格したる優秀者のみを更に一定期間教育して後、高給を以て赴任せしめたのであり、此れは三世紀後の今日尙一部に繼續せられてゐるのである。

斯くて遙々南洋に來つた彼等は、深酷なる國際競爭場裡に奮闘する本國の立場に鑑みて、島民の幸福より先づ第一に本國の、又同胞の繁榮向上の爲に專念するの愛國心に燃えてゐた。（日本植民政策と比較せよ）

從つて其の政治經濟的活躍は、總て本國の利益を中心とし、之が背景的威力として不可缺の軍備は常に充分に維持され、十七世紀末期に於ける東印度會社の海軍力は、戰闘艦のみで四十五隻に上り、以て三千餘の大小商船の積極的南海活動を保護して、不安無からしめてゐた。今日確固たる和蘭の南洋に於ける地盤は、實に此の時代に基礎附けられたものである。

中世以來馬來各地に群立してゐた諸島民族の脆弱なる國家が、彼等の爲に蠶食併呑されて行つたのは此の時代であり、モルッカス、セレベス諸島の蒙昧なる群小回教サルタン酋長諸國は最も早く、比

較的文化高いスマトラ、爪哇等のスンダ列島諸王國も亦權益を縮少削減されて行つた。卽ち最も强大であつた爪哇西方のマタラム王國も、一六一〇年アブルマファヒル Aboelmafachir 王以後衰へて往年の繁榮無く、一六八二年サルタン・ファター Sultan Fatah に至つては殆んど和蘭東印度會社の下に屈服したのである。又西岸なるバンタム王國は、一六一八年サルタン・アグン Sultan Agoeng の時代、其の王城ヂャガトラ卽ちバタヴィアを和蘭に攻略せられてより秋風落莫たり、一六七七年マンクラト二世 Mangkoerat II 卽位の頃には、既に和蘭軍の重壓裡に其の實權を奪はれ、又一七〇三年マンクラト三世 Mangkoerat III＝Tegalwangi 卽位の翌一七〇四年には、遂に和蘭總督ファンホーン Joan van Hoorn の爲に征服せられてしまつた。更に翌一七〇五年和蘭はパクヴワナ一世 Pakwoewana I を擁立したのであるが、バンタム王國は事實上此の年を以て其の六百年の獨立を消滅して了つたのである。

數千年の發生以來、炎熱に其の精神能力を減退せしめられ、豐かなる天產に飽食して生產事業、戰鬪法等、研究の智的刺戟尠かつた南洋諸族の遲々たる生活力の發達は、其の永き悠長なる風習の中に醸されたる懶墮なる性質と相俟つて、殆んど抵抗力無く、全く其れと異れる環境に人となつた和蘭人の精悍の前には、鎧袖一觸以て爲されるがまゝであつたのだ。

斯くて古代以來、特に中世に於ける華やかなる滿者伯夷以下爪哇諸國の支那、安南、甘淸塞、印度諸國及び既に姿を消した日本商船等との交通貿易に依る利益及び其の齎らす政治、思想、文化等の連關は中絶せられて、和蘭代つて之が自主的接渉に當るに及んだのである。斯くて千餘年來の永き亞細

亞的思潮、氣風は除々に南洋の空より驅逐され、現象は凡て歐羅巴的なるものの中に考へられねばならぬ情勢に變化し來つた。實に是は南洋史上看過し得ざる非亞細亞的一大エポックであり、卽ち今二十世紀白人統治下に衰亡せる南洋諸島國出現の端緒である。

白人の侵略史としての南洋史は、斯くて益々佳境に入る。

尙、本文中東印度會社に就いて、官吏なる語を用ひたが、政府の任命する總督の管下に在る會社員であり、其の動向は總て政府の指示に依つたものであるが故に、實際上の官吏として此の語を用ひたのであり、此の意味に於て又會社の事をも或は總督府と稱した。

第三章　十七世紀馬來諸島に於ける日本人と歐羅巴人及び德川外交

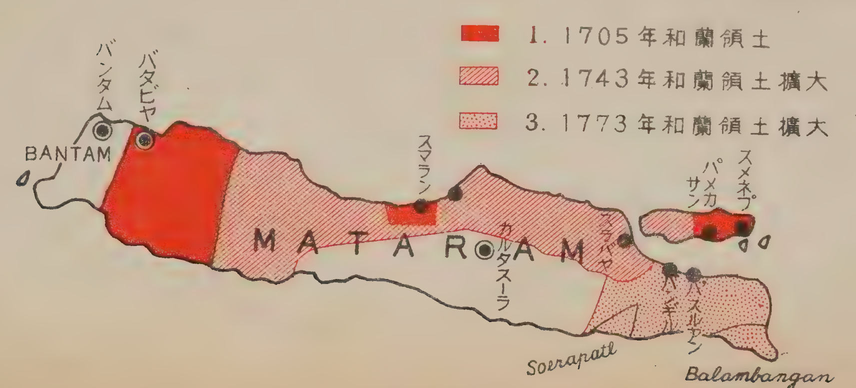
十七世紀前葉、未だ日本に鎖國令無かつた頃、日本商人、浪人武士團は盛に自國商船に依り、或は所謂ガレウタ Galeota なる歐洲諸國船に乘じて南洋諸國に渡航した。

マニラ、ヂャガトラ、（バタビア）、甘蒲塞、暹羅、媽港（天川）、臺灣（高砂）、印度（天竺）等が其の主なるものであるが、本章に於て述べるのは馬來諸島中の特に爪哇、モルッカス、ボルネヲ等和蘭との關係深き地方であり、他は各々其の地方史上に於て述べられるであらう。

彼等が信義と武勇賢明に依つて活躍し南洋諸島各地に、異常なる敬愛の念もて迎へられてゐた事は、旣に中世史上に於てわれわれの知る所である。

十七及十八世紀ニ於ケル和蘭東印度會社之征服事業





然して白人特に日本國との交易により、最もよく日本人を知る和蘭人は、彼等勇敢なる南洋在住日本人を、和蘭の馬來發展上の障害をなす英國、スペイン等との交戰に、或は諸島民の征伐に、軍人として利用し其の成果を收めた事も大なるものがあつた。卽ち一六一九年、マドラスなる英國の東印度會社所屬艦隊が、バタビヤなる移轉後間もない和蘭東印度會社の本據を衝いた折、時の總督クーンは其の形勢甚だ不利なるを察して、當時バタビア駐在約一千に上る日本人團に其の協力を求めたのであつた。

日蘭關係の貿易上の親密に鑑みた日本人達は、直ちに義勇軍を組織し、且其の一部は和蘭兵の指揮に當つて大いに英國艦隊を破り、英國をして其の後十九世紀に至る迄、再びバタビア襲擊の事を斷念せしめるものともなつた。

又和蘭は一六一三年のチドール Tidor 島（セレベスの西南）征伐を初め、香料の產に名高いモルッカス諸島が、未だ充分に和蘭の手に握られず、屢々英、西、葡等との間に、猛烈なる爭奪戰が演ぜられてゐた十六世紀末より十七世紀初頭に至る頃、該地方に迅く十六世紀初めより入り來つて、相當の勢力を持つてゐた日本人を巧みに操つて、和蘭軍に協同せしめ、大いに其の武力を和蘭勝利の爲に活用したのであつた。尙十七世紀初頭バタビヤに於ける日本人の動靜に關しては、村上直次郎博士「ヂャガタラの日本人」に一部掲載されてゐるのを見る。

然し乍ら此に記憶す可き事變は、一六二三年卽ち日本元和九年に於ける所謂アンボイナ事件である。

農産海産共に豐かな比律賓南方のセレベス、モルッカス諸島は、馬來諸島に於ても甚だ重要視せられてゐた地方で、歐洲人進入の約半世紀以前より、日本商船、漁船等は盛んに同諸島に出入してゐたものである。從つて十七世紀に於けるモルッカス諸島、特に其の南方セラム島 Ceram Is. の西南の要地アンボイナは、和蘭は勿論日、英、西等諸國商人の駐在する者多かつた。

和蘭東印度會社搖籃の一地たる同島は、政治上に經濟上に又軍事上に緊密なる利害を伴ふものとして、バタビア移轉後も、和蘭は沿岸各地に要塞、軍港を設けて、爪哇を除く外領中の最も重要なる地域として經營してゐた。

然るに一六二三年、總督カルペンチールの時代、圖らずも同地在留の日本人及び英國人が、協力して潛かに同地の軍略的又政治的事項を探査し、以て來る可き同島の占領を企劃してゐるてふ事實が和蘭官憲の手に依つて曝露されたとなされたのであつた。

和蘭に執つて最も恐る可き競爭者たる英國人、及び無力乍らも其の永き在住に依つて、島民の間に可成りの潛勢力を有する日本人に依る此の陰謀は、大いに和蘭總督府を驚かしめ直ちに關係日英人合計二十六名（日本人九名、英人十八名）は逮捕せられて直ちに死刑に處せられて了つた。

同島に關しては既に一六〇九年、初代總督たるボートに依つて「諸島一切の商業は和蘭公司の業に屬し、世界何れの國と雖も之を侵し得ざるものである」事が宣言せられてゐたのである。

然し乍ら和蘭總督府の此の暴擧が一度英國に傳はるや、大いに英國人を憤激せしめ遂に翌一六二四年クロムウエルの英國政府は、和蘭本國に嚴重なる抗議を提出すると共に、八萬九千磅の莫大なる賠

償を要求したのであつた。

而して和蘭政府は之を容れたので、事件は其れ以上擴大する事無く落着し、緊張した蘭英國交も漸く平穩化した。

他方日本人慘殺の件は、其の後日本商船に依り本國に齎らされたのであるが、消極事大の德川幕府は、之に對して何等の處置對策を執る事無く、寧ろ厄介視してゐた海外發展日本人は、外國法令に據り自由に處斷される事を望んでゐた狀態であつた。是は一六〇八年、卽ち慶長十三年、幕府が呂宋長官に宛てた公文に據つても知らるゝのである。（近世史比律賓第一章參照）

尙此のアンボイナ事件に就ては、著者未だ繙讀の機を得ないが左記の書が最も詳細であらう。

'Atrve relation of the vririust, Crvell, and barbarovs proceedings against the English at Amboina in the East-Indies, by the Netherlandisch Governovr and Covncel there..........' London, N. Newberry, 1624. 今日とスペル相違す）

漸く獲たる日本列島の保守に汲々として、對外的には全く事勿れ主義に終始した德川幕府が、若し正常なる同胞愛と、國家的進展性を持つ政府であつたならば、當然其處には英國と同樣なる行動が和蘭に對して爲され、且同樣なる意義ある結果が齎らされてゐたであらう。何故ならば、當時世界の客觀的情勢に於て、德川幕府の率ひる日本軍の戰鬪力は、遠く本國に離れて不利なる地理に在る和蘭會社軍を、充分に擊破する丈の能力を持つて居り、加之南洋各地に散在する日本商船隊の武力、特に暹羅方面に漸く政治的勢力を獲得しつゝあつた津田又右衞門、山田長政等の優勢なる應援は、尤に和蘭軍

と對抗し得る勢力を備へてゐたからである。

更に經濟的目的に主として行動してゐた和蘭會社が、日蘭貿易を犧牲にし、東洋に於ける商權を抛擲して迄、日本に栖附くの愚を爲す事は到底望み得ない事柄であつたからである。

如斯有利なる位置に在り乍ら、母國を遠くアンボイナ地方に雄飛して、幾分なりとも日本の利を劃策努力してゐた九名日本人の悲慘なる死は、犬死に終らしめられたのみならず、國家の保護無き在外日本人の雄志を沮喪せしめる大いなる動機となつた。

翻て一六三九年、卽ち鎖國令の翌々年なる寬永十六年、幕府は一切の切支丹的、南蠻的色彩影響驅除の爲、長崎在住和蘭人及び其の妻子一族十一人を和蘭人の根城たる爪哇ヂャガトラに追放した。其の際和蘭人の一人たるマルクスサイモンセンと其の妻たる日本婦人の間に生れた娘はるが、かの有名な所謂ヂャガタラ文の主お春である。美眉うるはしく文才に長けてゐた彼女が、爪哇の都バタビア卽ちヂャガトラに至つたのは十四の年であり、故里長崎の空戀しく日本行和蘭商船に托して、友だちに送つた情緖纏綿たる左の文が作されたのは其の後三年、十七の秋であつた。

ヂャガタラ文　（拔　抄）

千はやふる神無月とよ、うらめしの嵐や、まだ宵月の空も心もうちくもり、時雨とともにふる里を出でしその日をかぎりなし、又ふみも見じあし原の、浦路はるかにへだたれど、かよふ心のおくれねば、

おもひやる屋まとの道のはるけきも

ゆめにまちかくこえぬ夜ぞなき

…………………………………………………………………………………御ゆかしさのま丶、腰おれかき付申候、前業とは申ながらか丶るうき世にかひなき命ながらへ申さむよりは、ただ世になき身となり候はばいかにうれしからましを、たまたま花の世界にむまれきて、此身となれるとし月をかぞふれば、十とせあまり四とせがほどとこそおぼえ候に、かくうらめしき遠き夷の島にながされつ丶、きのふけふとおもひながら、はや三とせの春もすぎ、けふは卯月朔日、まだ東雲に、あすは出船と人の聞えつるに、せめて筆の跡にてもとぞんじなみだながら硯にむかひ申候

……………………はづかしながら筆にまかせ申候

……………………………………さてさてそこもとの御文くりかへしくりかへし見申候へば、ひとしほ御なつかしさ御すいもじなされくださるべく候………………………………………いまは何事も、みなあだごととなり行むかし語と成申候事こそ、ふかきおもひのたねとあこがれ申候あらこひしのそさまや　しのばしの友人や、ひとへ二重の色のみかやへ山吹をおくり給ふ情のいろくちはてずおもへとの御心のうちとこそおしはかられ申候

山吹の花のちしほはかはるとも
いはぬいろをばわれわすれめや

………………………………………………………………………………我身事、今までは異國の衣しやう一日もいたし申さず候、いこくに流され候とも何しにあらゑびすとは、なれ申すべしや、あ

ら日本戀しや、ゆかしや
見たや　見たや
　　　　　　　　　じやがたら　はる　より
日本にて
おたつさま
　　　　まいる

註　本文に關しては、後年知人某の爲せるもの也と稱する人もある。

斯くて日本との交通を絕たれるに至つた彼等在外日本人達は、其の後幾世代を經るままに、和蘭人或は島民の間に混血同化して本然の相を失ひ今日に至つてゐる。

第四章　爪哇バンタム、マタラム兩王國の滅亡と支那人

十七世紀以來其の發展的な機構と有能なる高級官吏の積極的活動に依つて、英國、スペイン等の勢力を驅逐したバタヴィア和蘭總督府は、十七世紀末には北は比律賓、南は濠洲の間に橫たはる所謂東印度諸島の廣大に竝び無き覇權を樹立して、中世滿者伯夷帝國繁榮に代るものとなつてゐた。

卽ち一六六五年に入つては總督メツイケル Joan Maetsuyker の派遣したスペールマン Cornelis Janszoon Speelman のセレベス征討艦隊が、南方の要津ブートン Boeton 及びマカツサー Makassar を攻擊して同地方サルタンを其の勢力下に置いた。

又豫てより分割統御 Devide et Impera＝Verdeel en Heersch の最も効果ある方法を用ひて蠶食してゐたバンタム王國の王サルタン・ファター Sultan Fatah が其の子アブヅル・カハール Abdoel Kahar と爭ひ、國內二分して大いに國力を殺いでゐたのに乘じて、同國に侵入し遂にファターを斬つてカハールを擁立しバンタム王國を事實上和蘭總督の治下に領有するに至つた。是は一六八二年總督スペールマン（曩のセレベス征討艦隊司令官）の時代であるが、既に此の事に關しては第二章に於て略述した如くである。

次いで和蘭は東北隣なるマタラム王國北岸の要港チェリボン Cheribon を領し、一七〇三年には南接プレアンガー Preanger 地方を獲得してマタラム王國も亦其の實權を奪はるるに至つた。

然して東方スラバヤに近いマヅラ Madoera 島を征服したのは、其の翌一七〇四年である。歷代總督の明敏積極性は斯くて十八世紀中葉、卽ち一七六〇年就任したファンデルパラ Petrus Albertusvader Perra の時代には、殆んど全爪哇をバタビア總督の權力內に包攝し、島民は史上空前の壓制下に沈淪するに至つた。

他方爪哇島民に比し高き文化と執拗性を持つ支那人の爪哇に於ける勢力は、十五世紀末スラバヤに近くグレシーの支那人町を作して以來回敎徒の政治的向上と相竝んで、爪哇島に於ける經濟的發展に成功しつゝあつた。然して此れは十八世紀に入つて爪哇經濟界に牢固として拔く能はざるものとなり、新來和蘭人の進出を阻害する事大であつた。加之其の人口の增大は益々統治者たる和蘭人の權益を脅威する力となつて行つた。

ヨクヂャカルタ Jokjacarta 州地方をマンクブミに配して彼等に其の空名を保たしめた。是和蘭史書がマタラム王位繼承の亂と稱するものである。

其の後五十五年の一八〇八年、時の總督ウィーゼ Albertus Henricus Wiese は全マタラム領土を回收し、改めてヂョクヂャカルタ州の一部を彼等に配し今日に至つてゐる。尙マタラム王は和蘭總督府の派遣せる知事 Resident（駐在官と譯す可きも事實上の知事てある）を兄と呼び其の命令に服從してゐる。而し如斯空しき王名を與へてゐる事が、却つて和蘭の爪哇政策上有效なる結果を齎してゐる事に就ては第六章に於て述べる。

第五章　和蘭の爪哇政策と十九世紀に於ける英國の爪哇占領

一六〇二年和蘭東印度會社創設以來二百餘年、總督歷代の爪哇政策は辛辣其のものであつて、其の間に獲得した富は數千億盾を越え、尤に小和蘭王國をして、歐洲列强の中に雄飛制覇せしめる經濟的基幹となつたものである事は既にわれわれの熟知する所である。

從つて其の對象たる爪哇島民大衆は、機會ある每に其の生活權益、能力を剝奪蠶食せられて憔悴し、加ふるに舊王國時代の敎育法令等は撤廢されて、人間的特徵たる考ふる餘裕無く、全く和蘭掌握の下に畏縮せしめられてゐた。

斯くて十八世紀末の一七九九年、總督ヨーフェルストラーテン Pieter Gerdus van Överstraten の時代、二世紀の永きに亘つて和蘭興隆の盤石として重大なる役割を勤めてゐた東印度會社は衰へて解散せしめられ、翌一八〇〇年より全く形式上にも和蘭政府の直轄する總督府となり、植民地統治機關となつた。

而して會社時代爪哇全島に施行せられてゐた主なる虐政を擧ぐれば、先づ農業副産歩合税、所謂コンティンゲント Contingent 强制上納制 Verplichte Leverantien 〔會社の利益となる農産物のみを强制栽培し、上納の義務を負はしめる」及び强制森林伐栽法、竝に奴隷制度等であり、此等は名儀は變へられたが、十九世紀以後に於ても依然として襲用せられたものである。

其の如何に苛酷なるものであつたかは、一八一一年爪哇を占領した英國の植民地行政官をも一驚せしめ、其の改善に志しめたほどである事に依つても、充分に察知せらるるであらう。

尙會社が解散するに至つた主なる理由は、會社の腐敗亂脈以外に英國、スペイン等姉妹國との粉糾に基き、本國は一六八九年より一七〇二年に至る間、英國王ウィリアム三世治下に合併され、降つて一七四八年に至る永い間の和蘭王權は空位時代を現出して國勢不振、加ふるに一七八〇年國王ウィリアム五世時代には英國と戰端を開いて五年に及び、國歩益々困難に陥り、遠き南洋植民地等を顧るの餘裕が無かつたのに因る。

又、爪哇なる總督管下の會社亦此の間其の餘波を受けて業蹟擧がらず、如上三强制政策を案出敢行して、其の結果を償はんとしたのであるが、綱紀の弛緩と不統制は其れをも意の如くならしめず、遂

尙ラッフルスは其の後新嘉坡總督として辣腕を振つた事は餘りにも有名であり、更に爪哇史 History of Java: 1818, London の著者として見逃し得ない人物である。

斯くて五年、一八一五年歐洲に於てはさしもに豪勢を誇つた大ナポレオン帝國崩壞し、同年末巴里に、英、佛、蘭、西諸國の平和條約成り、梟雄ナポレオンの出現に依つて攪亂された歐洲の平和は暫次回復された。

此の條約に基き、和蘭は完全に佛蘭西よりの羈絆を脫すると共に、ウィリアム一世登位して獨立を復興し、且先年英國に委任した東印度諸島統治權の返還を受けたのであつた。ウィリアム一世卽ち今日和蘭王朝の開祖である。

他方英國は爪哇以下東印度諸島を和蘭に還附する代償として、曾て和蘭勢力下に在つた西北なる新嘉坡の獲得を容認せられたのである。斯くて一八一六年和蘭本國よりフェンダル John Fendall 爪哇總督に赴任するに及んでラッフルス是に讓り、ラッフルスは新たなる英國領土新嘉坡總督に任ぜられ、パイヲニーアとして同島の拮据經營十餘年、遂にバタビアを凌駕する南洋の要津、英國の馬來根據地としての要害を作り上げたのである。

一八一一年以來一八一六年に至る、英領東印度諸島六年の歷史は斯くて終る。

第六章　暹羅領馬來半島の沒落

馬來半島の西北部に在り、中世以來暹羅の保護領であつたトレンガヌ Trengganu ケランタン Kela-

ntan ケダ Kedah（北部の小部分パリース Perlis を含む）及び暹羅に朝貢して其の保護を受けてゐたペラ Perak 及びスランゴール Selangor の五酋長國地方に、初めて西力が其の鋭鋒を近付けて來たのは、一五一一年印度ゴアのポルトガル總督ダルブルケ d'Albuquelque の遠征商船隊がスランゴールの東南マラッカを占據した時に初まる。

而して英國の東印度會社が馬來地方に其の觸手を伸ばしたのは、十七世紀初頭に於ける同社の派遣したランカスター Cap. Sir James Lancaster の率ひる遠征商船隊が、スマトラ北岸の亞珍 Atehin 王國及び爪哇西岸のバンタム王國に通商し來つたのに初まる。

然し當時の英國は、ムガール帝國下の豐かなる大印度各地に對する、各種利權開拓の爲に全力を擧げて印度の征服事業を强行して居り、又同地方に先入してゐる强敵佛蘭西、和蘭、ポルトガル等の勢力と困難なる角逐を行つてゐたので、東方なる馬來諸島には其の勢力を充分に伸ばす餘力を持たず、僅かにスマトラ西南岸のベンクーレンに商館 Factory を築いて馬來貿易に當つてゐたものである。從つて馬來諸島に於ける英國の勢力は、同地方に主力を注いでゐた和蘭の爲に驅逐せられ、反對に印度に於ては、之を獨占せんとする英國の努力の前に、和蘭は佛蘭西、ポルトガル諸國と共に漸次驅逐されつつ十八世紀に入つた。

プラッシー原頭に於けるクライブの大勝に依り、大印度の死命を制して間もない一七八六年、英國はライト Cap. Francis Light に武装船隊を率ひしめて、暹羅領馬來半島西岸の酋長國ケダに誼みを通じ、同國領にして南海交通の衝に當る彼南島に商館を築造する事を許された。現代二十世紀に於け

英領馬來



至バンコク國際鐵道
泰
SIAM
パリス
Perlis
ケダ
Alor Sta
Penang
P.Wellesley
ペラ
Taipin
Ipoh
Kota Bharu
ケランタン
Trengganu
トレンガヌ
パハン
Kuala Lipis
スランゴール
K.Salangs
Kuala Lumpor
ネグリスムビラン
Slemban
Tampin
Malacca
マラッカ海峡
Batu Pahat
Johore Bharu
Pontian
Singapore
Riouw
スマトラ
N.I.
海峡植民地
St. Settlement
旧暹羅領
非聯邦
Unfed Ma. States
聯邦
Fed. Ma. States

March 1824 卽ち和蘭の所謂倫敦協定 Tractaat van Londen 1824（スマトラ條約とも云ふ）を締結して、和蘭は新嘉坡の出現により其價値を激減したマラッカを英國に返還すると交換に、英國よりスマトラのベンクレーンを接收した。

卽ち今日に於ける英領馬來と、蘭領印度出現の發端である。尙一八二四年締結の英蘭協定の內容には、英國のスマトラ貿易に對する特權と、新嘉坡を主とするヂョホール王國に對する特權とがヂョホール王の同意を求めて認められてある。

更に、當時和蘭は今日の如く英帝國ブロック內に包圈さる可き弱體なものでなく、英國の新嘉坡繁榮策に對抗して、附近の小島リヲウ Riouw に港を築營したのであるが、失敗に歸したものである。

斯くて英國の南洋經綸は二十年を經て、一八四六年には、ブルーク（前出）のサラワク領有と前後して、ボルネオ北岸に在るブルネイ王國の領土たるラブアン島 Labuan Is. を占め、爪哇の南方に在る小島ココス Cocos Is. 及クリスマス Christmas Is. の二小島を各一八八六年及一八八九年に英國領とした。

尙曩に述べたペラ王國は一八二六年以來暹羅より離れて、半ば英國の保護領化してゐたのであるが、半世紀を過ぎた一八七三年には實質的に全く英國の實權下に入り、翌一八七四年には是を法文化せるパンコル條約 Treaty of Pangkor, 1874 が英ペ間に締結された。

其の內容要點は次の如くである。

「宗教、習慣に關する以外の凡ての行政は、英國の理事官 Resident 又は副理事官 Sub-Resident の指揮に服從すべく、又其西岸の港たるヂンヂングス居留地 Dindings Colony は英國に割譲し、是は英國の海峽植民地に專屬すべきものとする」

尙東岸のトレンガヌ王國は代々暹羅に毎年朝貢してゐたものであるが、殊に一七七六年には同國王マンスール Sultan Mansul は暹羅王宮に特使を派して金花を贈り、兩者の國交益々親密なるものがあつた。然し如斯關係は一九〇九年、バンコークに於て英暹條約が結ばれ、暹羅の同國に對する宗主權が解消せらるる迄續いたものである。英國的文献には此種朝貢が、兩者の間に何等政治的服從關係を示すものでないと稱してゐるが、英國に執つては斯く解する事が便宜であつた。

一八六四年、英國は暹羅保護領たる馬來半島西南岸の回教酋長國スランゴール(サルタネート)に内訌の起つたのを機會とし、沿岸漁民が英國商船員を負傷せしめたのを理由として、海峽植民地の知事クラーク Sir Andrew Clark をして、同國サルタンに巨額なる損害賠償と今後の安全保障を要求して容れられず、以て同國を保護化せんとした。

其結果國民は排英運動を起すに至つたので、英國は兵を上陸せしめて徹底的に之を粉碎し再び起つ能はざらしめた。

此の亂によつて逃れたスランゴールの志士達は東南の、現ネグリスンビラン地方の北部たるスンゲイウヂョン Sungei Ujong に遁入し、其地の酋長クラマ Datu Klama に保護を求めたのであるが、既に英國の特務機關の手によつて懷柔されて居た彼は、領内民衆の希望に反して之を追放し、遂に彼

らは東方バンダル Datu Bandar の治むる地に逃れて漸く保護された。

而してスランゴールの反英志士を容れなかつたクラマは、民衆の反感を買ひ、遂にスンゲイウヂョン地方は各地に反王一揆勃發して、王は危險に陷り駐屯英國軍隊の保護する處となつた。同時に彼は同地に永久的に英國理事官を迎へて行政の實權を掌握されることとなつたのである。

斯くて一八七六年、英國軍隊は此地方を基地としてネグリスムビランの一部たるスリムナンチ Sri Menanti を攻擊し、其の酋長プルトアン Yang di Pertuan を降して、英國の實權下に入れた。

斯くて英國は着々と此等スムビランの未開回教諸サルタネートを懷柔或は征服して其の保護下に合併し（主なる酋長國はテレブ Teleb レンバン Rembang タンピン Tampin で其の征服年は各、一八八一年、一八八七年及一八八八年）更に一八九八年、英國は其等をスンゲイウヂョン、スリムナンチ他四酋長國をも含めて、今日の所謂ネグリスムビラン國を形成せしむるに至つた。（尙ダト Datu とは回教法上の位にして、佛教上の僧上にも相當すべきか）

然して其王には最も英國に忠節を勵んだ曾てのスリムナンチの王プルトアンが推選され、英國レシデントの下に立つ事になつた。

尙其後に於ける馬來諸國の變化を見るに、一九〇九年の英暹條納 Treaty of Bangkok, 1909 による暹羅勢力の馬來半島諸國よりの退却と同時に、トレンガヌに於ては、同年英國との間に協定が成立したが、是は一九一九年更に强化された。然して其の內容は、英國のペラ其他回敎酋長諸國に對する其れと同樣、宗敎（回敎）關係を除く全行政權を英國の駐在官が握ると云ふのである。

酋東北岸の同敎酋長國パハン Pahang に對する英國勢力の樹立經程も同樣なもので、一八八七年ウエルド Sir Frederick Weld と同國との間に保護條約が結ばれ、翌一八八八年より英國の駐在官が實權を握る事となつた。又南端のヂョホール Johore＝柔佛王國に對しては、一八八八年同國と英柔條約を締結し、同國の保護化を法文化し、一九一四年以後は從來の理事官に代るに總顧問 General Adviser を駐在せしむるものとなつた。

現代馬來聯邦 Federated Malay States と呼ばれてゐるペラ、スランゴール、ネグリスムビラン及パハンの四酋長國は、一八九五年の聯邦條約 Treaty of Federation 及其後（一九〇九、一九一二、一九二七）の補修 Supplementary Agreements により成立せるもので、同聯邦の首府はスランゴールの王城たる吉隆坡（コーランポ） Kuala Lumpur に奠められた。

第八章　和蘭の植民政策とマクスハーフェラール

一八一六年再び和蘭の手に復した爪哇及び附近諸島は、十八世紀以來歐洲の產業革命に因る生產手段の飛躍的發達竝に之に伴ふ生產樣式の資本主義化に依つて、和蘭以下歐洲列强は益々資源供給、商品販路としての植民地を必要とする時代に在つたので、其の經營、統治方針は前時代よりも更に强硬なるものとなつてゐた。

即ち和蘭政府は本國に教育產業植民省 Department van Onderwys nationale Nijverheid en Kolonien を新設し、一八一六年就任した總督ファンデルカペーレン Codert Alexander Gerard Philip Baron

van der Cappellen は英國統治時代の制度を全廢して、舊デーンデルス法に基調する植民地統治法 Regeerings Regrement を發布して資本主義的植民地政策の典範とした。又、バタビアに中央司法機關としての高等法院 Hoog Gerechts Hof を設け、全島要地には特權ある全和蘭内地人（一般白人及日本人を含む）の爲の地方法院 Residentie Gerechten を設けた。更に和蘭内地人兒童教育の爲に、本國に準ずる小學教育令を實施して在留内地人教育に多大の經費を支出した。

各州には再び知事を任じ、尙バタビアの南隣の秀麗の無憂地 Buitenzorg＝ボインデンゾルホを歷代總督の自適の地とした。斯くて和蘭總督は一度緩んだ爪哇に對する政治的把握を再び完成した。然し乍ら過去六年間に進出した英國商品及び資本の爪哇、セレベス、モルッカス諸島に對する勢力は容易に驅逐し得ず、一八二五年總督カペーレンは、遂に英商品に對して二十五％てふ當時國際貿易界に於て禁止的な高關税を設けた。

斯くて數年後には、和蘭領東印度諸島は、經濟的にも充分に和蘭的に統制せらるるに至り、一八三〇年にはデーンデルスと共に爪哇人に恐れられた有名な總督ファンデンボス Johannes Graaf van den Bosch の赴任を見るに至つた。

實に彼こそは武斷と搾取の權化として歷代總督中の異色であり、和蘭發展の前には凡ゆる障害を紛碎して母國の資本主義鐵蹄下に馬來諸島を蹂躪した硬骨漢であつた。

支那の元帝國、爪哇の滿者伯夷帝國、又元の歐洲統治等、亞細亞人諸國家の悠長淡白なる領土指導原理とは凡そ對蹠的なるものであつた。

卽ちファンデンボッス就任の一八三〇年の末、東南沿岸なるヂョクヂャカルタ州に空位を擁してゐたサルタン・マンクブミ三世 Sultan Mangkoeboemi III の時代、爪哇島民の敬愛を一身に集めてゐた王叔ヂポ・ネゴロ Dipo Negoro は、爪哇人及び一般回敎徒、就中ハヂ Hadji の熱烈なる後援により憤然として起ち、遂にファンデンボスの誅求に對して窮鼠猫を食むの反動に出でた。然し乍ら和蘭軍の爲に完膚無き迄に膺懲せられ、爪哇民族は此れを最後として遂に全く起つ能はざるものとなつて了つた。

尙ハヂとは回敎徒中、其の理想たる聖地アラビアのメッカに既に參詣して、一の資格を得た回敎敎師を指す者で、彼等の回敎的團結は、全馬來諸島は無論、印度、アラビア、アフリカ等に亘つて、二十世紀に於ても相當の勢力を潛めてゐる。

次にわれわれは主として十九世紀初頭ファンデンボスの創案に成り、今日に及んでゐる和蘭植民地政策の一般を瞥見しやう。

無論彼等の植民地を價値づけるものは、加奈陀、アメリカ諸國等、主として同種白人を主とする文化高き植民地を除いて、是等蒙昧なる異敎徒群る南洋植民地に對しては、其の經濟的、政治的又は軍略的本國への貢獻を中心とするものである。卽ち先づ豐穰なる爪哇諸島には耕作制 Cultuurstelsel の下に、和蘭の必要とする農產物を强制栽培せしめて一に本國の富强を圖つた。

次に彼等は、島民統治に際して、多くの場合直接之が行政には當らなかつた。賢明なる總督府は爪哇全島を二十二分して、其の大半に舊王侯を配し、一方的契約を以て其の所領を彼等に貸與し、以て

農産、納税。上納の義務を負はしめ、之が監視、强制力としては有能なる知事及び軍隊を各地に配置した。

無智無力な諸藩侯達は、其の契約履行の爲に所領を井田法に依り細分して、領民農奴に小作せしめ、全生産の六十％の上納額に達せんが爲めには、必死となつて農民を督勵酷使せねばならなかつた。無智なる農民達は、彼等に此の虐待を爲す者は一に王侯領主なりとし、其の苦衷を和蘭官吏に訴へるてふ次第であつた。

眞に和蘭は勞せずし功多き經濟原理の基本を巧みに行つてゐた。費したるは實に其の智腦なのである。更に威力ある和蘭政策の巧妙は、島民を如斯苦境に在らしめ乍ら、一朝對外的に、或は對內的に變亂あつた際は、直ちに和蘭の爲に身命を賭して戰はしめ得た事である。

又和蘭人の威力政令を全く承服し切つてゐる爪哇人上層は、其の義務を完うさんが爲には、所謂農民階級を奴隷の位置に陷れるに吝かなるものではなかつた。從つて古來米の島、南海の蓬萊島等と呼ばれてゐた豐かなる爪哇人の人々も往時の夢を追つてはゐられなかつた。未だ强大なる外國に襲はれる事なかつた在りし日華やかなる大滿者伯夷帝國時代の、消極的平安なる爪哇人の生活は、斯くして彼等には忘れられぬ甘きスーヴェニアとなるのであつた。

十八世紀以來、如斯生活に壓縮せしめられて來た彼等の生活の悲慘を、多少なりとも向上せしむべく一八一一年英國の爪哇總督ラッフルスは、島民の自由と獨立能力を回復す可き寬大なる政策を執つた事は既に述べた如くである。

和蘭本國ト蘭領印度トノ比較（面積）



歐羅巴ト蘭領印度トノ比較（面積）

然し乍ら數世代に亘る無智狀態に入間的自覺を失はしめられてゐた島民達には、人格、責任、能動等人間的特性、觀念は消磨して、鞭と强制無くば動く事無い者と化し、新しき英國の自由制、報酬制も、彼等には利用され得ず、恰も豚に眞珠の如きものであつた。彼等には勞賃よりも安眠に幾多の魅力が持たれたのである。

和蘭人に執り、先代同胞の多くの犧牲、國家的冒險、其れ等はひたすら母國、內地人の利益繁榮を希ふ爲にのみ費された尊きものであつたのだ。

母國の、卽ち內地人の權益を擁護發展せしむる政策のみが、其の現實國家皇室への忠であり、逝ける先靈に對する禮であるのだ。

先づ己を施して後他に及ぶこそ、人間の運命づけられたる行政上の自然の道程である。

而して認識不足に基く仁政、過度なる優遇、何れも撰ぶ可からざるものであり殷鑑遠からず南洋史に在り、其の智識無き者のみ、能く此の愚を犯す。さはれ歷史以來群雄猫額大の地に相竝立して、常に國際壓力大であつた歐洲諸國と異る東洋の、悠長裡に國家を作したる我國として、又初めての植民地統治經驗として、其れは無理からぬ經路でもあらう。(外地に對し過度の仁政ありとすれば)

卽ち一七二一年バタヴィアに於て一部島民を率ひて起つた混血兒エルベルフェルド Pieter Erberfeld 及び其の部下に對し、和蘭總督府は全員を斬殺の刑に處すると共に、和蘭への叛抗の罪の如何に恐ろしきものであるかを全島民に知らしめ、以て島民の絕對服從感念の强化に資し、且總督府官吏が、本國繁榮と何等關連無き如斯內部的不生產的事柄に勞力時間を浪費するの愚を避けたのである。

然して首魁エルベルフェルドは梟首の極刑に處せられ、一七二二年には、和蘭官憲に依つて燒打されたヂャガトラ街道なる彼の廢屋の跡に、彼の首は恰も銅像の如くに高く揭げられ叛罪の記念碑が建てられた。

其の後春風秋雨二百二十年、其の曝し首の下に刻まれたる銘文は今日判然と次の如くに讀まれるのである——

"Uijt een verfoeijlikte gedagtnisse tegenden gestraften Land verraader Pieter Erberveld sal niemant vermoogen te deeser plaaten te bouwen, timmeron, metselen off planten nu ofte eenigen daage. Batavia den 14 April to 1722"

「死刑に處せられたる國事叛人ピーター・エルベルフェルドに對する怖しき記念の爲め、何人も此處に栽培し、建築し、煉瓦を積み又は木を植うる事を現在將來永久に許さざる可し。バタビアにて一七二二年四月十四日」(昭和十七年五月日本軍により同首及碑は撤去されたり)

尚和蘭の植民地政策一班を知るの捷經としては、十九世紀中葉有名な和蘭休職官吏ムルタチウリ Multatuli 本名デッケル Eduard Douwes Dekker の作せる小說マクスハーフェラール Max Havelaar に詳しいものがある。之は今日に於て文學的にも價値ある讀物とされてゐる。次に第五章中の一節を紹介することゝする——

『…………和蘭政府は、政府を喜ばすところの物を其の土地に栽培する樣に爪哇人を拘束する。

然も其の產物は和蘭政府以外の何人にでも賣つた場合には、政府は之を罰する。然して爪哇人に對して支拂ふ可き値段は政府に於て一方的に之を決定するのである。歐羅巴への運賃は、特權を與へられてゐる商社が引受けてゐるから高くなる。更にレヘント（副理事官＝爪哇人王侯＝Regent　筆者註）への獎勵金が加算されるが故に買上價格は更に低廉なものとなる。……然して最後に於ける全體的な利益が考へられてゐるから、之を生み出すには、爪哇人が餓死しなければ良いと言ふ程度丈が支拂はれるのである。何故なら餓死されては產物が減少して了ふから……斯くの如くして憐れな爪哇人は和蘭政府とレヘントとの二重の權力によつて鞭打たれ、彼等の必要な水田から引戾され、之が再三飢饉の原因になるのである。……和蘭の富となる收穫を滿載した船の上には常に樂しげな國旗が飜つてゐる。…………飢饉？充分な豐饒さを羨まれてゐる筈の爪哇に飢饉？然り讀者諸君、僅かの年月の間に幾多の地方が飢饉に襲はれた。母は食物の爲に子供を商品にした。母が我子を食べて了ふのである』と。

尙デッケルは一八三九年より一八五八年に至る間バタビヤ總督府官吏たり、實說マクスハーフェラールの出版は一世を風靡して洛陽の紙價を高まらしめた名著である。（一八六〇年アムステルダムに於て出版）

第九章　十九世紀和蘭のボルネオ、セレベス及スマトラ回教諸國征服

白人のボルネオ發見は、支那、安南、滿者伯夷及び日本等亞細亞諸國の共れよりは大いに遲れて、一五二一年ポルトガル商船に依つて初めて爲された。其の後北方なるスパニッシュ比律賓との交渉あり、和蘭としては一六〇〇年モルッカス諸島に西葡聯合艦隊を破つたファンヌールトの艦隊が同年末ボルネオの西岸サンバス Sambas に寄港したのを以て嚆矢とする。

當時の馬來諸島國は、十三世紀以來ヒンヅー教の後を受けて勢力を振つてゐたアラビア人の影響を受けた回教徒に依つて支配されてゐた。

一六〇二年アンボイナに創立された和蘭聯合東印度會社＝和蘭東印度會社が、ボルネオのサムバス港に商館（ファクトライ）を設けたのは、一六〇九年であり、其の後一六三五年、總督ブルーヴェル Hendrik Brouwer は、其の東隣なるコチ＝クタイ Coti＝Koetei 王國に遠征艦隊を派遣して、之が征服を企てた事があつたが失敗に終つた。

當時沿岸を除いては未開の闇黑島であつたボルネオとの通商は、何等彼等に益する所が無かつたので、其の後は敢て列國の狙ふ所とならなかつた。

斯くて十八世紀に入つた一七一一年、總督ファンリーベック Abraham van Riebeeck は其の南岸

の要津バンヂャルマシン Badjermasin に着眼して、此處に商館を設けて僅かに通商を開始したが、降つて一七七一年、總督ファンデルパラ Petrus Albertus van der Parra は、サンバス港の南方にして、アラビア人アブヅルラーマン Abdoer Rahman の統治するポンチァナ Pontianak の有望なるを察して、此處に商館を設置して貿易を開始した。

然し依然として貧弱なボルネオ地方の產業狀態と、其の後不振に陷つた和蘭本國及び會社とは、再び之との關係を絕つに至つた。

和蘭がボルネオ島を植民地として獲得す可く活動し初めたのは、本國復興の一八一六年以後の事に屬し、歐洲列强の資本主義的活躍漸く華かならむとして、植民地の必要も亦益々激しからむとしてゐた時代である。如斯氣運の中に爪哇に赴任して來たファンデルカペーレン總督は、內に英國勢力の驅逐、內政の整備等に努力する傍ら、附近諸島に不斷の注意を怠らず、遂に一八二四年、三年計劃を以てボルネオ沿岸に連る回教諸酋長國の征服に着手した。

然して一八二七年には、比較的大なる東岸のクタイ Koetei 及び西岸のブルネイ兩王國を除いて殆んど之に成功し、サンバス、ポンチャナ、コタバル等、諸要津の大酋長所在地には商館を築くと共に、監理官 Kontroller 及び軍隊を駐在せしめて、該地方の政治經濟的權益の擁護發展に係はらしめ、次でボルネオ內地の資源調查に進出したのである。

斯くて和蘭の本格的ボルネオ征服行動は起され、爪哇本島に於ける知事と相似たる位置に在る監理官と駐屯軍の合作に依り、徐々に蒙昧無力なる內地酋長諸國に對する接觸を發展擴大して行つた。

而して十七世紀企てられて失敗した東岸クタイ王國の征服が完成されるに至つたのは、一八四五年レインスト Joan Cornelis Reijnst の時代であり、翌一八四六年監理官を派して正式に之を統べる事になつた。

然し乍ら其れと前後して、西北ボルネオのサラワク及びブルネイ王國地方には、ブルークの率ひる英國特務艦隊の活動目覺しく、其の勢力看過し得ざるものとなつたので、一八五九年總督パウドCharles Ferdinand Pahud は、其れ等を除く全ボルネオの蘭領たる事を事前に世界に宣明した。而して内にダヤク Dayak 族以下島民の叛亂を鎭壓平定し、十九世紀末には殆んど其の勢力内に掌握し和蘭帝國主義的發展上に於ける要地の一として經營するに至つた。

斯くて廣袤三十萬方哩、爪哇島に六倍する此の大島は、英國及び和蘭てふ南洋の二大勢力に依つて亞細亞人より奪はれ、一八九一年には、兩國のボルネオ分界條約が倫敦に於て締結せられたのである。今日を去る四十餘年前明治二十四年の事である。

尚ブルーク艦隊の北ボルネオ占領に關しては既に印度史第四章に於て述べた。

爪哇總督府が西北の大島スマトラの占領に着手したのも、ボルネオと同じく一八一六年、卽ち和蘭復興の年、十年の永き間在任した總督ファンデルカペーレンの時代である。

然して知る可きは、爪哇總督府の任務は、其の本國及び所領の發展的積極的維持てふ觀點より、其

の所領のみの統治を以て滿足せらる可きものに非ず、本國より派遣せられたる有能進取の高級官吏達は列强植民地連る南洋に於て、利害相錯綜せる國際情勢に對して、常に深重なる考慮を巡らし、以て其れ等の政治經濟的虚隙に乘ず可き不斷なる進出に熱中するものであつた事である。

從つて總督府官吏は高級幹部に進む程、其の任務の重大さに依つて寧日無き努力と勉學に忙しかつた。故に自國の世界的位置、自領の南洋的位置を、全的關聯に於ける部分として正しく把握し、巧みに善處するの機會と能力を啓發せられて行つた。

悠長尊大なる日本の植民地高級官吏が、部分の意義は常に全的聯關に於てのみ客觀性を見出し得可きを知らずして、狹小なる認識範圍に蒙昧なる自負を抱いて其任に就けるとは凡そ異るものであつた。智的に經濟的に、貧弱なる屬僚下級官吏の能力を過分に要求するの必要も亦無論なかつた。

卽ち爪哇島を主領としてゐた總督府官吏の關心が、其の發展的維持として常に附近諸島の獲得に注がれてゐた所以であり、頓て其れが實施され成功するに至つた所以である。

卽ちファンデルカペーレン總督は其の就任の翌一八一七年より、旣に附近に迫つて居た英、佛勢力の機先を制してスマトラ進出に着手し、一八二一年には其の中部なる酋長國メナンカブー Manag-kabo = Menangkaboe を保有し、次で一八二三年には最も重要なる東南パレンバンの占領に成功し、更に一八二五年には西南岸タパンデリ Tapandeli ナタル Nathal アェルバンヂス Aelbandis パラン Palan ベンクーレン Benkoelen 諸港を確保して、經濟的發展地を擴張し、遂に北方マラッカに入つたのである。

然してメナンカブーを、其の首都ボンヂョル Bondjol に亡したのは一八三七年であり、スマトラ内地のヂャンビ Djambi＝淺卑を攻略して之に據り、徐々にシンケル Sinkel バロス Baros 等を攻略したのは、其の前々一八三五年の事であつた。

又北端の强豪、回教亞珍王國に隣接する諸回教酋長部落を、武力或は謀略を以て征服懷柔したのは、一八五九年パウド總督の時代である。

和蘭に限らず一般白人諸國が、征服乃至保護下に入れむとする地方には、特務別働隊たる宣教師或は兵を屯する商館を建設して、經濟的武力的占據をなすを常例とした事は既にわれわれの知る所であるが、佛蘭西が有能精悍なる人物を、巧みに宣教師を僞裝せしめて活躍せしめたるに比し、和蘭は特に商館を要塞の如き有力なるものに築城して、確たる前衞たらしめた事に特徵を持つ。

斯くて十九世紀中葉にはスマトラの大半を占領して、爪哇總督府の權益機能はボルネオをも加へて大いに擴大强化されたのであるが、十六世紀以來西北に蟠居して頑强なる亞珍王國の占領には、多大の犧牲を拂はねばならなかつた。

卽ち豫てより亞珍王國攻略の機を狙つてゐた爪哇總督府は、一八七三年、偶々同國內に起つたアラビア族對馬來族の政爭に、勢力二分して弱化せるに乘じ、總督ラウドーン James Loudon は直ちに全爪哇艦隊と、忠誠なるクタイ族以下の島民軍を動員して之が征討に急派したのである。此の報に驚いた亞珍國民は、祖國の急に應ず可く忽ち相剋の反目を氷解して團結し、勇敢なる戰鬪を以つて遂に



在バタビヤ　エルベルフエルドノ碑

和蘭軍を撃退したのであつた。因つてラウドーン總督は直ちに増援軍の急派を本國政府に電請し翌年其の來着を待つて、增大せる自國領内島民軍との聯合大遠征隊を組織して再び亞珍雪辱の戰に上らしめた。

時の亞珍王パングリマポリム Sultan Pangerim Polim の奮戰力闘は、和蘭軍の鋭鋒をして容易に成らしめず、兩國の抗爭は實に十七年の長きに亘つたのであるが、遂に一八八〇年ランスベルヘ Johan Willem van Lansberge 總督の時代に至つて、亞珍王國の大半は刀折れ矢盡きて和蘭の軍門に降るに至つた。而して同國各地方が完全に和蘭の手中に入つたのは一九〇三の事である。

斯くて十一世紀以來八百年の永き亞珍王國、又馬來諸國中最後の獨立國家としての亞珍王國は二十世紀に入り漸く亡び、和蘭史中に其の本然の姿を消滅し逝いた。

十三世紀亞珍王國が元帝國に藩屬し、十五世紀滿者伯夷帝國に統治された事あるは、既に中世史上に於てわれわれの知る所である。

然して廣大十六萬四千方哩、和蘭本國に十二倍する世界第二の此の大島が、全く和蘭領となつたのは其の後二十餘年の一九〇三年、和蘭陸軍中佐ファンダーレン Van Dalen の率ひる軍が、西岸なる回教酋長國の王モハメッドダウト Sultan Mohamet Dawot を仆した時であり、今日より僅か三十餘年前の事である。

然し和蘭が馬來諸島國に對する三百年の永い征服事業の中、最も苦心したのは此のスマトラ、特に其の豪勇亞珍王國の征服であり、其の所要年月は前後合して五十年、其の經費二億盾、戰死者二千五

百（島民兵二千、和蘭兵五百）てふ大いなる犧牲を拂つたものである。
何等優遇を與へずとも其の位置に安んじて、和蘭への忠誠を誓ひ二千の戰死者を出す迄戰はしめた爪哇總督府の政策手腕の偉大、學ぶ可きもの甚だ多きを知るであらう。
然して英國と共に倭小なる本國ながら、世界一流の大植民地王國たる和蘭は、二十世紀の今日に於てすら、英國に於ける濠洲大陸（實に全歐羅巴の一・二倍に近き大陸）の如くに、スマトラ及びボルネオを、將來の開發資源地として保有するの國家的餘裕を持つたのである。
スマトラ東南の大邑パレムバン地方を除き又ボルネオ沿岸及び內地の一部炭田鑛山を除き、實に本國に十餘倍する兩大島は、一九三七年に至るも可惜未來世の用に供す可く殆んど未開の儘に確保されてゐるのである。二十世紀現實生活に惱む日本、伊太利、獨逸等の植民地尠き列强が、不公平なる植民地の再分割、平分等の問題に關心する理由は、此處に充分に見出されるのである。
和蘭は爪哇を本島と稱して大いに開發し、ハルマヘイラ Halmaheira 新ギネア Nieuw Guinee ボルネオ、スマトラ、セレベス等の附近馬來諸島は外領 Buiten Bezittingen と稱して、悠々來る可き第二段の活用地に豫定してゐるのであるが、英國と共に、和蘭王國の前途は斯くて益々洋々たりと言ふ可き歟。
尙ボルネオの東方なるセレベス Celebes 島は、同じき爪哇中興の名總督ファンデルカペーレンに依つて、一八二四年其の北方の一部回教酋長國家を懷柔して勢力圈內に抱擁した。

又モルッカス諸島も曩に述べたる如く、其の利益は十七世紀以來和蘭の獨占する所となつてゐたのであるが政治的に其の獨占し初めたのは、十九世紀ファンデルカペーレンが、武力征服したサバロア島民の反抗鎭壓の一八一七年である。モルッカス諸島が政治的に全く和蘭總督府の統治下に入つたのは、十九世紀中葉總督ロチウセン Jan Jacob Rochussen が、提督ファンスイーテン Van Swieten をして同諸島未歸順酋長部落を征服した一八四九年であつた。

× × × ×

尙羅香林＝羅芳伯所建婆羅洲坤甸蘭芳大總統考＝なる論文に據れば、淸の乾隆三五年より同六〇年に至る頃、卽ち一七七〇年より一七九〇年に至る間、ボルネオの西南部地方には、支那廣東人羅芳伯なる者の君臨する一華僑の王國があり、ポンチャナを首府として居た由であるが未だ確たる考證を得てゐない。然し乍ら筆者としては諸種の狀況形勢より觀察して是は當然有り得可きものと信じ敢て此處に記す。（四頁＝民國二六年一月號參照）

第十章　和蘭植民政策の社會學的意義

人種、國家、民族、地理等の差異に因る政治經濟的利害關係の相違は、其の各々の有する立場に基いて、互に相異る又は互に相反する正義觀、理論を生むものである事は、其れ等が各々社會學的原理に則り生きる人間達の生物學的又心理的結合であるてふ現實に於て、客觀的な妥當性を其の發展の中に持つものである。

從つて敎育、知識、技術、衞生等の文化的要素は、和蘭の如きコロナイジングパワーに執つては其の存立、發展上に於て不可缺の重要性あるものであつたが、是と異り或は相反する立場に在る和蘭領馬來諸島民に對しては和蘭に對立し得ない能力程度に於てのみ、否、和蘭隆盛の欲する政策遂行の助成的方向に於てのみ必要なるものであり、馬來諸島民自主的方向に於ては無用の長物であつた。

故に其れ等植民地の統治に當つては、初めより內地人同胞及び一般白人に對すると、島民及び一般有色人種に對するとは、異る二種の差別ある法令權益を以て之を迎へ統御して行つた事、既に第六章に於て述べたる如くである。

然して其の植民地統治法は、一八五四年ファンツウィスト Albertus Jacob Duijmaer van Twist 總督に至つて一部を改訂して、島民の奴隷制を緩和したが、一八六〇年には同制を廢止する一方、和蘭內地人利益の爲に、爪哇本島に阿片の專賣制を施行するに至つた。

尙、總督は本國に於ける政黨、政變より獨立し、任期五年を原則としてゐるもので、其の間爪哇に在つて只管本國及び馬來自領の發展的維持に努力するものであつた。

又總督は用兵、外交、統治上に極めて高度の權能を有して殆んど獨斷專行の自由と信賴とを持つてゐたが故に、歷代總督は其の植民地統治法に依り、莫大なる收益を以て國庫への援助をなし、以て全和蘭の政治經濟的補强に資する事が出來たのである。

從つて富强なる本國政府は、其の寶庫にも等しき爪哇總督府管下の官吏に對しては、充分以上の高級を以て厚遇し得、在留母國人も亦優待せられて、總てが豐かなる生活に惠まれてゐたが故に、彼等

同胞は官民を不問、常に誇らかに本國への感謝と忠誠の心を以て各自の任務に精勵する事が出來た。
然し乍ら英領下に喘ぐ印度三億民衆の其れの如く、世界に秀でた天産沃地に在り乍ら爪哇諸島民四千萬の生活は、强制、搾取の諸機構の下に、平年に於てさへ豐かではなかつたが故に、饑饉不作の年には忽ち島民一般は食糧難に見舞はれるのであつた。
其の最も甚しかつたのは一八四八年より一八五〇年に亘る全島的大饑饉であり、數百萬の衰弱者と各地數十萬に達する餓死者は全島に滿ちて生地獄と化した。
十九世紀世界文明より餘りにも懸隔ある島民の無智なる事は、植民政策上却て不利であると共に、對外上も面白からざるものあるによつて、一八六六年、總督マイエル Pieter Mijer は初めて島民敎育を志して三年制の公學校令を發布し、島民の有志を之が敎師に任ず可くバタビア南隣なるバンドン Bandoeng に島民敎師養成所 Kweek School を設けた。
又比較的智度進んだバタビア市民の爲には、高等市民學校 Hoogere Burger School を設置したのであるが、爪哇島民の敎育制度の成つたのは、實に和蘭領となつてから二百餘年の事である。
尙島民法中の刑法の一部が緩和され、又彼等の島內移住、旅行等が制限附で許可されるに至つたのは一八七二年ラウドン總督の時代である。
十九世紀末葉に於てすら、如斯苛酷な境遇に生活を送つてゐた一般爪哇人の爲に同情惜く不能、憤然起つて彼等の自由を叫んだのが元爪哇總督府の官吏にして、後辯護士となつたファンデフェンテル Conrad Theodor van Deventer である。

一八九九年、彼は彝倫の義務 Eer Eereschuld なる書を著はして、餘りにも慘酷なる和蘭の植民地政策を駁し、以て人道的倫理的植民地政策の實施を力說したのであつた。

一九〇四年、中部地方なるスーラカルタ Scerakarta＝Soloヂョクヂャカルタ Diakjakarta＝Djocjaの舊土侯領を除いた他の十五州に、州評議會 Gewestlijken Raad が設立され、制限的なものではあつたが島民の參政法が創案せらるゝに至つたのは之が影響の一と見られた。

尙、一九〇三年卽ち明治三十六年に於ける爪哇島人口三千二百萬に對して、初級公學校（日本領臺灣に於ける蕃童教育所に相似たるもの）三百二十三、一校收容兒數平均二百名で、就學數全島にて僅か六萬五千であつたが、更に之を同年に於けるボルネオ島民百五十萬に就いて見れば、同じき程度の公學校が全領に僅か二十一校に過ぎぬ僅少なるものであつた。

此れを日本領となつて僅か四十年の、一九三五年に於ける臺灣島民（九三％閩粤族）が、母國人と同等なる高度の公學校教育を受け、兒童の就學率は六十％に上り、教育費は總督府全豫算額の二十％を占むるの隆盛と比較せられ度い。

卽ち臺灣が世界植民地史上曾て無き同仁政策の下に、世界一の多幸なる植民地人として、歐洲列强に認めらるゝ所以である。若しも和蘭政府が、僅か十萬に過ぎない在爪哇同胞に對して、之に三百五十倍する三千五百萬の島民と、何等ハンディキャップ無き同等の待遇と位置を與へたとする時、同胞は島民の壓倒的優勢なる迫力に會つて、忽ち共の經濟的、延て政治的優越を崩壞沒落せしあられたであ

らう。植民地獲得の爲に、曾て費されたる本國の、又同胞の、經濟的、生靈的偉大なる犧牲を沒却し去るが如きは、獨尊的主我的和蘭政府の敢て爲さざる處であり、植民地獲得の目的、理由も亦其處に彼等には判然たるものがあつたのである。

從つて同胞は植民地に於ては一人のルンペン無く、生活苦に基く犯罪者も無かつた。況んや貧窮同胞救助の爲の救護所等に於てや。統治國民としての和蘭人の厚生と威容の寛大、延て馬來諸島民の彼等及び其の國家に對する尊敬と服從は、其處に根强く培はれたのである。

尙知る可き重要な事は、十七世紀以來既にそうではあるが、和蘭は一八六四年以後南洋植民地官吏の養成敎育を目的とする特別科をライデン大學內に設けてゐた事である。

卽ち政府は同學內に豫選入學せしめた官吏に對して、南洋植民地統治上必要なる南洋事情、政治經濟、地理、民族學、語學等を各々專門の敎授に依つて講義せしめ、以て列强植民地接相して、利害相錯綜する南洋に於ける自國領の、發展的維持經營に遺算なからしめん事を期したのである。

斯くて一定の習學期間を卒へた彼等は、更に嚴重なる詮衡を經て後、初めて高級を以て有能なる植民地官吏として任用せられたのである。

又島民の無智と溫順は內に顧る所尠いが故に、總督府は常に廣く南洋の大局に留意して其の國策遂行上の本部となる事が出來た。

從つて高級幹部に上る程、其の任務は多忙重要なるものとなり、其の有能なる智力は充分に發揮應用せられたのであり、總督府の領土統治其のものに對する容易は、大いに生產的な對外權益擴大に其

の精力を注ぐ事が出來たのである。

尙如斯は獨り和蘭のみならず英國、佛蘭西等白人列强の各植民地總督府に對して言ひ得るのである。

第十一章　ニウギニア諸島の黎明

廣大肥沃なる印度、馬來諸島を獲得して之が開發に暇なかつた列强に執つて、其の東南遙かに廣がる未開地の大島ニウ・ギニア New Guinea は然したる魅力を持たなかつた。卽ち二十世紀現代に出るも未だ抛擲せられ勝なる所以である。

彼等がテルナテ王國 Ternate Sultanaat の統治下に在り、一般馬來人に依つてはプアプア又はパプア Papua と呼ばれてゐる同島の存在を初めて知つたのは、印度ゴアのポルトガル艦隊がマラッカ遠征を企てた一五一一年の暮であり、偶々ハルマヘラ Halmaheira=Gilolo 島の要津にしてサルタンの王城あるテルナテを經て東航したポルトガル人ダブロー Antonio d'Abreau に據る。

然して白人が同島に足跡を印したのは、一五二六年同じくポルトガル人ドメネース Don Jorge de Menesesが暴風雨を避けてパプア西北ベラウ半島 Berau Peni. の屬島ワイギヲ島 Waigyiou Is. に上陸したの以て嚆矢とする。

然して彼は其の島を Isla de Versya と呼んだ。

又パプア本島への上陸は一五四六年ドロータ Ynigo Oritz de Rotha がベラウ半島北岸に上陸した

のを以て最初とし、同時に此の島を Nova Guinea と命名したのであるが、今日ニウギニアと呼ばるる所以である。卽ち西部アフリカのギニア Guinea に住む島民と其の生活、容貌甚だ相似たるものあるを以て彼は斯く呼んだのであつた。

尚オートリウス Ortelius 一五八〇年の地圖に據れば、既に一五三七年に於てニウギニアは、既にトレース Luis Vas de Torres に依つて知られて居り、南ニウギニアと濠洲大陸北端のヨーク半島 York Peni. とを劃する海峽には、彼の名が冠せられてある。卽ち今日のトーレス海峽 Torres Straits である。

而して此の時代に於ける彼等ポルトガル人或はスペイン人のパプア認識は甚だ漠然たるものであり、其の內容に就ては殆んど白紙と言ふ可く僅かに一部島民との間に交易が行はれたに過ぎない。今日の蘭領パプアが漸く和蘭人の間に知られたのは十七世紀に入つてからであり、當時新興の意氣に燃えてゐた和蘭王國の一航海者ヤンツ Willem Jansz は、一六〇二年アンボン(アンボイナ)に創立せられた和蘭の活動機關たる東印度會社の大勢力を背景として南洋各地の資源探險に從ひ、一六〇五年遂に此の島を發見した。降つて一六一六年東印度總督リアール Laurens Reaal の時代には、ルメール Jacques le Maire スハウテン Willem Schouten 等が同島の沿岸を調査した。フイジー諸島を初めポリネシヤの諸島嶼は彼等の發見に基くものが多い。

然して一六二三年夫の有名な總督クーンがモルツカス諸島を占領す可く、其の統治者にして頑强なるテルナテ島のサルタン征討艦隊を派遣した時、同艦隊の一司令ヤン カルステンツ Jan Carstensz

は東航して西岸ニウギニヤに及んでゐる。

其の後和蘭軍と南海の雄テルナテ王國軍との闘爭は容易に勝敗を決せず、加ふるにテルナテ王國に對しては南隣チドール Tidore 王國の後援あり、和蘭軍は益々苦戰に陷つて覇業成らず三十餘年を經た。斯くて武力に訴ふる事の不利なるを知つた和蘭總督は、威嚇と共に懷柔の策を案じて無智なるテルナテ以下諸王の鋭鋒を避け、遂に一六六〇年總督メツイケル Joan Maetsuyker の時代に同地方に於ける和蘭の特權を認めるの條約を締結せしむるに至つたのである。

セレベス以東パプア西部に及ぶ和蘭勢力の設定玆に初まる。

其の後パプアは一七〇〇年に英人ダムピーア William Dampier に依つて其の北岸探險が行はれ、一七六七年にはド・ブーゲンヴィール L. A. de Bougenville 等に依つて多少開發が行はれた事もあつたが殆んど抛擲せられたまゝ十九世紀に入つたのである。

ハルマヘラ島の東方なるワイギヲウ島と、パプア西北のベラウ半島の間を劃する海峽は今日尚ダムピーア海峽 Dampier Str. と呼ばれてゐるのを見るであらう。

尚一七九三年には英國東印度會社がパプア西北の大灣ヘールフインク灣 Geelvink baai 中のマヌスワリ島 Manuswari Is. に駐兵して其の領有を宣言した事があつたが、其れは只單に名目上の宣言に終つた。

南海の寳庫にして和蘭興隆の物的動力となつた爪哇の大資源開發經營に暇無かつた和蘭王國が、漸くパプアの存在に意動いたのは十九世紀も半ばを過ぎた一八五五年であり、一八五八年に初めてバイ

ブルと武器とを持つたユトレヒト宗教團 Utrecht Missionary Society の一派をベラウ半島なるポート・ドーレイ Port Dorey に送つた。

其の後二十一年、一八七九年には、同地方の和蘭的活用に反抗する島民撃滅の爲にバタビヤ總督ランスベルへ Johan Willem Lansberge はファン・デル・クラブ P. van der Crab を司令官とする遠征軍を同島に派して、反和蘭的なる島民を所謂夫の Extinction Policy を以て掃蕩した。

和蘭が今日の如き、西半パプアの領有宣言を發して東方パプアに動いてゐた、英、獨兩國政府の諒解を得たのは一八八四年の事である。

然し乍ら西南パプア、セラム、アルー Aroe 等バンダ海 Banda Zee 諸島を領有統治してゐたチドール王國 Tidore Sultanaat が、完全に其の主權を和蘭に讓つたのは一九〇五年であつた。

蘭領パプアの史的概略は上述の如く約二世紀に亙るものであるが、今日英領（含北半濠洲委任統治領）となれる東半パプアの歐羅巴史的開闢は、一八八四年、和蘭の緯度一四一度以西の領有宣言と共に成れる、東北半の獨領卽ちカイザーウイルヘルム島 Kaizer Willem's Land 及び東南半の英領確定時に在ると言ひ得る。

從つて現代に至る迄其の領有は未だ六十年に滿たない淺いものである。

而して獨逸帝國は其の翌一八八五年、獨逸ニウギニヤ勅許會社 German New Guinea Co. (Chartered) を設立して、カイゼルウイルヘルムスランド（パプア本島）及び東方海上に連るビスマルク諸島 Bis

marck Archipelago を併せ統治するに至つた。

他方英國は一八八八年、同島を南に近き濠洲大陸のクイーンスランド府廳 Govt. of Queensland の管下に併合し一九〇六年パプア廳 Territory of Papua と改稱し、濠洲政府直轄諸州に準ずる一地方とした。世界第一の大島パプアは斯くて、當時の三大コロナインヂングパワーに分轄せられ、獨逸を除く英及蘭の二國は、他に有する大植民地經營に全力を盡し、此の未開の大豐土には殆んど觸手の必要無きまゝに現代に入つた。

第四部　印度支那諸國

第一章　十七世紀暹羅王國

十四世紀建國以來暹羅は、或は緬甸と苦戰し或は柬蒲塞を討ち、印度支那半島の强國として其の中央湄南（メナム）河下流アユチヤの都に榮へ、殊に十六世紀末葉プラ・ナレスアンの善政と日本人の任用は、益々其の國勢を昂らしめて近世に入つた事は既に中世史上に於て我々の知る所である。

然るに十七世紀に入つて間も無い一六〇五年、英君ナレスアンも儚く逝いてエカトツアロート Ecadzalot 之を嗣いだのであるが、僅か六年にして王族プラ・チヤヲ・ソンタム Phra Choa Songtam の爲に王位を簒奪せらるゝに至つた。

卽ち一六一〇年新に暹羅國王となつたソンタムは、其の敏腕と賢明を以て、外に漸く衰運に傾いた明政府の干渉を廢して獨立國としての面目を具ふると共に、大いに南洋諸港との貿易を興し、內に佛敎を普及し政令を改善し。以て國民生活の向上に資したのであつた。

當時に於ける暹羅の國際關係は、ポルトガル、和蘭の歐洲勢力未だ侵入せず、中世以來永き支那政權漸く其の影を潛め、獨り渡來日本人團の勢力のみ大いに振つてゐた。

尙十七世紀に於ける暹羅國の範圍は、今二十世紀に於ける其れに約二倍し、西はサルウィン川及び馬來半島を結ぶ線より、東は遠く現佛領印度支那たる湄混（メコン）川以東に、北は遙か雲南に及ぶ廣大なる面積を統治してゐたものである。

ソンタム王は特に廉潔にして力ある日本人との親交を增進す可く、一六二六年には使節坤納賓替門を德川幕府に派遣して寶物を獻じ、日本人の盡力を謝し、且今後の指導誘掖を求めた。

ソンタム王治世の頃、勢力あつた日本人には津田又左衞門王城の近衞隊長として、又岩倉平左衞門日本人町統領として在り、在住約一千の日本人は政治經濟上に相當の力を持つてゐた。

順調なる國步、豐かなる國民生活、人々はソンタム王の善政を讃えて大王の尊稱に呼んだ。

南支那、呂宋、臺灣、印度支那諸港との貿易に活躍してゐた倭寇の一雄、山田仁左衞門長政が、速水又三郎、玉屋忠兵衞等と共に臺灣よりアユチヤなる暹羅國都に近い日本町を訪れ來つたのは此の頃である。然るに一六二五年、暹羅西南の屬領六昆（リゴール） Ligore 太泥（パタニー） Patany 逸比留（イビール）（現ペチァブリ）等の諸藩王は聯合して突如叛旗を飜し、暹羅國二十年平和の夢を破つた。

ソンタム王は大いに驚き直ちに鎭壓の兵を急派したのであるが空しく擊退せられ、六昆以下の聯合軍は勝に乘じて程遠からぬアユチャの攻略に突入し來り、首府は將に累卵の危きに瀕した。ソンタム王は直ちに暹羅國軍の總動員を行ふと共に、重臣津田又左衞門に命じて日本人救援軍を參加せしめ共力之に當つた。

豫て山田長政の才幹を認めてゐた津田又左衞門は、直ちに彼を暹羅及び日本聯合軍の總司令とし、

暹羅國存亡の大事に當らしめた。

卽ち山田長政は、時の日本人町統領岩倉平左衞門以下、多くは一六〇〇年卽ち慶長五年關ヶ原の戰に破れた豐臣家の殘黨遺臣たる今村左京、有賀門太夫、速水又三郎初め大阪屋助作、鉤屋庄右衞門、山田仁兵衞、大塚十左衞門、明智十太夫等一騎當千の將士を各隊長に任じて暹羅兵及び日本兵を指揮せしめ、進擊し來つた六昆聯合軍をアユチァ郊外に邀擊して粉碎し、更に敗走の敵を追つて徹底的膺懲を加へた。

內に志を得ずして遠く海外に發展してゐた彼等日本商人及び浪人武士團は、此れを機會として大いに其の驥足を伸し、暹羅國の爲に奮戰して輝かしき勇名を馳せたのであるが、就中若くして豪膽武略ある司令官山田長政の偉名大功は、暹羅國內亂の鎭壓者として、又暹羅國復興の恩人として全國民の厚き感謝と信賴を受くるに至つた。國王ソンタムの寵愛優遇も亦一身に集まり、プヤ・セナヒムク Phya Senaphimuk の高き位階を與へられて其の絕大なる信望と權威を顯彰せられたのであつた。又其の王姬を娶はされて暹羅王族＝掩普剌＝ Opra に列し、國政に與ると共に近衞隊長に任ぜられたのであるが、ソンタム王の若き王姬の赤心は、旣に迅くより垣間見たる男々しき北國の勇士、長政の秀麗威容に人知れぬ思慕の情熱を寄せてゐたのであつた。

其の後間も無くオプラ山田長政は、曩に鎭めた六昆、太泥及び逸比留以下ナコンシタマラート地方（現シンゴラ Singora 地方）の藩王に封ぜられ、今日の馬來半島の大部を統治するに至つた。日本人として最初の暹羅國高官となり、日暹貿易を興した英傑津田又左衞門は、已れに勝る有爲なる後繼者

山田長政を見出して大いに喜び、其の後暹羅官民惜別の中に日本に歸還した。

斯くて一六二八年に至るや、ソンタム王は當時十五歲の嗣子チェッタ Jetta の後見を、六昆なる王族山田長政に依賴しつゝ崩じたのであるが、王位繼承に關して確たる法の定め無き暹羅王室は、其の後王弟アチチウォン Athitywong を迎へんとする陸軍大臣派と、王子を推さむとする權臣ピャ・シー・ウォラウォン Phya Sri Worawong 派との間に紛爭を生じて熄まず、遂に暹羅國の實力を握る先王の重臣、長政の許に使者を派して最後の決定を乞ふに至つた。此の頃長政の一子阿因（オイン）は亦逸比留（イピル）藩主に封ぜられてゐた。

尙此の日本勢力下の暹羅時代たる十七世紀前葉、白人列國は旣に一五一一年を先驅として來つた印度ポルトガル船以來、屢々其の虛を狙つて暹羅諸港に遊弋し來つたものである。而して十七世紀に入つた頃には馬來半島南部マラッカ地方に勢力を獲てゐたポルトガル、和蘭等が北上して侵略の手を進め來つたのであるが、確たる日本人保護下の暹羅は、容易に之を擊退して外侵を受くる事無かつたのである。

更に山田長政時代暹羅國にはポルトガル、和蘭、印度、佛蘭西等の諸國人が傭兵として仕へてはゐたが、無力且不信でソンタム王以下一般暹羅人より信任無く極めて低い位置に在つた事を附記する。

第二章　オプラ山田王國と德川鎖國令の亞細亞的影響

ソンタム王後嗣に關して最後の決定權を持つた六昆なるオプラ山田長政は、日本に於ける家督相續

順位に倣つて王子をして繼承せしむべきこと、並に王弟は是が成年に達する迄の後見者たる可き事を決定回答した。

即ち同一六二八年、若き王子チェッタは卽位して暹羅國王となつたが、之に代り最も勢力を得たのは之を推した權臣スリヲラヲンであるが、彼の幼帝推薦の眞意は、一に其の後に於ける攝政權延て王位の簒奪てふ野望に在つたのである。

卽ち王族山田長政が遠く視界の外に在るを幸に、反對派たる王弟アティチアン及び陸相一派の排斥暗殺を決行して暹羅國の行政兵馬の大權を掌握し、次で殘る大敵山田王家一族とチェッタ王を暗殺せんとするのであつた。翌一六二九年スリヲラヲンは意を決してデェッタ王暗殺を斷行し、封地六昆に在つて故知らぬ長政に對しては、アティチヲン自らの登極認容を求めたのであるが、王弟の存在を無視した此の要求は無論長政の容るゝ所とならとならなかつた。

老獪なるスリヲラヲンは敢て長政の反對に逆ふ事無く同意を裝ひ、祕かに自己の野望達成の祕策を巡らしつゝ機會を狙つてゐたが、遂に翌一六三〇年、暹羅國第一の重臣長政の毒殺に成功し、城外に在つて內情知らぬ日本人一般を巧みに懷柔した。

スリヲラヲン多年の宿望は斯くて漸く達成せられ、翌一六三一年暹羅王位に登つた。プラ・チャヲ・プラサト・トーン Phra Chao Prasat Thong 卽ち彼である。

然し乍ら事は漸く曝露され、長政の王子阿因 Oin 以下は大いに憤慨し、暹羅王國の爲め、又父王の復讎の爲、一六三四年斷然逆臣スリヲラヲン討伐の兵を起し、馬來半島北部なる六昆以下諸藩及び

麾下日本の陸海兵を率ひて、東方アユチャの首都に破邪顯正の軍を進めるに至つた。

アユチャなる日本人町も亦之に合流して、プラサト・トーン王の暹羅軍との間に戰端を開き、アユチャ地方は、又馬來半島沖は壯烈なる戰場と化した。

然し乍ら十六世紀以來一世紀に亘る日本人勢力も、長政既に在らず、加之本國に於ける鎖國政策に影響せられて、衰運に在り、又暹羅王國の實權は既に長政の死の四年以前よりプラサト・トーン王の握る所であり、阿因の義軍も後援續かずして遂に敗れ、其の有する三百餘艘の艦船に乘じて東方に逃れたが途中四散し、阿因一行は東蒲塞に入り、其他は占婆、安南、或は遠く呂宋諸港に壞走した。

事既に破れた阿因は、東蒲塞に於て再起を圖つたのであるが不及、最後迄追從し來つた速水又三郎、大塚十左衞門、明智三太夫等の侍臣と儚く同地に自刄し果てた。

斯くて十六世紀以來榮え來つた暹羅に於ける日本人の政治的勢力、日暹貿易に依る經濟的利益は崩壞し、十七世紀初頭に於ける日本浪人山田長政の努力に成れる馬來半島の山田王國も空しく南海の夢と消え逝いた。（著者は後日在盤谷時代に調べた山田王國の哀史を物したいと思つてゐる）

國家的事業として、旺盛强大なる開拓政策を以て南洋諸國に臨んでゐた和蘭、英國等の勢力が進入し來つたのは其の後間も無い事である。僅か一艦隊と五年の歲月とを以て、英人ブルーク James Brooke がボルネオなるサラワク國の王となり、今日全く英國領として其の版圖を遺せるに比し、約一世紀の長年月と一千に達する日本人の、暹羅一國に對する活動は僅かに一時的山田王國を築いたのみで、今日何等の政治經濟的勢力の遺跡を殘さなかつたのである。

當時既に人口に對する生產の程度が歐洲列國の其れに近くして然程に豊かならず、從つて國內に於ける生存競爭も亦相當に激烈であつた日本が、若し爲政當局に高き對外的政治經濟的智識ある者を持つたならば、所謂南蠻諸國に不當の恐怖を抱く事も無く、是等海外發展の先驅功勞者に對しては、白人列强の如く其れを國家的大事業として行ふ事無しとするも、尠くとも國策的見地より一臂の後援を與ふるに吝かで無かつたらうと思はれる。

卽ち德川幕府が漸く克ち得たる日本列島內治に汲々たる事無く、廣く目を關係深き支那及び南洋諸國の大局に注ぎ、既に其れ等との貿易に巨利を博してゐた松浦、島津、加藤等諸大名及び商人其の他を活用し、スペイン、和蘭等に比して人種的に地理的に極めて有利なる南洋貿易の發展策を執つたならば、賢明にして不屈なる彼等日本人は盛んに大商船を驅つて南海諸國に活動し、其の經濟的利益は大名、商家其の者を大ならしめるのみならず、德川幕府の日本をして世界の富强國たらしめた事歐羅巴なる和蘭、英國以上のものと成り、麾下封建諸侯を制壓するにも何等の苦痛を感じなかつたであらう。

古來狹少なる島國に在り、農產面積尠く人口多きが爲に鍛練せられたる生存競爭的進取戰鬪の精神と智能高き尙武の日本人は、又海岸線の多きと陸上產物を補ふ可き海運漁業の發達せる海國日本人は、歐洲列國の如き常に國際場裡に智能武力を促進せしめられて、高き文化を釀成してゐた優位性に對抗しても、直ちに之を吸收消化して己がものとなし、以て彼等白人諸國に相對して降らぬ文化的又武的

發展能力を充分に內藏してゐたものである。是は、十九世紀末に於ける白人文化の消化に因る日本人が、飛躍的發展を爲し得たるに徵しても明かなる如く、況んや當時に於ける僅かなる文化的武力的能力の差は、容易に之を超躍し得るものであつたのだ。

然して若し斯くあつたとする時、歐洲に於ける產業革命、資本主義は直ちに日本にも輸入せられて其の文化的延て政治的發展は隆々として亞細亞に振ひ、廣大歐羅巴に二倍する南隣南洋諸國を女々しくも小數白人諸國の爲に蹂躙利用せらるゝの十六世紀以來今日に至るが如き醜態は演ぜらるゝ事無かつたであらう。更に東西兩文明人種の接觸に依る世界文化の發展は、遙か今日の其れを凌駕せる偉大なるものとなつてゐたであらう。

斯くて又西洋諸國と相比肩して進步向上せる日本文化は、他の亞細亞諸國をもリードして、今日の如き醜きまでの舶來の思想禍を蒙る事無く、又全く語系を異にする英語其の他を自國內に於て第二國語とする必要も、世界文化に接するの迂路曲折を步むの愚をなす必要も生じなかつたのである。

況てや既に白人の爲に大半を領有されたる南洋を顧みて俄かに自國及び亞細亞保全の爲に、奮起冒險するの現代二十世紀日本の自覺狼狽の苦しき相を見る事も無かつたのである。

斯く考ふる時、德川幕府三世紀の鎖國は戾すに由なき時の流に、亞細亞の政治、文化、思想に大いなる禍を蒙らしめて、日出る亞細亞の興隆を、又世界史の發展を反亞細亞的動向の中に沈滯せしむるに至つた遺憾なる史實と見做さるゝものである。

尙當時十七世紀に於ける日本及び暹羅との關係を知るには、外務省調査部調書第十一輯「十七世紀

に於ける日暹關係―昭和九年」に詳細なる記述がある。

第三章　緬甸及暹羅の相剋と英佛の印度支那進入

山田長政以下日本人勢力の衰退した一六三一年以後、即ちプラサト・トーン即位以後に於ける暹羅にはポルトガル、佛蘭西等歐洲商船の出入俄かに增加し、一六五五年王位を繼いだ嗣子プラ・ナライ Phra Narain の時代に入つては其の接涉益々多事なるものがあつた。

生來英明なるナライ王は大いに內治、產業を改善開發し、教育、貿易を振興して國家の富强を圖ると共に、比律賓、爪哇、印度等を攻略して徐々に身邊に迫り來つた植民地獲得を目的とする初期資本主義時代の和蘭、スペイン、英國等の歐洲列强との、經濟的文化的交通を興して、自國の位置を世界的水準に進めたのであるが、其れが頓て實力無き自國を蠶食せらるゝに至るものであらうとは夢想だにし得なかつた。

從つて多くの亞細亞諸國がそうであつた如くに、十七世紀中葉以來の暹羅は、歐洲諸國が其の侵入の前驅として有能なる間諜を、或は宣教師に或は學者に擬裝せしめて進入し、其の政治、經濟調査に暗躍せしむるにはこよなき時代であつた。

即ち國家の富强、民度の向上を求めて西洋文明を輸入し、產業、教育開發上に白人を招聘し、頓ては政治經濟上の顧問乃至官吏として彼等を採用するに至つた暹羅であつた事亦他の亞細亞諸國と異る所ない。

從て暹羅に振つた往時の支那の勢力も、山田阿因の敗亡後、又鎖國令の一六三九年後、俄然其の姿を沒した日本人の遺勢も顧らるゝ事無く、獨り歐洲列强人のみ歡び迎えられた。

斯くて一六八〇年にはプラ・ペトラヂャ Phra Phetraja の敬稱の下に希臘人ポールコン Constantine Phaulcon が宰相に任ぜらるゝに及んで、歐洲勢力は益々暹羅國內に流入し、基督教も亦佛教を驅逐せんずる形勢となつた。

尙ポールコンは、元暹羅との間に交易盛んであつた英國東印度會社商船の一乘組員であり、辭職後アユチャの町に移住して官廳に出入してゐる間に其の才能を認められた者である。尙同地に在つた殘留日本商人木村嘉兵衛の姪八重 Yae の美貌に魅せられ、頓て二人は熱き戀を語るに至り、遂に嘉兵衛の許可により結婚へと進んだものである。其の後八重はピーニアと改名した。

然し乍ら白人列强中最も有力なる國家的進入を爲し得たものは英國及び佛蘭西の兩東印度會社であり、彼等は日本人衰亡の後を承けてアユチャ其の他の要都に商館を設け、時の英國王ヂェームス一世とナライ王との間にも親しき友誼の文書が取り換はされてゐた。

殊に十八世紀に入り、印度に於ける英佛の爭覇が英國の勝利に歸して以來、英國は其の優勢を以て斷然暹羅に於ける佛蘭西勢力をも驅逐し、遂には其の强大なる武力を以て暹羅國政に參與し、干涉するの特權を獲得するに至つた。英國東印度會社のマドラス駐屯軍が暹羅を遠征し、湄南下流地方に英國勢力を扶殖したのは一七一九年の事である。

暹羅保護領馬來半島南部ケダ州下の彼南＝ピナン島 Pulo Penang を英國が占領して來る可き英領

植民地釀成の端緒としたのは、一七八六年會社總督コーンウォリス Charles Mann Cornwallis の時代である。他方ルイ十四世 Louis XIV の積極的東洋政策に依つて、佛蘭西も亦印度を經て印度支那に攻略の手を伸し、一六八五年には、佛蘭西東印度會社の少壯幹部社員シャプリエー A. Chabrier 宣教師として暹羅に入り、國情を偵察し、佛蘭西の商人、軍人、派遣艦隊は續々として來住し、威嚇、甘言、欺謀等凡ゆる手段を以て暹羅王宮、社會に其の利權を擴大して行つた。尙之と同時に東隣安南には更に强力なる侵入を試みてゐたのであるが、之に關しては後章に讓る。

斯くてナライ王の後を承けて一六九八年卽位したプラ・チャヲ・スワ Phra Chao Suva 王の頃より十八世紀にかけての暹羅の無力は、英佛二大國の挾擊を受けて其の國步の進展を歪められてゐたのであるが、更に其の難を大ならしめたものは、中世以來相反目して熄まぬ西隣緬甸王國との相剋的な抗爭であつた。

然し乍ら緬甸は印度に近く、英國の侵入は暹羅に對する其れ以上に深刻なるものであつたが、未だ十七世紀に於ては明政府勢力下に緬甸國權劣へず、ツング王朝 Tung Dynasty のアナンペトル Anankpetlun 王の一六一〇年にはシリアム Syriam 港に闖入し來つたポルトガル艦隊を破り、其の將デブリト De Brito を誅した事がある。其の後一六六一年東北に淸政權起つや、明最後の永明王は四世紀に亙る緬甸の形式上の保護權を淸に移讓するに至つた。

而して一七〇九年には、淸政府の閑却せると緬甸の懷柔とにより英國印度會社は印度經營の傍らシリアムに商館を設けて、其の後の緬甸に對する發展のステップとしたのであるが、西力の侵入に何等

豫想する事なき淸及び緬甸當局の蒙昧は其の爲すが儘に任せてゐた。

然るに十八世紀中葉に至り北方阿瓦 Ava の區に豪族アランパヤ Alangpaya 起つて南部ペグ Pegu なるツング王朝を亡し、全國を統一して一七五三年王位に卽いたがアランパヤ王朝 Alangpaya Dynasty の祖卽ち彼である。

翌一七五四年彼は大軍を派して、古來犬猿も只ならざる隣邦暹羅を、其の首都アユチァに襲つたのであるが利あらず、國力を疲弊せしめ國威を傷つける事大であつた。

其の後一七七〇年に至り、緬甸王シンビウシン Hsinbyusin は往年の會稽の恥を雪ぐ可く數萬の大軍を以てアユチァを攻擊し、スチャリット王 Somdet Phra Maha Bowan Sucharit 下に力無き暹羅軍を粉碎し、南方暹羅を其の勢力下に握つて十年に及んだ。

此の緬甸軍の大侵入と占領に依り、暹羅王城は陷りスチャリット王は國外に逃れて殆んど滅亡の狀態に在つた時、同じく東方チャンタブーン Chantaburi 地方に難を避けてゐたアエチャ貴族の一人にして、父を支那人に持つ鄭昭 Phya Taksin は、徐々に四散せる舊暹羅軍及び曾て暹羅の屬領たる甘蒲塞、安南地方の諸藩主の兵を糾合して、暹羅復興の大軍を組織し、一七八〇年突如としてアユチャを襲擊し、緬甸勢力を擊滅驅逐して舊態に復し全暹羅を統一したのであつた。然して彼は中世曾て王城の地であつたトンブリ Tonburi 附近卽ち今の盤谷 Bangkok を首府として王權を握つたが一七八二年逝き、同年其の嗣子鄭華 Phya-Takwah Chakri が王位に卽いた。此れ今日に於けるチャクリー王朝 Chakri Dynasty（バンコック王朝）の祖プラ・ブッダ・ヨト・ファ・チュラロク Phra Buddha Yot Fa

Chulalok 卽ち拉碼一世 Rama I である。敗走の緬甸は其の後衰へ、加ふるに英國印度會社の壓迫日に烈しく、國難の中に再び暹羅を襲ふの勢力を失つた。

次いで國王は馬來半島、柬蒲塞等の諸藩國を招服或は征服し、又北方ルアンプラバン（現佛印領）に至る地方を征服して舊領大半の統治權を回復した。尙新王チャクリー＝華策格里は、卽位と共に北方の大國、淸帝高宗の下に其の旨を告げ進貢し、且チャクリ王朝成立の此の一七八二年を以て暹羅曆紀元元年とした。

斯くて十八世紀末に入り復興した暹羅王國は、一七九二年緬甸を攻擊してサルウィン下流地方（現緬甸領）を奪ひ、一七九五年には柬蒲塞を討つてアンコル Angkor バツタンバン Battambang の兩州を獲得し、新興チャクリ王朝下の暹羅國勢愈々鞏固なるものとなつた（現暹羅全盛時代の領士を成す）。

此れに比して西隣の緬甸王國は、一七五三年のアランパヤ王朝以來、支那との抗爭、暹羅への遠征、英國の侵入等により、國運は落日の共れに似て十九世紀滅亡への急テンポなる沒落過程を辿つたのである。

第四章　英國の緬甸占領と暹羅に對する佛蘭西の迫力

天惠の豐富と氣候の溫熱とに因り智能と覇氣に鈍重な南洋諸國民が、發展的な歐洲勢力の侵入に對し、自國の文化、國勢の强化等に依る適應策を講ずる事を得知らず、世界の全體的關連より孤立した小さな分野に籠つて砂上の樓閣にも等しい空しき努力に奔走してゐる間に、世界的認識と進取の精神

に富む歐洲列强は、彼等無力蒙昧なる南洋諸國家に對し飽く無き活動を續け、母國の發展、國民の厚生に資するのであつた。

是を客觀すれば實に强食弱肉の國際的鬪爭であり、十八世紀以後の印度支那諸國史は、印度諸國民國家に執つては荊棘の道、沒落への哀史である。

卽ち安南、暹羅、緬甸等曾ての印度支那の强國は、十九世紀爛熟せる歐洲資本主義諸國、特に英佛二大國挾擊の下に侵蝕され、安南及び緬甸の二王國は遂に其の犧牲となり、縮少せられたる暹羅のみ僅かに其の間に踰踉たる國步を運び行くのであつた。

英國が印度經略概成後の一七八六年、彼南を暹羅より獲得して馬來半島に最初の一步を踏み入れてより後、其の征服事業は着々と成功してゐた。暹羅に在つてはノブハライ Phra Buddha Loes Fa Nobhalai＝Rama II 卽位の一八〇九年、東隣の大國安南は、歷代の宿望と佛蘭西の使嗾に依つて當時暹羅の保護國であり、且永く安南暹羅間紛爭の癌となつてゐた南岸甘蒲寨を攻略したので、暹羅王は直ちに救援回復の軍を送つたのであるが利あらず、遂に安南との間に不利なる媾和條約を結ばねばならなかつた。

卽ち西部バッタンバン地方を得たのみで、他の全甘蒲寨は安南領となつたのであるが、是は來る可き佛蘭西の全安南占領豫定を有利に導く可き準備工作の一であつた事論を俟たない。

東隣よりの佛蘭西、西南よりの英國てふ龍虎の壓迫の間に介在して其の二勢力の緩衝地帶となつてゐた暹羅王國は、東は佛蘭西の爲に湄毘流域地方を奪はれ、西及び南は英國の爲にサルウィン流域及

び馬來半島南部を占領せられたが、幸にして湄南流域の中央地方を地理的には犯される所無かつた。

卽ち十八世紀末より十九世紀に入り、特に新嘉坡を和蘭勢力下より獲得した一八一六年以來、英國の馬來半島に於ける活動は目醒しかつた。一九〇九年には暹羅領たりし北部ケランタン Kelantan 以下五回教サルタン諸國及び南部マラッカ地方は完全に英國の支配下に奪はれてゐた。英國の威壓下に締結された英暹條約 Anglo-Siamese Treaty=Treaty of Bangkok は此の地方が暹羅領より獨立すべき事を規定してゐる。此の英國東印度會社の活動、偉大なる成功に於て英國人の忘れ得ない恩人となる者は、其の社員にして暹羅、或は馬來諸島に駐在し其れ等諸國家當局と外交交渉して彼等を非武力占領或は懷柔するの重任を果したクロホード John Crawfurd である。彼は其れよりも更に一八二二年、十九世紀東印度諸島史及び暹羅史を著はした事によつて有名である事は既に述べた。

然して同じく一八二四年、暹羅は年來開港を迫つてゐた英國及び米國に盤谷を開き通商條約を締結して世界貿易線上に浮び出てゐた。

斯くて一八五一年モンクト王 Phra Chom Klas Maha Mongkut=Rama III 卽位の頃には、文明開化の風潮暹羅沿岸を洗ひ舊來の政治、教育、產業、交通、軍事等の制度樣式は、滔々として輸入せらるる先進歐洲文物により、招聘せる白人顧問等の力に依り、着々と改良せられて行かねばならぬ時代となつてゐた。然して其れは一般暹羅國民の文化的啓發に資したものである事、程度の差は大いに在るが同時代に於ける北方日本の明治維新と變る所はない。

然し乍ら悲しむ可き事は、十七世紀以來三世紀の永きに亙つた白人進出の爲疎んぜられ來つた地理

的歴史的關係深き同人種日本、朝鮮、支那等東洋諸國との厚き友誼を、否、其の存在をすらも忘るるの蒙昧に置かれてゐた暹羅以下の南洋諸國であつたてふ事である。

更に更に悲しむ可き事は、比較的文化高き日本以下の東洋諸國人が十九世紀末來の白人列强との國交開始、對世界的覺醒に於て、白人列强植民地としての南洋諸國を見出し、恰も彼等を白人以上のストレンヂャーの如くに考へ扱ひ、僅か六世代以前卽ち十七世紀に於ける兩者祖先の間に結ぼれてゐた繁き交通貿易乃至政治的關係をば、容易には思ひ出し得ぬ嘆かはしき未開の狀態に在つたてふ事實である。從つて南洋諸國獨立の過去をも認識し得ず、開闢以來の白人植民地であるかの如く思ひ、其れを當然視してゐた者も多かつたのである。

斯くの如き南北亞細亞諸民族蒙昧の十九世紀の一八五八年、暹羅は時の英領香港總督バウリング Sir Jhon Bauling との間に特殊條約を結ぶに及んで、英國は暹羅に對する既存權益の上に更に强大なる政治經濟的指導權を獲得したのである。

翌一八五九年には佛蘭西、米國及びポルトガルと、次で一八六〇年には和蘭と、更に降つて一八六二年には獨逸等と相踵いで各々修交條約を締結し、暹羅は力無きまゝに世界外交舞臺に登場し近代的暹羅となつた。

尙古來因緣深き日本、支那等諸國と、暹羅との修交は未だ結ばれず、新來の白人諸國より半世紀も遲れるてふ極めて不自然なる亞細亞諸國の狀態であつた。

斯くて一八八年、チュラロンコーン王 Phra Chula Chom Klao Chulalongkorn = Rama V の時代には暹羅領馬來半島の南方ペラ Perak 以下四サルタン藩は、英資本主義鐵蹄下に蹂躙され、完全なる英領海峽植民地總督府の管下に英國的價値を高めてゐた。

他方緬甸に於ては、十八世紀末來の衰運に乘じ、頓に活潑となつた英國の緬甸進入運動が十九世紀に入つて益々激化し、遂に一八二四年國王バギドウ Bagyidaw の時代、英國東印度會社總督アムヘルスト Lord Amherst は、緬甸に於ける英國權益の保護と稱して反英緬甸人を殺戮しイラワヂ流域の南部緬甸地方を英國勢力下に握つた。所謂第一回緬甸征伐 The First Burmese War である。

次でパガンミン王 Pagan Min の末代一八五二年、辣腕を以て鳴る印度總督ダルハウジーは、兵を進めてペグ Pegu を占領し、殆んど南部緬甸の實權を獲得、一八六二年にはヘイア大尉を正式に南緬甸總督に任命ずるに至つた。所謂第二回緬甸征伐 The Second Burmese War である。當時北マンダレー Mandalay の首府には衰運影薄きミンドン・ミン王 Mindon Min あり、南ペグの要都には實力全緬甸を蔽ふ英國總督めり、無智無力なるミンドン・ミン王は一の傀儡に過ぎなかつた。斯くて殆んど英領に等しきが如き十九世紀中葉以來の國情に對して、國民は各地に英人に反抗したのであるが、狼に向ふ小羊の如く徒らに屠らるゝのみで何等の效も無かつた。

他方印度に於ては、一八六二年名實共に征服完成の印度は、英國政府の直轄統治する所となり、英帝國主義の鋭鋒は更に植民地擴大の爲に注がれるに至り、遂に一八八四年就任したデュッフェリン總督 Lord Dufferin は緬甸に對する政治經濟的權益を徹底せしむ可く新に之が英領印度帝國への編入を志

した。

卽ち一八八六年、英國印度艦隊の大部は舳艫相銜んでベンガル灣の波濤を破り、緬甸第一の要港ラングーン Rangoon を攻擊して之を陷れ、上陸した英海軍は遂に時の國王テバウ Thebaw の實權を廢して、全緬甸の完全占領を宣明した。

一〇五四年の建國以來八百三十餘年、印度支那の雄緬甸王國も、あはれ暗雲に國力の發展を鎖されて國際鬪爭に適應し得ず、遂に强大英國の爲に併呑、英領印度帝國の一部として統治せらるゝに至つたのである。斯くて神の照覽無き南洋、白人利益の爲に造られたる此の地上世界は、着々と白人の理想の如くに改變せられ、其の廣大肥沃なる征服地方の資源は、其の有する大いなる能力の下に盛んに歐洲本國及び同胞の經濟的、延て政治的文化的發展、厚生に活用せられて行つたのである。

然し乍ら印度支那に於ける此の英國の優位性に對立する者として、東方より迫り來つた佛蘭西の安南に於ける活動があるが、之に就ては次章に讓らねばならない。

斯くて歷史以來印度支那の主たる三國の內、東西なる緬甸及び安南（含甘蒲塞、占城等）の二は既に亡び、殘る中央の暹羅のみは、英佛二大國挾擊の下に、且其の一たる英國の利己的指導の下に、漸くして危き發展の道を辿りつゝ二十世紀現代に入つたのである。

尙、十九世紀後期、英國が緬甸王として形式的に存置せしめてゐる王が、己が位置をも自覺し得ざる無智の中に、次の如き對等の資格を以て文書を一八七二年、英國女王ヴィクトリアとの間に交はしてゐるが、其の文中に日出る國の王と自稱してゐるを興味あるものとし、ヴィクトリア女王の返書と共

に次に掲載して置く次第である。

緬甸王の書

FROM HIS GREAT, GLORIOUS, AND MOST EXCELLENT MAJESTY, KING OF THE RISING SUN, WHO REIGNS OVER BURMA, TO HER MOST GLORIOUS AND MOST EXCELLENT MAJESTY, VICTORIA, QUEEN OF GT. BRITAIN AND IRELAND,

Madam, My Royal Sister, Prompted by a desire to act in accordance with the duties incumbent on independent sovereigns, who rule over great countries, which leads them to establish friendly relations with each other, if they do not alread been established, I hvaae taken it into my most earnest, careful, and deliberate consideration the best means to cause the great friendship that exists between Burma and England to be placed on secure, lasting, and firm basis, and, having also an earnest desire for the confidential intercourse which independnt Sovereigns should have with each other, I have appointed an Embassy, consisting of Mengyee Maha Saythoo Kenwon Mengyee……………………and have entrusted them with a Royal letter to Your Most Gracisous Majesty.

On arrival in England, the Envoy will have an opportunity of bearing personal testimony to the feelings by which I am actuated in regard to the friendly relations which I am

anxious to promote between the two countries..........................

I am, Madam, my Royal Sister,

Your Gt. and Most Glorious Majesty's Good and Royal Brother,

(Sighn)

緬甸王の書を要譯すれば次の如くである。

至上至高緬甸をしろしめす日出づる國の王より至上至高大ブリテン及アイルランド女王たるヴィクトリア陛下へ呈す

女王陛下　大國を統治する兩獨立國の持つ義務を果す可く、相互の友誼を深めむが爲に若し未だ兩國の間に無きものは之を作り、既に存するものは之を深む可く、朕は緬甸と英國との間に親密なる友好關係を確き基礎の上に築かんと欲す

更に之が親交の爲に、朕はメンギー、マハ、サイトウ、ケンワン、メンゲン以下より成る使節を任命し、以て陛下への親書を托せんとするもの也

英國に到着したる彼等使節は、直ちに朕が軫念する兩國親交の爲に宜しく御引見あらむ事を

御　名

'20th February 1873.

英女王の返書

My Friend, It is with the utmost gratification that I have received the marks of Your Majesty's friendship presented to me by Your Majesty's Minister Plenipotentiary the Meng-yee Maha Saythoo Kenwaon Mengyee.

I cordially reciprocate the sentiments which they express. It is, as Your Majeesty truly odserves, always conductive to the maintenance of peace between Empires, that the Ministers and subjects of one Sovereign should visit the territories of another, and that thus, by the extension of mutual knowledge, the bonds of friendship may be strengthened alike between rulers and between nations. It has afforded me great pleasure to receive Your Majesty's Envoys, and I have odserved with much satisfaction the cordiality with which they have been welcomed by my people in all parts of my dominions which they have visited,

I forward this letter by the hands of a trussted officer, who will deliver it to Your Majesty, together with a portrait of my self, as tokens of my friendship and esteem.

With assurances of the interest which I feel in all that relates to Your Majesty's happiness and prosperity,

I am, Your Majesy's sincere friend well-wisher, VICTORIA.

英女王ヴィクトリアの返書要譯如次。

王陛下　陛下の親書を陛下の臣メンギー、マハ、サイトウ、ケンワン、メンギーより受けたる事は朕の最も嘉するところ也

陛下の仰せの如く兩國の親交により、兩帝國の平和は維持され、又斯くして相互は啓發せられ友好關係は兩統治者及臣民の間に深まり行かん

陛下の使節は朕を喜ばしむると共に、朕は陛下の使節が朕が領土各地に於て國民より歡迎せられたる事を此に告げ得るを喜ぶもの也

朕は此事を朕が寫眞一葉と共に信ずる臣に托して陛下に捧げ、以て親愛の印とせんとす

御　名

第五章　佛蘭西の安南侵入と支那

十七世紀前葉の安南王國は、黎王朝の宿將たる鄭松卽ち平安王の主宰する交都（現交趾）を首府とする大越國と、鄭松の專制に反撥して南方順化に起つた阮潢（先王又は太祖に同じ）の統治する廣南の二地方に分裂紛爭を續けつつ十八世紀に入つた。

當時の南洋は、印度を初め比律賓、爪哇、セレベス等の馬來諸島皆英國以下和蘭、スペイン等歐洲列强の植民地として利用されて居た。然し乍ら同じく歐洲の强國たる佛蘭西のみは當時他の歐洲列國との植民地獲得競爭に破れ、印度、馬來何れに於ても敗退の止む無き狀態に在つた。

佛蘭西は歐洲に於ける本國勢力の均衡上如何にしても他の列强の壓力に對抗し得る丈の植民地を持

たなければならなかつたが故に、虎視眈々其れ等諸國勢力の及ばぬ南洋を求めて、見出したのが卽ち印度支那の東岸に連る安南諸國であつたのである。

佛蘭西政府は先づ安南の國情を精査す可く、軍人又は官吏の變身たる宣敎師を各地に派遣し、又鄭、二王家に接近せしめて全安南王同に對する侵略の機を窺つてゐた。

南方交趾支那に活躍してゐた宣敎師ベーヌ Pigneau de Behaine は、廣南なる阮王家に親近し遂に其の顧問となつたが、其の後一七七三年安南の豪族阮文岳は、時の廣南王阮福映を討つて交趾王となつた。廣南國政に參與してゐたベーヌは、此の機會を以て當時佛蘭西の大國策であつた安南占領絕好の秋となし、阮福映を後援して全安南を獲得す可く、同年廣南及び佛蘭西との間に、阮王朝復興及び佛蘭西自身の權益增大の爲に佛安攻守同盟を締結した。

斯くてベーヌは其の假面に依つて充分に阮王朝を欺謀し、其の信任を以て直ちに佛本國に安南遠征軍の急援を要請し、翌一七七四年其の到着を待つて廣南軍と協同、ベーヌ自ら總司令官となつて容易に阮文岳の交趾支那を奪回すると共に、進んで順化(ユエ)を占領し、十八世紀末には北方東京地方をも征服し、遂に一八〇二年阮福映は佛蘭西の後援を以て全安南を統一し、安南王位に卽く事が出來たのであつた。卽ち現安南王朝(空名であるが)の祖である。尙無實の宗主國、淸の仁宗は彼に贈るに越南國王を以てした。

斯くて一世紀に亘る佛蘭西の努力は空しからず、政治的に經濟的に多くの利權を獲得して安南王國に隱然たる勢力を確立し、十九世紀に於ける完全なる佛蘭西領たる所謂佛領印度支那の前奏とする事

に成功したのである。

佛蘭西の如斯領土掠奪を稱して、英人は飽くなき土地盜人 Insatiable Earth-Hunger と呼んでゐる。卽ちマクマホン A. R. McMahon の佛蘭西の安南武力征服に關する一節には次の如く述べてある——

"…………Really they were the victims of an insatiable earth-hunger' as well as a morbid political ambition, which, of late years, has distinguished the French, whose two fold object…………as they cynically admit…………was to acquire a new colony in Tonquin and supplant the English as the dominant power in Farther India. …………When the French, however, under the flimsiest of pretexts, ventured to occupy Tonquin, China very naturally demurred to part with a province which undoubtedly belonged to Celestial Empire, and in Support of her contention, was obliged to arms…………a challenge accepted by France with a light heart…………"

………McMahon, A. R.:—Far Cathay and Farther India………

London, 1893.

翻つて世界の老大國、東夷西戎南蠻北狄の中に獨り尊しとなす中華の支那を見るに、曾つては有した印度支那、馬來諸國に對する宗主權も、白人列國の强大の前には既に儚き朝露と消え、切迫危殆に瀕せる十九世紀南洋諸國に對して、何等適宜の處置をも執り得ぬ無能なる巨體を徒らに橫たへてゐる

のであつた。

第六章　佛蘭西の安南獲得と臺灣封鎖

植民地獲得に遲れ馳せた佛蘭西も十八世紀以後安南に於て如斯傑作を收めたが、當時歐洲一般を風靡してゐた舊封建制に對する進歩的自由思想、延て有力化したブルジョアジーの擡頭、民衆の自覺は、遂に一七八九年巴里バスチーユ牢獄の破壞を契機として所謂佛蘭西大革命となり、國王ルイ十六世は斷頭臺上に處刑され、從來の王政は根底より破壞せられて、全歐洲諸國を震駭せしめたが、其の後ナポレヲン及びナポレヲン三世に至る十九世紀中葉迄の佛蘭西は政情不常、遠く南洋を顧るの餘裕を持たなかつた。

漸く成らんとして拋擲せられた佛蘭西の安南政策に於て復興した安南王國は、一八四八年阮福任卽ち後の嗣德帝卽位するに及んで、更に衰運に傾いた白人勢力の驅逐に力め、基督敎傳道の禁止、佛蘭西既得權の解消等を斷行したが故に、歐洲的特に、佛蘭西的勢力は根底より崩壞されて了つた。

然るに佛蘭西本國に於ては、一八五二年英明進取的なるナポレヲン三世帝位に卽いて國勢大いに昂り、一八五五年より翌一八五六年に亘るクリミア戰役を經て政局亦安定を見るに至つたのを利用して、彼は民心收攬、國勢發展の爲に豫て志してゐた南洋植民地の復活に再び着手し初めた。卽ち曩に安南政府が佛蘭西人宣敎師を殺戮せるを理由として、一八五六年佛蘭西政府は東岸の要津

ツーラン Tourane の割讓及損害賠償を要求して拒絶せられたるを機として、同じく損害賠償を理由とするスペインと共力し、同じき年の末つ方兩國の聯合艦隊は佛將ドヌーイエ Rigault de Genouilly を總司令官として遙かなる南洋への大遠征を決行したのである。

其れより後四年、佛軍の活躍は遂にツーラン港、償金二千萬法及び宣教の自由等を得たる外、西貢、交趾支那、崑崙等貿易上、産業上最も價値多き南部地方を獲得した。其れ等は一八六二年西貢媾和條約に依つて正式に成文化されるに至つた。尚衰へたるスペイン王國は償金七百萬弗と宣教の自由を以て滿足した。

斯くて佛蘭西は全安南の半ばを獲て、其の目的完成に近づき安南に於ける侵略は益々强化大規模なるものとなり、翌一八六三年、新任交趾支那總督ラグランヂェルは、古來安南と暹羅との間に介在し曾てはクメル文化に榮え、後には兩隣の大國に挾擊せられて其の衝突地帶となつてゐた柬蒲塞（當時は暹羅に藩屬）王ノロドム Nolodom を討つて之を佛蘭西領下に合併した。

强大なる武力を背景として、英人の所謂領土狂 Earth-Hunger なる佛蘭西は、無力なる北方の安南政府に對して遮二無二戰ひの爲の戰ひ War for war's sake を挑んで息まず、遂に一八七三年には首都河内 Hanoi を占領、次いで翌一八七四年には北方安南の大半を征し嗣德帝を降し、且交趾支那に對する完全なる主權を樹立するの大業を强行した。

統制無き支那淸政府は、當時日本との間に臺灣事變の紛糾あり、佛蘭西の隣邦安南侵略に對しても

何等强硬なる抗義を爲し得ず、斯くて安南の獨立は實質的に失はれて行くのであつた。

然して安南政權に最も致命的な打擊を與へて是を無力化したものは、前述一八八三年に於ける交趾支那總督ルミル・ドヴィエー Le Myre de Vilers の率ゆる佛軍の河内、東京 Tongking = Tonquin 地方に於ける安南軍の擊滅及び其の占領であつた。

斯く、同年末、佛蘭西提督クールベー Admiral Courbert の遠征艦隊が順化 Hue を攻略するに當つて、安南は全く其の戰鬪的經濟的活動を閉鎖されて了つたのである。

佛蘭西軍の傍若無人なる侵入に對して自國の脅威を感じ出した支那政府は、一八八四年卽ち光緒十年末、遂に佛蘭西に抗議したが容れられず、對佛宣戰を布告するに至つた。卽ち淸佛戰役の發端である。

卽ち劉永福、吳長慶等の淸軍能く戰つたが到底精鋭なる佛軍には敵す可くもあらず、福州、廣東等の諸港市はクールベー艦隊に砲擊占領せられ、加ふるに當時劉銘傳督辨たりし東方海上の臺灣島諸港を封鎖され、北岸の基隆は佛軍主力に依つて上陸占領せらるるに至つた。

斯くて東洋の雄、中華と誇つた尨大支那は連敗の結果、翌一八八五年卽ち光緒十一年佛蘭西に對して和を求むるに至り、遂に安南の拋棄、其の他の不利を約する天津條約に依つて淸佛戰役の終末を告げたのである。

老大支那の敗退、之は其れ迄支那を眠れる獅子として怖れてゐた歐羅巴諸國をして全く意外に思はしめ、彼等白人列强の支那人蔑視、延て其の後に於ける彼等の遠慮無き東洋侵入の動機を作るものと

なり、東洋諸國に執つて、又亞細亞人種に執つて、眞に不幸な敗戰であつた。卽ち歐洲勢力を東洋から驅逐した一九〇五年に於ける日露戰役とは全く反對な悪影響を齎したものである。

斯くて歷史以來二千年の永い因緣關係を棄てて、安南が名儀上にも實質的にも全く支那の羈絆を脫し完全なる佛蘭西植民地となつたのは此の一八八五年であり、臺灣島は不毛の蠻島として敢て顧ず支那に任した。

印度支那東岸及び南岸に位置する敗亡安南、甘蒲塞、交趾支那諸王國を、佛領印度支那と總稱して初め西貢 Saigon に設置し後、北方河內に移つた佛領印度支那總督府に初代總督コンスタンツ M. Constantz が就任したのは一八八七年の事である。

尙臺灣諸港を封鎖した佛蘭西亞細亞艦隊司令官クールベーは、一八八五年基隆占領の際同地に病死したが、其の墓地は今日尙風光明眉なる同市海岸に在り、附近一帶はクールベー濱と稱せられて、臺灣有數の優秀な海水浴場となつてゐる。

十九世紀後半に於ける佛蘭西の印度支那に於ける活躍は斯くて大なる成功を收めたが、現地に總督府設立後は更に其の活動は潑溂たるものとなつた。

又、歷代總督の北方東京、西方湄混西岸の暹羅領に對する侵略準備工作は不斷に進められ、遂に一八九一年就任した總督ドラヌーザン De Lanessan は一八九三年、暹羅領チャンタブーン地方の武力征服を行ひ次代總督ルーソー Armand Rousseau の一八九六年、所謂佛暹事變の遠因を作るに至つたのであるが、之に就ては次章に於て述べるであらう。

然して北隣なる東京及び南支那雲南地方は、其の經濟的價值最も優秀にして印度支那の寶庫と稱せられて居り、之に對する侵入に對しては、遠き南岸西貢なる總督府に於ては甚だ不便なるものあり、一九〇二年總督ベヲー Beau は本國政府と圖つて北部の要都河内に總督府を移轉した。

斯くて有能なる總督府の對外活動は支那を壓し、暹羅を威嚇し、孜々として倦む所を知らず、早くも一九〇四年には湄混上流、雲南地方に於ける、又、ルアンプラバン Luanprabang シャン Shan 地方を含むラオス Laos＝老撾の廣大なる資源地帶を獲得するに至つた。

尙、東洋研究機關として有名な佛蘭西東洋學院が河内に創立せられたのは一九〇一年であり、東洋の土俗、歷史等の硏究に資してゐる。今日人類學研究上に世界有數の權威を有するものとなつてゐる巴里人類學會 La Société d'Anthropologie de Paris も亦同學院の貢獻に俟つ所大なるものがある。

近世以來、歐羅巴列强植民地總督府政策の共通なる特徵は、內に徒らに土人生活への文化均霑、權益增大等の不生產的事業に汲々たらず、確と彼等を服從の中に巧みに忠誠に把握して、外地獲得の目的たる母國及び母國人發展本位の植民地政策實施を容易ならしめると共に、外に廣く世界政策的見地より、本國の發展確立の爲に、自領植民地附近に於ける其の外的政治經濟勢力の膨脹を期するてふ積極的な點に在つた。

曾ては該植民地獲得の爲に尊き祖先幾多の生靈が犧牲となり、莫大なる國帑が費され國家存亡の冒險が爲されたものである事を思ふ時、其れは自然の經路と考へられる。然し植民地人の福利が母國人の發展と共榮的なるものである事を期し得る時は此の限りでない事は勿論である。

斯くの如き世界情勢の下に佛領印度支那は漸く現代に入つた。

×　×　×　×　×

第七章　十九世紀暹羅に對する佛蘭西の迫力

一八六八年より一九一〇年に至るチュラロンコーン王 Phra Chula Chom Klao Chulalongkorn＝Rama V の時代は、近代暹羅に執つて最も重要な革新時代であり、日本に於ける明治大帝治世の年間と殆んど一致する。

英明なるチュラロンコーン王は四海の情勢に應ず可く、一八八〇年馬來諸島特に爪哇本島を視察し、歸國後大いに軍備、産業、教育等を振起し、一八八九年には奴隷制を廢し、更に一八九七年には顧問乃至官吏として暹羅國政を左右せる英國人の慫慂に依り、廣く知識を英國に求む可く遠く英京倫敦に遊んだ。

緬甸を併せ馬來半島を占據し來つた英國人が、暹羅に迫つて佛人顧問と共に其の國政を指導してゐた此の頃、東隣の友朋安南以下は既に佛蘭西領下に編入せられ、更に其の勢は湄混以西の自國に迫つてゐたのである。

卽ち一八八六年、既に永き支那の印度支那諸國に於ける宗主權を驅逐した佛蘭西は、湄混西方なるを、舊安南領として其の返還を弱小暹羅政府に要求し來つたのである。

暹羅は之に對して先づ兩國國境線の劃定を提議し、其れが決定迄同地方を中立地帶たらしめんと委

協した。

當然なる暹羅の此の提案に對し、又英國の背景を慮り、詮方なく佛蘭西は之を受諾せるが如く裝ひつつ、占領豫定内に在る同地方に密かに兵を進め、歐羅巴諸國が亞細亞諸國に對してのみ執り得る自主的見地より、一八九三年佛領印度支那總督ラヌザーンは、何等暹羅に通報交涉する事無く突如として佛蘭西駐屯軍及び土民兵を派して一擧に廣大なる同地方を占領した。而して一九〇五年に至る迄新國境線要所に、有力なる軍隊を駐して同地方の確保と對暹羅威嚇に資したのである。

英國は佛蘭西の此の對暹侵略に就て、印度支那に在る支那宗主權の、佛蘭西に依る奪取を有力な理由としてゐる如くであると述べてゐる。尙 "……All the countries lying east ward of the Mekong, from the point where it leaves China, must be considered as belonging to France……"Norman:—Far East. Chapt. 29. とも稱せられてゐる。

暹羅は非道なる佛蘭西の此の行爲を、ヘーグなる國際仲裁裁判所に提訴す可く、信任厚い法律顧問佛人に圖つたのであるが要領を得ず、遂に有耶無耶の中に葬り去られて了つた。

然るに同一八九三年末、盤谷市に於て一佛人殺害せらるるや、佛蘭西政府は暹羅當局故意の所爲なりとしてツーラン港待機中の亞細亞艦隊の主力を盤谷に急派し、威嚇を以て暹羅政府に幾多不利なる條約を結ばしめた。

加ふるに佛軍は該條約の履行を監視すると稱して、アランヤ東南方チャンタブーン地方に兵を屯し、遂に一九〇四年には同地方を其の儘獲得するに至つた。

如斯は實に一八四二年に於ける英淸間の阿片戰役と全く其の軌を一にするものであり、白人諸國の間に於て如斯行爲は狂せざる限り不可能な事であつた。

佛蘭西總督府の活潑なる侵略行爲が、斯くて暹羅の中心に迫つて來た時、其れは當然同目的を以て前世紀以來努力し來つた英國勢力との衝突を來さなければならない。

卽ち英國印度總督府は、旣に一八七二年には、暹羅領サルウィン流域及び馬來半島テナセリム Tenasserim 地方を占領すると共に、一八九五年には新嘉坡根據地より、馬來半島を縱斷して首府盤谷に至る鐵道を敷設し、暹羅政府との間に政治的に經濟的に密接な利害關係を結んでゐた。

卽ち翌一八九六年英佛の間には暹羅獨立保證條約が調印せられ、同時に英佛兩國は相互に利害一致する所あれば湄南河を境界として、其の以東を佛に以西を英に獲得せんずる暹羅國分割占領てふ怖る可き默契が交はされたのである。

當時暹羅國政府は財政、交通、產業、敎育等主とし經濟的方面は英國勢力の爲に、外交、法制てふ司法的方面は主として佛蘭西人顧問に牛耳られてゐるてふ女々しいものであつた。如斯半ば英佛二國の共同管理の如き、卽ち現代支那の如き狀態であつたが故に、特に暹羅に於ける英國資本家の產業的、商業的活躍は實に目覺しきものあり、試みに一九〇〇年度に於ける暹羅國輸入を見るに、總額七百五十萬磅の內其の八三％卽ち六百三十萬磅は英國商品に依つて占められてゐたてふ殆んど獨占的な狀態であつた。

十九世紀より二十世紀初頭にかけて、僅かに殘れる南洋唯一の獨立王國暹羅も、英佛二大帝國主義

鐵蹄下に壓迫せられて氣息奄々たるものがあつた。

斯くて近世初期の頃、密接なる國交を結んでゐた日本との政治的又貿易的關係は、十八世紀末の强大英佛二歐羅巴國家の爲に完全に破壞消滅せしめられてゐた。一八九八年卽ち明治三十一年、伊藤內閣當時再び日暹修好條約が締結せらるるに至つた頃は、兩國人は恰も未知のストレンジャーの如き冷たき感情の中に、互に曾ての親交ありし數世代前、祖先の深き因緣關係を忘れ果てたるが如き情無き有樣であつた。

尙特に玆に記すべきは、十九世紀末日暹關係に於ける日本的好機の逸跌である。參考迄に次の一件を揭げる。

而して現今國際的に喧しきクラ Kra 地峽開鑿問題の因果認知のよすがも其處に充分見得られるであらう。

又半世紀の以前に於て、旣に此の重點に着目して此れが占有を希求した領事、齋藤幹氏の慧眼には深く銘肝すべきものがあらう。

「………此の半島（馬來）中部以北の地卽ち暹羅領と稱する彼の荒漠未開の大野は、クラー地峽より東面海岸に沿ひケランタン部を經てツリンガノー部に至る間、其の面積蓋し南部英領地に讓らず、然れども全部實に未だ開けざる蠻域……………又一九二六年に方り英國と暹羅國との間に締結したる條約後にて、右ケランタン部及びツリンガノー部の獨立を認定此の暹羅領及び北

部の地は無論耕作を施すに堪え、又金鑛山、錫鑛山多く…………若し我政府に於て此の荒漠の大野に我帝國人民を移し、開墾耕作の二業に從事せしめば、從來其の利益蓋し鮮少のものには無之義に候。

………………更に一歩を進めて此地方後來の大勢を申上度は即ちクラー地峽の事に有之候。御承知之通只今東西兩洋の間を航する諸船舶に對しては、此馬來半島は非常の際害物に有之候。…………若し右のクラー地峽近傍に我帝國人民を移住せしめ、此の大荒漠の地を占領したる後、機に乘じてクラー地峽左右の好位置を測り、一條の運河を開鑿したらんには我帝國の馬來半島に於ける領地は、坐して東西兩洋の商權を占むるは、之を掌に指すが如し」

〔新嘉坡領事齋藤幹氏對外務大臣榎本武揚建白之書＝明治二十六年〕〔入江寅次＝邦人海外發展史上卷＝昭和十二年に據る〕

第八章　英佛勢力の膨脹と新興獨逸の南洋進出

十九世紀以來英國は印度支那各地に如斯廣大なる土地、權利を獲得したのみならず南支那に於ては阿片戰役の無道に依つて香港諸島其の他に多くの權益を掠奪し、南亞細亞に於ける一大根據地を經營して、思ふ存分に其の資本主義的發展、驥足を伸してゐた。

佛蘭西も亦其の均衡保持上、宣教師の迫害を理由として支那を威嚇し、廣州灣其の他を獲得して南支那に於ける對英佛蘭西勢力を殖立した。

然して佛蘭西は亞細亞に於ける最大の植民地印度支那の經營には最善の努力を注ぎ、徐々に其の鋭

鋒を第二占領豫定地方たる北隣の支那領雲南省の鑛產獲得に向けたのであつた。

佛印度支那內地の要地交趾支那には知事を置き、其の他の諸州には理事官を派して統治に當らしめてゐた。

佛蘭西の內治政策中他の列强と異る點は、島民の使用する支那的安南文字に彈壓を加え、凡ゆる新聞圖書、雜誌には之を佛蘭西式にローマナイズして用ひしめた事である。卽ち安南文字の「國語」をqu'oc-ngu と書かしめたるが如きである。

斯くて英、佛が全印度支那に其の勢力を普及し終つた頃、歐洲に於ては新興獨逸國民は、一八七一年不倶戴天の怨敵佛蘭西を擊破して、獨、佛永年の確執紛爭の歷史に由緖深き思ひ出の巴里ヴェルサイユ宮殿に於て、精悍無比なるウイリアム一世が獨逸帝國皇帝としての晴の戴冠式を擧行し、其の國勢は隆々として全歐羅巴を蓋ふの慨があつた。其の後間もなく、內閣には鐵血宰相として世界に鳴つたビスマルクが上り、猛君ウイリアム一世との名コンビに依つて列强の重壓を反擊し、新興獨逸民族の鬱渤たる精力を政治に、產業に、外交に、軍備に、遺憾なく發揮してゐた。

卽ち立遲れたる植民地獲得競爭に憤然として突入し、先づ列强植民地散在して國際利害關係錯綜せる南洋に於て一八八五年、老衰スペインを威嚇してマーシャル群島を獲得、次で一八九八年には米西戰役に敗退して、キュバ、比律賓等の大を失ひ、昔日の面影なく憔衰したスペインよりカロリン、マリアナの二群島を買收、更に同年末には英國其の大部を領せる南方の大島パプア Papua = New Guinea の東半及び所謂ビスマルク諸島、サモア Samoa 諸島を占領して其の帝國主義的發展を遂行して行つ

た。

斯くて二十世紀に入つた頃には、全南洋諸島國は僅かに暹羅を殘して完全に歐羅巴半島なる白人諸國の爲に領有利用せらるるに至つたのである。

悠長間抜けたるが如き東洋及び南洋の亞細亞諸國民は、其の地理的、人種的、歴史的關係の厚きにも似ず、利益は總て對立せる異邦人の爲に開拓され、偏へに彼等の强大世界制覇に資されて行つたのである。白人利益卽世界道德は斯くて完成され行く道程を勇躍進んで現代に入つた。

第五部　臺灣

第一章　村山等安の臺灣遠征

十六世紀末日本太閤秀吉は原田孫七郎一行を使節として臺灣經略を圖つたが、臺灣島の無主と征韓役の多忙、次で秀吉の急逝等に依つて空しく終つた事は既に中世史上に於て述べたが、十七世紀近世史の劈頭を飾つたものは同じく日本人にして且未完成に終つた村山等安の率ゐる艦隊の臺灣征討である。慶長五年關ケ原の戰終つて三年、家康天下の權を握つた一六〇三年、即ち慶長八年、長崎代官に任ぜられた曾ての南洋貿易家村山等安は、在住和蘭、ポルトガル、支那人等の外人と交遊多く、彼等の間にはアントニヲ・ムラヤマ Antonio Moerayama として知られ、南洋事情に詳しく又巨萬の富を擁してゐた。

其の後十年、等安は代官を辭して再び南洋貿易に從事するに至つたが、一六一五年即ち元和元年家康の勸商政策による朱印狀を受け、主として臺灣＝高砂＝Taccasang 及び南支那諸港との通商に從つた。夙に南洋貿易に於ける臺灣の位置が寄港地として、根據地として重要なるを認めてゐた彼は、幸に臺灣が統一無き蠻島として日支商人の勢力下に在るを機として、翌一六一六年即ち元和二年是が占

領す可き旨を時の將軍秀忠に奏上したのであるが、無智な幕府は之を容れなかつた。

彼が全財産と能力を拋つて十三隻より成る個人的な大艦隊を組織し、南海の富に均霑す可く遙々遠征の途に上つたのは同年末の事であり、秀吉の朝鮮征伐以來の大外征である。

村山艦隊の活動は實に目醒しきものあり、忽ちの間に淡水、安平鎭、打狗（タカヲ）等の重要なる西部諸港に蟠居せる日支海賊の群を撃退して之に據り、殆んど其の目的たる臺灣占領を達成したのであるが、私的事業の事とて限りある人と戰とに其の權力を維持し得ず、遂に翌一六一七年に入つては之を拋棄するの止む無きに至つた。斯くて一部は本國に歸還し、爾餘の勇者は更に乾坤一擲南航して交趾支那、呂宋、セレベス諸島に其の運命を開拓して行つた。（幕府は何等の後援もしなかつたのである）

尙一六一六年村山等安臺灣征服の事は、長崎及び平戸在留外人の間に大いなるセンセーションを起し、時の和蘭商館長（同時に和蘭東印度會社理事）スペークス Jacques Specx 英國商館長コックス Richard Cocks 及び支那商人等は、直ちに此の旨を本社に或は本國政府に急報して其の對策を圖つたのであつた。

英國、和蘭等の臺灣への着目及び其の後間もない和蘭及びスペインの臺灣占領並に臺灣と最も近い關係に在る支那福建の巡撫、黃承玄等が沿岸の防備を强化するに至つたのは其の結果の一である。

當時日本の政治、經濟社會狀態に關しては、スペイン、ポルトガル、和蘭、英國等諸國商人乃至宣教師等の日本在住者が、本國への通信に認めた多くの文獻があるが、就中村上直次郞博士譯の耶蘇會士日本通信 Cartas do Japão 及び同博士を中心とする新村博士、村川堅固博士等譯の異國叢書、續異

國叢書等有名であり、原著としてはポルトガル、スペイン及び和蘭等本國の圖書館、古文書館等に藏されてゐるものが多い。

其れ等に據れば、一六〇〇年關ヶ原戰役に敗走した豐臣秀頼以下殘黨の、流球を經て南洋諸島に入れるを認め、村山等安南洋遠征目的の一を、其れ等亡命者の捕獲に在りと記したものもある。

豐臣殘黨の南洋逃避は、當時那覇を初め、アユチアに於ける有賀門太夫一行及び其の西南甘蒲塞のプノンペン又マニラ、ヂャガトラ、アンボイナ等各地日本人町に於ける浪人武士の急激なる增加及び其の活動遺業に依つて充分に知り得らるる。

而して曩に本國長崎に歸還した村山等安以下一族は、幕府鎖國政策の忌諱に觸れ死刑に處せらるるの悲劇が演ぜられたのであるが、是に因つて一六一七年に於ける村山等安の臺灣遠征も可惜一場の夢と消へたのである。

尙一六二〇年卽ち寬永七年には、島原の城主松倉重政は政令のバチルスたる天主敎徒を壞滅驅逐すると共に、他方に於ては永年呂宋と貿易して巨利を博してゐた。又同年數十名の臣を該地に派して其の地理、經濟、要害等を調査せしめ、之が南洋貿易上好個の大島たるを以て、將軍家光に該島の占有を獻策した事があるが容れられなかつた。因つて後自ら之を征服せん事を圖つて準備してゐたが、其の半途にして病み遂に逝き、呂宋征討の擧は空しく史上の泡沫と消え去つた。

尙村山等安の臺灣遠征に就いては、臺北帝國大學史學科研究年報第一輯昭和九年中に、同學岩生敎授の長崎代官村山等安の臺灣遠征と遣明使がある。

第二章　臺灣を巡るスペイン及び和蘭の角逐

十六世紀中葉ポルトガルは既に明政府より媽港を、スペインは比律賓諸島を獲得して各々南支南洋に利を營んでゐたのに對し、一五八一年スペインより獨立した新興和蘭王國は、一六〇二年アンボイナに東印度會社を設立して以來、其の鋭鋒を附近馬來諸島に向け一六一九年時の總督クーンが同社をバタビヤに移轉、其の機能を擴大强化してよりは遠く北方にも其の發展の羈足を伸ばした。

先進ポルトガル、スペインの二勢力に對抗す可く、根據地獲得の目的を以て、東印度會社の全艦隊を上げて北上せしめたのは其の後三年の一六二二年の事である。

卽ちクーン總督は東洋貿易を壟斷せるスペイン、ポルトガルの勢力を驅逐す可く、該艦隊をして斷然ポルトガル根據地媽港の奪取を命じたのである。

然し乍ら媽港なるポルトガル當局は直に明軍と協力して、共同の敵たる和蘭の闖入を擊退した。不屈なる和蘭艦隊は、擊退されるが儘に媽港より徒勞に歸還する如き無駄を爲すこと無く、雇傭せる支那人船員の言に依つて詳かに知り得た明領澎湖島の占領に方向を轉換した。

時の福建巡檢司南居益以下は此の時ならぬ和蘭軍の澎湖島侵入に對して力戰苦鬪大いに力めたのであるが及ばず、澎湖諸島は將に危殆に瀕したので、明政府は詮方なく蘭艦隊の要求せる蘭支貿易の許可と共に、其根據地として澎湖に代る可き東方海上の蠻島を紹介し、其の占領を默認したのであつた。卽ち同艦隊は東航し豫てフヲルモサの名に依り知られてゐた臺灣島に上陸、意外にも豐かなる資

源地なるに狂喜したのである。

斯くて笨港（現北港）其の他に占據して日本甲螺と誇稱し威を臺灣に振つてゐた支那海賊顏思齋、鄭芝龍等を驅逐して西部臺灣一帶を占領、和蘭勢力下に置くに至つた。時に一六二四年總督カルペンチールの時代であり、同年末頃には安平（當時鯤身）に堅固なる商館、要塞等を構築し、初代長官ゾンク Marten Sonk 以下多數の官吏、商人、宣教師等を派遣統治するに至つた。

斯くてバタビアなる東印度會社の政治經濟的活動は遙か北方の臺灣を根據地として盛に日本支那諸港に伸展し行くと共に、臺灣島內の產業開發、島民使役、教化等に依る同島の和蘭的貢獻に利して行くのであつた。

後進和蘭が臺灣を占領して大いに利を博してゐる事を知つた時の比律賓總督タボラ Juan Nino de Tabora は一六二六年、未だ和蘭勢力の及ばぬ北部臺灣を占領して和蘭勢力との均衡を確保す可く、在マニラのスペイン艦隊を急據北上せしめた。

卽ち同艦隊は臺灣東北岸なる三貂角を奪つてサンチァゴ San Diego と命名、更に基隆（當時鷄籠）を征つて、サンサルバドル San Salvador 城を造營し、砲壘を築き、其の覇權を確立す可く和蘭と等しく臺灣長官ボルチリヲ（Gonsallo Boltilio を任命して之が統治に當らしめた。次いで一六二九年には西北岸なる淡水を占領、サンチャゴ San Diego 城を築いて、北部臺灣に於けるスペイン政權の强大に資したのである。

スペイン政權の北部臺灣進出に依つて其の牙城を搖がされむとした南臺灣の和蘭政廳は、一六三〇

年、今日尚紅毛城として其の遺趾を留むるかのゼーランヂァ Zeelandia 城を安平に構築し、外敵內攻に備え、徐々に其の政權を北進せしめ以てスペイン勢力の驅逐に傾到した。

然し乍ら少數の守備軍を背景とするスペインの北部臺灣に於ける統治權は、比律賓に於ける其れよりも更に脆弱なるもので、先來の日支人勢力を驅逐する事も無く、僅かの貿易利の外は主として布敎に在り、和蘭の其れと比較して見る可き何等の勢力扶殖も行はれなかつた。

從つて一六四二年バタビア總督フアンヂーメン Antonie van Diemen が時の臺灣長官トラウデニウス Paulus Traudenius をして北部基隆にスペインを攻擊せしめた時には、社寮島なるサンチャゴ San Diego 城將が僅かに頑强なる抵抗を試みたのみで、和蘭軍は容易に基隆、淡水等を征服して北部臺灣に於けるスペイン勢力を驅逐し得たのであつた。

時のスパニッシェ比律賓總督コルケラ Sebastian Hurtado de Corcuera はスペイン政權の無力に基く內憂に迫はれて、其の管下なる臺灣を顧るの餘裕無く、一六一六年以來の北部臺灣に於けるスペイン勢力は僅か二十餘年にして和蘭の爲に解消されて了つた。

斯くて一六四二年以後の臺灣島の西部要地は大體に於てバタビヤ總督の和蘭統治下に置かれるに至つたのである。

其の後八年、一六五〇年、臺灣和蘭長官ワーテル Pieter Antonis Zoon Overt Water は其の擴大せる臺灣領土統治の本據を安平より臺南に遷してプロビデンチァ Providentia 城（鄭氏時代改稱赤崁城）を築いたのであるが、是は鄭氏より淸領時代を經て十九世紀末日本領となる迄全臺灣政治經濟の

中心地となつたものである。

尙東部臺灣に對する統治は皆無であつた。

更に當事ファンヂーメンスランド Van Diemen's Land と假稱されてゐた今日のタスマニア島は、此の頃初めて和蘭總督府に因つて其の價値を見出されむとしてゐた。卽ち一六四二年の爪哇總督ファンヂーメン(前述)が進入、命名せるものであり、其の後抛棄したものである。

第三章　十七世紀臺灣に於ける日蘭勢力の衝突

一六二四年和蘭の西南部臺灣統治以來、其の最も障害となつたものはスペインを除いて、十六世紀以來迅くより發展し來つた日本商人の、既に臺灣諸港に扶殖したる勢力、權益への統制であつた。其れは日本よりの國家的後援の無い小規模なものではあつたが、十九世紀以來强大なる白人文明に壓倒されて畏縮した近代日本初め亞細亞諸國人の如き、卑屈なる拜歐的氣分の未だ釀成せられてゐなかつた當時の事とて、彼等日本人は眞に發溂として男性的なものであつたが故に、和蘭人の不當なる壓迫に對しては頑として應ぜず、自主的立場を持して讓る所無かつたからである。

互に相降らぬ兩者は其の必然の經路として、一六二六年卽ち寬永五年には早くも關稅問題を巡つて烈しい衝突を演ずるに至つた。

日本貿易の確保に熱心する所あつたバタビア總督府の對外政策は、特に其の優秀性に基いて、支那、安南、爪哇等亞細亞諸國人に對するとは格段の相異ある優遇と敬意を日本人には拂つてゐたのである

が、利己を犠牲に供して迄の謙讓は勿論持ち合はせてゐなかつた。卽ち同年末和蘭の臺灣長官ウイト(Geraad Frederik Szoon de With は獨斷を以て南臺灣在住日本人及び支那人に對して納稅の義務を負はしむると共に、其の貿易商品に對して高き關稅を設定したのである。

然し日本商人團は臺灣諸港に於ける優先權により、其の課稅及び關稅に應せず、且和蘭長官が今後日本商人に對して如斯一方的無法なる制壓を加ふる事あれば、臺灣日本人は結束して之が排擊に當るであらう事を言明し、更に此の經緯を時の長崎代官末次平藏の許に報知したのであつた。

斯くて問題は重大化し日蘭國際關係に惡影響を及ぼさんとする形勢に立ち至つて、驚いたウイト長官は、此の旨をバタビア本社に急報したのであつた。

翌一六二七年初頭、此の報告を受けた時のバタビア總督クーン Jan Pieterszoon Coen は、重要なる日蘭貿易關係を破壞するが如きウイト長官の此の獨斷措策を責めて直ちに彼を罷免し代るにヌイツ Pieter Nuyts を以てした。

新任長官ヌイツは卽時北航して長崎に至り、當局に出頭して日本人課稅其の他を取消すと共に今後の修好を乞ひ、以て該問題は無事落着したのである。

然るに同一六二七年末、南洋貿易に從事して盛んに活躍してゐた長崎代官末次平藏所有の一商船が、濱田彌兵衞(外人間には Yaffioye dono＝彌兵衞殿として知らる)を船長として支那福州へ航行の途次、臺灣の安平に寄港した際、和蘭官憲は同船が武器を藏しゐるの故を以て反蘭的意志あるものと邪

推し、突如襲撃して之を抑留し、武器、商品其の他一切を沒收して了つた。

言ふ迄も無く、當時の海外貿易は歐羅巴、亞細亞諸國を不問、總て嚴重なる武裝の下に行はれてゐたものであり、商船が武器を携帶する事は極めて當然の常識と認められてゐたものである。

貿易上の常識を無視した此の暴擧に依り、福州通商の好機を逸して莫大なる損害と侮辱を蒙つた濱田彌兵衞一行は恨を呑んで歸國、此の旨を船主末次平藏に報告した。卽ち日蘭人衝突の原因となつたものである。

曾つて無い侮辱と損害に末次平藏は大いに立腹し、直ちに彌兵衞を長とする武裝船艦を南航せしめ、在臺和蘭政廳に對して謝罪と損害賠償を要求し、若し容れられざる場合は直ちに彼等を擊滅す可く命じた。時に一六二八年卽ち寬永五年の春である。

如何にしても臺灣に於ける日蘭利害の不一致は避け難きを知り、バタビア總督府諒解の下に先年如斯行爲を執つたヌイツ長官の强硬態度は、必ずや該日本人團よりの應酬ある可きを豫想して既に兵力、沿岸の防備等を强化してゐた。

卽ち彌兵衞の率いた艦隊が安平に入港するや、和蘭當局は一行幹部を優遇するが如く巧みに欺き捕獲し、直ちにゼーランヂァ城内の一室に監禁すると共に該船内の武器其の他の一切を押收した。

斯くて敵の陷穽に入つた彌兵衞等幹部は、其の窮迫の中に遂に彼等以上の有效果敢なる權謀を案出せしめられたのが、ヌイツ長官への敬意を表す可き會見の懇請であつた。之は容れられて相接見したが、忽ちヌイツを人質として拉し去り、猿狽せる和蘭當局に對して三日間の猶豫を以て左の要求を履

行せしめ、以て先年に於ける損害、侮辱への賠償、雪辱を完うし得たのであつた――

一　日本商船を抑留し沒收せる生絲千五百斤及び抑留の爲支那との商機を失へる爲に損せられたる生絲二萬斤の現物及び金貨に依る賠償

一　長官の長子及び若干和蘭人と彌兵衞の一子との人質交換

一　彌兵衞一行に對する慰藉等

斯くて完全に其の要求を充たした彌兵衞一行は、ヌイツを釋放し代つて其の長子及び數名の和蘭人を連行して自己の商船に歸り揚々本國に向け出帆した。

長崎歸還後連行したヌイツ長子及び和蘭人は、九年の入牢仰付けられ一六三六年即ち寛永十三年期滿ちてバタビアに送還されたがヌイツの長子のみは獄中に病死して了つた。

尚父ヌイツ長官は利多き對日貿易に不利を招ける責に依り、バタビア總督府より免官、二年の禁錮に處せられ、翌一六二九年新しく臺灣長官としてプトマンス Hans Putmans が渡臺就任した。然し乍ら其の後間も無い一六三九年寛永十六年、日本幕府の鎖國令に依り、日蘭關係は永く中絕せらるるに至つた。

第四章　鄭成功の臺灣占領と日本への求援

或はスペイン勢力を北に討ち、或は日本人覇權を南に排し、和蘭の臺灣統治は多難を極め、漸く基礎成ると見えた一六五〇年、卽ち其の首都を安平(アンピン)より臺灣に遷してより僅か十二年の一六六一年には

日支混血の梟雄鄭成功の爲に和蘭政廳は徹底的な掃蕩を受け、同年末には長官コイエット Frederik Coyett を最後として、全く臺灣島から其の勢力を驅逐されて了つた。（臺灣とは現臺南を指す）

斯くて和蘭領臺灣は一六二四年西部臺灣を領してより三十八年、一六四二年全臺灣（東部及び中部臺灣を除く）を統べてより僅か二十年であり、其の間基督教傳道と多少の産業開發を行つた外見る可き事業を遺さなかつた。

支那及び日本に最も近い臺灣島を和蘭の手より奪還し、東南亞細亞の一角を政治經濟的に復興した鄭氏の臺灣占領は、大なる亞細亞的意義を持つものと言へよう。

尙、鄭氏が臺灣征討の兵を動かしてゐた一六六一年、卽ち明の永曆十五年頃は、恰も支那は漢人三百年の明政權沒落して、北部滿洲なる淸政權が全支那に及ばむとしてゐた時代であり、曾ての明臣であり、漢系たる鄭氏と、淸軍との間には多くの紛糾が讓されてゐたのである。

鄭成功の父鄭芝龍は、臺灣海峽を中心として東支那海に勢力を振つてゐた海上無冠の雄で、曾て日本長崎に遊び、同地田川氏の娘を娶つてゐたものであり、其の後明政府に用ひられて福建水師提督となつてゐた。

然して明政權が淸の壓迫により危殆に瀕した際、彼は大いに明軍の爲に戰つたが利無く、遂に德川幕府に對して援兵を請ふ可く使者林高を派したが、時既に遲く、力盡きた芝龍は淸に降服して了つたので幕府としては何等彼に沙汰する所無かつた。

當時彼の妻田川氏も淸軍包圍裡に福建なる鄭氏の本據泉州城に在り、弟芝豹等は彼女に其の延命逃

避を薦めたのであるが、大和撫子の有終の美は、遂に彼女をして落城の悲運と共に自刎し果てしめたのであつた。

流るる日本人の義血と悲壯なる死に依つて、其の子成功（日本名福松）は大いに發憤、同じく回明の爲に努力したのであるが、一六五九年、永曆十三年、かの金陵の一戰に武運拙く清軍の爲に敗退して了つた。

然し乍ら成功の明への臣節は屈する事無く、再び征清の兵を擧ぐ可く、先づ母方の祖國日本の幕府に求援の兵を乞ふて捲土重來を期したのであるが、幕府は之に對して何等回答する所無かつた。

長崎代官を通じて送つた成功の切々たる請援の書狀は卽ち次の如く讀まれる。

鄭成功日本幕府請援狀

大明與龍三百年、治平自久人忘㆑亂、韃靼乘㆑虛破㆓南京㆒、神州悉汚㆓腥羶㆒、成功深荷㆓國恩㆒、故將㆓蹀㆑血以報㆒㆑讐、徘㆓徊浙閩間㆒、感㆑義願有㆓樂從者㆒、然孤軍懸絕、千芳萬辛、中心未㆑遂冒其邁、成功生㆓于貴國㆒、故深慕㆓貴國㆒、今艱難之時、貴國憐㆑我假㆓數萬兵㆒、感㆑義無㆑限矣。

斯くて失望の中に討清の事を止めた彼は其の後廈門に兵を集結し、轉じて和蘭の占據せる臺灣に向つたのである。

時に彼の率ゆる兵力三萬は、一六六一年先づ澎湖諸島を經略し破竹の勢を以て臺灣に進入、安平（アンピン）、

臺南各地の和蘭兵を擊滅驅逐、忽ちにして全臺灣を其の勢力下に掌握した。

時の爪哇總督メッイケル Joan Maetsuyker は、プロビデンチァ落城の直前、臺灣長官コイエットの急派せる商船に依つて强力なる鄭軍の襲來を知り、直ちに五百餘名の增援軍を急航せしめたのであるが、到着した一六六二年、臺灣は既に確たる鄭政權の治下に在つた。敗走した和蘭兵がバタビアなる本據に歸還したのも亦此の頃である。翌一六六三年爪哇總督府は再び臺灣奪還の兵を、淸政府との攻守同盟の許に送つたのであるが無爲に終つた。

鄭氏は其の後統治權を確立して、臺灣を東寧(又は東都)と新稱し、ゼーランヂャ城を安平鎭、プロビデンヂァ城を承天府と命名し、且全島を南北に二分し、各々其長、知縣を設置し凡ゆる和蘭的色彩を廢して、純正なる亞細亞的政治を施した。

卽ち蕃人の撫育、閩粤島民の爲の教育、屯田制度に依る農兵等を創設して鄭領臺灣王國の富强を圖つたのである。

一衣帶水なる隣邦支那よりの移住者の激增は此の時代に初まり、當時在臺灣支那人………全部閩粤人、は總數約十萬と稱せられる。然し乍ら鄭氏及び其の私兵、屬僚に過ぎざる其の部下達に依つて統治せらるる當時の臺灣行政は、全般的に見ては貧弱なるものであり、南臺灣和蘭占據時代の其れよりは稍優れてゐる程度のものであつた。

當時先住民族たる馬來族(俗稱蕃人)は未だ西部平野各地に蟠居し、漢人都落は其間に散在してゐたものである。

鄭氏三代二十二年の臺灣統治の黎明卽ち斯くて初まる。

第五章　鄭政權下の臺灣と淸への降服

一六六二年康熙元年、鄭成功臺灣に其の覇權を樹立するや、雄心勃々たる彼は、臺灣の安定を俟つて更に同年末には南隣なる同胞の發展地呂宋の經略を志し、マニラ在住同胞有志と相策應してスペイン政權の打倒を圖つたのであるが、不幸にもスペイン官憲の爲に事前に暴露せられて蹉跌し、加ふるに同年スペイン政廳の在住支那人大虐殺の慘劇が演ぜらるるに至つた。遙かに承天府に在つて之を聞いた成功は憤激措く能はず、彼自ら兵を率ひて呂宋征討を決行せんとし、着々其の準備を整えてゐた最中圖らずも病を得、卒然として逝いた。北侵し來れる和蘭の手を臺灣より驅逐して、後年日支兩國の政治經濟的安泰を確保した日支混血の英雄鄭成功事田川福松の比律賓征服の大業は、斯くて頓挫し遂に儚く南海の孤島一杯の土と化したのである。

彼の崩後、當時厦門に在つた嗣子鄭經來り繼いだが、成功の部將であつた蔡雲、黃紹等は成功の遺命なりと稱して成功の弟鄭襲を立てんとして策動した。然し經の率ゐる精銳は其れ等の反軍を破つて臺灣に君臨した。

他方淸政府は臺灣なる鄭經を招諭したが過ぎし明朝の爲に節を守つて聽かず、其の後一六七三年卽ち康熙十二年、明の遺臣吳三桂の反淸軍に後援して大いに淸と鬪つた。然し其の後は積極的な反淸行

動を執らず清臺の關係は徐々に好轉するが如くであつた。

父成功の遺業を繼いだ經は、總て父の善政に倣ひ島民の厚生に力めたが、就中見る可きは島內各地に於ける製糖業及び製鹽業の獎勵、勃興であり其等は臺灣產業上の主要物產となり、後世斯業發展に於ける淵叢となつた。

斯くて彼の治世二十年間の臺灣は、彼の威令の及ぶ限りに於ては比較的平穩裡に經過し、一六八一年彼の死と共に無能なる嗣子克塽、武將劉國軒補佐の許に起つた。

然して豫てより臺灣諸島の經略に志してゐた時の清帝聖祖に執つて其れはこよなき機會であつた。卽ち聖祖は一六八二年康熙二十二年武將內大臣施琅を水師提督に任じ、臺灣諸島の征服を命じた。施琅は精兵二萬五千より成る大艦隊を率ひて先づ克塽の後見にして澎湖の太守たる劉國軒を討つて澎湖を占領し、破竹の勢ひを以て臺灣島に進入、鄭領二十年の治安に馴れ、且凡君克塽の下に軟弱なる臺灣軍を須臾の間に擊破粉碎して了つた。

劉國軒既に逃亡して在らず卽ち克塽狼敗措く所を知らず、直ちに清軍に投降し同一六八二年末、鄭氏は遂に二十二年に亘る臺灣の統治權一切を難無く淸政府に奪取されたのである。

然して翌一六八三年康熙二十三年、清の侍衞吳啓爵來つて正式に克塽より臺灣諸島を受領し又鄭氏の呼び馴せる東寧の稱を棄て、代るに同島征服の功勞者施琅の言に依り新しく臺灣と命名するに至つた。

尙淸に降つた鄭經は其の後任官して正黃旗漢軍公に封ぜられ、逃亡した劉國軒亦淸に仕へて天津總

兵の職に就いた。

第六章　清政府の臺灣統治

斯くて完全に清領となつた翌一六八四年、康熙二十四年、清朝は同諸島を福建巡撫に屬する一臺灣府となし、知府を臺南に置いて全島行政の中心とした。

又知府の下に澎湖を一防として、本島を臺南、諸羅、鳳山の三縣に分ち、各其の長官として縣治を配し、同島守備の爲には臺南に總兵を長とする鎭臺を設けて軍事を司らしめた。然して是等の行政組織は其の後幾度か改變せられた事を知る可きである。

然して十八世紀清領臺灣の、前半に於ける統治範圍は、和蘭及び鄭氏時代の其れと大差無くて、深く內地に及ぶものに非ず、尨大なる清本國の臺灣に對する期待は極めて尠いものであつたが故に、敢て積極的な開發向上策を執る事無く、支那人の深く奧地未開の山野に進出する事を禁じた程であつた。

然し乍ら鄭領以來滔々として盡くる所を知らない南支那閩（福建）粤（廣東）地方よりの臺灣移住者は、禁止地域を犯して全島各地に進出增加し、十八世紀末乾隆年間には未開なる馬來族を驅逐して殆んど西部平野全般を其の勢力圏內に包含して了つた。

文化高く且努力的な移住支那人との生存競爭に破れた馬來族、卽ち所謂蕃人は多く東部に連る峻險なる山間峽谷に逃難して、文化より離脫した原始的生活に入り、比較的に支那人と相容接した一部蕃

人は平地乃至山麓に留つて相互の交易を續け、習俗は多大に支那化して行つた。前者が今日の所謂生蕃であり、後者が今日の所謂熟蕃である。（今日は兩者共に高砂族とも呼ばる）

斯くて初期に於ける禁止區域は徐々に撤廢せらるるに至り、其の度毎に臺灣統治の範圍は地理的に政治的に擴大せられ、一七六六年卽ち乾隆三十一年には全島を領し、更に蕃人の爲に府内に特別なる行政機關として理蕃廳なるものが新設さるるに至つた。

又產業方面の開拓に當つては一般農業の外、鄭氏時代に奬勵された製糖、製鹽業を普及し、本國との貿易を興したが、敎育、文化てふ方面は淸制に倣ふに留まり、特に其の振興を圖るてふ如き事はなかつた。

理蕃廳の通事であつた吳鳳が阿里山蕃人の馘首の蕃風矯正の爲に尊き犧牲となつたのは一七六九年淸曆乾隆三十四年の事である。

平地に近い熟蕃の敎育は土蕃社學なる敎育所に於て逐次敎化され支那化されて行つたが、山間深く遁入した生蕃に對する敎化は遙かに遲れ、漸く其の端緖に就いたのが約一世紀後の一八七四年、同治十三年の事である。

十九世紀末日本が臺灣を領有した頃には、臺灣最後の巡撫唐景崧に依る蕃學堂が臺北に設けられてゐた。然し乍ら曩にも述べたる如く、老大亞細亞の重要部を占めて豊かなる支那政府は、南海の孤島臺灣に對して政治的、經濟的又軍事的何等の期待を持たず、從つて其の統治は放慢冷淡なるものであり、歐羅巴列强の領有せる植民地統治とは凡そ其の意義、價値を異にするものであつた。

化外の蕃島、惡疫瘴癘の不健康地、海盜無賴の巢窟としての臺灣は必然其處に現出し、官吏の優柔怠慢不正も亦其處に行はれ其の不統一なる事、南隣のスペイン領比律賓內政の紊亂に變らぬものであつた。領有三百年の永き、幾十度か淸の臺灣政策は朝令暮改の變遷を重ねて見る可き業蹟を遺さず、僅かに十八世紀に於ける吳鳳、濫鼎元、十九世紀末に於ける劉銘傳等其の偉業を稱へられてゐるのみである。然して一八八四年卽ち光緖九年に就任した最も著名なる巡撫劉銘傳の統治を瞥見するに、彼は從來臺南に置かれてゐた臺灣省を臺北府に移して今日の如く臺北を全島の政治經濟の中心となし、大いに全島の產業を開發し、法制を改善し、治安を嚴にし、初めて鐵道を敷設して舊來の面目を一新した。茶、樟腦を官有專賣としたのは卽ち彼であり、更に武器大砲を整えて軍備をも近代化し、文化敎育方面には先づ臺北、臺南、安平等各要地に府學を設立し又書院を臺南以下全島十七個所に營み、更に義塾を各地に設けたのであるが、此の向學の風に乘じて民間には書房が大いに增設發達して行つた。

劉銘傳の心血を注いだ如斯方面に於ける臺灣の向上も、光緖前期の僅か六年の彼の在任の間に過ぎず、一八八九年、光緖十五年、辭職して淸へ歸還した後には、巡撫邵有濂代つて來り、前代の政令を改廢して遺業は續かず、漸く明朗化せんとしてゐた臺灣島も不統制の孤島に逆轉して行くのであつた。則ち同時代に於ける南方印度、爪哇、比律賓、安南等、和蘭、英國、佛蘭西等の歐羅巴列强植民地の產業的開發に依る、各本國への政治經濟的貢獻の偉大なると比較して、其の價値に雲泥の差あるを見出すのである。

第七章　清政權の放慢と臺灣の無政府狀態

十七世紀前葉英明なる淸帝聖祖、雄將施琅等の努力に依つて漸く淸領となつた臺灣も、本國の廣大富裕と多事、派遣官吏一般の腐敗、竝びに來住島民の惡質等諸種の障害禍根相重複して統治は容易に圓滑ならず、十八世紀末以後卽ち乾隆年間以來の臺灣は、化外の蕃島として淸政府自身すら其の向上發達を圖るの志望を抛擲せるが如き狀態であつた。

從つて歷代巡撫以下諸官吏の多くは任務を怠り、私利に趨り、賭博に耽つて官紀は弛緩して留まる所を知らない有樣であつた。斯くて島民の生活は不安化し、同じ人種國民にしてあり乍ら、官に對する服從、國家に對する忠誠等は、利に叶はざる限り、島民の心理には浮び得ないてふ淺間しき思想を釀成してゐた。

其れは本國遠きスペイン官吏の比律賓に於ける苛斂誅求に對し異人種島民フィリピノの、對スペイン感情以上のものがあつたのである。

淸の臺灣統治誌の一節にもあるが如く、眞に「在臺文武員賭博に沈涸するを知るのみ、兵民瓦解」せるものであつた。

蒙昧なる馬來族の蟠居ありしのみ、歷史以來國家としての統制を見たる事無く、中世以來主として日支海寇及び其の亞流が勢力を占めてゐた臺灣島、就中一葦帶水の近きに在る南方支那漢族（永く明朝に仕へたる）の流入せる者を主とする臺灣島に對する統治政策は、主權者たる淸國の、特に深重な

る方針を以て望み、萬全の策を講ず可きものであつたのである。

然し乍ら事實は全く相反して益々其の不良性を增大せしむるが如き放慢政策であつた。

福建水師提督藍鼎珍の弟で、彼と共に一七二一年卽ち康熙六十年臺灣に於ける朱一貴の叛亂を鎭定した淸官藍鼎元は、驚きの中に臺灣島民の支那的儒敎化の假面の中に藏せる不信好亂を本國へ報告して居り、又島民の盜癖公認性に關して浩嘆之を久しうし、其の著平臺紀中には次の如く記してゐる。

「王と言ひ侯と呼ぶ寧ろ種あらむや、山東の鼠賊と蔑し去りたる群賊は秦の天下を覆したるに非ずや、成れば卽ち王たり、成らざれば卽ち賊たるのみ」と。

又臺灣に於ける治安維持の無力に、夥しき不良島民の騷擾誘發を說いて言ふ――

「臺民亂を唱ふるを以て嬉みと爲す、豈眞に刑罰の畏る可きを知らざるにあらむや、山大にして谷深く逋逃の藪多ければ也。成れば民の害をなし、敗るれば去りて山狙となる」

斯くて淸時代の臺灣、化外の地として持て餘された暗黑臺灣各地に、絕ゆる間もなく頻發した事變叛亂は幾百度なるかを知らず、淸本國より救援軍を派して鎭壓に當つた大なるもののみでも數十度に上るが其の內、後世迄有名な大事變のみを二、三を擧げると次の如くである。

一、一七二一年＝康熙六十年　臺灣知府王軫之の時代、羅漢門（現旗山）に於ける朱一貴の亂

卽ち朱一貴は鳳山縣下反官不服の徒を率ひて先づ縣廳を占領し、遂次增大せる叛徒を指揮して附

近地方に及び、之に倣つて全島各地に蜂起した民衆亦是に合流して清軍を逐ひ、遂に臺灣府を攻略して清政權の大半を奪ひ、自ら中興王と僭稱するに至つた。急を聞いた清政府は翌一七二二年、康熙六十一年に至り閩浙總督覺羅滿保をして、提督藍鼎元以下を同亂平定に向はしめ、漸く之を征討、賴り無き清政權を復興する事が出來たのであつた。

二、次に起つたのは清高宗の乾隆五十一年卽ち一七八六年、林爽文の作せる全島的反清祕密結社天地會を指導勢力とする叛亂である。是は北路（現彰化）に源を發して全島に波及し、遂に清の政令を無視して臺灣島を其の指令下に握つたが、翌年本國より陝甘總督福康安大軍を率ひ來るに及んで討伐平定された。然し乍ら徹底的掃蕩は遂に不可能に終つた。

三、其の後十年の一七九五年卽ち乾隆六十年には、前記天地會員陳周王は島內が旱魃不作に依り物價昂騰して島民生活大いに苦境に陷つた機會を捕へて民心を刺戟し、反清思想を鼓吹し、以て社會を大混亂に煽動し、全島を無政府狀態に陷らしめたが約半歲にして漸く秩序は回復さるるに至つた。

四、降つて十九世紀中葉、淸文宗の咸豐四年卽ち一八五四年には、葛瑪蘭（現宜蘭）に無賴漢の統

領吳瑳なる者在つて該地方の不良團を糾合して蹶起し、縣廳を占領し自ら長と稱して統治、徵稅して地方的獨立を成したが同年末鎭定解消せられたのであつた。

枚擧に遑なき故に以下主なる變亂のみを年代順に列記する。

一六八二年＝同治元年……………………戴萬世の亂
一六九六年＝康熙三十五年………………吳球の亂
一七〇一年＝康熙四十年…………………劉却の亂
一七三一年＝雍正九年……………………吳福生の亂
一八一一年＝嘉慶十六年…………………高夔の亂
一八二四年＝道光四年……………………楊武斌の亂
一八三二年＝道光十二年…………………張丙の亂
一八五三年＝咸豐三年……………………林供の亂
一八八七年＝光緒十三年…………………施九段の亂

斯くて三世紀に亘る永き脆弱なる淸の臺灣政權は、見る可き業蹟を遺さず、徒らに島民を外賊と不潔と混亂の中に陷れて益々彼等の利己的缺點を助長し、社會も國家も顧るの倫理無からしめ、況や一死報國てふ如き國民的感情・犧牲的精神は彼等の間には露釀さるる事無かつた。

又永く權力威嚴無き政權下に在つた島民には、服從も然程必要なるものに非ず加ふるに「好鐵不打釘、好人不當兵」てふ商業民族たる彼等には國家の爲に生靈血税を供するてふ如き尊き國家的訓練を一度も經驗する事無く、只利己的小才のみが發達せしめられてゐた。

實に十七世紀より十九世紀に至る永き間の臺灣島民は、無責任な清政權下に、悲しくも非國家的放逸無統制なる歷史を閱せしめられたるものと言ふ可きである。

第八章　島民閩粤二族の抗爭

淸領臺灣の混亂暗黑を、更に倍加して其の社會を無政府狀態に陷らしめたものは島民二族卽ち閩族（福建人）と粤族（廣東人）との種族的偏見確執に基く執拗なる抗爭であつた。其れは恰も印度に於けるヒンヅー敎徒と回敎徒の宗敎的反目にも相似た激烈なる對立であつた。

加之同じき閩族の間に在つても、其の鄕里を異にする泉州人と漳州人は又互に相讓らず、同鄕人に

（兩族對立抗爭の意）の非を說諭せる諭民策、勦和策等も、統制力無き清權の下に在つては孰れも無效に終つた。

然して淸本國自身も、十九世紀以來內憂外患に疲弊し、漸く其の力無き巨體を帝國主義的發展華かな歐洲列强侵入の前に橫たへてゐたのである。

第九章　十九世紀臺灣を巡る日本及び歐米列强

一八四〇年卽ち道光二十年、先づ英國は屬領印度に產する莫大なる阿片を支那に强賣せんとして阿片戰役を起し、以て豫ての欲望であつた要港香港諸島を獲得して南支那に於ける根據地と爲し、列强に先んじて對支政治經濟のヘゲモニーを確立した。

其の後十五年の一八五四年、日曆安政元年、日本來航の米國艦隊司令官ペリーは、其の歸途東洋貿易上の要地としての臺灣の位置を確む可く、所屬二艦をアボット（Captain Abbot）に率ひしめ基隆に上陸調査せしめ以て有望なる同島の價値を認めて、時の大統領ピーアスに報告し、之が占領を主張したのであるが、モンロー主義未だ餘勢を保つてゐた當時の米國議會は之を容れなかつた。

次で一八六〇年咸豐十年、支那官憲による英國商船アロー號の無斷臨檢及び英、佛兩國宣敎師の殺傷を理由として、兩國の聯合軍は淸の國都北京を攻略し廣東を占領し、遂に北京條約に於いて臺灣を含む支那諸港の開放を約せしめるに至つたが、之に依つて外國貿易線上に登つた臺灣諸港は基隆、淡水、安平、打狗の四港である。（打狗＝現高雄）

新興獨逸帝國の亞細亞遠征艦隊所屬運送船エルベ號 Die Elbe が安平に於て淸兵の砲擊に遭ひ、其の結果獨逸本國に於て臺灣占領の議が行はるるに至つたのも此の年である。

其の後三年一八六三年、同治二年には、安平に於て島民と在留英商人との間に紛爭惹起され、安平市街は英艦の砲擊に破壞された。尙淸が交趾支那を佛蘭西に割いたのは此の前年である。

又一八六七年、同治六年巡撫劉銘傳の時代、米國軍艦ローバー號、香港よりの歸途臺灣沖に於て遭難、恒春にて蕃害に遭ふの所謂ローバー號事件が惹起した。

米國政府は直ちに時の厦門領事リゼンドル（後の日本外務省顧問にして、後年西鄕從道の臺灣征討に盡力す）に命じて、淸政府に强硬なる抗議を提出したが、淸は臺灣を化外の地なりと稱して責任を回避したので、リゼンドルは所屬米國軍艦二隻を以て直接匪賊討伐に向つたが成功せず、僅かに酋長より、今後白人を殺傷せずてふ口約のみを得て歸つた。

其の後七年一八七四年、日曆明治七年には再びローバー號事件と相似た漂流日本人の蕃害事件が惹き起され、遂に日本の臺灣征伐となつたのであるが、十七世紀前後、豐臣秀吉、村山等安、濱田彌兵衞等の征臺行あつて以來實に二百餘年の事である。

卽ち西鄕從道は命に依り、一八七一年明治四年及び一八七三年明治六年琉球藩民及び小田縣民合計七十餘名が、臺灣東南岸の八瑤灣（現臺東廳牡丹社附近）及び馬武窟社に於て蕃人の爲に慘殺せられたるの非を訂す可く、旗艦高砂以下に兵三千を率ひて南航し琅𤩝（現臺東廳車城灣）の社寮に上陸、

炎熱惡疫と戰ひつつ遂に酋長阿碌以下諸蕃を斃して南臺灣一帶を占據した。

無論日本政府が如斯行動に出でたのは米國がローバー號事件に於て執れる行動と等しく、淸政府が日本人の被害に對して、臺灣は淸領なるも化外の蠻島にして淸は其の責に任ぜざるの旨を答へたるに因る。從つて豫てより淸の無責任を憤慨してゐた英、米、獨等列强の在支外交官は大いに日本に對して好意的態度を執つた。リゼンドルが厦門領事を辭して、日本外務省に入つたのも此の頃である。如斯不利なる情勢に驚いた淸政府は、直ちに閩浙總督李鶴年をして數隻の軍艦を率ひて車城灣に急航し、西鄕從道に會見して日本軍の臺灣撤退を要求したのであるが、西鄕都督は斯かる交涉は日本外交當局と接涉せらる可き問題なるを說いて一蹴した。

卽ち日淸本國間の外交交涉は進められ、結局日本は淸より償金十五萬兩、遺族扶助其の他の利權を獲得して翌年同事件は圓滿解決を見るに至つた。

斯くて年を經る十年、內外多事な淸政府は又も印度支那なる東京、安南、甘蒲塞、交趾支那等の諸小國に對する宗主權に關して、該地方に侵入し來つたナポレオン三世下に優勢なる佛蘭西と大衝突を演じて破れ、遂に同一八八五年光緒十一年には天津條約に基き其れ等諸國に對する覇權を佛蘭西に讓渡するに至つた。淸佛戰役卽ち之であり、當時クールベー中將の率ゆる三十五隻より成る大艦隊の爲に臺灣諸港が封鎖さるるに至つた事、既にわれわれが近世印度支那諸國史第六章に於て知る如くである。

卽ち時の臺灣巡撫兼防務總辨劉銘傳は、曹志忠、章高元等の部將及び本國よりの援兵指揮官銘功、

建字等と協力臺灣を死守したのであるが、基隆及澎湖諸島は佛蘭西軍の上陸占領する所となつたのである。斯くて清佛間に天津講和條約締結せらるるに及んで佛蘭西の臺灣封鎖は解かれたが、他方連年の外寇敗戰に亞細亞に誇る老大清帝國の國威は全く地を拂ひ、東海孤懸の一小屬領臺灣島行政の如きは殆んど顧るの餘裕なく、又一千餘年に亙る廣袤二十七萬方哩の豐かなる印度支那に於ける政治經濟的利權すらが全く歐羅巴諸國に奪取されて如何とも爲し得ない苦境に置かれて來たのである。

第十章　日本の臺灣領有と其の歐羅巴的影響

其の無能に乘ぜられた清は、虎視眈々たる歐米列强の手に各地を蠶食せられつつも、一八九四年、日曆明治二十七年には、再び東隣の小國日本との間に朝鮮獨立承認問題に關して紛糾を惹起し、遂に其れは激化して戰端を開くに至つた。

而して此の日清戰役は、意外にも其れ迄世界史上に影薄かつた極東の列島帝國日本の大勝に歸し、慘敗した清は下關條約に依つて遂に臺灣を日本に讓渡するに至つた。

同條約締結の直前、清政府は英國公使の似而非親清外交に乘ぜられて、祕かに臺灣を英國に割讓せん事を策動したのであるが、時の英國首相ローズベリーは清の不信と新興日本勢力の大義及び東亞の大局に鑑みて受けず、且同條約に關して何等日本に抗議する事も無く、對英依存を圖つてゐた李鴻章以下清政府幹部の期待を裏切る事大であつた。

無主にして蒙昧なる北上馬來族割居の暗黑島として二千年、十七世紀以來和蘭領、鄭領時代を經て

十九世紀淸領時代の終焉を告げる迄部分的或は朦朧政權下に沈淪すろ事三百年、化外の蠻島臺灣は斯くて初めて古來因緣深き極東の新興勢力日本の確たる統治權下に入つたのである。近代臺灣の起源は實に此の一八九五年の日本歸屬と共に創まる。

即ち日本政府は直ちに此の最初の植民地たる臺灣統治の爲に臺北に總督府を開き、總督樺山資紀を派して其の任に當らしめた。

然し乍ら時の臺灣巡撫唐景松は、下關條約に於て臺灣の對日本移讓を傳へ聞くや、直ちに淸本國總理衙門に打電して、在支外國公使の後援を乞ひ、或は英國の保護を懇請し、或は佛蘭西駐屯軍の來援を求むる等凡ゆる反日運動を試みたのであるが、本國政府よりは其の總てを斥け來つたので遂に臺北に臺灣民主國なる獨立國を創案して自ら總統を稱した。

時に一八九五年卽ち明治二十八年五月二日であり、同年同月十四日には來臺日本軍の爲め鎧袖一觸の下に紛碎されて、十二日間の泡沫國と消え失せた。

其の後間も無く日本本國よりは北白川宮殿下の率ひらるる有力なる近衛師團の來援あり、同年末には全島の土匪悉く御稜威の下に服するに至つた。

然し乍ら此の征臺行に於て忘れ得ざる事は、一度日淸戰役に於て政治的經濟的に生命的に、當時の日本としては國運を賭したる大犧牲と大冒險を經て、臺灣獲得の爲には充分なる代償を拂つて在り乍ら、更に古來惡疫瘴癘の島として有名な此の炎熱の地に島民鎭壓てふ不生產的な戰ひの爲に、再び供

されねばならなかつた可惜尊き數多くの日本人生靈及び巨費の犧牲である。

曾て確たる統治權下に在つた事の無い見棄てられた如き暗黑島として其れは銓方ない事ではあるが、其の酷暑に加ふるに全島の不衞生、交通不備等は、戰鬪以上の艱難を日本軍に與へ、病死者戰死者は畏くも北白川宮殿下を初め奉り四千八百七十名の多きに達し、治療の爲に內地に送還されし戰傷病者の數は無慮二萬二千餘名、臺灣に於て入院せる者五千二百餘名てふ驚く可き犧牲を日清戰役以外に供せしめられたのであつた。

加之此の血稅の外に當時としては又天文學的巨額な戰費が消費され、日清戰役に引續いて內地同胞の經濟生活を再び苦しめたものである事を知らねばならない。

而して歐羅巴列强の植民地政策と全く相異なる點は、如斯國家的の大犧牲を二重に供せしめられた猫額大の一小島、即ち蘭領スマトラの十五分の一、同セレベス島の四分の一に過ぎない臺灣島に對して、日本は總督府開設と同時に其の砲煙彈雨の中に冒險しつつ文化的施設即ち島民の敎育事業に着手したてふ歐米人には理解出來ない事實である。

臺北府下なる士林の國語傳習所即ち之である。化外の島に永く亂世に馴れ、清領時代に於てすら然して顧られなかつた一般島民に對する此の敎育事業は一の大なる疑惑を以て迎へられ、勇敢なる文化のパイオニーアたる敎師達の多くは島民の爲に哀れ慘殺の悲運に遭はなければならなかつた。今日士林なる芝山巖頭に祭られてある六氏先生の碑即ち其の最初の尊き犧牲であつたのである。

歐羅巴諸國が其の植民地を先づ本國の政治經濟的發展の爲の開發に資して、島民の文化的向上等は

餘裕ある時機を撰んで爲す政策とは凡そ異るものを見出すであらう。

而して同明治二十八年臺灣總督樺山資紀は、下關條約第五條に基いて島民の自由臺灣退去規定を發布し二年間の猶豫と保護を與へて、反日本的支那人の本國歸還を許した。

即ち之に依つて日本の統治下に入るを好まぬ支那民族は二年間に亘つて充分本國支那に歸還するの便宜が與へられたのである。從つて日本の統治に入るを欲する者のみが歸郷する事を止めて敢て臺灣に留まつた。現代に於ける臺灣人（本島人）即ち其の子孫である。

超えて三年の一八九八年即ち明治三十一年、日本政府は外に淸に對して臺灣と一葦帶水の近きに在る福建省の對外不割讓を約せしむると共に、内に原則として帝國憲法を臺灣にも等しく施行する旨宣明した。

領有以來數年ならずして、斯くの如く母國人と島民とを同一法の下に扱へる政策を執れるは、實に世界植民政策史上未曾有の擧であつた。

然して翌一八九九年明治三十二年には、臺灣小公學校令及び島民のみを收容する醫學校令發布せられて、島民の敎育機關は着々と完備せられたが、金融機關としての臺灣銀行が設立せられたのも亦其

の年である。然して島民教育の普及奬勵を目的とする臺灣教育會が開かれたのは翌々一九〇一年卽ち明治三十四年であり、曩に劉銘傳の初めたる樟腦、鹽等亦此の年に官有專賣と爲され、他方大いに新式製糖業の發達に盡力して、臺灣島の產業開發に資した。

領臺以來連年五百餘萬圓の國庫補助を受けてゐた臺灣總督府財政が獨立し得るに至つたのも亦此の年である。

更に翌一九〇二年、明治三十五年には曩に發令した反日支那人臺灣退去令に背じなかつた親日と見做される在留臺灣人を日本臣籍に編入し、益々一視同仁の厚遇に力めた。

斯くて日本政府の仁政下に入つた往時の暗黑島臺灣の島民は、改隷僅かに七年にして、歐羅巴列强の植民地となつてより三百年の永きを經たる爪哇、印度等の、曾ては華かなる獨立國たりし歷史を持つ彼等島民の生活に比較して、雲泥の差ある法的、文化的優遇保護を與へられるものとなつた。斯くて其の生活は、淸領化外の蠻島と稱せられた二百餘年の永き蒙昧時代より飛躍的な向上發展を促されて南洋諸民族中最も文化高き有能者としての位置を築くに至つたのである。

島民に對する政治經濟上、教育上、又文化的諸施設上最も完備せられたる植民地としての豐かなる生活を以て、二十世紀に於ける世界第一の幸福なる植民地人なりと、歐米諸國民に三嘆せらるゝに至つた日領臺灣人の黎明は斯くて明け初めた。

×　　×

然し乍ら、飜て史眼を廣く世界の大局に置く時、明治二十八年日淸戰役を契機とする極東帝國日本

の擡頭は、頓て來るであらう日本の亞細亞的指導勢力化を怖れるアングロ諸國に執つて、こよなき不愉快なる出來事であつた。

其れはアングロ諸國の世界獨占慾に對立する、亞細亞人國家の日本的强化を前兆する忌はしき黃禍の憂であつたのだ。

既に十七世紀以來其の土地、國家を奪はれ、悲慘なる境遇に陷つてゐる亞細亞大半の民族を無視した、否其れを主觀的優越感より寧ろ當然視せる英米諸國家は、左の如き黃禍を想像して、共同の敵日本への、亞細亞への、壓迫、覆滅を深重なる計畫の下に企圖し初めたのである。

「一八九五年の春、歐洲列强は從來餘り注意を惹かなかつた地方の事件に就いて、考慮しなければならなかつた。前年の夏に初まつた日清戰爭は、世界の政治的系統と國際的關係に深刻なる變動を與えた。歐洲列强は此の戰爭の結果、新興の軍國日本が極東の舞臺に躍り上り、東亞に於て主動的位置を要求してゐるとの、不愉快なる事實を發見したのである。

……………………………………

……日本の勝利が益々確實となるに從つて……………日本を盟主とする强大なる亞細亞帝國が形成され、豐饒なる土地の經濟的發展に、英米諸國が除外される如き事態の發生する事を恐れた。

……………………………………

……………極東に於ける戰禍の裡に、……………基督教徒と佛教徒との大鬪爭の前奏曲

を見出した。彼の想像に現はれた黄禍の相は、歐洲の全武力にも優る黄色軍と甲鐵艦とが、戰列を作つて歐洲を席捲する光景であつた」

〔芦田均＝最近世界外交史＝前編 "Grösse Politik" ……第三章參照〕

第六部　近世南洋史の世界的意義

中世末以來の西力東漸は、豐かなる溫熱の地に科學と進取的精神の發達無き生活能力の弱い南洋諸島國民をして、强力なる歐羅巴列國の智的武的壓迫の下に、徐々に征服蠶食せられて、近世の中期即ち十八世紀頃には、僅かに暹羅、安南等を除いて殆んど其等列强の苛酷なる植民政策下に呻吟せしむるものとなつた。

然して十九世紀中葉には、前記二國すらも、英、佛兩國の勢力下に編入せられて、自主的立場を失ひ、兩南洋諸國は完全に歐羅巴勢力の圈内に入れられた。

近世南洋史は斯くて半面に於て英蘭の南洋侵略史と見らるゝ所以である。

歐亞交通の十字路としての、又世界の資源寶庫としての南洋は、其の必然の經路として、東洋諸國よりも早く且深く、列强侵略を受けねばならなかつたのである。

斯くて益々其の文化的政治經濟的位置を向上强化して、世界の覇權を確立した彼等英蘭は、北進して日本、支那等の東洋諸國と全面的直接交涉を持つに至り、以て日支兩國を啓蒙し初めたのである。

斯くて十九世紀後半、後進日本人の多くは其の歐羅巴的思想、歐羅巴中心的文化認識に導かれ、又威

壓せられて、南洋諸國に對しても恰も其の創めより英米列强の專有する、犯す可からざる地方の如くに思はしめられ、地理的に人種的に歷史的に因緣深い南洋諸族に對して、對英米人以上のストレンヂャーの如き觀念、態度を以て望むのであつた。

其の狹小なる列島内の生活に鍛鍊釀成せられたる不屈の精神と智的包容力に因つて、十九世紀開國以來急激なる發展を遂げ來つた日本が、一八九五年亞細亞の老大帝國淸を擊破し臺灣を獲得して果然極東に勃興した時代、同時に又黃禍を唱へられた此の時代に於てすら、日本人は未だ如斯南洋史的世界認識には甦らない自覺無き情勢に置かれてゐた。

斯く在つた事實の中に、傍く思ひ浮べられるのは十六世紀末、大明帝國を、又南洋諸國を、其の威力の下に震駭させた稀代の英雄秀吉の急逝に、泡沫と消えた彼の圖南の大業である。又十七世紀前葉、鎖國の令に日本を世界的關連より分離蟄居せしめた德川の消極政策であり、將又南海馬來半島を領し陰然暹羅を支配した山田王國の劇的終焉である。

悠長唯心的なる亞細亞思想、文化に對し、現實的科學的戰鬪的努力の歐羅巴文明が勝利を占めたるは自然の歸趨であり、生存能力に資する事尠い亞細亞特に南洋諸國人の文明が、然らざる歐羅巴諸國人文明の銳鋒下に征服せらるゝは南洋諸國に與へられたる不可避の運命であつた。

此の鬪爭に因る盤根錯節、切瑳琢磨を經過し、之に適應し得可き潑剌たる能力が釀成せられたる秋に於てのみ、人々は、より有能なるものとして雄々しく世界を濶歩し得るものである。

斯くて地上人類の全一なる發展、世界史の動向は逐次其の中に決定せられて行く。此の意味に於て啓蒙的な近世歐羅巴文明の世界史的意義、價値は、容易ならぬ偉大さを持つものである事を忘れてはならない。

卽ち古代及び中世前期に於て華かなりし亞細亞文明は、却て輸出し、リードし居たる歐洲に於て、中世末來近世に於て素晴しき發展を歐洲的雰圍氣の中に遂げ、遂に其れは恰も異るものゝ如くに强大なるものと變改せられて、十九世紀以來再び亞細亞に逆輸入せられ、對亞細亞的指導勢力と化したのである。

西力東漸時代より、十八世紀南洋侵略の概成に至る時代卽ち十七、十八世紀の頃、狹小なる歐羅巴半島――現代の英領印度と殆んど變らぬ――に蟠居する歐羅巴三億の人間と數十個の獨立國家は、當時より既に生活難と國歩難に惱まされて、個人的に國家的に生存力の强化、對外進出の必要に迫られてゐたグルッペであつたのだ。

從つて個人の生活上、國家の存立上、亞細亞特に生活資源豐かなる南洋諸民族の其れとは比較にならぬ難關を開拓するの試練を經てゐた。科學の發達に依る自然物の利用、進取的精神の旺盛に依る機會の獲得等に高き能力を培養せられたるは當然の事である。彼等は斯くて充分に其の羈足を、懶墮な民族群る廣大なる海外各地に伸し得たのである。卽ち――

“………………Until the vast commercial expansion of recent years, the population of

great Britain was obviously in excess of the means of subsistence. Employment was often difficult to be obtained; wages were scanty; food was scarce…………Beyond the sea were continents of rich land lying unused by man. The idle and the waste lands had merely to be brought together, and the giant evil of the time would be redressed…………"

加ふるに人種的優越感と其の宗教的背景は、全世界を自らの專有と自信し、其の高く强き文化、能力は人口に於て已に五倍し面積に於て百倍する異人種世界を己の利益の爲に支配活用するの權能を自負してゐたのである。

未開人の利己的統御を白人の負擔 White Burden 也とし、又人類道德の準據を白人利益に置く黃禍說 Peril of the White 等、彼等の間に膾炙せる是等の語は其の間の消息を雄辯に物語るものであらう。十七世紀、西力東漸の初期、彼等の智能によつて蒙昧なる南洋諸族が、如何に惱まされたかを見るには、次の興味ある一文がある――

「其人猫眼鷹準、拳髮赤鬚、諸國中之最傑者、四海行賈、不レ至則已、至則圖謀人國、呂宋亦其陰謀併奪焉、接佛郎機人得利互市、途奉王金壽、向レ王乞レ地ニ得一手皮大一、王許レ之、佛郎機酋、陰截ニ牛皮一、細條相連、圈圍已ミ逾ニ百丈一、王有ニ難色一、但業許レ之、佛郎機酋、立將其地築城、城內置レ樓城臺上列ニ大炮一、後殺ニ王兄弟一、併其國………。」

C. Fryke, C. Schweitzer――〔黃秦封、桃栅譯＝十七世紀南洋群島航海記〕

佛郎機（フランキ）（スペイン語）とは異國人（此の場合に於てはスペイン佛郎機の酋とはレガスピを指したも

のである。

又、和蘭東印度會社其の他が、「希望峯以東に神の照覽なし」てふ當時彼等の常識に依つて、如何に南洋諸島に於て傍若無人の行動を執つたかは、次の片節に據つても知らるゝであらう——

「…………使讀者於明瞭、荷蘭人冒險進取精神之余、對二於當日南洋之原始社會一、亦可レ得二以認識一、且當時所謂之東印度公司、不但視二土人生命一、螻蟻不レ若、卽、荷蘭本國、用二種種手段一所二招集三之工役、一出二國内一、卽被船主輩酷遇剝削、其慘有非四筆墨所二能形容一者三、…………視爲二荷蘭東印度公司一篇黑幕史一可也…………」

〔前記十七世紀南洋群島航海記に對する顧因明の跋文〕

斯くて近世南洋史は、世界に雄飛する歐羅巴半島諸國家の支配下に、荊棘の道を二十世紀現代へと進み行くのであつた。

政治的には勿論、間接的には文化諸學方面に於ても、近世以來世界史の動向を指導し來つたアングロ種族の偉大に、最も大いなる貢獻を爲せる事蓋し南北兩米大陸に優る南洋諸島國の衰退の犧牲より偉大なるは無からう。

獨逸の政治學者リスト Friedrich List も曰へる如く「…………凡そ正規の發展を爲しつゝある國民は、未開國民を指導して文化の恩典に浴せしめ、尙其の有する過剩なる人口と精神的資本の餘力を以て植民地を建設し、新しき國民を創造する力を有してゐる」ものであるが、之は倫理的方策に據つてのみ正しく容れらる可く、又永續し得可きものであらう。

十九世紀末、初めて植民地を獲たる日本、能く此のリストの正規の發展を爲しつゝある國民たり得るや否。

是は南洋の一角を占むる臺灣が古來南洋諸島國と地理、歴史、種族等凡ゆる點に於て最も緊密なる關係を持つて最適任たる日本の統治下に在る限り、日本が臺灣を含む今後の南洋を亞細亞的本然の軌道に復歸せしめ得る否やの劃期的重大意義を持つものである。

竹越與三郎氏は其の著臺灣統治誌中に述べて曰ふ――

「今や日本國民は絶東の海表に起ちて白人の大任を分たんと欲す。知らず我國民は果して黄人の負擔を遂ぐるの幹能ありや、否や。臺灣統治の成敗は此の問題を解決するの試金石と云はざる可からず」と。

左記は十九世紀末に於ける日本政府の對外認識、行動を知るのよすがとして、入江寅次氏の邦人海外發展史上卷より拔粹して次に列擧する事にした。

「………先年（明治二十七年＝一八九四年）ニウヘブリヂス群島を占領するが良いだらうといふ事を、同島在任の英國人より海軍大臣外務大臣にいつて來た。拙者にも同様のことをいつて來ました………」

〔志賀重昂＝植民協會報告第二三號所揭〕

「………青木氏（子爵青木周藏）曰く、予の歐洲にあるや、南洋の某島を僅々數百萬圓にて我帝國

の版圖に入るべき機があつた。然も當時閣臣の小志弱行の爲に果す能はずして止んだ。今にして之を終天の恨事とする」と。

〔德富蘇峰＝近世日本國民史—鎖國篇所揭〕

「……今を去る十六七年前（卽ち明治十年＝一八七七年頃）我が小笠原島の島續きとも稱すべき西班牙領のマリアナ群島及びカロライン群島を買上げ、尙進んでニウギニアの一部に殖民を試みんとする意見を建議したる人がありましたが行はれなかつた由、其の後ボルネオの北海岸にして我九州地方と伯仲すべきサバー（現サラワクの藩名也）と稱する島を、一百五十萬圓にて其の領主たるウエルネー及びスルーの酋長より讓り受け得べき機會がありまして、時の內閣に謀りました人があつたが、不幸にして其の言は用ひられなんだ……」

〔榎本武揚の述懷＝殖民協會報告第一號所揭〕

註　ウエルネー＝ブルネー
　　カロライン＝カロリン

第五編　現代史

總說編

第一章　日露戰役の世界的影響

過去數世紀に亘り、歐洲列强の爲に奪はれた南洋諸國家は、英、蘭、西諸國人道德に基いて與へられた惱み多い生活に喘いでゐた。

斯くて自己の無力に因る幾世紀に亘る彼等の永き雌伏生活は、既に彼等を去勢して正常なる批判力を失はしめ起つ能はざるものの如くに見へてゐた。

南洋諸民族が如斯沈滯の二に在つた時、突如として彼等の精神に偉大なる衝擊を與へ、頓て彼等の人種的、民族的自覺と奮起を促すに至つたものは、二十世紀初頭に於ける同種日本の大露西亞帝國擊滅であつた。

當時ツァーニコラス Czar Nicolous の下に歐洲の大强國として、其の勢力を歐亞大陸に振つてゐた露西亞帝國の極東侵略政策は、十九世紀末來シベリアを併せ滿洲を犯し、二十世紀に入るや遂に南下して日本に隣接する朝鮮に侵入し來つた。

一九〇四年卽ち明治三十七年、自國存立の爲、東洋平和の爲、遂に日本は奮然として起ち上り、海

に陸に世界史上空前の大激戰を演じつつ、翌一九〇五年卽ち明治三十八年、然しもに强大を誇つた露西亞帝國の大軍を徹底的に粉碎し、全く其の極東延て亞細亞侵略の野望を拋棄せしめたのであつた。十三世紀末蒙古の英雄成吉斯大汗が、當時未だ蒙昧無力であつた歐洲諸國を其の統治下に征服してより實に六百年、絕へて久しき亞細亞人國家の勝利であつた。

亞細亞極東の一小列島たる日本の、歐洲の一大帝國露西亞打倒は、當時の世界人心を震駭せしめた成吉斯大汗以來未曾有の歷史的大事件であり、常識化されてゐた歐羅巴人種の對亞細亞人種的優越感を破壞し、有色人種能力の潛在せる偉大性を發揮せるものであつた。

此の事實は、歐洲人國家の攻擊或は統治下に、或は惱み或は亡びた南洋諸民族を初め、亞細亞、アメリカ等の全有色人種國民を狂喜せしめると共に、其の諦觀絕望視せる自己の無力を反省して前途に洋々たる可能の世界を見出したのであつた。

其れは統治者英人への過信を薄弱ならしめ、徐々に其の苛酷なる歐米諸國よりの羈絆を脫す可き向上强化への努力となり、頓て其れ等の精神的衝動は外面的運動を形成するの動機を作つて行くのであつた。

他方アングロ族に執つて日本の强化、亞細亞の擡頭は、彼等世界專制の牙城を搖がす一大脅威であつた。

斯くて其の十年前の一八九五年卽ち明治二十八年、日淸戰役以來歐洲に提唱せられた黃禍論は更に如實に全歐羅巴諸國人の腦裡に流布喧傳せらるるに至り、科學の進步に伴つて主觀的に縮少される將

來の地上鬪爭は、やがて國家を超ゆるものと擴大せらる可きが豫想された如くである。

「………日本は既に吾人に於て………………………………避け難き大決戰に於ける壘壁を感知してゐる。

此の決戰に依つて……………………………戈を聯ねて起たねばならないであらう…………」

〔芦田均＝最近世界外交史 "Grösse Politik" 上編＝第九章參照〕

斯くて十九世紀末來の世界的文化思潮及び二十世紀初頭日本の露西亞打倒は、蒙昧なる南洋諸民族の自覺蹶起を促す事多く、之等の地方に植民地を有する英米列强は、曾て顧る必要なかつた自領植民地人の向上に對して何等かの、又多少の人道的待遇を考へねばならぬ時勢となり來たつた。

當時最も迅く日本を仰いで之に倣はんとした亞細亞諸國は、土耳古、阿富汗斯坦、伊蘭、印度等の回敎國家であり、伊蘭は一九〇六年憲政を樹立して諸政を一新し、印度は翌一九〇七年より組織的な獨立運動に入つた。更に土耳古は其の翌一九〇八年、新進有志等、青年土耳古黨を組織して、近世以來衰退せる土耳古民族の奮起、歐洲文化の輸入等による國力の充實を圖つて外侮の絶滅を期してゐた。

尙、日露戰役の世界的影響に關しては、二十世紀亞細亞人種勃興の意味に於て、倫敦大學敎授ワウルス Graham Walles の著人間の政治性 Human Nature in Politics. London, 1917. 及び印度ベンガ

ル大學教授サルカル Benay Kumer の著若き亞細亞の將來 The Future of Young Asia, Calcutta, 1922. の名著がある。

又米國アトランタ大學教授ボイス Wliliam de Bois は一九三六年十二月、日本來朝の折東京に於て述べて曰く――

「……………來る可き世界は……………………………………………能く經濟的精神的勢力を協力する場合に於てのみ、頓て世界は……………………………………であらう………………」と卒直に其の所信を披瀝した。彼は一八九〇年ハーバード大學教授たり、一八九五年獨逸ベルリン大學に學び、翌一八九六年以來アトランタ大學教授として經濟學、史學等を講ジてゐる黑人出の學者である。

第二章　ヴェルサイユに於ける人種平等案の否決

遠く其の因を英國の帝國主義發展に置く一九一四年の歐洲大戰は、日英同盟の誼みにより遂に日本をも其の渦中に惹き入るるに至り、スエズ以東の東洋及び南洋は獨逸勢力に對する日本陸海軍の攻守を必要とするものとなつた。

卽ち日本陸軍に依る獨領膠洲灣の攻略及び同海軍による南洋各地に於ける英、佛植民地の保護及獨領諸島の占領等、亞細亞保全の爲の大活躍之である。

斯くて日本は亞細亞の盟主としての位置、能力を世界列國環視の中に充分遂行して、歐洲なる聯合

軍援助の爲に又亞細亞平和の爲に大いなる貢獻をなし、大戰終了の一九一九年にはヴェルサイユに開催された萬國講和會議に、日本は亞細亞の權益を代表する最も有力なる大國として參加するに至つた。然して數世紀以來、英蘭人壓迫の爲に畏縮し切つた南洋諸族を初め亞細亞人種十億に執つて、最大の期待と感謝を捧げられたものは、歐米列强に對抗して遜色無き唯一の先進同種國、大日本政府に依つて提出された、正義人道に基く人種平等の要求であつた。

彼等は東洋の、延ては亞細亞の諸民族が自らの國家存立向上の爲に、國運を堵して敢然と起ち、夫の强大露西亞帝國の亞細亞侵入を破つた日本の此の力强き主張は、其の正當性に於て必ずや通過し、三百年に垂んとする亞細亞、主として南洋諸民族の永き陰慘なる生活は之を契機として解消し、頓て招來せらるるであらう自然の惠みの、彼等と共に等しき春の日の訪れを待望したのである。

然し乍ら、日清戰役以來擡頭し來つた日本を盟主とする有色人種諸國家の聯合結成を恐れてゐた、卽ち黃禍を危惧してゐた英米諸國は、眞向より此の日本の正しき提案に反對し斷乎之を否決し去つた。

更に有色人種をして悲しましめた事實は、歐羅巴文明に啓發され其の文化的思想的侵入を受けてゐた日本國民其れ自身が、强力なる英米列强には恐れをなして、敢えて强硬なる該提案の通過を試み得ず、事前に既に其れが否決を豫想して部分的、制限的認容にすら何らの努力を爲し得なかつた日本の卑屈なる態度であつた。

"............Although apparently this Japanese demand for racial equality was made

purely on grounds of national prestige and did not involve other more material objectives……
……"—Japan in American Opinion"—by Tupper & McReymolds.
p. 151. New York, 1937.

地上人類の大半十億に餘る有色人種の輝かしき希望は、斯くして無殘に葬り去られ、信ずる者を失つたデスペレートな氣分の中に、彼等は再び灰色の悲痛なる生活に低迷するの餘儀無からしめられたのである。

一部亞細亞諸國民が、絶大なる英米權力の前に屈服し、之に迎合して生活し行く事の、寧ろ英米列國に對立抗爭するの愚を行ふに勝れるの女々しさを思ひ、又彼等一部の先覺者達が、日本依存の無駄を知つて自力甦生を志す可きを痛感し初めたのも此の時である。

然し乍ら如斯意考は、其の多くが、彼等の統治者たる英米諸國の巧妙なる植民政策に依つて釀成せしめられたる無理からぬ思想であつた。又雄々しく獨立を企圖せる先覺者有志に執つても、餘りにも無智なる同胞大衆を見ては、其の理想も夢の如く、儚く且望洋の感に打たれるのであつた。

又地上諸々の國民は、人種平等案の否決に因つて知らるる人間の人種的偏見の根强さ、及び之に基く地上永遠の利益生活の氷炭相容れざるを悟らしめられ亞細亞の勃興は、必ずや將來に於て多大の困難の伴ふ可きを豫想せしめられたのである。

斯くて列强の高く唱ふる自由、平等、博愛、正義、機會均等、人道等の倫理は、自らの主觀的優越や White Leadership for Coloured Peoples に依つて、同種列强間にのみ通用するものであり、其の

利害、歷史、地理を異にする亞細亞人種にまでは其の德を及ぼすものでは無いと考へられるのであつた。一九二〇年英、佛等所謂「持てる國」列强の既成利益保全を隱されたる目的として創立された、國際聯盟 League of Nations に於ける利勘き日本の一九三四年の脫退も亦「持たさる國」たる亞細亞的日本の强化と、英、佛を中心とする列國の發展との利害衝突に遠因するものに他ならない。又此の間に於て、戰亂絕え間無き無統一支那に於て、英、佛等が試みた反日歐米依存思想の普及は、亞細亞强化の爲に一大損害となり、一九三七年、昭和十二年七月に於ける日支事變勃發てふ大不幸の遠因も亦玆に見得るのであつた。

日本勢力の亞細亞的興隆は、實に英米發展の大障害であり、英米は之を仆す事に依つてのみ、僅かに餘せる極東をも掌握して世界制覇の大業を完成し得るものであつた。

西力東漸時代に於ける彼等の「南洋に良心無し」「亞細亞に神の照覽無し」等の常識は、十九世紀末來一般有色人種の文化的向上、日本帝國の勃興等に依つて、大體に於て其の外廓を隱蔽して不明瞭ならしめられ來つた。然し內には依然として中世時代同樣の利己擴大の劃策が賢明に强行せられて居り、地上は現代に至るも尙アングロクリスチャンのクリステンダムの如く思ひなさるるのである。

其れ等よりも既に早く、一九〇四年、曾て印度總督であつたカーゾン卿 George Nathaniel Curzon は一小歐羅巴半島なる英蘭人權益の爲に着々と擴大され行く、卽ち蠶食され行く廣大肥沃なる亞細亞陸を眺め快心の笑を洩らしつつ言つた――

「…………全亞細亞に於て吾人の政治策戰上の勢力の確立して動かざる見込あるは、シベリア、露西亞領中央亞細亞、印度及び印度支那である」と。

とまれ、同じき人種にして英米列强と比肩し、堂々と世界史の動向決定に參與せる先輩日本の雄飛は、他の同種衰亡諸國家民族に執つては最大最高の指標であり憧憬であつたのだ。

彼等黄色乃至黑色人種諸國民の家庭の多くには、同種の興隆に最も力あつた日本の　明治大帝の御尊影と、人種平等案を引提げて歐洲に乘り込んだ牧野全權、竝びに黑人開放に偉功あつた米國大統領リンカーン等の肖像が、恭しき尊敬の中に高く掲げられあるを垣間見るであらう。

第三章　南洋諸民族の覺醒と列强

一度南洋諸民族の間に萠え初めた人種的平等感の新芽は、世界時潮の流れへの認識を深めるに從つて徐々に成長し、内に平等化への能力向上の爲に智的要求向學心を勃興せしむると共に、外に生活權、獨立權の獲得を目ざす運動を發生せしむるに至つた。

其れは同種日本の治下に在る臺灣及びマリアナ以下のミクロネシア群島住民が、舊スペイン領時代に在つたに比し、平和と幸福の中に其の豐けき文化生活を營めるを見て更に其の感を深めしめらるるものであつた。

英米列强に竝立して亞細亞の利益を代表する唯一の帝國日本、又英佛等有植民地大國の權益維持機關に過ぎざる所謂國際聯盟を、反亞細亞的なるより離脱して孤立に陷り、加之世界に堂々の陣を張つて降らぬ雄々しき極東の大國日本に對する思慕の念は、油然として彼等の一部有識者の間に湧き出るのであつた。

賢明亞細亞人に比して一日の長ある歐羅巴諸國、特に南洋植民地を失つては其の榮ある存立を危からしめらるる位置に在る英、佛、蘭等が、領下南洋諸族の間に漲る如斯思想傾向を等閑視する筈は無かつた。

卽ち彼等は領下民族の宗教盲信性を利用して、宗教的倫理的形而上學を中心とする教育を興して、島民の上層に智識を滿足せしめると共に、三年乃至五年制の小學教育を創めて一般島民の智的要求の

一部を充たした。

然し乍ら島民一般の經濟的生活は、到底彼等の向學心を滿足せしむる能力が無かつた。

加ふるに賢明なる植民地總督府は、折に觸れ時に隨つて、日本の侵略主義を說いて、島民の間に恐日排日的思想を涵養し對日接近の希望を無からしめた。

然して島民の無智と日本の對外政策の消極は、充分に其れを島民に信じ實行せしめる事が出來たのである。

從つて一部先覺者島民の熱心なる指導も、同胞島民の大半が斯かる讀み書きをすら得知らぬ無智の位置に在り、且敎育よりも先づパンに追はるる生活難者流である點に於て、其の效果を期待する事は殆んど不可能であつた。

加之總督府は、穩和なる島民を如斯境遇に在らしめつつ尙巨額なる國防費の外に警官、兵役等に徵集して、尊き血稅を喜んで支拂はしめ得る賢明なる政策を執つてゐた。

斯くて本國に數十倍する尨大なる植民地を把握統治する總督府の威令は、數世紀來嚴として島民の間に普く、法律的經濟的桎梏を以てしても尙島民の不穩動搖を招來する事無かつた。又斯くあつてのみ、內に島民に禍される事なき列强總督府は充分に其の覊足を近隣諸島より廣く南洋、東洋への政情に注意し、國策遂行上の有利なる發展を爲し得、以て總督府の目的たる當該植民地の發展的維持は容易に有效に達し得たのである。

第四章　現代南洋史上に於ける日本の位置

其の地理的人種的見地より、日本と南洋諸島との間には密接なる因縁が在り、特に中世日本人は曩に述べたる如く、白人に先んじて南洋諸島國と交り深い關係を結んでゐたものであるが、徳川鎖國令の二世紀の間其れは中絶せられ、折からの西力の爲に全く蹂躪せられて了つたものである。

十九世紀末、再び兩者の關係が開かれた頃には既に互に先祖の其れを忘れ果て、加之南洋諸族は列强の植民地人として兩者の直接交渉は許されぬ狀勢に置かれてゐた。舊交を溫むるの由も、認識を深むるの術も相互に有しないのであつた。

然るに一八九五年、日本は臺灣を領有し、二十世紀に入つては一九一四年卽ち大正三年、かの歐洲大戰に參加してスエズ以東全南洋の廣大を其の制海權下に確保し、又ミクロ、メラネシヤ群島を占領し、次で一九一九年大正八年には、其れ等の內ミクロネシアの一部を統治下に編入するに及んで、中世時代結ばれたる日南關係の一端は將に微かに復活せられんとする形勢となり來つた。

更に一九〇五年明治三十八年に於ける日本の露西亞打倒は、南洋諸民族の間に異常なる亞細亞的日本的思想傾向を釀成するものとなつた。降つて一九三二年昭和七年に於ける滿洲の獨立、一九三四年卽ち昭和九年に於ける日本の國際聯盟脫退、及び昭和十三年に於ける東亞新秩序建設を目ざす日支事變の建設的意義等に依る日本の亞細亞的指導國化は、南洋諸民族の一部先覺に更に日本信倚の情を昂上せしむるに至つた。卽ち思想的亞細亞の統一化は其の一步を進められんとするが如くであつたので

ある。斯くて列強の南洋各地に於ける反日思想培養政策も、又南洋諸民族に對する無智留滯政策も、其の根柢に於て破壞せられんずるもの丶如く、一部島民の獨立思潮は堰止め得ぬ勢を以て普延され行つた。

卽ち過去三世紀の永きに亘る英米勢力下の南洋は、斯くて內部的崩壞への端緒に就き、二十世紀中葉以後に於ける南洋史は劃期的な意義ある亞細亞的自覺時代となり來らむとするかに見へた。

而して此の中に燦然たる光と力を其の必然の經路に於て效す可き日本の役割、運命も亦、史上空前の大いなる意義を持つものとなつたである。

然し乍ら不幸にも如斯重要なる位置に在る日本人も肝心の南洋に關しては殆んど無智であつた、從而無策であつた。

西力東漸の最初にして最大の接涉地たる南洋史を知らずしては、西力の如何なるものなりしかを知り得るものに非ず、從つて英米人其者の本質的思想、行動を理解する事は不可能である。

加之、日本初め支那暹羅等亞細亞諸國の指導的位置に在る所謂インテリ階級は、强烈なる歐洲文明の閃光に眩惑魅了せられて、拜歐的思想は殆んど本能に近き迄に彼等亞細亞人の腦裡に、又生活に、浸透し切つてゐるのである。

既に迅く一九〇五年に於て、日露戰役を仲裁せる米國大統領ルーズベルトから亞細亞に於ける日本の指導的位置を認められ慫慂されて居り乍らも。

然し乍ら二十世紀前葉人類の智度、倫理に於て、列强植民地相連り利害相錯綜する複雜なる南洋の

地に活動せんとする、日本の爲す可き多くの大事の成功には、特に人類最高の智識武力と倫理の併用が要求せられねばならない。

斯くて二十世紀中葉以後の世界史の動向を決定するものゝ一は南洋に在り、南洋をリードする者は尠くとも全亞細亞をリードし得る能力者となるものである。

然して既に世界諸國に侵略國と見られてゐる日本に執つて、今や南洋史研究の現實的な文化的政治的價値は、其の頂點に於て認められねばならないものとなつてゐるのである。

雖然今日日本の平和的南洋進出も列强の南洋民族に對する恐日誘導政策の成功と、其の賢明に守られたる强大なるエゴイズムとに因つて益々困難なるものとなりつゝある。

飜て吾人は玆に南洋に對する日本及列强の位置を確認し度いと思ふ。卽ち英國、和蘭、佛蘭西等の列强が、遠く異域亞細亞なる南洋に其の科學的戰鬪的强大なる鵬翼を伸して、廣大肥沃なる大資源地、大市場を獲得し、猫額大本國の世界的繁榮に資してゐる時、不思議にも日本のみは、古來因緣深き南隣の島嶼と富を利用し得ないのである。

況んや南洋と地理的に歷史的に又經濟的に一環同軌に在り、其の運命を共にす可き位置に置かれてゐる日本の南洋發展は、英米の單なる經濟的且一方的なるものとは根底に於て異り、將に衰亡の悲運を辿りつゝある南洋諸族を中世以前の繁榮に復興し、亞細亞的共存の實を擧げ世界平和に資せむとする人道的倫理的意義あるものなるに於てや。

亞細亞の指導勢力日本は叙上の如き共存共榮の中に、何等其の過剩人口を、缺乏資源を、又英米列强よりの脅威を感ずるの必要無きものとなるであらう。

斯くて現代の弱小亞細亞諸國が發展して遂には亞細亞列强と稱せらるゝに至るとも、彼等は敢て歐羅巴諸國をば、彼等が亞細亞諸國に對して爲せるが如くに慈悲無く侵略撃滅はしないであらう。

兩者は斯くて互に其の分を守りつゝ相交歡し、地上は初めて春日長閑なる中に共榮發展の道を進み行く。

然し乍ら、現代世界を支配せる覇者達の不屈不撓の精神は、飽く迄も其の優越なる位置を確保發展せむとして永久に已まないであらう。卽ち曾ての China Press 主筆ペッファー Nathaniel Peffer は力强く宣明して言ふ――

「…………英米今日の隆盛は、英米列强が過去に於て亞細亞、亞弗利加、南洋等の未開諸族を搾取し、過剩生産品を賣付け、又過剩資本を貸付けたる事によつて、近代的資本主義利潤經濟の複雜なる組織を高度に發達せしめたるに在る。…………卽ち完全なる搾取市場として獲たるが故に在る…………………英米が亞細亞から手を引く事は、英米の產業組織、金融組織に決定的な打擊を與へるものとなり、是は到底言ふ可くして行はれ得ない事である………………………

斯くて我々は飽く迄も强行政策 Macht Policy に據つて突進せねばならぬのである」と。

〔國際「パンフレット」通信――第八一四號〕

ロゴス以來二百世代に過ぎざる現代人類の胸裡に潜む切々たる生物學的、原人的基調は未だ如何としても掃蕩し得られずして存する。

各説編

第一章　歐洲大戰の印度民族への影響及華盛頓會議

南洋諸族の中、廣袤百八十萬方哩、人口無慮三億五千萬を擁して殆んど歐羅巴半島の其れと相匹敵する大印度の民族は其の豐穰なる土地と、曾ては絢爛たる歴史の歩みを中斷せられて、今日悲慘なる生活に沈淪してゐる。

然し乍ら十九世紀末以來、自由民權のデモクラティックな世界思潮、同種日本の興隆、印度國民議會の活動等に依る印度社會の澎湃たる民族的自覺の風潮は、如何に英國の印度人弱化政策の巧妙と搾取機構の完璧とを以てしても、容易には阻止し得ない陰然たる力を持つものとなつた。

其れは二十世紀に入つて以來、或は獨立運動として或は參政權獲得運動として、徐々に擴大强化するに至り、英國印度總督府も其の影響勢力を看過し得ざるものとなつた。

卽ち一九〇九年英國政府印度事務相モーレー John Morley は、時の印度總督ミント Lord Minto と相圖つて所謂モーレー・ミント改革法を發布じ、武力に依る威嚇を背景しつゝ印度人一部に對して立法、行政への制限的發言權を認容し、以て印度民族に對する充分なる讓歩と考へた。

然して翌一九一〇年、新しく印度總督に任ぜられたハーヂング Lord Hardinge は十七世紀以來永く印度征服の根據地であつた英國總督府の所在地カルカッタを、印度史以來の王城の地たる中北部デリーの舊都に變更し、翌一九一一年には英國皇帝の行幸を求め其の地に於て英國皇帝の兼務たる印度皇帝としての盛大なる戴冠式を擧行し、以て三億印度民衆に對する英國的臣節の涵養に資した。尙北方國境に蟄居して千年の超現實的な歷史を有するネパール Nepal ブータン Bhutan の二小佛敎王國が、完全に英國の保護下に入つたのは此の年である。

然し乍ら英國の如斯制限且內實無き法案と利己的恩威宣布に依る懷柔に滿足する者は、極めて小數の無智なる舊印度王族藩侯の、年金と空名に依り巧みに英國化せしめられたる貴族に過ぎず、不遇に喘ぐ三億印度民衆の要望利益は何等充足齎來せられるものでは無かつた。

印度國民の內最も消極的なる一派の要求を以てしても、其れは華かなる曾ての獨立國印度の文明に徵して、既に英國が一八六七年自治を許し與えたる加奈陀自治領 Canada Dominion の其れに等しき、植民地としての最高形態に於ける政治的位置の獲得に在るのであつた。

當時資本主義的發展華かなりし列强相連る歐羅巴半島に於ては、其の當然の歸結として世界各地に於て互に猛烈なる角逐鬪爭を演じ、特に列國の利害相錯綜せる東南バルカン半島に於ては一觸卽發の危機が釀されてゐた。遂に其れは一九一四年一セルビア人の放てる一彈を機として轟然爆發し、世界史上空前の大戰亂を勃發せしむるに至つた。所謂第一次歐洲大戰である。

最も高き段階に資本主義的發展を遂げつゝあつた英國が其の渦中に在つた事は論を俟たない。

斯くて戰禍は日と共に擴大して全世界諸國列强植民地に及ぶに至つたが故に、植民地大帝國たる英國の受くる影響は最も大なるものとなり、聯合國の主力たる英國は全軍の武力的經濟的補强の爲に遂に大印度を動かす事になつた。卽ち戰勝後、印度に完全なる自治權を賦與するてふ公約を以て、英國の搾取下に疲弊せる印度民衆より、一九一五年より一九一七年に亙つて無慮十二億ルーピーの巨費を徵募すると共に、百二十萬に上る印度義勇兵を大戰最も激烈なる西部戰線に出動せしむる事が出來た。習性化せる英國人への畏敬と、自治獨立の希望に滿ちた印度人は、其の大いなる負擔犧牲をも敢て重しとなさず、直接何等利害關係無き獨墺人を相手として全能力を擧げて主人の爲に慘烈なる殺戮戰に從つたのである。印度國民議會の大立者であり、全印度民衆渴仰の的である偉人ガンヂーが英國の爲に有らん限りの後援に熱中したのも此の時である。

時の英國僧正マドラス Henry Madras は此の印度人の忠誠壯擧に感激讃嘆して曰く――

「…………印度軍隊がマルセイユに上陸したるの日は印度史上に新時代を劃する大事と言ふ可く、啻に英帝國に關するのみならず、實に世界文明に關し印度に新地位を與ふるものであつた。古來世界的大運動に參加せる經驗なき彼等は、國境を隔つるヒマラヤ山脈の爲に世界より隔離され殆んど孤立の生活に長夜の夢を貪つてゐたのである。今や其の時代は去り彼等は來る可き數世紀の世界文明に影響す可き大戰の渦中に投じたのである」と。

然し乍ら既に歐洲文明の如何なるものかを知り、英領印度政策の眞意を解してゐた一部印度人先覺者達は、印度國民議會一派の雄チラク Bal Ghandar Tilak を主班として起ち、飽迄印度文明を包被

し印度人生活を無視せる如斯一時的利己的褒賞に乘ぜざらん事に力めてゐた。即ち一九一四年以來、彼等は印度人の獨立運動を潛かに後援するアメリカ人と共に成せる印米協會 The Indo-American Association（市加古に本部あり）及び印度青年協會 Young Indian Association 竝に、積極的に印度及び之に對する侵入を計劃してゐた獨逸特務機關等と相連絡して、英國が大戰に他を顧る餘裕無きに乘じて一擧に武力革命を斷行せん事を劃策してゐた。

然し乍ら其の陰謀は老巧不斷なる英國密偵の爲果然暴露せられ、寸時を待たず其の本部は英國官憲の爲に占領破壞されると同時に、主謀者以下は直ちに死刑に處せられて、米獨各自の立場より操れる印度人反英獨立援助の企圖は斯くて未然の內に失敗に終つた。

即ち一九一五年以來總督ハーヂングの續出せる、印度人束縛の諸法令は曰く 印度警備法 Indian Defence Act 曰く 不穩集會禁止法 Prevention of Sedition Meeting Act 曰く 印度印刷物法 Indian Press Act 等數十の多きに上り、印度人は其の强壓裡に全く自由を失はしめられて了つた。

斯くて印度人社會は上下共益々其の思想的政治經濟的諸般の能力を減殺されて行くのであつた。

而して一九一八年、五年に亙る歐洲大戰も獨逸の沒落と共に其の終局を告ぐるに至つたが、歐洲諸國の社會は大戰の影響被害の爲に殆んど收拾する能はざるの狀態に陷り、列强は之が回復の爲に又白人の世界覇權復興の爲に全力を盡さねばならないものとなつた。

シュペングラー其の他の西洋の沒落 Untergang des Abendland 等、白人種の沒落的悲觀論が唱へらるゝに至つたのも此の頃である。

從つて英國が大戰中印度人に對して與へた自治權賦與の公約等は到底履行せらる可くも無く、反對に益々偉大なる印度の政治經濟的位置を利用して、自國の補强再建に資する所あらねばならないものとなつた。

卽ち時の英國印度事務大臣モンテーグ Montagu は印度總督チェルムスフォード Lord Chelmsford と圖つて、前に制定せられたモーレー・ミント法の字句を改正し、印度人への公約履行に似せたる如く紛はしき、十年間の自治準備期間を與へた所謂モンテーグ・チェルムスフォード改革法 Montagu-Chelmsford Reforms を發布し印度人心を迎へんとした。

然し乍ら其法中に印度人參政の權益に關しては何等見る可き讓步は無く、僅かに印度人官吏の採用を認めてゐたが、其れも年俸六十磅を超えざる事てふ無きに等しき下級官吏の登用に過ぎなかつた。無誠意不信なる該法は、到底印度人の待望せる自治領制 Dominions States を滿足せしめるものではなかつた。次で一九二一年チェルムスフォード總督は、招集解散及び否決權を握る二院代議制の印度立法議會を開設して、少數印度貴族に參政權を與え、同時に印度治安維持を鞏固たらしむる爲に所謂ローラット法を施行して、漸く擡頭し來つた印度民族運動の急尖鋒たる印度國民議會を中心とするスワラヂ（自治）スワデシ（國産）黨の武力壓迫に備えたのである。

一九一五年の大戰當時、英國が窮餘に約した公言に基く印度人の巨額の出資と血稅の大犧牲に對して、其れは期待を裏切る羊頭狗肉の策であつた。

尙亞細亞人、特に日本人として忘れ得ぬ英國の外交政策は、一九一九年、大戰も其の終局を告げて日英同盟の英國的價値卽ち日本海軍の印度壓迫の必要解消した英國が、翌一九二〇年米國政府に對して密かに「世界平和は實に兩英語國民の双肩に懸れる重責である」事を强調し「英米兩國が徒らに建艦競爭を爲すは世界文明及び人道上の罪惡である。故に英國政府は傳統的大海軍主義を抛棄して米國と均等なる海軍力を協定する用意あり」とて米國政府を懷柔し協力し以て「太平洋の新興帝國日本の隆盛を牽制す可く、米國は專ら其の大艦隊を太平洋に配置し英國は主として大西洋の守りに任ずる」事を約し、其の實證として日英同盟の廢棄を米國に通じた事である。

然して兩國の協調合議は更に百尺竿頭一步を進めて、日本海軍力の積極的無力化に乘り出すてふ、國際的大芝居を演ずるに至つたのであるが、卽ち是翌一九二一年米國が表面に立つて提唱せる華盛頓軍縮會議開催の原因である。歐羅巴文明の絢爛に眩惑魅了せられて白人の美點のみに通ずる、悠長なる亞細亞國民。當時の日本は無心に極めて無邪氣に國際道德的見地より忻然同會議に參加し、日本の太平洋防備の縮少、艦船能力の弱化、日英同盟の廢棄等の記念品を得て悲憤裡に歸つた。斯くて內面に藏されたる英米兩英語國民の對日壓迫は首尾よく完成せられたのである。

「外面如菩薩內心如夜叉」は、常に國際的外交交涉に最も多く見受けられねばならない消極的な自己防禦政策の一であり、其れは血腥く犧牲多き戰爭以上に有利なる立場を創造する、智能の平和的なる使用である。

尙此の華盛頓會議開催迄の英米間に行はれた經緯に關しては、當時の紐育タイムス情報部長ヤング

Eugin Young の著 "Powerful America" New York, 1929. 第三章中に明かに記されてゐる。

第二章　ガンヂーと獨立運動

曾ては英國を信じ英國の爲に同胞印度人の歐洲戰線派遣、軍資金調達に奔走したガンヂーも、全く印度人三億の生活を無視せる英國の不信なる政策に對しては、遂に斷然たる排撃の烽火を擧げねばならなかつた。

卽ちガンヂー Mohandan Karamchand Gandhi＝Mahatma Gandhi は悲壯なる聲を以て印度民衆に呼び掛けた「ガンヂスの河は溢れてゐる。印度に於けるガンヂスは埃及に於けるナイル以上の慈母である、其れは熱氣に蒸發せられて空に上り雲と化し、雲は再び雨となつて地上を潤ほし河となる。自然は如斯循環して息む所を知らない。然るに印度の場合、雲は再び雨となつて還る事なく、遠く倫敦の地を潤ほすのみである」と。

一九二一年、彼は印度の各階級種族を網羅する全回敎徒ヒンヅー敎徒を打つて一丸とし、不信なる英國の統治に對する印度自治獨立運動の指導者となり英國に對する商品、納稅、裁判、血稅等を拒否する所の、國民的休業 National Harkur を宣言した。所謂英國との非協力運動 Non-Cooperation Movement である。

斯くて全印度にはガンヂー指揮下に一齊に此の消極的排英運動が行はれ、英國總督府は曾て無き驚

愕と狼狽に陥つた。

尚ガンヂーは、故郷アーメダバドを出でて倫敦に遊び法學を修め、次でボンベイに辯護士たり、後に眞理の探究 Satya Graha に基く倫理的政治運動に身を投じ、一般印度人よりはマハトマの尊稱を受け救世主の如く一世の信望を集めてゐる偉人であり、二十世紀印度の反英獨立運動の鼻祖として其の名は世界に鳴り響いてゐる。

英國總督府は翌一九二二年、主魁たる彼を投獄六年の刑に處し、以て全印度に漲る不穩なる形勢の解消に資せんとしたのであるが、事實は全く相反して民衆の獨立潜行の運動は益々活潑となり、翌一九二三年には、曾て中立派の重鎭であつたヂンナー Muhamad Ali Jinnah ガンヂーの後を承けて獨立黨を組織し大いに氣勢を昂げ、一九二五年以後は專ら印度合衆國 United States of India の建設に盡力してゐる。

斯くて一九二八年、曩に約束せる自治準備期間十年に滿つるや、同じき獨立派の闘將ネール Pandit Motilal Nehru 及び其の子ネール Jawaharal Nehru は同志ボース Sbash Chandhre Boss 竝に出獄せるガンヂー等と成せる印度獨立聯盟 The Independence for India League 以下印度人各派團體と合流一致して、其の代表者會議を開催、父ネール之が議長となり、以て曩に英國が言明せる印度自治權賦與其の他を正式に總督に要求する事を議決した。

然し之に對する、時の總督アーウィン Lord Arwin の回答は模糊として、何等の誠意を認め得ず結局不得要領の中に葬り去られて了つた。

翌一九二九年ラホールに開かれた印度國民會議が、悲壯なる決意の下に印度の完全獨立、無實なる印度立法會議員の總辭職、納稅の拒絕等を議決し以て耐久的排英抗爭の手段に出でた所以である。印度民族獨立の動きは斯くて愈々深刻なるものとなり、一九三〇年に於ける印度は聖雄ガンヂーの下に英商品不買實施せられ、各地印度人陋屋上には、印度獨立の旗へんぽんとして春日に輝き渡るのであつた。

飽く迄も强き主義に據り、對立者の主張に藏せらるゝ客觀的妥當性を認めない英本國政府は、如斯印度に於ける不利なる情勢を更に利己的に解決す可く其の最初の試みとして、總督アーウィンと相圖り其の一九三〇年、獨立派の巨頭たるガンヂー、ヂンナー等及び既に英國懷柔の中に在る回教徒代表アリイーマン其の他の印度諸侯を本國なる倫敦國會上院に招集し、英國皇帝臨御の威容下に首相マクドナルド議長となつて、所謂第一回の圓卓會議を開催した。

然して先づ議長マクドナルドの雄辯は、古來世界に冠絕せる印度文明の宗教的讚辭に初まり終局に於ては遂に、次の三箇條を各印度代表に認容せしめて了つたのである。

A　ガンヂーの主宰する國民會議一般は其の目的とする印度の完全獨立を拋棄する事

B　暫定的な應急策として全印度の聯邦制を計畫する事

C　其の聯邦制を基礎とする憲法を英印協定する事

熱と意氣に燃ゆるガンヂー一派の印度人志士等如何に賢明なりと雖も、永年國際關係、外交接涉等

多角多端なる歐洲に大國を營む經驗深き英國外交官の老獪には到底及ぶ可くもなかつたのである。英印協定卽ち之であり、巧妙なる英國の政策は斯くて大體に於て成功し、大戰以後十年に及んだ英印間の紛爭も一時的安定を見るに至つた。

然して翌一九三一年歸還した印度代表達は、直ちに印度國民會議を召集し旣に決定せる該協定を、暫時は認容するも、第一條印度獨立の抛棄てふ事のみは絕對に受容するものに非ずと議決した。

然しガンヂーすらも懷柔されたる英國政策の巧妙なる處置は、印度民衆一般に、恰も該協定は兩者の間に完全に認められたるもの丶如くに印象着けて了つたのである。

次で英國總督府は信望あるガンヂーを處刑する事の不利なる反響を避けつ丶、彼の勢力失墜を圖る可く、先づ印度人の狂信を利用して、彼等の社會に不拔の尊嚴を以て迎えられてゐる回敎徒及びヒンヅー敎徒の長老にして、加之國民會議の會員たる有力者の籠絡獲得に奔走した。

卽ち總督府は彼等を誘致するに Sir の尊稱と優遇及び年金の賦與を以てし、着々と其の親英化に成功し、明くる一九三二年總督ウイリンドン Freeman-Thomas Willindon の時代には、印度人最高能力者たる倫敦派遣の圓卓會議議員の大半を此の種英國的傀儡印度貴族に依つて占めるに至つた。

英國の此の巧妙なる間接的壓迫政策に禍ひされたガンヂーが、曾て華かに、今沒落の身を政治運動の第一線より引退を聲明するに至つたのは其の翌年の事である。然して彼の後繼者たる可き位置を占めてゐたのはヂヤワハラル・ネール（曩に記した獨立派の鬪將ネールの子）であつた。

然し乍ら其の後に於ける英國の印度政策に就いて、印度側の權益を主張す可き極めて少數の上層印

度人達は、例年の倫敦圓卓會議出席者を初め其の他全部が、偉大なる英國の恩惠と威嚇を多大に受けて錯覺を起し、同胞大衆三億の貧窮を知り得ない、從つて其の向上幸福等を忘れ果てた長閑な然し決して利己を忘れない人々であつた。

何れの國に於てもそうである如くに、印度貴族乃至上層階級の人達が、最大多數を占めてゐる重要なる下層生産階級の要求や希望を理解し得ないのは、彼等が愚鈍或は惡意を持つてゐるからでは無く、彼等少數の上層者の社會が下層の其れとは全くかけ離れ、生活の不安から高く逃れた特權的位置に在り加之權力によつて厚く保護せられて其の立場を異にしてゐるが故に、大多數下層階級者の悲慘なる生活苦が彼等の視野に這入らないためである。

又假令其れが彼等の視界に入つたとしても、上層者の安閑たる道德的鍛錬無く慈悲心薄き單調なる生活境裡には、直接關係無き下層者流の悲慘にして困難なる問題を身に泌みて感ずる事なく、從つて其の問題解決の爲に、敢て正義を求め努力奮鬪するの犧牲的倫理的要求も實行力も培養せらるゝ筈が無かつたのである。

吾人は凡ゆる人生問題に就いて、如斯觀點角度より其の眞相を正しく認識洞察して行く事を忘れてはならない。

尙ガンヂーの後を承けて印度國民會議派を統率するに至つたヂャワハラル・ネールは、其後コミンテルンの毒牙に赤化し、一九三六年以來反日的となり、一九三八年に入つては、日支事變を以て極端

なる日本帝國主義の發露なりとして盛んに攻撃の矢を放つてゐる。

ネールの投稿せる論文 Foreign Affairs, Jan. 1933. "The Unity of India" 參照

第三章　英帝國主義鐵蹄下の印度

英國は歐羅巴半島の全面積に近い廣大肥沃なる英領印度(含緬甸、バルチスタン、馬來半島の一部)に對して、巨額の資本と智能を投じ、其の産業交通を開發整備して資源の活用に餘す所なかつた。從つて英本國の商工機關は極度に發達し、對外國貿易は常に出超相繼ぎ、三億印度民衆は無論其の消費者として獲得せられてゐた。

更に印度のみに於て見るも、其の對外貿易は年々驚異的利益を收めて英國財政に比類無き援助を與へてゐる。

世界に君臨する英帝國の政治經濟的文化優位性は、斯くて印度によつて初めて創造せられ得たものであり、文學に於けるシェクスピーアと共に、印度は英國に執つて國寶的な偉大なる存在であつた。十九世紀以來英帝國の世界制覇原動力は、實に此の廣大なる印度の土地と資源と勞力の徹底的利用に在つたと言ひ得る。

然し乍ら翻つて印度人自身の生活を、此の華かなる英國人の發展興隆と比較して顧る時、其の差の餘りにも甚だしきに驚倒するであらう。

古來豐かなる印度に、加之凡ゆる文明の利器を應用した英國の印度開發にも拘らず、三億印度民衆

は其の恩惠に與る處無く、曾て榮えた蒙古(モガール)帝國時代の幼稚なる生活樣式の間に在つた時よりも悲慘なる生活に喘ぐてふ矛盾に置かれたのである。

殊に凶作の年を考慮しない總督府の强制的穀物輸出、多額の國防費負擔等の爲に、全人口の約二十五%卽ち七千餘萬に上る飢饉線上の印度農民は、各地に數萬乃至數十萬てふ、信じ得ぬ程の多數を以て餓死する悲劇が演ぜられるのであつた。

死に逝く彼等哀れなる土人達、幸か不幸か其の與へられたる悲遇を喞つ由も無き無智の中に、何人をも恨む事なき宗敎的雰圍氣の中に、可憐なる弱者としての死を死に行くのであつた。立場を換えて之を英國的に解釋すれば、如斯方策に據らざる限り、本國及び本國人に數十百倍する遠隔の大植民地を、確と把握して英國强化の爲に存續せしむる事は不可能であつたのだ。多くの場合一の發展の歡喜の影には必ず他の一の衰亡の悲哀が伴はねばならない。

斯くて其の後に來るもののみが、より優秀なる、より高度なる生的價値と意氣を具備するものであらう。

全人口の百分の一約三百萬の印度人が人間的標準に生活し、其の中の幾千人が大學に進み、而して其の幾百人が所謂先覺者として活動するも、又必然の權益を絕叫するも、對象たる他の絕對多數の同胞が考へる餘裕なき位置に在る限り、其の正義も理論も馬耳東風豚耳南風遠く絕望の彼方に雲消霧散し逝かねばならない。

試みに一九二七年に於ける英領印度の敎育狀態を見る。豫算總額一五億ルーピーの內、敎育費は僅

か〇・八％の一千三百萬ルーピー、小學校教育を受くる者約九百萬卽ち全人口の〇・三％、加之就學兒童の半數は卒業するに至らずして退學するの止む無してふ狀態である。英領となつて以來二百餘年の印度の眞相である。

而して豫算の大半を占むるものは國防警察産業費であり、改隷以來僅か數十年に過ぎぬ日本の外地島民が、總督府豫算總額の十五乃至二十％の教育費を受けて母國人と變らぬ優位を占めゐるを顧みよ。一九二五年印度國勢調査の結果に據れば、小學校卒業者及び簡單なる讀み書きを爲し得る者合計二千二百萬人卽ち全人口の七％であつた。

如斯印度人の文盲は、二十世紀現代世界に第一位を誇る完備せる日本及び其の植民地の教育制度就學率を有する國民に執つては想像も着かぬ事である。（就學率、日本九八％、英國八九％、米國七七％）回教徒多く、文化も最も高き印度ベンガル州に於てすら、其の文化能力程度は日本の臺灣蕃人に比して及ばないのである。

斯くて幾百人のガンヂー、ネールル現はるるとも印度自らは今日の褪勢を挽回する事は困難であらう。英國の印度人に對する福利文化施設は斯く貧弱なるものであるが、軍略的及び生産的資源開發上に於ける投資と努力は完全に近く、鐵道網の如きも一九三〇年に於ける總延長は六萬九千哩に達してゐる。又印度の對外貿易（英本國に對する分を除く）は左の如く、日領臺灣の本國依存とは全く異り常に對外出超を以て英國財政に多大の貢獻を爲してゐる――

一九二八年度　總　額　　四十二億五千萬ルーピー

輸出　　二十四億四千萬ルーピー
輸入　　十八億一千萬ルーピー

一九三〇年度　總額　三十三億ルーピー
輸出　十九億ルーピー
輸入　十四億ルーピー

尙英領馬來に於ける一九三四年度を見る――

總額　一億一千四百萬ドル
輸出　五千四百萬ドル
輸入　四千六百四萬ドル

×　×

更に政治的方面に於ては、印度の發展的維持の爲に西北隣なる沃野、廣袤二十五萬方哩に亙る阿富汗斯坦 Afganistan 王國一部を其の勢力圏内に收め、北は支那新疆、西藏、雲南西部地方の廣大に不拔の權益を獲得樹立してゐる。

又總督ウイリンドンは、一九三三年改正印度統治法を施行して全印度の直轄十一州及び英監督下の土侯州を合體せる聯邦組織となし、形式上に於ける印度總督の權限は縮少されたるが如くに見えたが實質に於ける兵馬外交上の大權は寧ろ擴張せられたのであつた。

而して本法發布の動機をなすものは、倫敦圓卓會議に代表派遣を拒否して英國より離叛せんとする

印度民心の收攬と、世界的自由平等思想、列國情勢への適應等に在つた。
現代に於ける印度人政治運動機關の主なるものは、一八八五年創立せられ、主としてガンヂー、後にネールに依つて率ひられてゐる印度國民會議、一九二二年結成されたスワラヂ黨及び一九二五年ソヴィエト露西亞なる世界赤化本部の指令下に動く印度共産黨などが其の有力なるものである。
露西亞は日露戰役敗退、帝政顚覆後、一九二〇年後再び亞細亞侵略に志し、赤化本部中の印度部は、巧みにヒンヅー敎回敎兩徒の間に潜入して、英國政權の倒壞と赤化に盡力し來つたものである事、支那、日本、爪哇、印度支那等諸國に對する其れと軌を一にする。
尙印度民族獨立運動史上のパイヲニーアとして、最も光彩華かなる國民會議は、英國總督府の老巧なる切崩し政策に乘ぜられて、宗敎に關心厚き同胞の對立確執を招來せしめられ、加ふるに巨頭ガンヂーの引退を見るに至り遂に内部より崩壞せんずる形勢となつた。
他方サビエト聯邦の赤化政策は逐年目醒しき發展を續け、一九三四年には印度國民會議派の亞流たるマヘンドラデブの主宰する新興勢力、社會主義的印度國民黨の幹部を其の支配下に屬せしむるに至つた。斯くて漸く複雜化し來つた印度政情に鑑み、一九三五年アーウィンは、曩に發布を見た改正印度統治法の再訂を英本國に要求するに至つた。尙之れに據れば、十九世紀末英領印度に合併された曾ての緬甸王國が、該王國民の民族意識勃興に伴つて、利害相同じからざる固有印度との分離統治さる可き事を要求するに至つて、一九三七年遂に之は承認せられた。
尙特に知る可きは、英國が如斯印度人一般の思想の中に在り乍ら、頑健なる印度青年を徵兵して軍

尚東南に廣がる世界第一の大島パプアの東半英領(除濠洲統治)パプア British Papua=British New Guinea 約九萬方哩(面積に於て臺灣の約七倍人口に於て二十分の一)の沃野は、島民僅か三十九萬、英人は二千四百に過ぎず、餘裕綽々として濠洲大陸と共に英國將來の發展の爲に、殆んど未開發のまゝ存置せられてゐる。ハウザー E. O. Hauser は、一九三七年十二月極東情勢 Far Eastern Survey 誌上に述べて曰ふ――

『南洋の將來に關する英國の憂慮は直接的な經濟的利害關係に基くばかりでなく、政治的及び戰略的考慮に基いてゐるのである。顧みるに、此の地域に於ける英國の主權及び政治的勢力は樣々の方法で、しかも場合によつては表面に現はれないで、英國の經濟的權益の助長及び維持に貢獻して來た。又英國の植民政策は傳統的に各國民に對する機會均等主義を主張として來た點で、日本、佛蘭西及び北米合衆國の如き他の列强の政策と截然たる對照を呈してゐた。しかるに最近新興工業國たる日本は侮り難い經濟的敵手として登場して來た。そして日本商品の進出は、世界に溢る經濟的國民主義の傾向と相俟つて、英國及び和蘭の傳統的な門戶開放政策を修正せしめた。其の結果現はれて來るものは、經濟的國民主義相互の衝突であるが、これは不可避的に政治的分野に波及し、之に對して何等かの調整乃至相互和解の手段が講ぜられなければ、永く國際的摩擦の源泉となるであらう』と。

第五章　印度の眞相と是に對する輿論

今日一般世界人に誤れる印度認識を與へるに至つた主なる理由は、英國の對外宣傳政策に因るは勿

論の事であるが、獨逸の史家ファレンティン Veit Valentin の次の如き印度不統一論等に禍されてゐる所が多い――

『カルカッタ人はデリー人を見る事恰も羅馬人が英國人を見るが如く、スコットランドとギリシャとの距離はパンヂャプとベンガルの共れよりも更に近い。印度には印度國民 Nation 無く、印度の人民 Volk が無い。從つて此の大陸には政治上、形式上、宗教上、社會上の統一が無い』とて其の面積は日、佛、伊、三國の和に二倍する一五〇萬方哩、人口は南北兩米陸及び濠洲の和より更に多くして無慮三億二千萬に及び、又言語、宗教等の多樣を擧げてゐるが、現在ベルリン大學に印度史を講じてゐる印度人教授バンネルジー D. N. Bannerjea は說いて言ふ――

『…………印度と言ふのは單なる一の地理的表現であつて、英領となつて以來初めて統一された行政的歸一を見たるに過ぎない。故に印度國民の總意などと稱する事は常らない。統一された國民的要求などは全く無い。』とは能く反對派の唱へる一のデマである。印度は歷史的に一の總括された文化的表現と政治的結合を、一定の地理的領域內に有してゐる事、往時に於けるチャンドラ笈多、阿育大王、サムドラ笈多等の印度帝國の存在に依つて、今更あらためて說く必要も無からう。印度は外國の侵略に依つて國內を亂された時以外は平和を保つて來た。

英の統治は回教徒ヒンヅー教徒を故らに區別したり、基督教徒と然らざる者とに政治的差別を設けたり、其の他幾多の社會的政治的差別を與える事に依つて印度國民の全體的一致協力を妨害した。實に英國權力の維持上に於ける此の相殺政策の價値は偉大なるものである。勞働黨內閣の最初の印度事

務大臣であつたオリヴァー卿は、一九二六年ロンドンタイムス紙上に發表せる書翰中に次の如く告白してゐる「印度の事情を熟知する者の間には、何と言つても英國官憲が回敎徒團體へ肩を持つてゐる事を認識せしめられるが、之は數多きヒンヅー敎徒に對抗する牽制政策的見地より出づるものである』と。　〔世界經濟「パムフレット・ニウス・カレント・ヒストリー」第十四號〕

ファレンティン敎授の觀察に於て適中せる所もあるが、多く誇張に過ぎ、人種、立場を異にする事に因る印度史の好意的解釋に缺く冷淡を見逃す理には行かない。

何れか當否は、既に南洋史の大概を知れる諸君に執つて自ら明らかなる所と思ふ。

パンネルヂーは更に力說して曰ふ——

「…………印度に於ける英國の重大なる利害關係の深さを知らない者のみが、英國が印度に自發的に自治を與へる時あるを信じる。然し印度は英國軍隊の廣大なる練兵場である。印度豫算六十%は軍事費である〔日本植民地豫算の內容と篤に比較して、植民地人の蒙れる恩惠と、母國人の過度なる負擔を顧よ〕のみならず西北部邊境なる無辜の部落民は、英空軍實地演習好個の標的として爆破されてゐる。印度に於ける治安維持を名として駐屯せる英兵力は、常に世界の如何なる地方に突發するであらう緊急事變にも直ちに應じ得る丈の陸、海、空軍を常備してゐるのである。

…………印度人の敎育、文化的向上政策てふが如きは對外的態面上、僅かに軍事費の半年間の利子にも及ばない程度の豫算で行はれてゐるに過ぎない。其れは印度國民たる三億の民衆中の一割、三千萬人の內讀書を初級程度に於て爲し得る者が、僅かに一千萬卽ち全人口の一%に充たない事に依つ

ても知り得らるゝであらう」と。

米國の元國務長官であつたブライアン William Jewnings Bryan も英國の印度統治に關して「…………印度人は政治上の發言權を有せずして年五億弗の巨額を徴税せられ、其の內の二億弗は印度人が士官たり得ざる軍事費に使用されてゐる。尙印度人は在印度の英內地人に對する課税の二倍の税額を納付する義務を履行してゐる」と暴露してゐる。曾てベンガル洲廳の官吏であつたフィリップ・フランシス Philipp Francis は其の實情を具に知つて「中世に於ては專制君主の下に朗らかな生活を送つてゐた印度人も、英領となつて以後三百年其の强力なる搾取下に憔衰の極に達して、彼等には理想も希望も權利も主張し得なくならされてゐる」と忌憚なき眞相を述べた。

逸居偸レ安喪二邦家一
奈此文恬武熙何
敵將凱旋壓城日
士人齊唱太平歌
嗚呼印度事已矣
雖レ有二萬卒一無二一士一

是は曾て日本の同情者が印度亡國の愚と悲を痛嘆したものである。自主的愛國的にして强大なる英國政府は、如斯輿論…………僅かに「論」に止まる總てに憚る所なく、着々として自國の繁榮强化を劃策して行つたのだ。

既に一九一一年には上海、新嘉坡、スエズの三大要港を連結する所の三S政策を實施して亞細亞に於ける利權を擴大し、次で一九二〇年には更に一歩を進めてカイロ、カルカッタ、廣東を結ぶ地方の政治經濟的强化を實現したのであつた。所謂三C政策である。

殊に歐亞交通の南門を扼する要港新嘉坡は軍港として重大視せられ、一九三六年日本の國際聯盟脱退後は之に對抗す可く空前の大擴張補强工作が行はれて、益々英國鎭南の要害としての價値を增大した。卽ち一朝事ある際新嘉坡は直ちに南太平洋の制海權を確保す可きものとなつたのである。

更に英國航空省は印度總督府の調査に基き、カイロ、カルカッタ、マンダレー、新嘉坡、ブルネイ等を結ぶ大航空路を開設（一週一回の命令航路）して、制空權の把握をも忘れる事無かつた。更に之は一九三六年以來倫敦より香港に延長された。(Imp. Airways=I. A.)

之に對抗す可く、佛蘭西は既設巴里西貢間の航空路を更に廣東に迄及ぼし、(Aire Français=A.F.) 次で米國はサンフランシスコ、布哇、ガム、マニラに亙る航空路を一歩進めて廣東に及ぼしたのである。(Pan Amer. Airways=P. A. A.)

斯くて北上する歐米列强の經濟的勢力は政治化し、空に於ても一九三六年に於て既に南支那、日領臺灣に近く迫り來るのであつた。斯かる近隣に於ける逼迫せる情勢に於て、亞細亞の盟主を自他共に許して悠々たる日本帝國は、一九三六年に於て漸く僅かに臺北盤谷間及び臺北バタビヤ間の航空路を單に計劃のみし、一九三八年に至るも、未だ實現し得ざる次第であつた。

×　　×

斯くて强者は正者であり、偉大なる發展の能力者であり、又其の作る文化の、倫理の指導者でもあつた。斯くて倫理の創造變改者は、實に强者のみに許されたる天與の使命であらう歟。

一九三八年六月、ムッソリーニは複雜困難なる歐羅巴政局の中に嚴然として叫んだ――

「一國家の存立と發展を能くするもの、法に非ず論に非ず只是血あるのみ」と。

次に參考までに南洋に於ける主なる英領植民地を揭げる。

1、英領印度(含緬甸)…………一七五七年―一八九七年(獲得年)

面　積…………百八十二萬方哩　　人　口…………三億五千萬

2、濠　洲　大　陸…………一九〇一年(正式に濠洲共和國となる)

面　積…………二百九十九萬方哩　　人　口…………六百八十萬

3、海峽植民地…………一七八五年―一九〇八年(獲得年)

面　積…………一千六百方哩　　人　口…………百六十萬

4、馬　來　聯　邦…………一八七四年―一八八八年(右　同)

面　積…………二萬八千方哩　　人　口…………二百二十萬

5、馬來非聯邦…………一九〇四年

面　積…………二萬二千方哩　　人　口…………百七十萬

6、英領ボルネオ（含サラワク、ブルネイ）一八七七年―一八八八年（右　同）

面　積…………八萬二千方哩　　人　口…………百六十萬

7、香　港　諸　島……一八四二年―一九〇八年（右　同）

面　積…………五百方哩　　人　口…………百二十萬

第六章　佛領印度支那の現狀

安南、柬蒲塞、交趾支那、東京、老撾（ラヲス）の諸王國及び舊暹羅國領の大半を領して、其の廣袤實に二十七萬方哩卽ち日領臺灣の二十一倍半に相當する大領土を統治する、在河內佛領印度支那總督府の政策基調は、資源開發國庫援助、本國商品の市場竝に南支那、主として北隣雲南省の利權獲得に在り、之が遂行容易の爲には內に顧る事尠きやう、土民勢力の勃興を來さぬ經濟環境に土民を保持する事に在つた。

從つて二千萬の土民が悲遇に沈淪してゐる事も亦印度爪哇其の他の南洋諸民族の生活と何等變らないが、多少異る所は佛蘭西が安南王國上層階級土民、特に安南王族に對して佛國化を强要し其の有能なる者を官吏將校等に任命してゐる事である。尙佛蘭西は英國、和蘭等が其の土民の旅行、移住に對して、一地方內に制限してゐたのに比し五十哩以內を許容してゐた。

更に曩に述べたる如く二十世紀初頭以來は、土民間に用ひられてゐた支那式文字を廢してローマナイズせしめた。

領民の微溫優柔と無智により內政に容易な河內總督府は、既に一九〇五年總督ブー Beau の時代金礦其の他の礦產資源豐かなる北隣支那の大省雲南（支那諸省中廣き事第二位にして、約十一萬方哩即ち日本本州に匹敵する）への進出第一步として、河內より雲南に通ずる滇越鐵道施設權を支那より獲得し、一九一〇年には其れを完成して佛蘭西の南支那活躍の政治經濟的根據地たらしめた。

又此の鐵道は日支事變に於て佛蘭西の對蔣政府武器輸出に大なる役割を果した。安南民族最初の獨立運動と見らる可きものは、一九〇五年佛國官憲の爲に事前に暴露し、撲滅せられた潘是漢の率ゆる國民黨の越南獨立企圖である。

同運動は一九〇三年佛蘭西が安南王として傀儡たる成泰王を擁立せしめた時に胚胎したものであり、潘は同志を糾合して安南に於ける政權の奪回を圖つたのであるが、未だ成らずして佛當局に發見せられ、黨員の大半は死刑に處せられ、首領たる彼は逃れて安住再起の地を同種の先進國日本に求めて其處に亡命した。

一九〇七年卽ち明治四十一年、日本は佛蘭西との間に「日本或は佛蘭西が有する主權、保護權又は占有權を有する地方に接近せる支那地方に於て安寧を保護せんが爲に兩國は互に援助す」てふ主旨の所謂日佛協約を締結した。

卽ち當時半開の日本は、國防上政治上國家存亡の密接なる特種關係ある支那地方にて、單なる利益發展の爲にのみ支那と關係を結ぶ佛蘭西と同等の利害を表現せる協約を結んだのであり、佛蘭西に執

つてはこよなき有利な協約であつた。
加之、同年日本は佛蘭西よりの要請無きに不拘、同種の先輩國として賴り來つた安南の志士潘是漢等に對して、何等の指導保護を與ふる事をなさず情なく國外に追放したのである。
南洋史的知識皆無に等しく、從つて之に對して何等の關心、對策を持たぬ當時、國際的には少年に過ぎない當時の日本が、其の亞細亞的自覺も無く如斯擧に出でたるは無理からぬ理である。
明治時代の日本、其れは未曾有の新知識舶來して之が吸收攝取に是非分別の遑無かつた頃であり、現昭和時代の如く既に飜譯消化を經た批判の時代とは異つてゐたのである。
英米列强に執つて亞細亞の雄、日本の如斯無自覺は極めて都合宜しきものであつた。斯くて一九一四年歐洲大戰勃發するや、佛蘭西は翌年以後每年巨額の資金と共に、數萬の安南兵を大戰の第一線に活躍せしめた事英國の其れに相同じい。
此の翌年、歐洲大戰に因つて安南の守備脆弱となれるに乘じて、佛蘭西勢力を驅逐す可く一部安南民衆は排佛獨立の兵を起したが忽ちにして一掃され、時の王維新王は之が煽動者と目されて遠く印度洋上佛領ルユニヲン Le Union の孤島に流謫せられた。何等の保護無き同王は其の後一介の勞働者として落魄の身を街上に曝されてゐると言ふ。
歐洲大戰以後、佛蘭西は每年交代制を以て安南兵二千を佛本國に駐屯せしめる事になつたが、既に大戰に於て白人兵の間に伍して勇敢に戰ひ、更に歐洲に駐在して其の文明に接した安南兵が、歸鄕して感慨の無量なるは、華かなる白人の本居に比して、餘りにも不潔と悲慘に蔽はれた己が同胞の社會生活

であつた。

すゞろなる啓蒙と自覺の秋は斯くして二千萬島民の間に穰り行くのであつた。

是が對策として佛蘭西當局は該兵及び印度支那各地に於て兵役を卒えた者の大部分を、其の家族と共に未開の山野に移住せしめて、其の若き精力を農產の增收其の他の經濟的佛領印度支那の價値向上に利用する事とした。

從つて一九二七年及び一九三一年安南兵に依つて惹起された自治要求の亂も大事に至らずして鎭壓する事が出來たのであつた。

尙河內總督府は、在印度支那母國人繁榮の爲に、有志母國人に廣大なる土地を無償に拂下げて地主となし、其の新知識を以て所屬島民に開墾せしめ全島的に大いに各種產業の勃興を企てたのであるが、此の方法は大いに成功して、獨り在留內地人を豐かならしめたるのみならず、總督府財政に貢獻する所多かつた。

佛蘭西の植民地政策も亦英國、和蘭等の其れと等しく、植民地領有の目的達成の爲には、內地人と外地人を各々斷然たる差異ある政治的經濟的位置に置いて統治した。

若し同等一視の下に兩者を置く時、百分の一乃至千分の一にも過ぎない小數の內地人は、忽ちにして夥大なる島民大衆の爲に先づ經濟的に驅逐せらるるに至るであらう事は自明であつたからである。

多大なる國家的犧牲と先祖の血稅を以て購へる植民地に於ける內地母國人は、斯くて厚き總督府の保護の下に、僅か四萬に滿たざる小數を以て能く二千萬に近き島民の間に、本國人としての權益と威

嚴とを保ち得るのであつた。

×　×

佛領印度支那其のものの統治には然して精力を徒費せぬ賢明なる河內佛蘭西總督府の發展的活動は、常に北隣の資源地支那雲南省への進出を企圖し、曩に述べたる如く既に一九〇五年には滇越鐵道の敷設權を獲得、不斷なる特務機關員たる宣敎師の活動は益々發悧として各種權益を增大し一九三一年には、遂に支那を說服して北方なる邊和(ヒヱンホア)地方を獲て飛行機根據地となし、鑛山其の他の利權と共に南方雲南を實質上佛蘭西の勢力圈內に包攝したのであつた。

尙印度支那に於ける一般的な社會經濟勢力を占むる者は、歷史的地理的關係より又其の高き能力よりして、五十餘萬の數多き支那人卽ち華僑であり、安南人其れ自身亦支那系が大半を占め、馬來系、主として南方の柬蒲塞人）は無勢である。

又此の地方にソヴィエト露西亞の赤化思想と是に相亞ぐ政治運動が侵入彌漫し、半ば來る可き亞細亞的結合への禍をなし、半ば反佛的勢力を得つつある事、他の南洋各地方に於ける其れと同じい。

更に知る可きは、日本が此の豐かなる佛領印度支那より輸入する物資は、一九三六年に於てホンゲー無煙炭のみにても連年五百萬圓に上るに比し、日本商品の當地進出は其の禁止的高關稅に禍せられて百萬圓にも充たぬ片貿易に在ると言ふ事である。

次に佛蘭西が曾ては五王國より成れる此の大地方を獲得した年次を略記する——

A 柬　蒲　寨…………一八六二年…………五萬八千方哩
B 安　　　南…………一八八四年…………三萬九千八百方哩
C 交趾支那…………一八六一年…………二萬二千方哩
D 東　　　京…………一八八四年…………四萬六百方哩
E 老　　　撾…………一八九二年…………九萬七千方哩
F 尙此の外雲南に廣大富裕なる勢力利益範圍を有す。

等々。

尙佛蘭西總督府が安南、柬蒲寨等に在つた曾ての王者を、空名のまゝ今日尙存續せしめて居る事、爪哇、印度等に於ける共れと變らない。

例へば安南は現在バヲダイ Bao Dai 氏王位に在り、柬蒲寨はシソワト Siso Vath 氏、ルアンプラバンはサワン Savan 氏等各々王位を繼がしめられてゐる。

然して一九三六年八月、佛領印度支那總督は更迭して、前佛領西阿弗利加總督デュール・ブレヴイ Jules Bróvie が新任する事となつた。

尙一九三七年七月來の日支事變に於て、河内佛蘭西總督府は常に援支抗日的行動を以て、日本の支那大陸及南洋に於ける政治經濟的勢力の失墜を圖つてゐる事は既に知らるゝ如くである。

第七章　英佛挾擊下に力無き暹羅の孤立

世界唯一の純佛教國たる暹羅は、自らタイ族の自由の國 Muang Thai と稱してゐるが、十九世紀以來兩隣の英佛より猛烈なる侵入と干渉を受けて、僅かに兩大國の緩衝地帶として存立を許されてゐる、不自由なる國となつて現代に入つてゐる。

然し乍ら古來因縁深い日本が一九〇五年雄々しくも北歐の莞鷲露西亞帝國を擊滅した事は、一千五百萬暹羅國民の迷蒙の夢を破り、民族的自覺を促す處多かつた。

卽ち彼等は齎來せられた歐洲文明を消化活用して大いに舊弊を改め、文化的近代的國家の構造に精進し、以て英佛二勢力の干渉を排し第二の日本帝國たらんと努力し初めたのである。

英佛兩國が、一八九六年協定した暹羅獨立保證條約の、竿頭一步を進めて暹羅國中央を貫流する湄南河を境界として、兩國が暹羅を分轄せんとする陰謀を探知したのは此の頃である。

驚いた暹羅當局は直ちに之が對策を練り、遂に意見は同種先進の强國日本の政治經濟勢力を聘して、是に代らしむるの餘儀無きを決したのである。

卽ち同年暹羅國政府は、時の暹羅日本公使稻垣滿次郞に此の旨を傳へ、祕かに友好日本の然る可き後援を懇請したのであつた。其れは日本に對する經濟的權益の讓與を暗示し、以て英佛と異る日本の倫理的進出を求めるものであつた。此の機會に於ける日本の暹羅に對する好意が、兼ねて暹羅に於ける往時の日本との親交の復活となり、又蓋然の南洋發展にこよなく有利なる足場となり、延て列强侵略の阻止と成るを思ひてや否、稻垣公使は此の旨を欣然として本國政府に報告したのであつた。

然し乍ら未だ世界情勢に蒙く、且内政に急であつた當時の黎明日本の政府は、强力なる列强勢力に慮る所多くして自主的態度を執り得ず、却て稻垣公使の此の擧を責むるが如くして、暹羅國政府の友誼的申入れをも拒絕したのであつた。

然して此のチャンスを見事に摑んだのは二十世紀以來の新興勢力獨逸帝國の使臣であり、夙に知つた此の由を以て、獨逸公使は直ちに暹羅政府に接涉し其の利權を引受けたのである。

卽ち獨逸政治家、資本家、技師、貿易業者及び商品は其の有利なる條件を以て陸續として暹羅國内に進入し來り、既威英佛の二勢力は着々と驅逐せられて行くのであつた。

斯くて一九一〇年前後の暹羅國經濟を支配する潑溂たるものは獨逸資本となり、貿易、鐵道、港灣、軍備等も主として獨逸人の經營乃至指導するものとなり來つた。

曾て榮えた暹羅に於ける英國の權益は其の後秋風落莫の悲境に陷つて數年を經た。

而して此の形勢を再び逆轉せしむるに至つたものは、かの一九一四年に於ける歐洲大戰の勃發であり、其の衝に當つた獨逸は漸く克ち獲た南洋の利を惜しくも抛擲して全力を大戰に傾倒せねばならないものとなつた。

二十世紀以來急激なる文化の向上を來した暹羅に於ては、曾て歐米及び日本に遊んだ英主、國王ヴアヂラヴヅ The Mongkut Kla Maha Vajiravudh = Rama VI の一九一六年に至り、首府盤谷に初めて大學を創立した。卽ち今日のチユラロンコーン大學 Chulalonkorn University でありチユラロンコーンは英明なる先王チユラロンコーン Phra Chula Klao Chulalonkorn = Rama V の偉名を執つたも

のである。

次いで翌一九一七年には聯合國の一として歐洲大戰に參加するに至つた。

暹羅國民度の一般的向昇と歐洲大戰參加に依る暹羅の世界的進出は、當時のデモクラティックな社會思潮と共に國民的自覺を喚起し、半ば列强に隷屬せるが如き暹羅國政及び暹羅王室の舊弊なる專制政治に對して先覺者達は漸く政治的不滿を抱懷するに至つた。

加ふるに大戰後の不況と國王乃至王族の失政は益々一部進步的な國民の信望を失ひ、遂に一九三二年國王プラヂャデポク Phra Paramindа Maha Prajadhipok＝Rama VII は主として少壯武官より成る暹羅人民黨の爲に其の專制權を解消せられ、此處に新しく暹羅國憲法が制定發布せらるゝに至つた。同王朝の祖チュラロクが、一七八二年絕對の王位に卽いてより實に百五十年の事である。同時に人民代表議會設立されて暹羅は一躍して近代的立憲王國としての體系を具ふるに至つた。

若き暹羅は斯くて無能なる王政、及び之に搦まる白人勢力を除去して完全なる獨立國としての、卽ち暹羅人の暹羅たるの自然の常軌に還らんとして努力したのである。

然し乍ら高き智能と鍛えられたる强大なる武力を持つ、英佛の二大勢力、加之既に三世紀の永きに亘つて浸透せる其の深刻なる潛在勢力は、思想的にも既に拜歐的に馴致せられてゐる彼等暹羅國民に執つて、容易には排擊し得るものに非ず、其の完全獨立の希望は到底不可能事に思はれるのであつた。此立憲革命に於ける幹部パホン少將、ピブン少佐等の苦心も其處に在つた。北方なる亞細亞の雄、日本すらが未だ拜歐的雰圍氣より逃れ得ざる二十世紀前葉の現代に於て、其れは無理からぬ過程に在つた。

卽ち一九三三年新憲法の下に最初の内閣成り、ピア・マノー其の初代の首相の印綬を帶びるや、英國は直ちにマノー及び主なる閣僚を多額の金品其の他を以て親英化し、以て當時暹羅國經濟組織の根幹をなせる正貨準備金一億五千萬銖（チカル）の金貨全部を英國へ賣却せしめたのである。

當時偶々金本位制を停止してゐた英國は、此の計略を以て巧みに暹羅國正貨準備金を買收し、與ふるに自國磅紙幣を以てし、遂に暹羅國經濟の基調を全く英國依存より逃れ得ざるものとしたのである。後此の賣國行爲は暴露されて同内閣は瓦解し、新しくピア・パホン内閣成立したが、未だ國際的には幼稚なる暹羅人の能力を以ては到底英國人に對抗する事は無理であつた。

尙マノー以下主なる親英派の暹羅人は其の後新嘉坡其の地に英國の保護を受くる事となつた。斯くて十八世紀以來の永き英國の暹羅勢力は牢固として拔く不能、内務大臣ルアン・プラヂット、又國防大臣ピブンの如き有能少壯なる知日政治家出るも見る可き日暹の提携行はれず、僅かに一九三三年國際聯盟に於ける對日反對投票棄權の消極的好意を見得るに過ぎなかつた。一九三三年改訂された暹羅國憲法に於て、又歐洲的國際聯盟の一員たる暹羅國に於て、將又確たる英國以下の勢力範圍に似たる暹羅國に於て、到底親日的政策傾向は日本の無關心冷淡と相俟つて到底期待し得られぬものであつたのだ。

斯くて中世に於ては視善無比の兩國關係も、西力東漸以後は歐羅巴諸國の爲に取つて代られ、二十世紀四十年に於ける暹羅國内の日本人勢力は極めて微々たる顯微鏡的存在に過ぎなかつた。

又暹羅國内に於ける拜歐的又南洋史知識なき日本人の進出は、常に强大なる歐羅巴的背景に阻害せられて、見る可き成功を成し得たるものがなかつた。

一九三六年日本の安川經濟使節團一行、大日本製糖會社等に依つて計劃せられた日本糖業の南洋進出とも見る可き日暹合辨製糖會社の創立の如きも、半ば成らんとして失敗に歸した所以である。

如斯經濟的方面のみならず文化的凡ゆる方面に渉つて、南洋に進出せんとするに先立つものは、資本以上に先づ其の歷史的知識であり、次で之に據る有利なる宣傳政策である。是無くては其の不利なる環境の中に、到底妥當なる手段方策を建てて其の成功を期する事は困難と言ふ可く、恰も木によつて魚を求むるが如きものである。

尙馬來半島に南下する英領テナセリム Tenasserim の南端と暹羅領との國境クラ Kra 地峽が、暹羅政府諒解の下に日本の手に依つて開鑿せられつゝあると言ふ情報は、若しクラ運河開通の曉は太平洋より印度洋に出る海路を約一千海浬短縮し、英國の獨占根據地新嘉坡の仲繼港としての、又軍港としての價値を半減するものとして、白人列强の間に異常なるセンセーションを起した。

然し乍ら如斯宣傳せられある日本の、平和的對暹對南洋進出も一九〇九年の英暹條約に於て同ラーチブリー州を外國に割讓或は租借せしめざる事てふ明文が存する限り不可能であり、既に迅くより英國は此の地方を自國の勢力範圍内として扱つてゐたのである。

〔Soerabaja Algemeen Handelsblad, 16, 4, 1936；臺灣總督府外事課〕

〔南支那及南洋事情　昭和十一年七月第十三號〕

斯くて亞細亞の指導勢力日本の對南洋發展は、其の史的知識の缺乏と十九世紀來釀成せられたる對白人的卑屈感とに依つて力無く、祕かに亞細亞モンロイズムを思ふ南洋諸民族よりも、頼り無き先輩として迎へられ、南洋の日本的鵬翼は遂に伸ばす日無からむとしてゐる。

尙吾人は、今日未だ暹羅に保留せられてゐる列强の準治外法權たる侮辱的な移審制度の日本に依る撤廢の先鞭を憶ふものである。亞細亞の盟主恩人としての日本の偉大寬容は此處に於て暹羅人に忘られぬよき思出となるものであらう。

尙昭和十二年十二月、東京朝日新聞社が決行した鵬號による日暹交歡は、恰も十二月十日の暹羅國新憲法發布記念日に參列するを得て、異常なる外交的意義あつたものと思料せられた。其れは同國外務大臣ルアン・プラヂットの衷心よりなる歡迎の文に據つても知られるのである。

他方支那政府（南京）交通部は、一九三七年より定期航空路を暹羅との間に開設して兩國間の交通經濟上に資す可く、互に二百萬元を支出して上海—廈門—汕頭—マニラ—盤谷間を結ぶ事としたが、之は同年七月以來の日支事變の勃發により絶望狀態に陷つた。尙一九三六年十二月、暹羅政府は、大正十三年盤谷で調印された日暹通商條約を廢棄する旨駐日ラグサ公使をして日本外務省に通告した。而して兩國間に於ける新條約の締結は今後の問題である。

次に暹羅國内に潤澤なる利益を獲つゝある英國大會社の二、三を列記する。

一、Bombay Parmer Co. Ltd.＝此社は北部暹羅の大森林の伐採權を有し、年三萬本以上のチーク

材を輸出してゐる。

二、Asiatic Petroleum Co. Ltd.＝此社は米國のスタンダード社に對抗して、暹羅石油の獨占に力めてゐる。

三、Anglo-Siam Co.＝林業、製材、米穀輸出、倉庫業等に於て全暹羅を把握せり。

第八章　暹羅に對する英國の優位性

經濟地理的及び軍事的諸理由から、暹羅が英國に接近することは極東に於ける英國の地位にとつて死活的な重要性を有する。暹羅は英國に對し經濟的及び金融的に依存してゐるため、從來政治的方面に於て英國に公然敵對的な態度を採ることができない。しかしながら暹羅に於て自己の勢力を擴大せんとする日本の企圖は、英國の立場から見て事態を多少危險化してゐるかの如くである。

暹羅は殆んど英國資本のみによつて發展せしめられて來た。一九三五年三月三十一日に於て暹羅の公債は九千七百二十萬八千七百五十九バーツ（銖）に上つたが、その中八千七百二十萬八千七百五十九バーツ（七百九十二萬八千六十九磅）は磅公債より成り、殘餘が國際的に募集されたものであつた。鐵道、灌漑及び水道の如き公共事業のために幾回となく起された公債の殆んど全部がロンドンで賣出された。尙ロンドンに對する暹羅の經濟的依存は暹羅政府の對外債務償還資金三千十六萬九千八百五十三バーツの中二千萬バーツ以上がロンドンの諸銀行に預金されてをり、殘餘は暹羅の在外磅基金とされてゐるといふ事實から見ても明らかである。最後に暹羅は所謂スターリング・ブロックに屬して

をり、その通貨は一磅對十一バーツ（又は銖）の割合で磅にリンクされてゐる。暹羅通貨準備の大部分はスターリング有價證券及び紙幣で保有されてゐる。暹羅政府には英國人の財政顧問が常駐せしめられてをり、盤谷にある六つの外國銀行の中三つは英國系である。

英國は暹羅の各種公共事業に莫大な金額を投資してゐるばかりでなく、その私的投資も少なからざる額に上つてゐる。暹羅の重要產業たるチーク伐採經營の權利は英人の手に握られてをり、一九三二年七月二十八日ロンドンに於て發表された「英暹聯合會社」Anglo-Siam Corporation, Ltd. の最近の年次報告は利潤の著しく增大したことを告げてゐる。

暹羅と英國との貿易は所謂「片貿易」である。英國から暹羅への輸入額は一九三五―三六年に於て一千二百五十九萬バートであつたが、英國への輸出額は僅かに百三十萬六千九百九十バーツであつた。同年日本からの輸入額は二千七百七十九萬三千バーツ日本への輸出額は三百二十四萬七千バーツであつた。日本は今日、暹羅の總對外貿易の一一・六%を占めてゐる。しかし全體としての大英帝國は依然として第一位を保持してゐる。一九三五―三六年に於て大英帝國は暹羅の總對外貿易の三七・〇%、輸出二九・八%、輸入の四二・〇%を占めた。しかもこれらの數字は、暹羅の對外貿易に於て重要な役割を演じてゐる香港及び新嘉坡經由の積換を控除した英帝國貿易の純價額を表示するものなのである。大英帝國への總輸出額は一億三千三百六十四バーツであつた。日本はまだ特別の制限策によつて拘束されてゐるため、最近長足の進出振りを示すに至り、重要な綿製品貿易では事實上の獨占を獲得した。

暹羅の海運では英國は、傳統的特權を有する諸威船に次いで、第二位に立つてゐる。一九三五—三六年に於て盤谷港出入船船總數二百四十九隻、總噸數二百七十一萬八千八百六十噸の中、英國船は四百四十二隻、八十六萬八千二百五十五噸であつた。

一九三六年十一月五日に暹羅は同國と外國列强との關係を規定した各種條約の破棄を宣言した。それにも拘らず爾來幾多の新條約が締結されたし、又暹羅は日本は對して特惠的諸權利を與へるであらうといふ、二三の外國が抱いてゐた危惧は遂に實現を見なかつた。暹羅に於ては英國の地位は依然として强固なものがあり、暹羅の繁榮は著しく英國の融資と結びついてゐる。とは言へ英國貿易並びに投資の機會の維持が政治的現狀の持續に少なからず依存してゐることは言ふ迄もない。

日本の陸海軍勢力は現在專ら支那に集中されてゐるし、一方日本を自棄自棄に陷らせる虞れのある國際的制裁行爲も先づあるまいから、日本が南東アジアに於て冒險的行動に出る危險は目下切迫してゐるとは言はれない。寧ろ、日本は現在その勢力を北方に集中しなければならない爲、南東方面へのその進出は掣肘されさうな樣子である。若し日本が支那に於て完全な勝利を占めれば、日本支配下の支那領土は日本の對外進出の足場となるわけであるから新たに南方への進出が見られるであらうことは明らかである。

（本章は Ernest O. Hauser : British Economic in South East Asia, "Far Eastern Survey" Dec. 1937. の譯である）

尙ハウザーは、一九三八年六月日本に來朝し、日本の眞相を觀察し、多少日本に好意的となつたらしい傾向を述べてゐる。未だ三十一歲の青年である。

第九章　英領馬來の現勢

面積五萬三千方哩（日本の九州は一萬三千哩）、人口五百三十萬（一九三九年一月）を有し、更に南洋の要津新嘉坡を擁する豊かなる英領馬來を統治する者は、英國皇帝の任命せる海峽植民地總督であり、馬來聯邦同非聯邦諸國に於ては、彼は高等辨務官 High Commissioner と稱せられる。

東洋に於ける一大仲繼貿易港たる新嘉坡は、其の持つ地理的政治經濟的優位性からして、近世以來香港と共に英國の對東津及南洋政策の策源地をなしてゐるものである。

卽ち英國側の解釋に據れば同地は、南支那海に於て香港及北ボルネヲのラブァンとの三要津を連ねる線を以て「東洋の地中海」の重要性を築くものである。

尙新嘉坡は南洋政策實施上の好適地として、獨り英國のみならず、各國南洋關係の大會社、通信網を初め、ソビエト聯邦を背景とするコミンテルン及び其の別動派たる中國共產黨、竝に中國の華僑工作機關たる僑務委員會等が就れも南洋の利益、又、民族獲得のために其の工作の中心機關を此地に設置してゐる。

英國財政上より觀るに英領馬來の海峽植民地總督府は、義務として每年四〇〇萬ドルの國防費及警察費の内、軍事警察とも觀るべきもの四割約二〇〇萬STドル、更に九個の酋長國より自發的に平均每年約一〇〇萬STドル、合計每年七〇〇萬STドルを英國極東國防費に獻納してゐる點に於て、日本の外地總督府豫算內容とは大いに其の本國的役割を異にしてゐる。因に一九三七年度海峽植民地總

督府の豫算は一億二千萬STドルである。國防費以外に官吏の恩給年金其他一切をも賄つてゐる點も日本の外地財政と異る處であり日本の外地政策上特に注意を要する點である。

更に英領馬來を資源上より見るに英領馬來は南海の寶庫であり、ゴムと錫は各々世界總産額の三〇乃至四〇％を占めて世界第一位に在り、又ヂョホール王國内の鐵鑛は日本に執つて無上の供給地であり、主として日本の石原産業海運會社が採鑛と輸送に當つてゐる。而して其の積出港は主としてヂョホール西南岸のバトパハ Batu Pahat であり、日本に直航してゐる。

日本人の馬來諸國にをる者は約八〇〇〇人、而して日本の投資額は約三七、〇〇〇、〇〇〇STドルと見られ、其の七〇％約二七、〇〇〇、〇〇〇STドルはゴム其他の栽培事業で、次が錫、鐵等の鑛山事業である。

玆に知る可き事は、新嘉坡は全南洋華僑八〇〇萬の中心地を爲すもので、現下日本最大の國策たる對支政策遂行上に於て、華僑政策は政治經濟上は勿論思想的に空前の重要性を持つに至つたと云ふ事である。

又英領馬來總人口五三〇萬の內、首位を占むるものは二三〇萬の華僑であり、本來の馬來人は二二〇萬で二位にあると云ふ事である。卽ち、馬來半島は政治上には英領であるが、人口的に社會的に又領內經濟的には充分に支那領と見らるべきものがあるのである。

第十章　爪哇民族運動、華僑及總督府豫算


FIJI
100 哩＝1吋
英保護領 1874以後—
Yasawa群島
Yasawa
Vanua Lava島
Tatu
Salia
Viti Levu島
Koro島
Levaka
Navula
Suva
Moala
首府ヲ示ス
TONGA
英保護 1900以後—
100哩＝1吋
Lette島
Vavau群島
Hsano
Kotu群島
Fua
Lafuka
Nukualofa
Tongatabu
Eua島
NEW CALEDONIA
200哩＝1吋
佛領 1853以後—
Wea島
Nachalo
Libu島
Mare島
Uaco
Bourail
Noumea
Pines島

十九世紀に於けるファン・デフェンテルの所謂倫理的植民地政策の提唱以來、和蘭總督府の島民に對する待遇は稍々改善せられ、二十世紀以來漸く緩和さるゝに至つた事は既に近世史上に於て述べたる如くである。

卽ち一九〇七年、總督ファン・ヒュッ Johanes Benedicus Van Heutez は歐洲式學校委員 Europeesche School Commissies 島民式學校委員 Inlandsche School Commissies及び特別監督委員 Special Commissie van Toezicht 等を設けて、其れ迄殆んど顧る所なかつた和蘭領東印度諸島民の教育費に、年豫算額の約一%を與へて島民生活の向上に資したのである。

然し乍ら其の後十年一九一六年に於ける國勢調査に據れば、其の所領中最も文化高き爪哇本島人三千五百萬に於て、成年男子千人中讀み書きを爲し得る者は僅か十五人卽ち一・五%であつた。

無論爪哇在住内地人に對する教育は、本國に於ける其れと同樣完備せる八年制小學校あり、華僑の富裕なる者及び爪哇貴族は之に入學するの特權が與へられた。

尙島民四千萬に對する中等教育機關には、バタヴィア以下十六個所に職業學校及び醫學校が設けられ、一九二四年には一部島民を僅かに入學せしめるバンドン工科大學 Technische Hc-ogechool te Bandoeng 一九一四年には同バタビア法科大學 Rechts Hoogeschool te Batavia 次で一九二七年にはバタビア醫科大學 Geneeskundige Hoogeschool te Batavia 等が創立せらるゝに至つた。

然し乍ら此の三大學も全教授總計七十名に過ぎない貧弱なものであり、日本植民地に於ける帝國大學の其れとは比較にならぬ小規模なものである事を識者は知るべきである。

而し貧窮に在る爪哇諸島民四千萬大衆は、和蘭本國の大學に留學せしむ可き、又之等島内の大學に入學せしむ可き資力を持つものは、上層一部を除けば極めて少い。一九三〇年に於ける爪哇本島人男子の公學校入學率を見るに、同年に於ける日領臺灣人（含蕃人）の公學校入學率平均六十％なるに比し、僅かに二・五％に過ぎず、加之爪哇の其れは乙種小學校とも云ふべき貧弱に在り、臺灣の其れは内地人と同程度の完備せるものである。

尙知る可きは、尠くとも南洋に於ては其設備に於て敎授數に於て最も完備せる臺灣島の臺北帝國大學が、一人の南洋諸島國民を留學生として吸收し居らざるに對し、前記三大學は一九三一年に於ける學生總數三百五十二名中、六十名の南洋留學生（支那、安南、暹羅及び印度）を收容して、南洋人の文化的向上に資してゐる事である。

又比律賓の諸大學（比律賓大學、聖トーマス大學、マニラ大學等）すら、暹羅、安南等南洋諸國より每年七十名以上の留學生があるのである。東亞の盟主を以て任ずる日本人の敎育を代表する諸大學當局は、自らの東亞に於ける敎育的又文化的使命を反省すべきである。

今日和蘭總督府は、其の屬領を、爪哇本島及び外州 Buiten Gewesten（スマトラ、ボルネオ、セレベス、モルッカス諸島）に二分し、前者は之を西部爪哇省以下に四分して各知事 Gouverneur 之が長官たり、後者はスマトラのアチェー州以下十四州に分つて知事乃至駐在官 Resident を之が統治に當らしめてゐる。（外州行政區分に就きては一九三八年七月一日改正）

外州を三地方に分つ

一、ボルネオ地方　長官＝知事一名　其下に二理事官州　首都バンヂエルマシン

二、スマトラ地方　長官＝知事一名　其下ニ十理事官州　首都メダン

三、大東地方 De groot Oost　長官＝知事一名　其下に五理事官州　首都マカッサー

（三、の所屬諸島はセレベス、モルッカス、チモル、バリ、ロンボク）

然して商業國民 A Nation of Traders たる和蘭人は官吏と雖も直に算盤の持てる利賢い者達である事を記して置く。

現代に於ける爪哇民族運動の黎明は、主として一九〇五年の日露戰役の影響に在り、次いで歐洲大戰デモクラシー及び社會主義等の風潮であるが、微温的な彼等島民も、漸く民族的人種的自覺を促進せしめらるゝに至つてゐる。

卽ち一九〇八年、東南ヂョクヂャ州なる醫師ワヒデン Was Wahidin に依つて創められた民族自決と、議會開設を目的とするブヂ・ウトモ Boedi Oetomo（＝淸き努力）、一九一二年、回教徒聯盟にして民族自決を標榜するサリカ・イスラム Sarekat-Islam＝和蘭人の所謂 Mohamedaansche Vereeniging＝回教協會、及び和蘭人と島民との混血兒デ・ホーグ F. H. De Hoog に依り統率され、其の社會的經濟的向上を目指す印歐黨 Indo-Europeesche Verbond 並に和蘭人のみの作れる祖國俱樂部 Vaderlandsch Club 等が主なるものである。

就中サリカ・イスラムは大いに發達して、一九一六年には全島の會員五十萬を擁し、之が統制機關としてスラカルタに中央サリカ・イスラム Centraal Sarekat Islam を設けてアミナト Chokro Aminoto を之が會長に推戴するに至つた。

同會は毎年大會を催して島民の島內旅行、移住の自由、敎育制度の改善、强制出役の撤廢等を協議當局に哀願した。

而して强力なる和蘭の植民地把握は寸隙を餘さず、一九一七年には正式に土人徵兵令が總督スティルム Johan Pawl, Graaf van Limburg Stirum に依つて發布せられ在來の兵役を成文化した。

翌一九一八年、時に和蘭植民相プレイテ Pleite の進言により總督府は島民一部に對して局限的參政權の賦與として國民參議會 Volksraad を開設、同年バタビアに第一回會議が開かれたのであつた。議員總數六十名、內三十五名は和蘭人殘る二十五名が全部官選島民であつた。然して其れは一九三一年各々三十名宛となり、官選の他に民選も出來る樣になつた。

全島四千萬、生活苦に喘ぐ島民の一部が、赤化政黨に指導せられてガルーに暴動を起した所謂ガルート事件 Garoet Zaak が惹起せられたのも此の年である。

尙一九二五年總督フヲック Dirk Fock は一九世紀以來幾度か改訂せられた統治法を再訂して、和蘭領印度立法行政法 Wet de Staatsinrichting van Nederlandsche-Indië を制定して發布したが、卽ち是現代に於ける蘭領東印度諸島に行はれてゐる統治法である。(其の後一部を改正せり)

徐々なる島民の自覺と相俟つて政治的な運動も漸く力あるものとなり、曩に述べた諸黨派も一九三

〇年以後は外領たるボルネオ、セレベス、スマトラ諸島民をも其の會員に擁するに至り、一九三一年には最も有力なる島民の結社としての印度國民黨＝パルチンド（略稱）Partai Indonesia＝Partindoが創立せらるるに至つた。

是に對して總督府は政治經濟的に多くの特權を與へられてゐる和蘭人を中心とする前記祖國俱樂部Vaderlandsch Club を結成したが、今日最大最强なるものとなつてゐる。

如何に六千萬馬來諸島民蠢動するとも、其の去勢せられたるが如き弱力を以て强靱なる和蘭統治の堅壘牙城に迫る事は到底不可能であると見られる。

和蘭は自領植民地島民に對して何等和蘭精神の涵養、國語の普及等を强ては試みない。彼等は其れが容易に成功し得ぬ無駄なる事を熟知してゐるからである。

……………………僅か改隷以來半世紀をも過ぎざる外地民に對して、如何に國語、母國精神を宣傳するとも、到底本心よりは望み得るものに非ず、其れは餘りにも事を急ぎ、外形に捕はれた無理なる策である。尙此の點に關しては、昭和十二年四月號「東洋」誌上に於ける、貴族院議員赤池濃氏の所論を參考すべきであらう。

× × × × ×

如斯對立する兩者の間に介在して、其の文化と賢明に依り漁夫の利を占めつゝあるのが所謂華僑である。

蘭領東印度、特に爪哇を中心とする地方に散在する其の數一九三七年末に於て實に百三十萬、其の

經濟的勢力の强大は眞に驚く可きものあり、和蘭總督府と雖も之を無視しては事を成し得ざるの狀態に在る。土民の經濟的能力の向上は華僑への脅威であり、又土民の政治的位置の强化は和蘭への不安である。卽ち華僑が敢て意識しつゝ和蘭の爲に利用され、土民の政治經濟的發展の阻害者となれる所以である。

而して此の華僑の中心勢力は日領臺灣人の其れと等しく、支那福建省を故鄕とする約七十萬であり、廣東人は約五十萬である。（然して現在彼等は、蔣政府の抗日政策に依り例外無く反日思想に燃えてゐる。）

就中其の豪勢を謳はれてゐるのは爪哇の建源（キャンゲワン）（黃冲涵）であり、英領馬來のヂャーナリズム界を牛耳る陳嘉庚と共に福建人である。彼等華僑が本國支那に對する送金は、每年平均二億弗を降らず（一九三二年度三億三千萬元、一九三三年度三億〇五百萬元、一九三六年度三億八一二〇萬元、日領臺灣各都市に散在して內地人を對象に巨利を博しつゝある華僑の利も亦大なるものあり）卽ち支那本國が連年の入超を補塡して餘りある所以である。

――バタビヤ總督府豫算――

吾人が特に留意して考ふ可き植民地（外地）財政上の要點は、其の豫算なるものゝ內容の比較檢討である。卽ち同じく植民地財政の獨立てふ事實の中にも、其の國に依つて內容程度に多大の差異あらしめられてゐる事である。（日本の植民政策學者經濟學者等により、旣に如斯問題は硏究されある可き筈のものである）

一九三六年度、和蘭領バタビヤ總督府豫算額は、四億六四〇〇萬盾、然して二三一八萬盾が赤字となつてゐるが、其の内容を見るに、國防費として陸軍に五一三八萬盾、海軍に三七六〇萬盾、合計八八九八萬盾を提供して居り、更に官吏の恩給として五五三〇萬盾を支出してゐる。

從つてバタビヤ總督府豫算四億六四〇〇萬盾の內、一億四四二八萬盾、卽ち其の三十一％は國防費と恩給費に充當せられてゐるのである。是は同總督府創立以來三世紀に亙つての事實であり、過去に於ては更に尨大巨額なるものがあつた。

故に之を、日本領臺灣總督府の同昭和十二年度豫算一億六千萬圓の支出內容と比較し、臺灣の其れと等しく國防費、恩給費等を全然負擔せぬものとする時、バタビヤ總督府の豫算は三億二〇〇〇萬盾となり、二三一八萬盾の赤字は無論の事、約一億二〇〇〇萬盾の餘分を生ずるものとなる。

卽ち日本外地豫算と同內容を以てするならば、蘭領印度總督府の豫算は寧ろ日本外地豫算以上に豐かなるものではなからうか。日本外地總督府の國防費恩給費負擔等は此處に當然考へらる可き問題の一として登場する。加之是は何等搾取なくして可能なのである。

第十一章　ポリ・メラネシア諸島の現狀

日本領マーシアル群島の東南海上にに展開せられたる大小無數の島嶼中主なるものを擧げると次の如くである。

A　ニウ・カレドニア　New Caledonia　メラネシアのローヤルティー諸島 Loyalty Is. の主島で佛

領。

B　トンガ王國K. of Tonga（In Friendly Is.）ポリネシア中のフイジー諸島 Fiji Is. の東南隣に在り英保護領。

C　フイジー諸島ポリネシア中の主島で英保護領。

ビスマーク、ソロモン Solomon 諸島は濠洲委任統治ニウ・ギニアに屬し、ニウ・ヘブライズ、New Hebrides ニウ・ジーランド New Zealand 等の諸島は都合に依り省略する。

以下前記三者の史的瞥見と、現代に於ける日本との關係を略述して見たいと思ふ。

A　**ニウ・カレドニア**

此の島は日本委任統治領ヤルート島から約千二百浬の南方、濠洲の東方海上に在り、面積は七七〇〇方哩で我が四國地方より稍大に、然して人口は一九三五年末に於て五萬二千、卽ち一方哩に付き六・五人と言ふ寥々たるものである。

該島は既に十七世紀に於て白人に依り知られてはゐたが、實際に同島に上陸し調査したのは、有名な英船長クック J. Cook の一七七四年に於ける探險を以て嚆矢とする。

共の後、他に多くの大植民地を獲得した白人諸國は、同島を顧る所無く七十年の歳月は流れ、一八四三年に至つて南洋植民地占領に遲れて焦燥してゐた佛蘭西が、初めて該島の獨占を宣言し、一八五三年には附近リフ Lifu マレ Mare 等の屬島をも合併正式に佛領なる事を再宣言した。

而して佛蘭西は初め同島を流刑植民地となし、豐かなる其の鑛產（ニッケル及びクローム は世界的產

地、他に石炭、鐵、水銀等）の開發に着手し、他方印度、爪哇等の土人を大量輸入して使役した。

斯くてニウ・カレドニアを全く平靜なるものとして、一八九五年には本國囚徒の流摘を廢して自由移民地となし、同島の鑛業貿易の振興に資したのである。

尚一八五四年以來毎年輸入した印度支那、爪哇等の勞働者數は一九三五年に於て無慮二萬を超え、同年に於ける衰退島民人口三萬と殆んど相伯仲するものとなつた。

同島は鑛脈多く、特に其の東部には有望なニッケル鑛山連り、佛人の企業者が盛んに活躍してゐるが、一九三七年以來鐵飢饉に喘ぐ日本人も漸く同島に進出するに至つた。

卽ち一九二二年同島に於て鐵鑛を發見した日本人瀨尾氏は、同鑛區五千町步を買收したが、企業に至らず空しく十五年を過ぎ一九三七年五月に至つて、初めて之が採掘を具體化せんとするに至つたのである。又一八九〇年以來日本に在り、日佛貿易に從事してゐた佛人フッシュ Robert Fuch 氏は、一九〇七年ニウ・カレドニアの有望なる鑛鐵山二萬町步を買收し、直ちに日本人勞働者二千餘名を送つて採鑛に着手したが、歐洲大戰後の不況に遭ひ遂に失敗に終つた。其の頃日本政府は同島鑛質調査に技師數名を派遣したが、其の品位は五五乃至六〇％の優良なるものであつた。

然し乍ら一九三五年以來の世界的軍擴影響、其れに因る鐵缺乏に伴ひ、新聞紙の報ずる處に據ればフッシュ氏の此の大鑛山に債權を有する日本人は、一九三七年以來フッシュ氏の息レヲン・フッシュ Léon Fuch 氏と共に、再び同島の鐵鑛採掘に着手するに至つた。然して事業經營は日本鋼管が主として之に當る豫定にあると云ふ。

斯くて日本＝ニウ・カレドニア間の經濟關係は、一九二二年以來の緊密性を保有せむとするに至つてゐる。

B　トンガ王國

トンガ王國はニウ・カレドニアの東方約千浬に在り面積約四〇〇方哩、人口は一九三六年末に於て二萬八千と推定せられる立憲獨立王國であり、女王サロート Queen Salote の統治下に在る英國の保護領である。

白人との關係は、一六一六年に於けるルメール Jacob Lemaire 及びスハウテン William Cornelis Schouten 等の艦隊と北方なるニウアトブタブ島 Nicatubutabu Is. に於て衝突せるを以て初めとする。其の後一六四三年にはタスマン、一七六七年にはワウリス Samuel Wallis 一七七三年にはクック等が訪れてゐる。

英國が同島に勢力を扶植した遡源は、遠く此の十八世紀に於ける冒險航海者クックの來島以後に在る。

然して英國が國家的侵入工作を此のポリネシアの小王國に對して初めたのは一七九八年であり、翌一七九九年には反英分子掃蕩の爲の島民相剋の戰亂を惹起し、十九世紀に入り英國の勢力益々强固となり、一八四五年には遂に英國擁立の許にタウファアーハウ王 King Taufaahau 起ち、トウバウ一世 K. George Tubau と稱した。

斯くてトンガ王國の實權は英國の支配する所となり、一八五二年には反英島民の一大掃蕩がトウバ

ウ一世の名の下に行はれ、英國の權益と布教使命は愈々容易に充分に保有擴大せらるゝに至つた。

英人を主班とするトンガ議會が開設せられたのも亦此の頃である。而して一九〇〇年の年の英ト協定 Treaty between Gt. Britain and Tonga Kingdom に依り、トンガ王國は完全に英國の保護を受ける事になつた。時の王は先王と同名のトゥバウ二世 K. George Tubau II であり、一九一八年トゥバウ二世薨じ、現女王サロート Queen Salote 其の後を嗣ぐに至つたものである。

又同國の通貨は一九〇五年以來英國の制度に統一せられて居り、文化的施設としては、全島に寺小屋式初等學校百箇所に散在し、英語に據る正規なる敎育は行はれてゐない。

C　フイジー諸島

フイジー諸島はトンガ群島の西北隣に在り、其の總面積七七五〇方哩、人口一九三三年に於て十七萬三千を擁して、ポリネシア中の大島嶼である。

主島はヴイチレヴ Viti Lebu で其の面積四國の三分の二に近い。首府スヴ Swa=Suva も亦此の島の要津を作してゐる。

白人との關係は一六四三年に於けるタスマン及び一七七三年に於けるクック等の發見に初まり、實際に白人が居住したのは、一八〇四年、濠洲よりの罪囚及び逃走船員がヴイチレブの東方沿岸に到着したのを以て嚆矢とする。

英國の武力と智能が完全に同島の王タコムバウ Thakombau を捕へ、其の統治權を英國に提供せしめたのは一八七四年の事である。

然して英國は同島の資源開發の爲め、一八七八年以後連年數千の印度人勞働者を輸入し、同時に其れを反英的島民勢力の擊滅に利したのであつた。從つて無智な島民一般は徐々に其の生活權を脅かされて十九世紀後半はフイジー島民史上空前の暗黑時代となつた。

一八七四年英國への合併以來、人間としての利益と幸福を求めて同島民は、幾度か生活擁護の爲に戰つた。然し共れは常に失敗に終つた。（削除十六行）

第十二章　南洋民族と在留日本商人の位置

中世より近世初期にかけて、雄圖遙々南洋に發展した日本商人、浪人武士團は、其の武勇と賢明信義に依つて南洋諸民族に異常なる歡迎を受けた。然して一部移住するに至つたものは彼等の社會に指導者としての、又支配者としての尊敬を拂はれ、德川鎖國令は遂に彼等を永遠に南洋を埋骨の地と決せしめて、其の後幾世代の永い生活に日本的影響を與へつゝ混血同化、其の本然の祖を消滅して行くのであつた。

今日主として馬來諸島民の間に日本的な言語、風習、傳說、思想等が遺されてゐるもの卽ち、之に因るものであり、中には日本を祖國視し同胞視する者ある故無きに非る次第である。「更に原史時代に遡れば馬來族の一部は黑潮に乘つて日本列島に北上せるもの多く、日本民族構成上の一要素を爲すものであると云ふ說を唱ふる小金井良精博士、松岡靜雄等の學者ある事を併せ知る可きであらう」

卽ち共の例をボルネオ南部バリト河畔の、主としてマプロクチヤホ地方に住むダヤク Djak 族に

執れば、一九〇四年日露開戰の報を傳え聞いた彼等は、諸酋長が中心となつて同胞の國日本を後援す可く敢然蹶起し、先づ之が先決問題として苛酷なる和蘭政權打倒の兵を擧げた事である。

時の爪哇總督ファン・フュッツは大いに驚き直ちに軍を派して征討に從つたが容易に屈せず、翌一九〇五年に入つて漸く之を鎭壓するを得た次第であつた。

其後ダヤク族に限らずボルネオ一般島民が、從前よりも更に虐遇に陷れられ、蒙昧生活に逆行せしめらるゝに至つた理由も亦此處に見出される。

南洋諸民族の親日的なる事に依る不幸又此處にも在りと言ふ可き歟。

又コータワリギン（サムピー）地方の島民は、一九〇五年の日露戰役に於ける日本大勝利を我が事の如くに狂喜し、各戶に旭日旗を掲揚して親日反蘭的氣勢を擧げたが爲に遂に、同地方の主なる酋長士侯は新嘉坡其の他に追放せられ、完全に親蘭的首長のみが擁立せられて今日に至つたが是は一九〇八年の事である。

尙セレベス島北方の要港メナド及び其の附近ミナハサ地方及南部のブギス族は、自ら日本人の後裔也と稱してゐるが、其の姓名の中にはトミヲカ、タナカ、サンキチ等あり、女性には必ズオの敬稱あり、オイト、オカネ等の名多きを見る。

如斯馬來諸島民一般の親日的傾向は、和蘭に執り不愉快なる脅威であり、從つて和蘭總督府の對日警戒調査機關の完備せる事は他に比類が無い。

次は一九三六年初葉に於ける比律賓の獨立案に對して、蘭印島民の獨立運動者に「和蘭治下に在る

事の幸」を篤く匂はしたものであるが參考迄に掲げる。

「比律賓に於ける日本人問題は、日本人の平和的進出を無制限に放置する結果の如何に恐るべきやを如實に示す。吾人は海運協定成立以來の良好なる日蘭印關係が更に緊密の度を加へんことを希望してゐる。

日本の貿易を妨害するの意志無きも、日本が常に我主權を尊重すべきことを要求する。

幸現在の蘭印に於ける日本の『平和的侵入』が蘭印利益の許す限度を越へてゐないのは政府の處置宜しきを得たる結果である。

比島獨立の前途危まれつゝある現時の情勢は、蘭印獨立主義者に敎ふる所が多い。」

〔ヂャバボーデ＝一九三六年七月二十三日〕

又、日本の南洋進出に關する限り、利害相通ずる英國及び和蘭の協力は互に侵略日本の宣傳に就いて、事ある毎に利己的記事を掲載して領下島民に知らせてゐる。加之島民社會には勢力ある無數の華僑が散在して島民の間に、益々反日的な思想を涵養してゐるのである。次に其の一例を掲げる――

「過去十年間極東に於ける日英間の不安狀態は、今後兩國の相鬪ふ事を意味しない。然し利害の衝突は今後益々熾烈を加ふべく、日本に對しては之を利用せんとする獨、伊を除き米、蘇、支、佛、蘭、濠洲等悉く反感を抱き暹羅すらも好ましき態度を示さない。

英國の對支政策の基本は支那に鞏固なる政府を樹立せしむるに在るが、日本は絕えず支那內亂を促進し、而して最近上院に於ける日支問題の討議に見るも日英間の協定に達する事は困難で、斯る情

勢の續く限り、日英間の協調乃至舊時の親善關係を提唱するは不可能だ。但し日本に眞に事態の改善に努力するの意志があれば、英國よりの好反響ある可きを期して可なるも、此の事實を認識せる日本の眞面目な分子は不幸にして目下勢力がない」

〔フリープレス＝一九三六年七月二十二日〕

上に排日を其の存立發展上より必要とする列强あり、中に幼時より排日敎育を受けて排日の權化となれるが如き支那人あり、南洋諸島民は此の間に在つて徐々に恐日的となりつゝあるのである。

而して二十世紀前葉末だ日本は之に對抗して五億南洋諸民族を善導し行く可き百年の大計樹立に思ひ至つてゐない。

否、共れのみか南洋其のものに對する史的槪念をすら摑み得てゐない。

對南洋經濟開發にせよ、文化普及にせよ、該地方に於ける凡ゆる活動に於て最も基礎となるものは其の史學であり、其の現實的意義であり、之を確と把握する所に初めて效果的對策は生れ出づる。

尙一九三三年以來日本貿易の對南進出、及び日本の國際聯盟脫退、更に一九三五年未來盛んなる日本の平和的南洋進出の聲は、益々和蘭の對日警戒竝に英國との接近共力に拍車を掛けるものとなつた。

一九三六年八月、總督には敏腕を謳はれたチャルダ Tjarda van Stalkenbolg Stazhovel 新しく任命

されたが、着任早々より其の活動は目覺しく、同年十二月には遂に生産過剩に惱まされてゐた爪哇糖の進出地を支那に見出し、其の財政部との間に輸入税半減、又將來は專賣制實施てふ巧妙なる契約を成立せしめた。（本章削除十二行）

第十三章　現代ニウギニア

英國及和蘭の巧妙なる自領植民地實情の、對外不紹介政策の效果に加ふるに、該植民地に關係深かる可き亞細亞の大國日本の南洋認識不足は、人口過剩、資源缺乏に喘ぎつゝある日本の南方に、日本の現代を以てすれば、實に驚くに堪えざる程の未開發大領土を何等用ふる事もなく安閑存置せしむるの不自然を現出せしめてゐる。其の最も甚だしきをボルネオ、スマトラ及此のニウギニア卽ちパプア Papua 諸島となし、屬島を含むパプアの全面積は三十七萬方哩に上つて、各植民地を含む全日本面積二十九萬方哩より更に遙に大なるものである。

然して兩者人口の比較は、パプア全島が約二百三十萬なるに對し日本は九千五百萬ある事を知る可きである。

世界の大植民帝國たる英國及和蘭は、窮々たる日本の現狀に反して、己が此の大領土を未だ開發經營するの必要無き程の餘裕綽々たるを持つ。

現代ニウギニアを瞥見するに當て、如斯客觀情勢は其の前提として知り置く可きである。

本章に於ては最も拓けたる蘭領ニウギニアのみに就て述べる事とし、命稱は本來の島名たるパプア

パプア諸島
New Guinea

○同縮尺日本トノ比較圖○



を用ふる事とした。

蘭領パプアは面積十六萬二千方哩を以て日本本土（十四萬八千方哩）より大なる事更に一萬四千方哩である。

然して人口はバタビア總督府今日に至るも未だ調査したる事もなき放置振りで、一九三五年に於ける推定人口は二十五萬である。卽ち人口六千萬を擁して喘ぐ日本本土より大なる此の大豐土が、其の總人口は僅かに日本の一都市たる廣島市にも及ばざる狀態に在るのである。

蘭領パプア最大の都市（邑）が北岸ヘールフインク灣西岸のマノクワリ Manukwari で、其の人口一九三六年末に於て八百人なるを以てしても如何に閑散なる地方であるかが知られやう。

二十世紀初頭まで此のパプア地方はテルナテ又アムボイナの二行政區に分たれてきたが、一九一九年以後は一ニウギニア區としてマノクワリ、フアクフアク Fak Fak 及メラウケ Merauke の三地に駐在官 Resident を設けて統治せらるることとなつた。

然して其の初めに於ては帝政時代に於ける露西亞のシベリア地方と等しく、和蘭は此の地方を專ら島民の流刑の地とした。

今日に於ても一部は然り、特に東方チグール川 T. Digoel 上流のタナメラ Tanak Me'ak は其の中心地たり、一九三六年に於ける流摘の士は、スカルノ氏以下其の數約四千人と目せられてゐる。

東南端の大邑メラウケは和蘭の作せる最初の部落で一九〇二年爪哇總督ホルデイク Colneris Pijn-acker Hordijk の建設に係り、守備隊、病院、駐在官廳等あり、フアクフアク及マノクワリと共にパ

プア行政上の一中心をなしてゐる。

西部の要津フアクフアクには駐在官を上官とする Gezaghebber＝郡守が派遣せられて居り、又王立和蘭郵船會社 K.P.M.＝Koninklijk Packetvaart Mij.＝Royal Dutch Packet Co. の支店が設けられてアンボイナ、チモール、爪哇諸島間通商上の一基點となつてゐる。又此の地方のパプア人は他方の其れに比し最も開化せられてゐる。

爪哇總督府は一九〇六年以來ゴーセン A.T. Gooszen フヲーヘル R. Vogel ランボンネット F. L. Rambonnet 等の軍人を隊長として幾度かパプア探險隊を派遣してゐるが、今日未だ同地方の完全なる調査は成されてゐない。

然し乍ら、野蠻なるパプア人に對しても和蘭政府は、年七盾（内四盾國税）の人頭税を徴收する事を忘れてはゐないのである。

教育に、生活に、絶大なる特權を彼等に與へて其の幸福と繁榮を圖り、加之一錢の徴税を行つて居らぬ日本臺灣の理蕃政策と比較すべきである。

又臺灣島民の九三％を占むる勤勉なる臺灣本島人、其れは日本の寛慢なる政策に依つて一般に富裕にして文化高きに對してすら、在内地母國人に對する課税に比すれば隔段の差ある低率を以て迎へられてゐる。

無智なりとは言へパプア人は、其の納税の義務を忘るる事無く、此の金額を貯蓄し得る迄は働き、濟めば又呑氣なる原始的な生活に還るのである。

然して一九三〇年以來は、徐々にパプアに對する研究を開始し特に一九三三年蘭領印度空前の不況襲來以後は、古來の有閑地たりしパプアに着目し、遂に爪哇總督ヨンゲ Thr. Bonifacius Cornelis de Jonge は一九三六年退役陸軍大尉ベッキンク Cap. Becking 及びハルティク Lieut. Haltyk 等を主班とする南ニウギニア探險隊を派遣し、主として其の鑛産、人口分布狀態の調査に當らしめた。又ニウギニア石油及びニウギニア鑛山の兩國策會社に命じて、大いに同地方の資源調査竝びに開發に活動せしめた。

日本委任統治南洋群島サイパンに本據を置き、主として糖業界に活躍してゐる南洋興發株式會社は其の後水産、綿花、製氷事業等に進出し、一九二六年以來パプア、ヘールフインク灣一帶の綿花栽培に從事して失敗した獨逸フヲニックス商事會社 Voniks G. S. を一九三一年買收して、同地方に於ける一切の事業權を獲得、棉花の外に新にダマル樹（樹脂を飛行機、船底等の塗料とし又レコード、電燈ソケット材料としての要品）の栽植を圖つた。

獨逸、伊太利と共に所謂世界の三大不平國 Three most powerful grievance countries の一としての日本に對して、和蘭は英國と共に世界二大飽滿國たる點に於て、日本及び蘭領印度の地理的接近、日本の經濟的出進等の客觀的情勢に、恐怖と反省と死守との交錯せる複雜なる國際心裡に自らを惹き入れてゐる。

パプアの人口密度を一とする時、日本の其れは實に四〇〇を超ゆる甚だしきものであり、パプアの存在は經濟的に和蘭に執つては何等の致命的な價値を有するものに非る事を知らない和蘭ではない。

然し乍ら和蘭人は言ふのである――

「經濟的發展の其の後に齎らされるものは必ず政治的な發展である」と。

尨大過分なるボルネヲ、パプア等を、日本の經濟的進入に快くは開放せざるの所以此に在る。

然し乍ら其後和蘭は其の事業に對し、部分的には相提携して之に當る事となつた。

加之、一九三七年春の日本帝國議會に於ては蘭領パプア進出に關して論ぜらるる處あり、爪哇總督府の神經は愈々尖鋭ならざるを得なかつた。

×　×　×　×　×

尙パプア島一帶は夫の有名なる極樂鳥の特產地である。

パプアこそは實に其の肥沃なると溫暖なるとに因り、開發せらるれば南海の一大パラダイスであらう。

Kennst du das Land wo die Paradiesvögels hüpfen!

尙此處に英領濠洲政廳委任統治領下に在るパプア諸港市に在る日本商人に就て一言附記して置かねばならない。卽ち獨領時代同地方に發展せる日本人パイオニーア達は、其後濠洲政廳の主唱せる白パプア主義＝White Australia に禍せられて、數十年來營々として築ける其の經濟地盤を彼等自身の繼續者たるべき日本人の入來を禁止せられ居る爲め、一代にして亡び行かねばならない悲境に陷つてゐると云ふ事である。

第十四章　英國及蘭領印度の經濟關係

英領に隣接する植民地蘭領印度に於ける英國の利權も相當に大きく、これ又甚だしく和蘭政府の好意的態度に依存してゐる。面積七十三萬六千方哩、人口六千五百萬を有する蘭領馬來群島は世界の熱帶原料生産地中重要な地位を占めてゐる。この地域の開發に當つては勿論和蘭が先頭を切つてゐるが、他方和蘭政府によつて最近まで固く守られて來た門戸開放政策は、他の諸國の投資及び貿易にも一樣にチャンスを與へて來た。しかし馬來當局とは反對に、和蘭當局は大規模な公債政策を實施して來た。現公債の大部分は最近の不況期中當局者が一つには不況の影響を克服せんとする目的から、各種公共事業計畫を繼續しようと決定したときに起されたものであつた。蘭領印度に於ける公表外國投資額は一九三六年に於て二億九千三百九萬六千磅と計算されたが、その中一億八千八百三十六萬八千磅は官營事業に投下されたもので、主として和蘭本國政府の出資に成るものである。此の故に、一九三三—三四年に於て三千一百萬磅と計算された英國投資は專ら私的企業に對して投下されてゐるものである。

—a—蘭領印度に於ける石油

蘭領印度に於ける英國の投資は今日世界原油生産額の約三%を供給してゐる貴重な且つ戰略的に重要な油田に集中されてゐる。蘭領印度石油生産額の四分の三以上を支配してゐるザ・ロイヤル・ダッチ・シェル聯合 The Royal Dutch Shell Group は一八九〇に設立された和蘭系持株會社たるロイヤル

•ダッチ石油會社 Koninklyke Nederlandsch Mij. tot Exploitatie van Petroleumbronnen in Nederlansch-Indie 英名—Royal Dutch Co. for the Working of Petroleum Wells in Netherlands India と一八九七年に設立された英系持株會社たるシェル運輸商事會社 The Shell Transport and Trading Co. とが合同して出來たものである。兩社は一九〇七年實際の合併手續を行はないので、各自の株式を併合した。この聯合會社は多數の作業會社及び販賣會社を傘下に置いてゐるが、その中でも有名なのはバターフセ石油會社 De Betaafsche Petroleum Maatschapij である。蘭領印度石油生產額のほぼ三分の二を生產してゐるこの會社の株式は、三對二の割合でロイヤル・ダッチとシェルとによつて所有されてゐる。卽ち總資本三億盾の中一億八千萬盾はロイヤル・ダッチが持ち、一億二千萬盾はシェルが持つてゐるのである。この會社の蘭領印度に於ける投資總額は六億盾と算定されてゐるから、當植民地に於ける石油生產への投資額（全部がバターフセ石油會社に投ぜられてゐるわけではない）は二億四千萬盾、卽ち二千六百五十萬磅と見ることが出來よう。蘭領印度に於ける石油生產額は增加しつつあり、新な油田が續々開拓されつつあり、又バターフセ會社はその兩持株會社に配當として一九三五年には三千九百萬盾、一九三六年には五千三百萬盾を拂ふに至つた。

—b—英國貿易に對する和蘭の援助

一九二八年頃は英國は和蘭に次いで蘭印輸入貿易の第二位に立ち價額一億一千九百萬盾、卽ち總輸入の一二・三%にあたる商品を供給してゐた。しかるに英國の輸出も他の歐米諸國の輸出と同樣に、日本商品の進出によつて甚大な打擊を蒙つた。一九三四年には英國からの輸入額は二千四百萬盾、卽

ち總輸入額の八・二％に低落したのに對し、日本は九千三百萬盾に及び三二・五％を以て第一位を占めたし、一群の製品部類に於ては文字通り獨占を確保した。歐米貿易が特に減退を來したのは綿製品の分野に於てであつて、一九三四年に日本は總輸入ヤードの八三・一％を供給したのに對し、和蘭は七・三％英國は二・八％を供給したのにすぎなかつた。一九三四年に和蘭當局が大英帝國で實施されたものと同樣な割當制を實施するに及んで漸く日本品の賣行は鈍り始め、これに反して英國品の賣行はどうやら安定しそうになつた。最近和蘭當局は英國輸入業者に多大な好意を示し、英國品は低い和蘭の關稅をかけられる外には何等の制限を受けないで蘭領内に入ることを許すといふ『オスロー特權』"Oslo Priviieges" を英國に賦與した。

斯くして投資額約三千萬磅年商額七百萬磅、及び當植民地海運中に於ける大きな割合（年總積荷噸數約一千六百萬噸の中ほぼ五百萬噸）を包含せる蘭領印度に於ける英國の經濟的權益は、現在相當健全な狀態にあるものと見てよい。尤もこの狀態は政治的條件に少しでも變化が生ずれば、忽ちその影響を受けることは必定である。本群島に對する英國の輸出貿易は殆んど全滅せんとしたるところを和蘭政府の懸命な努力によつて危く救はれたのであるといふ事實の中にも、我々は英國の經濟的利害關係に對する英蘭協力の效果を認めざるを得ない。英國と協力することによつて和蘭當局は一朝他國から攻擊を受けた場合、英國から保護を受けることを期待してゐるのである。現に英蘭軍事協定に關する最近の報導は當局者によつてさへ必ずしも否定されてゐない。

（本章は F. O. Hauser :—Britain's Economic Stake in South-East Asia: in "Far Eastern Survey" Dec. 1937 の譯である）

第十五章　臺灣史の飛躍的發展

臺灣經營の創業時代たる最初の十年間、最も多くの業蹟を遺したのは明治三十一年より同三十八年即ち一八九八年より一九〇四年に至る八年間在任した兒玉總督である事は、既に近世史上に於てわれわれの知る所である。

而して島民の辨髮、纏足等の弊風が禁止され、既に行はれてゐた初等教育令に次で中等、高等教育令が實施せらるるに至つたのは其の後間もない頃であり、內臺定期航路、鐵道敷設、製糖會社、中央研究所及び臺灣を基點として南支南洋への活躍を主旨とする金融機關臺灣銀行等が設立せらるるに至り、臺灣の交通、産業、教育、經濟等の文化的發達は實に臺灣史上空前の隆盛を見たのであつた。

又明治三十九年より大正三年即と一九〇六年より一九一四年に至る間、臺灣山脈に蟠居してゐた蕃族は全く平定せられて教育と生活向上施設の下に普き皇恩に浴するに至つた。

他方、清末以來臺灣に其の羈足を伸ばしてゐた英國の茶業、糖業商館、例へばサミュール商會 Samuel & Samuel Co. Ltd. 及び汽船會社例へばダグラス Douglas S.S. Line 等が其の勢力を失ひ、臺灣より撤退するに至つたのは大正八年乃ち一九一九年、明石總督の時代である。

然して同八年十一月明石總督薨じ、田健次郎代つて初代文官總督となるや、就任匆々にして地方自治制、內臺人無差別、共學制度を施行して島民權益擴大の所謂仁政に邁進した。

又專賣制を擴張して酒に及んだのは大正十一年、一九二二年の事であり、他方其の教育と經濟的富

裕の生活裡に、當然擡頭した島民の臺灣議會設置乃至獨立運動が熾烈を極めたのも亦此の時代に初まる。

斯くして昭和三年、一九二八年には、南洋に特殊使命を持つと稱せらるる臺北帝國大學設立せられ、降つて昭和十年、一九三五年には中川總督に依つて、大正九年田總督に依る地方自治制更に擴大せられて島民の政治經濟的位置は、白人領南洋植民地に曾て見ない高等なるものとなつた。

而して同九年度に於ける臺灣總督府豫算を見るに、一億二千餘圓に上り、西隣支那福建省政府が、臺灣島に約二倍半する廣大なる面積と人口を擁しつつ、僅か九百萬元（≒圓）、即ち二千萬に破する臺灣總督府の敎育費の、半ばにも及ばざるに比し雲泥の差ある豐かなるものであつた。

社會的に文化的に、溫情無類の總督府給付による發辣たる島民の飛躍的な發展は、其の人口の激增に因つても知られたのである。

即ち、一九三五年十三%を以て世界列國中第一位の人口增加率を示す日本本國人に比し、臺灣島民の人口增加率は二十四%てふ驚異的なるものであつたのだ。

昭和十年滿洲國より故鄉臺灣を訪れた駐日大使謝介石は、恰も中川總督に依る改正地方自治制の實施に際し其の所感を述べて曰く――

「…………………………臺灣の地方行政の爲に眞面目に深く考へると、臺灣の人士は玆に緊褌一番、公に奉ずる爲に之を一時機として更に國民としての、公民としての業務を果す可く努力致さねばならぬ事と思ふ。

……………………………一體支那民族は善政さへ布かれれば默つてゐるが國家觀念と云ふものが極めて稀薄で、此の點日本人とは大分違ふ。其れで政治に對しても兎角惡評のみを放ち易い。……………………………現在臺灣の善政に對して一般人民は非常に感謝してゐる。然るに一部の生半可通な學問をした所謂インテリ階級の中には、往々にして臺灣の政治に對して謬まつた見解を持つ者が多い。内地の大學などへ入つて來た者などに觀る例だが、所謂自由の名に心醉して徒らに言論自由を强調し、高論放言の風がある。……………………………今後の地方制度の運用如何に就ては、臺灣の民度が現在の狀態では多少問題である。兎に角新制度の實施に對して自由が與へられたとか、解放されたとか言ふ輕薄な考へ方では、到底運用の宜しきを期し得ない……………………」

〔臺灣日日新報―昭和十年十月二日〕

一八九五年卽ち明治二十八年、臺灣が淸より讓渡された時、化外の蠻島であつた不健康地臺灣の人口は二百萬に滿たぬものであつたが、其の後四十年、一九三五年卽ち昭和十年には、五百萬を突破する豪勢なものとなつてゐる。

反之、在臺灣母國人一般卽ち所謂内地人三十萬（昭和十四年）と馬來蕃人十三萬は自然增加を除き見る可き增加を示さず、寧ろ衰退の形勢に置かれてゐる。

他方臺灣の恩惠に浴す可く福建其の他支那各地よりの出稼華僑は逐年增加し、其の巧妙なる經營と努力は容易に在臺日本人の元來が貧弱なる經濟力を利用し蠶食しつつある。

尙日本は迅くより南洋協會を東京に設立し、臺灣に支部を置いて對南洋政策に着眼してはゐるのであるが、列强の其れに比して其の規模甚だ小である。

又昭和十年一九三五年以來計劃せられ、實施せられつつある日本內地人移民の來住も、其の最高豫定移民數、十年間に僅か二萬人を以て、五百餘萬島民の年人口增加十萬てふ壓倒的多數に對しては、九牛の一毛にも過ぎない貧弱なるものである。

加之、其の二萬の內地人が增加するとも、最も重要なる生活力たる經濟的方面には、英、佛、蘭等の列强南洋植民地在住母國人の强大なる位置に比較しては、同日に論ずるを得ない無力無產の農民階級に過ぎないのである。

斯くて昭和十一年卽ち一九三六年には、小林總督臺灣に新任するに及んで、南洋の一部分としての臺灣の位置漸く見出されむとするが如くである。

第十六章　臺灣經濟現勢瞥見

他方に於ては臺灣及び南洋の經濟開發機關として、臺灣拓殖株式會社が臺北に設立せられて、昭和十一年十二月より其の活動を開始せらるゝに至つた。又同目的に生く可き南洋拓殖株式會社も南洋廳パラヲに新設せられた。

臺灣在住一般島民が、母國内地人に比して、如何に所得との關係に於て僅少なる税負擔下に、其の國家給付の潤澤及び天然の肥沃と相俟つて、其の生活を豊潤ならしめてゐるかは、北山教授の左表に據つても其の一端を知り得られる。

内地臺灣比較租税負擔

業態別	所得階級別／内臺比較	四百圓程度	八百圓程度	千二百圓程度	二千圓程度	三千圓程度	五千圓程度	七千圓程度	一萬圓程度
農業	臺灣	四八・五一	一一三・三九	一五七・二七	三三三・〇一	五三二・〇七	九三二・八〇	一、四一七・三八	二、〇一八・三三
	内地	一七九・八一	三四一・四二	五三五・三七	九六一・二三	四八七・一四	二、五八九・五二	三、九八七・四九	五、六七九・二九
	内地に比して輕	一三一・三〇	二二八・〇三	三七八・一〇	六二八・二一	九六五・〇七	一、六六六・七二	二、五七〇・一一	三、六六一・六〇
商工業	臺灣	四七・〇一	八六・六三	一五七・六三	二三三・九六	四一二・四三	六二四・〇三	八三三・八〇	一、六六一・二八
	内地	五一・七七	九四・一一	一四七・〇八	二八六・一六	五〇三・〇五	八八二・二六	一、二三八・三〇	二、一〇五・六七
	内地に比して輕	四・七六	七・四八	×一〇・五五	五二・二〇	九〇・六二	二五八・二三	四〇五・五〇	四四四・二九
平均	臺灣	四七・七六	一〇〇・〇一	一五七・四五	二八三・四九	四六七・二五	七七三・四二	一、一二五・〇九	一、八三九・七六
	内地	一一五・七九	二一七・七七	三四一・二三	六二三・六九	九九五・一〇	一、七三五・八九	二、六一二・九〇	三、八九二・四八
	内地に比して輕	六八・〇三	一一七・七六	一八三・七八	三四〇・二〇	五一七・八五	九六二・四七	一、四八七・八一	二、〇五二・七三

備考　臺灣は財務局税務課昭和八年七月の調査による昭和七年の計數。比較の都合上販賣業と製造業とを平均して商工業とした。内地は廣島税務監督局の調査による同監督局管内昭和六年の計數…廣島財務、昭和八年二月號所載―共に關税及地方税の負擔額。平均は算出したもの。（北山富久二郎…豊かな臺灣の財政――臺北帝國大學政學科研究年報第一輯昭和九年に據る。
尙昭和十二年以後は右も相當に改變せられてゐる）

次に參考迄に昭和十一年九月發行、臺灣銀行調査課よりの「調査資料蒐錄」中の斷片を附記して置く

A「雜貨卸商の現狀」

……………本島人小賣商の勢力は日一日と內地人小賣商を凌ぐ狀態なるを以て、卸商としては本島人商店を度外視しては商賣は成り立たず……………」

B「臺北雜貨小賣商組合の現狀

……………臺北雜貨小賣商組合は今より二十年前に生れ相當古き歷史を有す。而して組合創立當時は相當の事務所もあり、書記を雇ひ組合事務を擔當せしめ、組合員は月例會或は必要に應じて會合し、商賣上のことに就て何かと意見の交換を行ひ、相互利益の增進に努め其の效果見る可きものありしも、其の後時勢の進運に伴ひ購買組合の進出………本島人經營商店の重壓ありて昔日の面影なく、內幕は相當苦しきもの〻如し。

如斯內地人經營の商店が日一日と疲弊の度を强めつ〻あるに拘らず、表面平靜を裝ひゐるは所謂植民地氣分とも……………」

尙興味あるものとして、一般貧民階級の最も有用なる金融機關としての質屋の利用者數を擧げて見やう。

然して島の都と謳はる〻臺北市の、昭和十一年度公設質舖利用者を執つて見る。

臺北市公設質舖利用者　昭和十一年度

城內	內地人	三、七三四人
	本島人	八二三

地區		人口
萬華	内地人	一九、〇三二
	本島人	一一、九二九
南門	内地人	一二、八四七
	本島人	一、七一二
大稻埕	内地人	三、〇四一
	本島人	四、九二一
計	内地人	三八、六五四
	本島人	一九、三八五

右の外に、殆んど内地人專用の私設質屋數十軒が臺北市内に立派に産を作して行きつゝあるを知らねばならない。

因に同年に於ける臺北市の人口は約二十七萬其の内二十七％の約七萬餘が内地人であり、殘る七十三％約二十萬は本島人である。

尚内地人入質者借受額の最も多數なるは五圓乃至十圓である。

尚小林臺灣總督は島民に對して國語普及及臺灣の工業化政策を執られてゐる。

× × × ×

次に臺灣貿易の内地依存の如何を見る。恰もそれは比律賓のアメリカに對すると相似たるを見出すであらう。

〔數字は臺灣總督府財務局調査に據る〕

A 外國貿易

	昭和十年度	昭和十一年度
輸出	三六、五四四、一九〇圓	二九、〇五三、九八〇圓
輸入	四四、九七八、九〇九	四八、八五四、四一九
入超	八、四三四、七一九	一九、八〇〇、四三九

B 對內地貿易

	昭和十年度	昭和十一年度
移出	三一四、二〇〇、四八三圓	三五八、八九四、九九八圓
移入	二一八、一四〇、八三七	二四三、八三一、五二九
出超	九六、〇五九、六四六	一一五、〇六三、四六九

A 卽ち昭和十一年度臺灣貿易總額六億八千餘萬圓の內、僅々十二%强の七千七百萬圓が外國貿易であり、加之其の七〇%は輸入額なのである。以て其の不振を知るであらう。尙知る可きは僅か十二%の外國貿易の內、對南洋貿易は其の又十%卽ち約一割、從て全貿易額の一分未滿に過ぎないてふ實に貧弱見るに堪えざる事實である。佛蘭西の印度支那、和蘭の爪哇等の貿易內容と比較すべきである。

B 反之、臺灣の本國內地との貿易は斷然臺灣貿易の主體を爲し、全額の九〇%に近く、加之移出は

移入の一、五倍に近い壓倒的優勢振りである。臺灣財政豐潤の一は、正に此處にも在りと言ふ可きであらう。

是によつて之を觀るに、臺灣貿易は國內金錢の移動に過ぎざる對內地貿易と言ふ可く、外國貿易は見る可きもの無く、況や南洋貿易の如きは九中の一毛にも過ぎざる狀況である。

世界の大消費市場たる南洋を南隣の近きに控へて、臺灣の內地依存は大いに考ふ可き性質のものである。

而して臺灣商品が本國に於て、特產品以外に內地商品との利害衝突を惹起するに於ては相剋も亦甚しと言ふ可きである。

臺灣經濟は、列强の南洋に有する外地諸島の如くに、更に國家的に生產的なる位置を築いて、さらでだに空前の非常時局に對處して窮々たる本國財政に寄與する所ある可きである。

斯くて臺灣領有の目的は更に深く考へらる可きものを持つ。更に南洋政策と共に、二十世紀日本の二大事業たる大陸政策の尖端を行く滿洲國經營の指導方針亦以て他山の石となす可きもの多きを知れ。日本諸大學の政治、植民政策等の學者にして、這般の比較研究をなし、日本國家百年の大計に貢獻せるの士ありや。

大南洋の肥沃なる諸島國に、十七世紀以來列强の爲せる植民政策、經濟政策の實相を迅きに及んで研究し、來る可き帝國の南洋政策に資せるもの今日ありや。無しや。時代は今や洋物飜譯時代を過ぎて實施自案を要求しつゝあり。

第十七章　日本領南洋群島の現狀及南太平洋

小笠原諸島の東南二百萬方粁の海上に點在する日領南洋群島の、世界史的出現は十六世紀末葉に於けるスペイン東洋遠征艦隊の發見、占領に初まり、其の後虐殺と搾取の暗黑史を經る事三百年、十九世紀後半新興獨逸帝國に領有せらるゝに至つて漸く判然たるものとなつた。卽ち一八八五年以來獨帝ウイルヘルム一世及び同二世の積極的政策は既に歐洲列强に分轄統治せられてゐる南洋諸島への進出を敢行し、ウイルヘルム二世の一八九九年に至る十四年間に、赤道附近に散在するマーシャル Marshall Is. カロリン Caroline Is. マリアナ Marianna Is. 等のミクロネシア Micronesia 諸島嶼を衰退スペインより占領或は買收し、更に南方メラネシア、ポリネシアに至り、其の大島たるウイルヘルムスランド Wilhelmsland 卽ち現代に於ける英領ニウギニア（パプア）の東半及びビスマルク、サモア諸島を領有し、二十世紀初頭に於ける其の南洋領土は十五萬方哩に及び先進英、蘭、佛、米等と相伍して、世界有數のコロナイジングパワーとなり了せてゐた。

然して此の狀態を覆すに至つたものは、一九一四年以後五年に亙る歐洲大戰であり、其の結果曾つての獨領南洋諸島は悉く聯合國たる英、佛、日等の諸國に委讓せらるゝに至つた。

斯くて一九一九年日本が獲たのが現在のマーシャル以下の顯微鏡的島嶼總面積九百方哩の地である。初め日本は此の地方を軍政の下に置いたが、大正十二年卽ち一九二二年南洋廳を設けて之が管下に統治せしむるに至つた。

全島民三千は主として馬來族中のカナカ、チャモロ兩種に屬し、サイパン島に本廳を置き以下四支廳に分治した。

過去三世紀の統治者に比し、寛大溫情世界に比類無き日本の仁政は、其の後十三年の昭和九年即ち一九三四年には、島民の人口五萬一千となり、約十五倍の激增を示してゐるのを見る。

而して同年に於ける母國人は三萬五千を數へてゐる。

斯くて徐々に開發せられて行つた同上島嶼が、財政的獨立をなすに至つたのは、昭和七年一九三二年の事である。

尙知る可きは、同島六萬に近い島民が日本の保護溫情の厚さに馴れて、生產事業に勞役せしむるに困難を感じてゐるてふ二十世紀現代には超現實的な事實であり、白人殖民地には夢想だに爲し得ない事實である。

米國一の南洋通を以て知られてゐる評論家プライス Willard Preis は一九三三年ハーバー誌 Harpers Magazine 十月號中に、日本の新前哨 Japanese New Outpost と題し其の南洋統治を絕讃して曰く―

「…………日本の善政はスペイン、獨逸の暴政と比するを得ず、被任國としての義務を文字上のみならず、精神上にも守りつゝあり、聯盟として何等非難し得ないものである。

日本は東洋に於ける唯一最大の安定勢力たる信念に忠實である。滿洲、朝鮮、臺灣、南洋群島と同樣に全南洋の秩序を維持するの能力を具備するものであり、歐洲列强が之に猜疑するは大いなる誤解である…………」と。

蓋し偏見無きブライスが、いみじくも唱へた公正の評と言ふ可きである。尙獨逸大統領ヒトラーは、一九三五年以來、其の勃興せる勢力を以て舊獨領植民地の返還を要求して居り、其れは翌一九三六年に入つて益々熾烈なるものとなつた。

× × × × ×

尙、筆者は日本領南洋群島の名稱改正の必要を說きたいと思ふ。

即ちマリアナ Marianna の名は、十六世紀スペイン國勢華かなりし頃同島嶼の統治に當り、時の王フイリップ三世 Philipp III の后マリア・アンナ Maria Anna の記念に一五六五年命名したものであり、カロリン Caroline 一六八〇年、占領當時のスペイン國王カロロ二世 Carolo II の名譽の爲に遺したものであり、マーシャル Marshall は、一七八八年、之を發見せる英國の一南洋探險船の船長マーシャル Cap. W. Marshall の名譽の爲に命名せられたものである。

地名は、其の屬する國民の對外的オリヂナリティー乃至パーソナリティーを示す爲に、又國語政策と共に同地住民の國家的感念を强化する爲に、相當重要なる位置を占むるもの丶如くである。

さればこそ獨逸は、パプア東方のニウブリタニアを英國より收めてビスマルクと改名し、露國は支那より獲たる大連をダルニーに、和蘭はバンタム王國のヂャガトラをバタビヤに、日本は露國より獲得せるサガレンを樺太に、又コルサコフを大泊又臺灣の打狗を高雄に各々改稱してゐる。

南洋群島に於ても、既に日本海軍が其の占領に當つて、春島、夏島等と改稱せられてゐる島もあるが他はサイパン、ヤルート、ポナペ、クサイ等の如く未だ改稱せられぬものが多い。

日領南洋群島の如き、島民僅か數萬に過ぎない地方の名稱は改むるに易く、且歴史的に因緣深く將來益々關係深からむとする南洋の地に、日本的名稱存在增加するは、自然の經程であり、日本の世界政策的見地からも意義ある事に思はれる。

斯くて南洋群島名の改稱は求めて可なるものに思料されるのである。

尙吾人は、此等ミクロネシアを經て、遙かニュージーランドを超へた南氷洋に覇を爭ふ英國、瑞典、日本等の壯烈なる大捕鯨戰を忘れてはならない。

最も立ち遲れた日本も、日本水產株式會社、太洋漁業株式會社等の奮起に依り一九三七年以來大捕鯨船隊を建設し英國、瑞典等每年の利益數億圓と稱せられてゐるに對する、僅か七％前後の貧弱さより一大飛躍を試みんとしつゝある。

千里寄せ來る海の氣を吸つて育つた海國男兒は斯くて勇敢に南太平洋に振ふ。

×　×　×　×　×

註　前記「バタビヤ」和蘭民族たるバターフ族の地の意にして、日本に執れば「大和」とも稱す可き地名なり。

次に現代南洋、南太平洋に振ふ列强の主なる汽船會社名を列記する――

英國系

Peninsular and Oriental and Br. India.

White Star.

Canadian Pacific.

Canadian Austral Asian.

Royal Mail Steam Packet.

Pacific Steam Navigation.

New Zealand Ship.

Eastern Austral Asian.

Union Steamship Co. of New Zealand.

米國系

Pacific Mail.

American Mail Line.

Williams.

Oceanic Steamship Co.

States Steamship Co.

American and Australian.

日本系

N. Y. K.（日本郵船）

O. S. K.（大阪商船）

I. S. K.（石原産業）

N.　（南洋海運）
M. B. K.（三井物産）

第十八章　海南島史及び其の經濟的位置

昭和十一年日支間に惹起せられた所謂北海事件で俄然有名になつた海南島は、南支那廣東省に屬する東京灣内の大島で、現在行政上には瓊崖と稱せられてゐる島である。
佛領印度支那に近く、其の面積は一萬三千餘方哩を以て日領臺灣島より稍々大に、人口は民國二十年卽ち一九三一年の調査で概數二百二十萬、臺灣の同年に於ける人口の半ばにも達しない少數である。土地の肥度は一般に高く、資本と技術さへ投ずれば農業の興隆する可能性は充分に在り臺灣以上と稱せられる。

然し乍ら一九三六年の北海事變迄、支那は勿論列强も閑却してゐた未開の同島は、明治二十七八年日清戰爭當時は、誰一人として、問題視するの價値を認めた島ではなかつた。從て日清戰爭後若し日本が强硬なる態度を以て、臺灣と共に「南支那の兩眼」と稱せられてゐる同島の割讓をも要求したならば、或は淸政府も詮方無く應諾したものであるかも知れない。（其後兒玉、明石の兩臺灣總督が同島の領有を立案したが容れられなかつた）

何故ならば佛蘭西は當時未だ印度支那に確たる主權を有せず、又英米列强も今日の如き强大不拔の大勢力を南支の地に持たなかつたからである。

今日より凡そ二千百五十年の以前、支那は秦の始皇帝時代、海南は越外の境として未だ支那政權の顧る處ではなかつた。降而漢の時代に至り、支那政府は同島を珠崖、儋、耳の三部に分治するに及んで漸く支那領土の一部と見做さるるに至つた。其の後同島は再び拋棄せられて約三世紀は經た。海南が稍々確たる支那政權に統治せらるるに至つたのは、紀元三〇〇年頃、晉の治世であり、初め北方の交州に都督が設置され日本との交渉も行はれてゐた。

唐時代に入つた頃、同島は崖、儋振の三州に分治、各州は之を四縣に分割統治せられ、都督府は東北岸の瓊州の市に移されてゐた。

然し乍ら支那本土とは異る化外の地として、其の永き四世紀の間何等の文化施設の恩惠に與る事無く、其れは恰も東北に孤懸する臺灣島の其れに相似たものであつた。

其の後五代の頃には南灣に隷屬し、十世紀以後卽ち宗時代には海陸の害賊横行したが故に、政府は請海軍節外史を黎母山に設けて支那の政權漸く强化せられたものである。

斯くて十三世紀、支那が世界史上空前絶後の大帝國を歐亞の大陸に建設した元の頃、同島は瓊州と改稱せられて雷州、北海南道の管下に入つてゐた。

南海が今日の如く廣東省管內に包攝せらるるに至つたのは十五世紀明時代の初期であり、瓊州府と呼ばれた。

其の後十七世紀の中葉、支那は北方の滿洲族に征服統治せられて淸と號するに至るや、同島には瓊崖道廳設立せられて、萬、崖の三州に區劃せられ漸く今日の如き海南を現出するに至つたのである。

然して海南 Hanan or Hailam が初めて世界貿易戰線上に出たのは清の咸豐八年卽ち一八五九年の事であり、英、米、佛、露諸國と通商を開始し、遲れて同治十四年卽ち一八七五年には伊太利とも通商協定を締結するに至つた。其の開港場は北岸の海口 Haikow であるが、同灣は一九一二年孫文に依る中華民國成立以後、折から侵入し來つた白人列强、特に英國及び和蘭の技術者に依つて幾度か設計築港せられて今日の海口港となつたものである。

尙民國政府は、同島の行政區分を今日の如く、一海口獨立市政廳と十三縣に改めた。

次に海南の產業狀勢を瞥見するに主として瓊、文二縣に擴ごる山地の四十五%は有望なる森林地帶を以つて蔽はれ、全島の耕地面積は今日未だ僅か二十%に過ぎない未開拓の儘に放置せられてゐる。糖房（製糖工場）は舊式に依つてゐるが同島の主要產業の一をなし殊に儋縣に盛であり、民國十七年度卽一九二七年に於ける其の輸出は十五萬八千擔に及んでゐる。製革、籐細工、檳瑯及び畜產等亦多く、民國二十年卽ち一九三一年に於ける貿易總額百二十萬元の內四十五%の輸出は此等に依つて占められてゐる。

而して輸入品の主なるものは綿布、石油、白糖である。

港としては海口の外に南岸の楡林及び東岸の淸瀾三亞等があり、楡林は東南海上に散在する西沙群島 Paracel Is. との主なる連絡港である。

此の西沙群島に就いて知る可きは、一九二一年卽ち大正十年、曾て臺灣の專賣局長たりし池田某が中心となり、西沙實業公司を興し、同地方の採礦、漁業開墾に從事して相當の成績を擧げてゐた事で

ある。

然るに一九二八年卽ち民國十七年、時の民國政府は英帝國使臣の暗躍に乘ぜられて排日の結果、遂に同公司を解散せしめて了つた。

其後英國は特に其の香港總督府を中心として、對日本的に利害を相同うする米、佛、蘭、支、比律賓等の南洋諸勢力と共に、彼等が臺灣と共に南支の二眼と稱する此の海南島の重要性に基いて、同島の軍事的、經濟的施設强化に邁進した。

尙此に注目すべきは、日淸戰役後日支間に締結された臺灣の對岸福建省の外國への不割讓協約が、英、米のために支那政府に依つて暗々裡に破棄せられんとする形勢に在る事である。

卽ち巧妙なる英國勢力の誘導のまゝに、民國政府は遂に福建省內の三地に英國の資本と技術を入れ來つたのである。然し是も一九三八年五月に於ける、日本軍の厦門占領を完成する事により、何らかの有利的轉換が見られるものと考へられる。(同島は日支事變により昭和十四年以來日本の勢力下に在り)

一九一二年孫文による民國政府樹立以來、支那史上空前の思想とも言ふ可き、國家意識に目覺めたる民國人も亦海南島の重要性を認めて次の如く述べてゐる——

「………在二海南島和菲律賓安南之間一。有廣達五千四百平方里的漁區。是世界一大漁場。從二經濟的觀點一。這實在是不レ能二漠視一的地方。不二但如レ此一。海南島國防上也有二很重要的意義一。南部岸縣

的楡港是一個天然的良軍港。……………………日人石丸藤太在其著「從軍事觀察海南島」一文中、說「海南島對二華南一。尤其對二廣東廣西一。是作戰的根據地……………對於兩廣軍隊的登陸。以及海上的交通貿易等。都有四支三配全局二之勢三」…………………單看這篇文學。就可推想海南島已經成爲二日本南進政策的目標了。我們爲二鞏固二南部的國防劃一。…………………………」

（民國二十六年三月五日　申報　揭載）

第十九章　米國統治下の比律賓と其獨立

十九世紀後期、國是モンロー主義を抛棄した米國が、他の列强と等しく華やかなる帝國主義政策の波に乘り、其の亞細亞に於ける最初の偉大なる成功として一八九九年比律賓共和國大統領アギナルドを籠絡、次で全比律賓諸島を攻略、軍政を布いてより二年、一九〇一年には迅くもタフトが總督として就任し、其の基礎を確立するにつた事は既に近世史上に於て述べる所あつた。

三百年スパニッシュ比律賓の後を承けた米國は、其の住民一千萬のフィリッピノの主流が既に宗教的に言語的に、延て思想的に永い白人的馴致を受けて、殆んど東洋的なオリヂナリティーの失はれてゐるのを見出した。

從つて米國は其の開發統治に際しても困難尠く又彼等を米國化するにも比較的容易であつた。

一九〇七年總督スミス James Francis Smith は、曩に制定せられた米國人のみより成る立法機

關、比律賓委員會に、一部有識フィリッピノより四名を選んで之に參加せしめ、同年第一回比律賓評議會 Philippine Assembly を開催してフィリッピノの法的位置をも定むる所あつた。

比律賓最初の大學たる比律賓大學 University of Philippines がマニラに創立されたのは其の翌一九〇八年であり、島民の智的向上に質する所大であつた。

斯くて一九一六年總督ハリスン Francis Burton Harrison の時代には、漸進的な比律賓自治法制定せらるると共に、在來の比律賓委員會及び比律賓評議會を各々上院及び下院とする比律賓議會の設立に至つた。

之卽ち一八九九年米國が比律賓占領當時、アギナルドの比律賓共和國政府に對して約せる獨立保證に基くものであり、其の後のフィリッピノの政治的自覺の强化に伴つて不可避の運命に在つたものである。

次で翌一九一七年には、十八世紀に於ける米國の對英國的關係にも相似て、時の米國上院議長チォンズ Johns は比律賓獨立の蓋然性を認めて本國議會の可決を見るに至つた。

所謂チョンズ法案である。

斬くて比律賓の獨立は容易にして只時期の問題となれるが如くであつた。

卽ち當時の米本國及び比律賓の經濟關係を見るに、毎年比律賓輸出貿易の七十%は米國に向つてなされ、且フィリッピノ勞働者の米本國移住は毎年二千五百名に上り、さらでだに大戰後の不況時代に在る米國は、此の比律賓の米國依存的影響を受けて非常なる打撃を蒙つてゐた。

米國實業家議員の比律賓拋棄論は此處に發生せるものであり、是は其の後十餘年の間大なる政治問題として、反對派たる帝國主義的政治家及び軍部との間に轟々たる論爭を繼續してゐるものである。

然して一九三二年に至るや、時の大統領フーバーは之が打衷妥協案として、所謂ホーズ・ヘーア・カッティング法案なる比律賓獨立案を決定發表した。

（ホーズは上院議員、ヘーア及び布哇の米國併合に活躍したカッティングは共に下院議員）

其の内容概略は次の如くである。

A　比律賓獨立準備政府は、其の樹立十年にして獨立を賦與せらる。

B　過度期間のみ比律賓よりの無稅輸入品を、精製糖五萬噸、粗糖八十萬噸、椰子油二十萬噸に限る。

C　過度期間のみヒリッピノ移住を年五十人とし、獨立以後は全く禁止す。

附帶條件

a　比律賓は獨立後も米國へ忠誠の義務を有す。

b　外交、經濟上米國大統領の絕對的監督管理に服す。

c　比律賓軍の指揮權は米國之を所有す。

E　T　C

然し乍ら、如斯一方的見地のみを强調せる有名無實の獨立法案が易々として受諾される筈は無かつた。

卽ち翌一九三三年、ケソン Manuel Louis Queson を上院議長とする時の比律賓議會は之を否決したのである。

豫め之を期してゐた米本國は直ちに之が修正を諾し、翌一九三四年、大統領ルーズベルトに至り上院領土委員長タイディングス及び下院領土委員長マクダフィーを中心として成れる所謂タイディングス・マクダフィー法案卽ち改正比律賓獨立法案を可決した。卽ち――

ＡＢは前法案に大差無く

Ｃ　獨立と共に米國は比律賓移民を年五十名以内に制限す。

Ｄ　米國は比律賓獨立と共に在比米軍を全部撤退す。

Ｅ　海軍根據地は從前通り存置し、獨立後二年米比間に於て更めて此の問題を議す。

（Ｅは卽ち米國の對亞細亞的關心の最後を決定せんとするに在る）

Ｅ　Ｔ　Ｃ

同年大要右の如き比律賓獨立法案はフイリッピノに依つて大體承認せらるる事となり、翌一九三五年の比律賓議會は米國比律賓總督マーフイー Frank Marphy 監督の下に比律賓憲法を制定し、十年後に於ける完全獨立迄の比律賓獨立準備政府を樹立するに至つたのである。

然して其の第一回大統領は同年十一月ケソン當選し、副大統領としては同じくオスメニア Sergio Osmaña 選出されたのであつた。

斯くてフイリッピノ大半の要望あつた曾ての比律賓共和國大統領アギナルド及び其の一派の純正獨

立派は遂に米國竝に親米派フイリッピノの術策に陷つて空しく其の勢力を解消されて了つた。

従つてラモス Benigno R. Ramos の率ゆる比律賓完全獨立を標榜するサクダリスタ黨乃至其の亞流が、排斥無力化せらるるに至つたのも亦當然の歸趨であらう。

とまれ、一五七一年以來白人統治下に其の本然の相を失つてきた南洋のフイリッピノ一千二百萬も、斯くて漸く甦生の機會を得たるものであり、一八九八年のアギナルドによる比律賓共和國樹立の緒に入つて以來將に三十七年後の再建である。

十四世紀以來の西力東漸に、亡び逝ける南洋諸國國民中唯一の獨立國暹羅を除いて、最初の獨立を約束せられたる比律賓島民の勃興は、眞に以て亞細亞の部分的復活として慶賀すべき史實の一であつた。

然し乍ら此の言は十年後に於ける獨立を確信し、又比律賓島民に未だ鞏固なる亞細亞的精神の潛在するあるを前提しての言であり、彼等が觀念上白人となり亞細亞的本質を忘るるに於ては、恐らく此の言は正に其の位置を逆轉するの不幸なるものと化するであらう。

尙一九三六年十月には、日領カロリン群島及び比律賓に近き米領グアム Guam 島及び比律賓南方の大島ミンダナヲ Mindanao には、米國海軍機關誌 Sea Powerの主筆ハッパードNathaniel Happardに依つて海軍根據地建設の要が說かれ、來る可き太平洋戰に備えむ事が提唱されてゐる。

又米國の比律賓に於ける不動の潛勢力は軍事顧問マクアーサー Gen. McArthur 將軍指揮下に、目下該政府に對して十年後に於ける、卽ち完全獨立時に於ける常備軍三十萬と、豫備軍五百萬のフイリ

ッピノ兵團の結成を促進しつつある。然して一九三六年十一月十五日、大統領ケソンは其の盛大なるコムモンウエルス記念祭に臨んで豪語して曰く「比律賓は今後十個年以内に、五百萬の强大國防軍を編成して外夷に憂ふる所ないのである」と。又比律賓に於て米國の權益を代表する駐在官たる高等辯務官 High Cmmissioner は、一九三七年末 McNot 任命された。

第二十章　フイリツピノの對日本觀と東洋復歸論

南洋諸島民の無力を巧みに利用し來つた列强は、其の初めより自領島民をして、特に北方なる强國日本をヂンゴイズムの權化の如くに恐れ嫌厭せしめて、有色人種の聯合、日本を盟主とする亞細亞的結合卽ち黃禍を内部より崩壞せしむる事を知つてゐた。

其れは列强共通の自主的世界政策の一端として日本、支那以下の有色人種國家に對しても巧みに流布されたるものであり、十九世紀中葉以來の日本も亦文化低きままに其の風に浸透せられて是を批判し得なかつたものである。

是卽ち世界史は、歐米列强の作せる歐羅巴中心的世界史を以て今日に至る迄滿足せしめられ、十六世紀以後南洋に於ける政治經濟的列强活動の眞相描寫たる本書近世以來の南洋史も知られてゐない所以である。況てや其の世界史的意義等は到底日本以下亞細亞諸國民の知識には入る可くもなかつたのだ。

斯くて日本の對南洋交通は曾つての深き關係沒却せられて僅かに列强を通じてのみ結ばれ、水準以下に蹴落されたる五億南洋諸民族の存在は顧みらるべうも無かつた。彼等は既に十九世紀以來其の國

語を失ひ亞細亞的イデオロギーを滅じ、同種亞細亞諸國人に對するよりも異種白人に對するが寧ろ自然を感ずるものと馴らされてゐた。

米國式ヤンキー氣質とヂャズ、現代フイリッピノ青少年の心を捕へてゐるものは卽ち之であり、可情青春の情熱を本能の命ずるまゝにダンス遊樂に費してゐる者が多い。

然し此の弊風は獨りフイリッピノのみならず、亞細亞の盟主たる日本に於てすら旺盛を極め、其の殆んどの青年の外形、言語、思想は米國來のキネマ、ヂャズ、ダンス等を通じて侵入し來つてゐる點に於て詮方ない事であらう。

× × × × ×

現代比律賓に磐石の米國勢力あるは當然の事乍ら親日的思想傾向は强く封塞され、親日的要人が不幸なる位置に沈淪せしめられてゐる事は、他の南洋諸島國の島民の其れと異るところがない。

之を假令へば昭和十一年夏訪日された比律賓大學講師兼辯護士たる親日派の巨頭デュラン博士 Dr. Pio Duran が、其の東洋復歸論 Time for a back-to-the Orient Movement in the Philippines 以來數多き反日派の壓迫に不遇に在るが如きである。

われわれは次に親しくデュラン博士のいみじき叫びを聞き度いと思ふ――

――東洋復歸論――

「…………吾人は如何にして英米列强の桎梏を脫し、對等の實力を作る可きかを、唯一の方法た

る亞細亞主義に依つて求めねばならない。…………數世紀來英米の東洋侵略は、無力なる東洋諸國人を變節せしめ、却て其の西洋化を欲する樣な情ない狀態にたち至らしめた。……然し日本は西洋文明を盛んに輸入したが其れに惑はされる事無く、巧みに之を消化して固有の宗敎、言語、制度を保有してゐる。加之、爪哇、スマトラ其他の東印度諸島國六千萬の同胞は中世以來の永いシリビヂヤヤShribisaya 滿者伯夷(マヂヤパヒト) Mjapahit 帝國時代の東洋的な榮ある歷史を中斷され其の文化を煙滅せられて了つた。…………米國はモンロー主義を以て南北兩アメリカ大陸を歐洲諸國との紛爭より救つた。局地的な了解は他との紛糾を解消するものである。……宜しく亞細亞は日本を其の大宗として他地方との國際的、人種的紛糾を絕滅す可きである。

…………有名な佛蘭西新聞ル・フイガロー Le Figaro は言ふ——

「吾人は東洋の事に容喙する必要はない。若し國際聯盟がかの日支紛爭に容喙しなかつたならば事態は今日の其れとは異り、日本も聯盟を脫退するには至らなかつたであらう。此の經驗を今後とも忘れてはならない。歐洲問題と東洋問題とは、其の軌を一にして論ずる事は出來ないものである。東洋をより良く知る者は東洋人である。從つて東洋の問題は宜しく彼等の手によつて交涉解決せしむ可きものであり、外人は之に關與しないのが最も賢明なる策である」と。

過般日本政府が聲明した「支那より手を引け」Hands off China てふ政策の基點亦茲に在るのである。…………一九〇五年、日露戰爭を仲裁した、かのルーズヴェルト米大領は、既に其の時亞細亞諸國の盟主としての日本の位置を認めてゐた。

……日本の國際聯盟脫退は東洋の二大國たる日支間の問題に、歐洲列强が不當なる干涉を敢行したるに對する抗義であり、其の海軍力の對等要求は東洋海上の平和破壞者を擊滅せんずる實力の具現である。又滿洲國に於けるソビエト領北鐵讓渡に關する日本の斡旋は日蘇滿三國間の軌轢解消に獻ぜんとするものであつた。

比律賓の獨立維持に對して最も好意と援助を與ふる能力あるは日本あるのみである。駐米齋藤大使は言つた「東洋平和維持の爲に、若し英米と衝突ある事あつた場合に於ては、日本は直に之に應酬するものである…………」と。實に日本は之に依つて世界に於ける此の地方の治安確保の責任を全うせんとする覺悟を示してゐるのである。現代に於ける日本の行動は、東亞に於けるモンロー主義の基礎を明示してゐるものであり、之をして成功せしめるか否かは、一に東洋諸國が日本の眞意を諒して之を援助するか否かに在るのである。

……二十世紀初頭米國の比律賓に於ける勢力は、其の極點に達してゐたが、かのタイディングス＝マクダフィー法案 Tydings-McDuffie Law 通過の結果、徐々に衰退す可きものであり十年以後に於ては全く消滅す可きものである。

斯くて比律賓は今や自由の固有文明の黎明に置かれてゐる。亞細亞大陸及び其の附近諸島を平和に確保せんとする日本の努力を今や後援す可きの秋である。日本を大宗とする東洋モンロー主義の比律賓に與える影響は如何であらう。比律賓の保全は無論比律賓自身によつて爲さる可きである。然し乍ら今日實際の情勢は强大なる日本の保護を拒否する事は出來ないのである。

一九三四年十月三日ルイスビルに於て開催された在郷軍人大會の席上、バトラー將軍 Gen. Butler は「米海軍は世界に冠たるものであるが、其の沿岸より三百浬以內に於て作戰す可きものであつて、他國の防衛の爲に兵を派するが如き事は思ひもよらぬ事である」と述べてゐる。現今世界に於ける最强の陸海軍は日本であつて他の何れの强國と雖も、亞細亞の地に於ては之に對抗し得ないのである。

……英國の軍略通記者バイウォーター Hector C. Bywater も言ふ「………若し比律賓に於て米國が東洋の某國と戰ひ敗れる事になつたならば、今日の英米の優位と威嚴を損傷するのみでなく、白人の勢力下に在る東洋諸國は各地に革命の烽火を一齊に擧げるであらう」と。之等の點よりして、吾人が今後採る可き道は、日本を盟主と仰ぎ之を支持する以外に全く見出されないのである。

比律賓は如斯政治的見地のみならず地理的文化的見地よりしても日本其他の東洋諸國と團結す可きものである。日本、比律賓共に其の文明文化を孔孟の訓に置くものであり、西洋人が比律賓を占領した十六世紀迄、比律賓は佛教徒乃至支那馬來人の作した、かの大滿者伯夷（マヂャパヒト）帝國の一部であつたのである。

遠く七世紀に建立された世界的大伽藍たる爪哇のボロボヅル寺、又十二世紀緬甸、アンコルヴァトに於けるシーバルマン Srivarman II 二世の偉業等、亞細亞文明の光は全く英米支配の下に蹂躪されて了つたが未だ僅かに幽かに偲び得るのである。

……………ヴェルサイユ會議の折、日本政府の提案たる人種平等の動議は西洋諸國の爲に否決せられた。

……………今後引續き利己的優越感を把持せる英米と妥協する事は、彼等の對亞細亞人侮蔑態度を益々増長せしむる以上の何ものでもない。

華盛頓條約に於ける英米の對日牽制は巧みに日本の軍備を制限弱化したのみならず、全東洋人に對して重大なる侮辱を與へたものであつた。

吾人は宜しく狹量なる國粹主義を棄てて、同じき東洋民族たる立場から、眞に價値ある日本を支持せなければならない狀態に在る。

如斯侮辱は其の精神を傷けるものであつて、生命のある限り不滅な問題である。……………全亞細亞民族が自覺して亞細亞の平和維持能力者日本を支援したならば、充分に亞細亞に於ける米人の壓迫を排擊し、今日歐洲が歐洲人の手中に在るが如くに、亞細亞を亞細亞人の手に取り戻す事が出來るのである。

勿論之に對して、斯くすれば益々日本の魔手を伸脹せしむるものとして、臺灣、朝鮮の例を擧げて反對する者があらう。然し之は日本の眞意を解しない者の言であつて臺灣及び朝鮮の領有には正當な理由があつたのである。

當時朝鮮は無力な一獨立國で、若し之が露國の手に歸したならば、日本の致命的打擊であつたのだ。日淸戰役は斯くて起つたのであり、其の本心は支那への反感に在らずして寧ろ露國勢力の驅逐に在つたのである。卽ち當時露國の侵略は滿洲を經て朝鮮に入り、日本は此の半島を確保しなかつたならば、其の獨立を保證し得なかつたのである。

從つて此の戰役の結果日本が臺灣を領有するに至つたのは、日本の延て東洋諸國の死活に關する重大な問題であり、之に首尾よく成功し得た日本に對する當然な報酬であつた。其の後十年日露戰役に於て日本は又完全に滿洲からツァーニコラスの魔手を排擊したのであつた。然し乍ら日本は之によつて二十億の巨費と、二十數萬の生靈を犧牲に供せねばならなかつたのであり、滿洲は日本に執つて忘る可からざるものとなつてゐるのである。

若し此の戰爭に於て露國が勝つたとしたならば、如何なる結果を生じたであらうか、此の事を考へる時吾人は實に慄然たらざるを得ないのである。卽ち露國は滿洲を奪ひ、東洋に於ける勢力の均衡は失はれ、頓て他の歐洲諸國も東洋に侵入して、支那は分割され、又無論朝鮮は露國の支配下に陷り、日本の權威と實力は全く地に墜ち、東洋には僅かに暹羅のみが獨立國として殘つたであらう。

次に恐れるのは支那の分割と、日本の勢力制限がある。其の結果は、亞細亞は第二のアフリカとならしめられるであらう事、火を見るよりも明かであつた。斯く考ふる時、日露戰役に於ける日本の勝利、歐米勢力の拒否は延て東洋諸民族全體の勝利であり、日本に對する感謝は此に汲然として起るべきである。…………………然るに日本が常に侵略的行動を準備しつつある如く思はれてゐるのは不思議と言ふの外ない。斯くの如き誣言は實に西洋諸國が受く可きものであつた。何故にか日本が支那より二回に亘り其の征服した土地を還付してゐる事が知られてゐない。卽ち日淸戰役後、所謂三國干涉と東洋平和の爲に日本は潔く遼東半島を支那に還付した。又日獨戰役後獲得した膠洲灣をも支那に返還して極東平和の爲に貢獻してゐるのである。

……………西歐諸國は實に些々たる事柄を理由として亞細亞の各地を占領した。……………………米は一小艦の沈沒により比律賓諸島を、英國は支那政府が國民衞生上甚だ有害なる阿片の購入を肯んじなかつたてふ理由を以て香港諸島を、又露國は何等の理由なく遼東半島の租借權を獲得した。

如斯事件は枚擧に遑無く、常に實行者は歐洲諸國で、犧牲、被害者は東洋諸國である。然し乍ら老獪な英米諸國人は、東洋諸國人に對して眞に危險なるは日本人なりと信じせしめる事に成功してゐる。

日本の經濟的武力的進出を、常に米人勢力への對抗と見る英米人は不斷に辛辣なる反日本的思想を宣傳して、日本の對外發展を阻止してゐる。吾人は決して之に惑はされてはならないのである。

……………………東洋モンロー主義を可とせば吾人は宜しく日本を支持すべし。

東洋を依然として英米勢力下に置かんとせば宜しく日本と絕緣せよ。……………西歐諸國は東洋の二大國日支の間を疎隔せん事に不斷の努力を忘れない。現今世界的な最も大いなる問題は如何にして東洋の二大國たる日支兩國を提携せしむるかに在る。

……………今日吾人の考ふ可き大問題は將來に於ける比律賓の獨立と發展に重大なる役割を演ずる者は、數千浬を隔てたる遠き英米に在らずして、近き隣國日本の行動に在つて存する。之卽ち

比律賓の將來政策樹立に中つて考ふ可き絕對的要素である。
吾民族的誇、國家の安全は、一に東洋モンロー主義の結成促進に懸つてゐる！…………………………………」

〔Philippines Herald, 1. 25, 1938 掲載要約〕

更に氏は日比同盟論を引提げて獅子吼して曰ふ——

「…………………獨立比律賓が外敵の攻擊を受けた場合、比律賓を最も有效に防禦し得る者は日本を措いて他に無い。米國は一旦放棄した比律賓の爲に、强大なる敵と戰鬪するの危險を犯してまで、太平洋の東端から西端迄出兵する樣な愚は爲さない。其れはキプリング Rudyard Kipling の**「東は東、西は西」**に尋ぬる迄も無く明白な隔たりがあつた。又我が人種の利益の爲に一度たりとも劍を執り血を流した事の無い米人の歷史に徵しても判る事である。

…………日本の海軍は西太平洋、東亞の海上に竝び無き絕大なる勢力を有し、此の海洋上に於て鬪ふ限り、英米の聯合艦隊と雖も鎧袖一觸である。故に若し何れの大國が比律賓を侵さうとしても、日本は其の優勢なる海軍を以て直ちに之を擊退し得る。同時に日本が之を占領し度いと思へば、何日でも之を實現せしむる事が出來るのである。換言すれば比律賓活殺の劍を握る者は一に日本のみであるのだ。從つて比律賓中立の保證條約などは、例へ成立しても無效である。故に如斯條約は初めから考へずに、東亞の盟主たる日本と同盟し、比律賓の完全な獨立を期する方が賢名である。スイスの中立は周圍の列强に利益があればこそ守られてゐるものであり、比律賓の其れと同日に論じ得るも

のでない。若し比律賓の中立を列强に仰いだならば、彼等は必ずや代償を要求して間違ひなく第二の支那となり了せるであらう。

比律賓の安全が何れかの國に依つて保證せられねばならないのなら、又何れかの國に隷屬せねば存立し得ないのであつたならば、比律賓は其の地理的、人種的、歴史的凡ゆる見地から當然、亞細亞解放のチャムピヲンたる日本に依存す可きであり、其れは東洋自體の爲にも正しき道である。

……………記憶せよ！　英米諸國は一度たりとも亞細亞人の爲に戰つた事は無いのだ。然るに日本は日英同盟てふ誓約の下に心苦しい戰ひを獨逸に宣し、其極東植民地を占領し、太平洋、印度洋、地中海から獨逸海軍を驅逐して、英米の印度濠洲航路を確保した程信義の厚い國であり、又滿洲國三千萬民衆の爲に、世界を向ふに廻して抗爭し國際孤立を賭して迄之が獨立を完成して、再び滿洲國民に戻してやつた正義の國である……………」

〔臺灣日日新報掲載―昭和十年四月九日〕

×　×　×　×　×

尙比律賓北部カガヤン州なる要津アッパリ Aparri 港（人口二萬四千）は、一九三七年一月より正式に開港場となされるに至つたが、同港と日領臺灣なる高雄港とは其の距離は僅かに二百三十浬であり、今後日比貿易上に於ける便宜に二大好轉を齎らすものとならう。

×　×　×　×　×

終りに臨んで、畏縮せる現代日本の一部拜歐米インテリに、次の一詩を頒つて、浩然の氣を養ひ得

れば幸である——

北極之南南極北　地勢雄潤多島國
久抱遠交近攻謀　欲向何處展我力
太閤雄圖徒勞民　七郎寄計空賴人
功名別有必成術　當途何爲之逡巡
沖繩遙望濠洲路　青螺點綴山無數
葬身元分鰐魚腹　埋骨豈期舊墳墓
君不見天下虎騰又龍蟠　小者常危大者安
又不見天公委我好版籍　多島海邊皆可略
不知孰能我殖民　視機察變取溟漠
西土密雲近雨期　恰是蛟龍飛躍時
苟能一變攻守勢　眞韮（マニラ）之麻足以繫日本之旗

右は明治二十二年（一八八九年）、圖南の大望を抱いて單身マニラに渡航同地に逝いた勇敢なる先覺青年菅沼貞風氏二十三歳當時の作である。

第二十一章　現代南洋の世界史的位置

二十世紀前葉、人口稠密にして既に飽和狀態を突破し、其の國民生活を弱化せしめんずる形勢に在る日本の、南方に擴がる大南洋は、濠洲大陸（歐羅巴の一倍半）を初めとしてボルネヲ、セレベス、スマトラ、モルッカス諸島、又世界一の大島として廣袤三十二萬方哩（臺灣は一萬三千方哩）のパプア即ちニウギニア島等、未開の儘に放置せられたる諸大島を見出す。此等は皆十七世紀以來に亙つて、白人諸國がトインビー Arnold Tynbee の言へる如くに「海上の覇權を獲得し世界を横行して良い處があれば容赦なく占領して强大なる植民帝國を建設し」て行つた努力の賜である。斯くて面積、人口共に日本九州に等しい小國和蘭は、本國遠き南洋に六十倍する大植民地を領し、餘りある其の餘裕はセレベス、パプア等の大沃地を殆んど未開の儘に存置し、又英國は濠洲大陸を其の南方ウェールスの一部のみの開發に終始して充分であり、他の歐羅巴の全面積に匹敵する大沃野を將來のアングロサクソン發展に保留し置くの悠々たるを持ち、加之大白濠主義を翳して黄人に何ら憚る處ない偉大さを持つ所以である。

曾てシェファー教授 Dietrich Schöffer（伯林大學）が嘆じたる如くに「白人文明は今が絶頂に在り、二十世紀以後は日本を盟主とする黄人文明が發達して世界に君臨するに至ると思はれる」ものならば、亞細亞に大宗たる日本の世界史的意義、使命は空前の重大性を帶びるものとなると共に、十七世紀以來の所謂白人の負擔は徐々に輕減されるに至るであらう。

然し乍ら將來亦依然として黄人が其の半數に滿たざる英米の支配下に在るか、又遂に全く英米の爲に衰亡せしめらるゝに至るかは、一に二十世紀日本の大陸、太平洋に對する諸々の政策の適否と能力の如何、竝に之を巡る亞細亞諸國民の智的向上と協力の程度如何に懸るものである。

斯くて世界史上空前の企畫たる東亞新秩序の主唱者たり、亞細亞解放の責任國たる日本の、南洋史を中核とする世界史的認識の必要は彌更に深刻化され行くものとなつた。

第二十二章　南洋史教育の國家的意義

現代亞細亞諸國に於て行はれてゐる歷史教育が如何に非自主的なるものであるかは、亞細亞の大宗と稱せられ、最も進歩せる日本の歷史教育を見て判然する。

此處に其の詳細を述べる餘裕を持たないが、國史たる日本史すらも古代より關係深い南洋諸國に就ては僅かに印度との佛教關係以外に記す處無く、中世に於ける緊密なる南洋諸國との政治經濟通商交涉等に就ては全く白紙である。

更に東洋史に於て見るも其れは支那史と變るところなく、印度史、安南史、暹羅史等に就ては殆んど絕無、況や比律賓、爪哇、馬來等今日亞細亞の保全日本の政治、經濟的存在發展に不可避の關係を有する南洋諸國の歷史に於てや。

反之、遠き歐羅巴半島諸國民の歷史たる西洋史教育の詳細なる事喫驚に價するものあり、現代西洋諸國民すら、日本人が西洋諸國史に精通せる程、精通してはゐない狀態である。

加之、其の西洋史其物は無論西洋人の手に成るものであり、是を基礎とするものであるが故に、事實以上に絢爛たるものがある。而して其の西洋史を擴大し、全世界に及ぼせるものが、世界史と呼ばれて、今日日本初め後進亞細亞諸國民の渇仰してゐるものである。又十六世以後の南洋史は、西洋史は無論、彼等の所謂世界史の何處を檢察しても正しくは見得られない。

南隣にして人種、文化、經濟、政治等に關係深い東洋史も亦南洋を沒却し去つて顧る處が無い。更に更に文化低き南洋諸民族は勿論殆ど自らの正史を確たらしめ得てゐない。斯くて全體的南洋史の存在等は思ひもよらない狀態である。

未開日本の明治時代、舶來文明の影響下創始せられたる現代日本の歷史敎育制度は、此等日本的、亞細亞的意義深き南洋の歷史に就て何等認識し敎授する所が無い。

見よローマ文明の、ギリシャ文明の、又アレクサンドルの、ナポレオンの將又基督敎の偉大を知る者の亞細亞諸國特に日本に如何に多くして、印度文明歐洲輸出時代の印度アソカ大王の、又アンコル・ワツトの、ボドボヅル大佛蹟等の、印度支那及び爪哇文明の絢爛を知る者の如何に尠きかを。

更に十四―五世紀に於ける爪哇マヂャパヒト大帝國時代の統制ありし大南洋の相を、交通を、更に若しも德川幕府がほんに僅かにでも國家的後援を與へたならば、山田長政は馬來諸島乃至暹羅地方に、夫の豫備役海軍將校たりしチェームス・ブルークがボルネオに於て爲せるよりも更に容易に一國家を、旣に十七世紀に於て創建し得てゐたものであらう事を。

又比律賓も、爪哇も、ボルネオも、倭寇乃至日本商船隊に藉すに一臂の國家的後援を以てせば、ボ

ルトガル、スペイン等の遙かなる國よりの武裝商船隊の不法を撃退し得、以て當時よりの日本人の經濟的南洋進出は、今日の華僑乃至白人以上に强大なるものとなつて、現代日本興隆の爲又亞細亞復興の爲に資してきたであらう事を。

更に日本乃至亞細亞人の大いなる思想的損害は、十九世紀以來の先進英米諸國の文化宣傳に禍ひされて、南洋を究明し得ざるのみならず、英米人其の者の自主的文化指導に乘ぜられて、餘りにも英米人の爲め都合宜しき世界觀、歴史觀乃至思想を抱かしめられてゐる事である。

良き半面のみを知るてふ事は、惡しき半面のみを知るてふ事と同樣に、其の全一を知るには、不完全なるものである。

× × × × ×

とまれ、植民地人に對して苛酷なる政策を執つて迄も、自國同胞の海外發展を敢行して今日の大を作し得た英蘭人は、日本人以上に遠大なる計畫に基く愛國心强きものあるを思はしむるが如くである。

× × × × ×

斯くて南洋史を知らずしては、正しき世界史を、又正しき東洋史をも知り得ないと同時に、日本の對外政策上不可避の對象をなして二十世紀世界に君臨する英米の正體をも知り得ないのである。

二十世紀初葉現代の極東には、白人の其れに比して、餘りに詭辯多く努力を欲せぬ若きインテリ層

が多い。獨逸の俚諺に曰く「鍬を持つ落伍者は無いが詩集を持つ落伍者は多い」と。味はうべきであらう。

歐洲文明に於けるシエークスピアの文學、レムブラントの丹精、クロムウエルの政治と雖も、彼等同胞が三世紀の永きに亘つて本國の爲め世界各地に强行せる征服事業に依り獲たる政治、經濟、生活的貢獻の一半を享有しつゝ、又其等の背景を、雰圍氣を、無意識裡に或は意識しつゝ、各々其道に精進して蓋世の大を作すに至つたものである事を深慮すべきである。

日本人の正しき史觀、國民思想、世界觀も一に懸つて其の上に嚴然と樹立せらるゝであらう。白人に對する正しき認識も亦其處に把握せらるゝであらう。偉大なる白人に對する認識の正しからざる限り、日本乃至亞細亞諸國の世界政策は其の成功を望み得ないものである。

×　　×　　×　　×　　×

好むと好まざるとに不拘、南洋史は斯くて公正なる世界史創成への一翼となり、史界の前途を照らすと共に、諸國の、特に日本の歷史敎育中に包攝せられて、日本の八紘一宇の大精神涵養に資し、以て、日本の、又亞細亞の將又世界の文化興隆に資し、正しき東亞乃至世界の平和體制の建設に活用せらるるであらう矣。

附表第一　南洋諸島國歷代統治者概表

一、印度

マウルヤ王朝	BC三二五年	BC一七八年
スンガ王朝	BC一七八年	BC七〇年
カンバ王朝	BC七〇年	BC三一年
アンドラ王朝	BC三一年	四二九年
クシャン王朝	BC三〇年	一五二年
グプタ王朝	二九〇年	五二〇年
ヴアラビ王朝	四九五年	七六六年
ガズニ王朝	九七〇年	一二〇九年
ゴール王朝	一一四六年	一二一五年
奴隸王朝	一二〇六年	一二九〇年
キリヂ王朝	一二八二年	一三二〇年
ツグラク王朝	一三二〇年	一四五〇年
ロヂ王朝	一四五〇年	一五二六年
蒙古朝廷	一五二六年	一八五七年
英國領(會社)	一七七四年	一八五七年
英國領(直轄)	一八二六年	現在

鄭氏領　一六六一年……………一六八三年

清國領　一六八三年……………一八九五年

日本領　一八九五年……………現在

五、馬來諸國（主なるもの）

滿者伯夷帝國（爪哇、ボルネヲ、スマトラ、セレベス、比律賓）

　一二八〇年……………一五五〇年

マタラム王國（西部爪哇）　十五世紀……………一七四九年

バンタム王國（西北爪哇）　十三世紀……………一七〇〇年

亞珍王國（スマトラ西部）　十五世紀……………一九〇四年

和蘭領（爪哇、スマトラ、セレバス、モルツカス等）

　一八一〇年……………現在

六、濠洲大陸諸島

十八世紀　英國勢力範圍（東南、現 Victoria 州地方のみ）

十九世紀　現在英國領

現濠洲政府の樹立は一九〇一年であり、此の時より正式に英國領たるものである。

第二　列國投資額（一九三七年迄の概數）〔除印度、緬甸、南太平洋小島嶼〕

和蘭　五十五乃至六十億（其の九〇%は對爪哇）

英國	十五乃至十八億	（除對印度及濠洲諸島／含對香港之四億）
日本	二乃至二・五億	（其の八〇%は栽培企業）
佛國	四億	（佛領印度支那及ポンヂシエリー以下の在印度二十四市）
米國	三億	（主として比律賓、除對濠洲、新紐蘭）
總額	約八十五億圓	

第三　南洋各地統治機關豫算概表（括弧内は首府及人口）

I	比律賓〔Manila＝四五萬〕	四〇七三萬弗	一九三二年度
II	佛領印度支那〔Hanoi＝一二萬〕	七八八五萬比弗	一九二八年度
III	蘭領印度〔Batavia＝四五萬〕	四億六四〇〇萬盾	一九三六年度
IV	英領印度〔Delhi＝三一萬〕	六五〇二萬磅	一九三二年度
V	日領臺灣〔臺北＝三〇萬〕	一億六千萬圓	一九三七年度
VI	英領濠洲〔Camberra＝一萬〕	一億七七四九萬磅	一九三三年度
VII	英領馬來半島〔Singapore＝六五萬〕	約七五〇〇萬ST弗	一九三二年度

VII は馬來聯邦 Perek, Selangor, Negri Sembilan, Pahang の四州、及び非聯邦 Johore, Kedah, Perlis, Kelantan, Trengganu の五州）並に海峽植民地 Straits Settlements 即ち新嘉坡、彼南、マラッカ等の三地方を含む）

山川菊枝譯　H・W・ファン・ルーン人類文化史物語　東京　昭和十年

Craig, Austin: The Malays. Manila, 1916.

do. Particulars of the Philippines pre-Spanish past. Manila, 1916.

do. The Filippino's part in the Philippines past. Manila, 1921.

Craig, Austin: and

Benitez, Conrabo: Philippine progress prior to 1898. Manila, 1916.

De Haan J. C: Leerboek der Wereldgeschiednis. Batavia, 1932.

Jennings, H, S: The biological basis of human nature. New York, 1930.

Money, Sir Leo Chiozza: The peril of the White. London, 1925.

Norman, Henry: The peoples and politics of the Far East. London, 1895.

Oliver, Lorb: White capital and coloured labour. London, 1929.

Qudus, Abdul F: Der hindu-mohammedanische Konfl kt. (Diss.) Dessan, 1932.

Ramanayyh, N. Venkata: Vijayanagara, origin of the city-and the Empire.Madras, 1933.

Robertson, Blain: The Philippines Islands; v. 8. Cleveland, 1903.

Kolijn, H.. Koloniale vraagstukken van heden en morgen. Amsterdam, 1928.

Schreker, J. J: De Indische politiek. Amsterdam, 1929,

註　讀者の爲に南洋史（政治、文化、經濟）研究上の參考文獻を多數紹介する豫定であつたが、印刷意の如く進まず乍遺憾省略する。

索 引

(M)

昭和十七年八月三十日初版印刷
昭和十七年九月十日初版發行
（初版一、五〇〇部）

大南洋史

(停) 定價金五圓五拾錢

出文協承認
あ 110035



著作者　白坂義直（シラサカヨシナヲ）
東京市神田區三崎町二ノ三八
發行者　田中捨吉
東京市神田區神保町二ノ九
印刷者　中澤今朝之進
（東東四一四三番）

東京市神田區三崎町二ノ三八
發行所　（出文協會員一一六一四二）　田中誠光堂
電話九段(33)二三二三番
振替東京九三三六〇番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社